
津川の双子後日録 RED SONIC

鈴村弥生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

津川の双子後日録 RED SONIC

【Nコード】

N3540A

【作者名】

鈴村弥生

【あらすじ】

トサマール恒星系第四惑星コーチ。銀河サミットを控えたベースシティに、謎の「魔獣」の影が潜む。奇しくも唯一の目撃生存者となったドルフェスは、否応無く事件の波に飲み込まれていく。

時折、変な夢を見る。

白い部屋の白いベットの横に座り、これまた白い女の手を握りながら。ぼんやりと窓の外を眺めている。

窓の外は、青い空と青い海、水色に染まっていそうな風が窓の白いカーテンを揺らしている。

現実感の無い白と青のコントラスト。

何処にも影はないのに影絵のように感じる光景。

そのなかで、唯一、現実感を持っているのは、両手で握りしめた白い女の手……

さっきまで物凄く熱かった手が、両手の中ですーっと冷えてゆく。その熱さを引き止めるように、手に力を入れて絞りだすような声が出る。

「逝くな…逝かないでくれ」

体が碎けそうな、いいようなない喪失感。失いたくない、という切望。心臓に痛みを与える悲しみ。

「俺では駄目なのか？ 何も出来ないのか？」

涙を流していたかもしれない、体に震えが走り、更に強く女の手を握る。手がピクリと動いた。

「貴方だけよ……私を見てくれた人……」

微かな、ため息のような応えに、初めて窓から女に目を移す。白いシ-ツに広がった褐色の髪が、死にかけた女の血のような気がし、目に滲みる。

「見ることしか、できなかった。」

女が、髪と同じ色の目を細めて笑った。儚い、消え入りそうな微笑み。

「それが…嬉しかった……ずーっと楽しかった……」

「もう、見れなくなるのか？」

「大丈夫よ…私達、御縁があるから…又皆で遊べるわ…」

「そうだな、俺とお前とあいつらと、皆で。」

そう答えると、女は白くなった唇でにっこりと笑った。

「そうよ…だから私…ちょっと眠るわね…皆が揃うまで…ね…」

心臓が、氷の手で鷲づかみにされた。だが、無理矢理笑顔を作り
頷く。

「ああ…おやすみ」

女は目を閉じると、氷の様になった手にほんの僅か力をこめて、
握り返してきた。思わず更に力がこもる。

女は微かにふふつと笑うと、ふうつと大きく息を吐く…それが最
後だった。

女が周りの白に同化する。思わず女の名を叫ぶ。

「!!!!!!」

そこでいつも目が覚める。

D・Dこと、ケリー・ドラゴ・ドルフェスは、何時もの夢からい
きなり現実へ浮上した。首筋から背中汗でびっしょりと濡れ、額
や頬に髪が張り付いている。

黒髪の青年は、パトロールマシンのドライバースシートをリクラ
イニングさせた楽な姿勢のまま、はればつたい両目を擦って、初め
て自分の涙に気が付いた。

一気にねむけが吹っ飛んだ。

青年は黒い目を大きく見開き、慌てて回りを見回す、幸い側には
誰も居ない、長身を長々と伸ばし、彼は大きいため息をついた。

頭のなかをあの夢がぐるぐると廻っている。

白い部屋、青い海と空、褐色の髪と目の女。女の手を握っている

自分。まるでシネムービーの一場面の様に繰り返し繰り返し、あの場面だけを視る。

観る度に二度と観たくないと思うのだが、反面あの女をもう一度見たいとも思う。

あの夢は一体何なのだろう？ 青年は昔から幾度となく繰り返し疑問を自分に問うてみる。

答えは判らない。

女を看取るなんて経験はしたことはない。

彼の母も健在だし、母の他には身内らしい身内もおらず、恋人と死に別れたなんて事もない。

ドルフェスは首を振った。夢は所詮夢だ。昔からあの夢を見つづけていたお陰で、いつの間にか夢の女が自分の理想になっていたが、あの女は決して現実にはいない。

その事は、あの女の面影を重ねた女達が、みな嫌というほど教えてくれた。彼女達は、ドルフェスが自分に他の女を重ねていることを鋭く感じ取って離れていった。

『貴方が見ているのは私じゃ無い』という捨て台詞を残して。

何だか気分が落ち込んでいる。きっとエミーに振られたせいだろう。

エミーは、同じ課に働く女刑事だった。ベースシティのダウンタウンにある、25分署でもNO1の美人、そしてNO1の気の強さを誇り、何でも思った通りにしないと気の済まない女。

始めはいつものように、夢の女と同じ髪と目の色に魅かれ、気の強さに裏打ちされた、物怖じの無さが気に入ったのだが、付き合ってから1週間で最悪の相性だと気が付いた。

おそらく、彼女の方でもその事に気が付いてはいただろう。あまり楽しい出来事とは言えない、数々の言い争いと、いきなり言い渡された一方的な別離宣言を思い出して、彼は深い溜め息をついた。

気を取り直して、ドルフェスは、夢の女の姿を思い浮かべてみる。褐色の髪は絹糸の様に柔らかで、おそらく肩よりは長く、白い卵

型の顔を額縁のようにつつんでいる。

小さめの形のいい唇、すっきりととがった顎、秀でた額、高くすうつととおった鼻筋。

そして、アーモンド型のけぶるような褐色の瞳。

白くほっそりとした、指の長い手の感触も思い出してみる、刺すような悲しみが思い出されたが、その後に、懐かしい様な甘やかな気持ちが始まり上がった、思わず口もとが緩む。

「百面相か？ D・D」

心臓が飛び跳ねた。

慌てて声の方へ首を巡らすと、開けてあった助手席の窓に肘を付けて、相棒のゾルゲがニヤニヤ笑いながら彼を見ていた。

「ゾルゲ…いつから？」

顔が火のついたように熱くなり、自分でも赤くなっているのが判る。

「今さっき一回りしてきた。いやぁ面白い目覚めの体操だな、顔しかめて、そんで泣き顔して、やらしいニター笑い、エミーとやっているとこでも思い出したか？」

「な…！」

彼女とは一週間前に終わっている。言い返そうとして止めた、これはゾルゲの何時もの手だ。

彼は年下の相棒をからかって楽しむ悪い癖がある。

青年は助手席にもぐり込むゾルゲに不機嫌な表情をして、無言の返事とした。ゾルゲは嫌らしい含み笑いでドルフェスに応酬する。

ギアをローに入れ、マシンは静かに浮き上がった。

*

「変な噂を小耳に挟んだぜ」

ゾルゲはまだにやにや笑いながら口を開いた。

「どんな？」

「トルファルガー地区やエルカサル地区の人けのない倉庫街に、化けもんがうろついてるんだと」

「ふうん」

ドルフェスの返事は興味が無い事をはっきりと示していたが、ゾルゲは構わず続ける。

「どっかの金持ちの阿呆が、DNA をいじくって作った身の丈3mはあるうかつていう犬みてえな奴だと」

「まさか」

鼻で笑いかけたドルフェスの前に、ゾルゲは人指し指を立ててチツチツと、左右に振った。

「すげえのはこつからよ、その阿呆が持て余して捨てたか、自分で逃げだしたかはどうでもいいとして、そいつが夜な夜な野良の動物や浮浪者を食ってるって話だ。その食った跡つてのが、食い散らかした死体で血の池地獄、目ン玉は転がってるは、壁に舌が張りついてるはでもう、スプラッタムービーなんてままごとに見えるってこつた」

青年は顔にかかる前髪をうるさそうにかきあげた、黒い直毛はなかなかゆうことをきかない。

「トルファルガーやエルカサルってうちの分署の管轄だろ？そんな報告聞いたこと無いぜ、どつから聞いたんだ？」

ゾルゲはおどけて舌を出した。

「親愛なる我等がガセネタ屋、酔いどれレイフさ」

「だろーなあ、酒代くれてやったのか？」

「ま、慈善事業さね」

「あの親父、こないだは銀河の涯から信号が来た。なんていったぜ、酔っぱらいの御託ごたくなんてほっとけば？」

ドルフェスの言葉に、ゾルゲはゆつくりとかぶりを振った。

「家の子守話にちょうどいいんだ」

「寝る前に泣くんじゃないか？」

「俺の倅^{せがれ}をなめるなよ、この手の話しはキャンデーより好きなんだ」

「さすが！」

「だろぉ」

パトロールマシンのんびりと流しながら、二人はひとしきり笑いあった。

2 OUR・TIME ―今は…― (前書き)

ベースシティの闇に潜むもの

2 OUR・TIME — 今 —

数多くのアース系人が密かに誇りに思っている事は、ミドルアース無しでは現在の銀河の平和はあり得なかったか、100年は遅れていたに違いないということである。

かつて、銀河には300以上のヒューマノイド、非ヒューマノイド型知的生命体と、100ほどの惑星国家があり、文化、文明、科学、そのどれを取っても当時の地球・太陽系が太刀打ちできる相手ではなかった。

テラ暦094年、《西暦で200X年を元年とした新地球暦》

惑星国家として統一を果たし、やっと兄弟星達に小さな足掛かりをつけて、母星太陽の見守る庭にそろそろと這いだして来たばかりの地球人達にとって、銀河の先輩達はその存在すら信じられない未知のものであった。

そんな世間知らずの幼い地球は、いきなり、セファート王国と、アルゴル帝国という銀河を2分する超大国同士の全面戦争に巻き込まれたのである。

だが、数々の星系国家が民族ごと滅んでいったこの大戦の中で、地球は、奇跡ともいえる特別待遇を受けた。

ある偶然により、セファート王家の第一王位継承者ソーラ・アイ・セファートと妹姫ソーロ・コーカ・セファルトアが地球に身を寄せていた事と、アルゴル帝国第13王位継承者アルタイル・アルナスル・アルゴスがソル系討伐軍の副官として《司令官は、彼の兄アルファルド・アルナスル・アルゴスであったが戦死している》地球攻撃をおこなった事によって、地球は奇跡と平和の星に輝く幸運を手に入れた。

ソーラ・アイとアルタイル・アルナスルはこの地で単独の和平協定を結び、それぞれ自国へ帰還をはたすと、ソーラ・アイは自国の

全てを王と後継者だけが持つ特殊能力「ロゴス」で包み、防衛以外の攻撃を停止した。アルタイル・アルナスルは、父アルゴル帝を暗殺、アルゴル帝国崩壊という強攻策で戦争に終止符をうった。

地球はまったくの新参者にもかかわらず、この和平協定の仲介人として大きな位置を占めるにいたった。

その後、多星系共和国として新生を果たしたアルゴルと、新王をかけたセファート王国。テラ国から馴染み深いアースと名を変え、独自に発達した経済理念を銀河内に普及せしめたために、急速に力を伸ばした地球の3国家によって銀河連合が結成された。旧テラ暦104年の事である。

旧テラ暦310年、銀河標準年206年現在、アース人は銀河全てに広がっている。

『市内パトロールに緊急指令、繰り返し、市内パトロールに緊急指令。トルファルガー地区26にて通報、付近巡回中のパトロールは速やかに現場へ向かわれたし。』

「32号、これより現場に向かいます。」

インターコムにゾルゲが答えると、ディスプレイに付近の地図が転送されてくる。

それを横目で見ながら、ドルフェスはアクセルを踏んだ。

「おつといけねえ、煙草たばこきらしちまった」

ポケットをまさぐってゾルゲが顔をしかめる。

その前に、ドルフェスは煙草の箱を差し出した。

「これでいいかい？」

ゾルゲは嬉しそうに笑うと、両手で拝むようにして受け取る。

「ありがとよ、何時も済まないねえ」

いそいそと封を開けながら、ゾルゲはドルフェスを見た。

「ところで、お前、煙草吞まねえのに何で何時も持つてるんだ？」

青年が、少し照れくさそうに笑う。

「俺の親父が、物凄いヘビースモーカーだったらいいんだ、それを聞いてから、何となく持つてると落ちつくんだ。ま、お守りみたいなもんかな」

「ふうん、悪いなお守りもらっちゃまって」

ゾルゲは美味そうに煙を飲み込みながら、しげしげと箱を眺めた。

アース語とアルゴル語の書かれたパッケージ。

「アース製か…シャイニング・ライト、軽い奴か…いや、違うな、輝きの光？ 眩しい名前だな」

「名前が気に入ってね。たっぷり吸っとけよ、もうすぐ現場だぜ」
「あいよ」

トサマール太陽系は、ミドルアースと仇名される地球を含むソル太陽系より、銀河系を挟んで反対側の中心部に近い部分にある。

新生銀河暦206年の現在、アルゴル連邦に加盟する2億の星系の一つとして、160億の人口を抱えた星系国家となっていた。

そして今トサマールは、その歴史始まって以来の1大イベントを迎えようとしていた。

銀河標準年5年ごとに開かれる、先進国首脳会議。アースの古い言い方で言えば銀河サミットがこの地で行われるのである。

3連合と呼ばれるセファート、アルゴル、アースを筆頭に、40カ国もの星系国家の首相が一同に会し、今後の銀河連合の有り様や方針を話し合う。

この会合の舞台に選ばれる事は、即ちトサマールがアルゴルの主要国の仲間入りを果たした証拠であった。

そして副首都星であるここコーチも警察の警備力の強化が計られ、商業都市ベースシティも又、近年にない安定した治安を保っていた。サミットを6ヵ月後に控え、ベースシティの警察もまた、フル稼働の毎日である。

トルファルガー地区は惑星内線の空港があり、大部分の区画が倉庫街になっている、普段から人気がない場所である。

その倉庫の狭間でドルフェスとゾルゲは、吐き気を堪えながら現場の確認作業にあたっていた。

わずか1mほどの路は、赤いペンキをぶちまけた様な有り様で、その所々に千切れた指や足、どこかの骨、肉のついた布辺が転がったり、壁に張りついていたり、凄まじい光景である。

「スプラッタだな。」

ゾルゲはオレンジ色の肉片を踏みかけ、それが舌と気が付いて身震いする。

「通報者はここの警備員、被害者は同僚らしい。二人で巡回中、不信な物音を確かめるため一人がここに入ったんだそうだ」

「それでギャー！ときて、飛び込んでみたら相棒はアートになっていたってわけか」

ドルフェスの報告に、ゾルゲは茶化した様な言い方で答えた。あたり一面から立ちのぼる、乾きかけた血液の鉄臭い臭いで、そうでもしていなければ吐きけがこみ上げてくる。

ドルフェスにもゾルゲの気分がよく判った。

恐らく、彼の頭にも酔いどれレイフのよた話がぐるぐると走り回っているに違いなかった。青年は首を振ってそんな考えを振り払った。世迷い事を考えている暇はない。

ドルフェスは指輪がはまったままの指が、一本転がっているのを見ないふりしている相棒に声をかけた。

「鑑識はいつ来るって？」

ゾルゲがドルフェスに振り返る。

「もうすぐだ。ルーシー通りで渋滞に引っ掛かってたらしい」

「まだここに居なくちゃならないのか？勘弁してほしいな」

ドルフェスのぼやきに、ゾルゲは首をすくめた。

「ま、巡り合わせてもんだ」

「俺って不幸」

青年のため息にゾルゲが笑いかけたとき、通路の奥を青白い何かが横切った。

「!?!」

ドルフェスは腰からニューロロッド（電圧衝撃機能の警棒）を引き抜いた。ゾルゲはパラライザー（麻痺銃。小さなチップを打ち込み遠隔操作で高電圧を掛けて動きを止める）を構えて、既に血ノ池地獄を飛び越していた、倉庫の壁が途切れた所で壁に背を付け、胸元で銃を構える。ドルフェスが追いつくと、彼は顎で、二人がいる通路よりも更に狭い、倉庫と倉庫の隙間を示した。その隙間から何とも言えない妙な呼吸音がしてくる。

犬が喘いでいる音を、少しゆっくりにしたような、動物的な音だ。ドルフェスは、野良犬かと思った、さっき見た物の大きさが無ければ、二人ともそれで納得したはずだ。

青年は、あれは見間違いだと思いたかった。眼の隅で、ほんの一瞬浮かび上がったものは、高さが2mはある巨大な四つ足の何かだった。

バイオクリチャー。

ドルフェスの頭に、酔いどれレイフの与太話が現実味を帯びて蘇った。

倉庫街や港に、3〜4mの大きさはある妙な生き物が出沒して、浮浪者や野良の動物を食べている。何処かの阿呆がDNAをいじったペットをもてあまして街に放したらしい。そんな、愚にもつかないような話が、本当の様な気がしてくる。

ふと、呼吸音が小さくなりだした、足音は聞こえないがゆっくりと遠ざかっている。ゾルゲとドルフェスは視線を合わせると頷きあった。

パラライザーを構えたゾルゲが、先に隙間に向き直り、ワントンポ遅らせてドルフェスがニューロロッドを蒼くスパークさせて突き出す。

電磁光に照らされて、薄暗い隙間にぼんやりと浮かび上がった影

は、青白い光沢のある毛皮に包まれた生き物だった。そして、その生き物はいきなりぐうっと伸び上がったかとみるまに、白い風が二人の前を下から上に吹きぬけた。

：青年は、自分の両手がニューロロッドを握ったままくるくると回りながら宙を飛んで行く様子を呆然と見つめていた。

時間が物凄くゆっくりに感じられた。

手の飛ぶ先をみていた彼は、青白い生き物の青紫色に脈動する双眸とぶつかり、暫く見つめあう。

青紫色の金属といえいいのか、腹の底から震えが来る様な、冷たい、しかも知性の宿った眼。それは、ドルフェスに向かってニヤリと歪んだ。

背筋を冷たいものが伝う。

相手の眼に残忍な光が浮かんだ、ドルフェスは死を感じた、が、その時死神の青紫色の眼に何かが突き当たった。

血も凍る様な悲鳴があがり、呪縛は解け、時間が正常に動きだした。

途端に視界が赤く塗りつぶされる。

それが自分とゾルゲから吹き出している血だと気付くのに少し時間がかった。手首から先を飛ばされた両腕に激痛が走る、急な失血のために意識が遠くなっていく。

ドルフェスは死神の姿をかすれかけた視界の中で追いかけた。

奴は左目に突き立った何かを必死で取ろうとしていた、まるで猫が顔を洗うような仕種になっているのが妙にユーモラスに見える。

ドルフェスは生き物の目に刺さっているのが、自分の両手が握りしめたニューロロッドなのに気がついた。自分の手が死に神の目の上でぶらぶら揺れているさまを見るのは、何とも変な感じだった。

スプラッタームービーでこんなを見たな。ぼんやりとそんな事を考える。

心臓の音が耳のなかでドンドンと響いているのを感じながら、青年はゾルゲと自分の血の海に、ゆっくりと倒れこむ。

遠くからサイレンの音が響いてくる。
だが、ドルフェスにはもう聞こえなかった。

2 OUR・TIME ―今は…―（後書き）

今回は背景説明。 緩長ですみません

3 Nostalgia・Paic — 懐かしさの錯乱（前書き）

ドルフェスの前に現れた男

3 Nostalgia・Paic — 懐かしさの錯乱

トルファルガー・26の惨劇は、ベースシティを震撼させた。

今まで噂にすぎなかったバイオクリーチャーが、にわかに現実のものとなって目の前に現れたのである。

市警当局は、初めこの事件を表沙汰にしないようにしていたが、三日後、夜間帰宅途中であつた5人もの市民が、変死体で発見されたことを潮時として、報道管制を解き、闇に潜む脅威を一般マスコミに公表した。

専門である衛生局と、職員に犠牲者をだした市警察の合同捜査が開始される。

厳重な警備体制がしかれ、市民には夜間外出をしないように呼びかけられた。しかし、まるで警察をあざ笑うかのように、一人、また一人と、闇に引き込まれ切り刻まれる犠牲者が増えていくだけであつた。

『闇に潜む死に神の影を見たものは誰もいません。唯一人、両手を失いながらもかろうじて一命を取り留めたベース市警25分署の、ドラゴ・ドルフェス刑事だけが、死に神の情報をもたらすことのできる人物として期待されています』

テレニュースのキャスターが緊張感を盛り上げる深刻な表情でその報道すると、警察病院にドルフェスに宛てた励ましのメールや、やたらに盛り上がった顔を見たこともない面会人、そして多数の報道陣が殺到した。

意識の戻らないドルフェスの代わりにそれらの対処にあたつたのは、息子の急を知り、急ぎ駆けつけたドルフェスの母アンジェラで、アルゴル人の血を引く金髪碧眼の彼女の、初老にさしかかっても衰えていない美貌と、息子に対する献身的な看護の姿に、報道陣はこぞって賛美を惜しまなかつた。

もつとも、25分署でのドルフェスの評判は、すっかりマザコンの烙印を押されていた。

そういいだしたのは、勿論エミーであつた。

ドルフェスは、世間の騒ぎなど全く知らずに、病室で夢を見つづけていた。

あの女が、笑いかけてきていた。

白い部屋ではなく、何処かの崖の下。

岩壁に寄りかかつて座っていると、あの女はその真正面にぺたんと座り込み、両手を伸ばして肩を揺さぶってくる。

「死んじゃうのかと思った。私を置いてくのかと思った」

彼女は、笑いながら涙を流していた。

いつもの死にかけた彼女ではなく、生命に満ちあふれ、強い存在感をもつて目の前にいる。

そして、いつも心を捕らえて離さない瞳は、華やかな金褐色に輝いている。瞳と同じ色の髪が、谷間を吹き抜ける風に踊っていた。

「私そんなの嫌よ」

女はそう言うと、不意にしがみついていた。心臓が早鐘を打つ。華奢ですんなりとした体が腕のなかにあつた。背中を撫でながら、上擦らないように声を出す。

「大丈夫、俺はあんたを看取つてやるよ」

女は笑いながら顔を上げる。

「約束よ、忘れないでね」

何時もそうしてるじゃないか。心の中でそう思いながら、女に笑いかける。女の笑顔が眩しくて目が開けていられない。

閉じようとした目に、青紫色の光が飛び込んできた。

死神が女の後ろにいた。武器を取ろうと腰に手を伸ばす、左肩に激痛がはしった、肩から先が無くなり血が吹き出している。

奴が悲鳴を上げた、ニューロロッドを握った両手が死神の左目に

刺さっている。奴はのたうちながら逃げていく。

女が立ち上がる。

「私にまかせて」

言うが早いか、死神を追って走りだした。

「待て！ 待つんだ！」

制止の呼びかけに、彼女は一度振り返った。

「大丈夫よ、・・・もいるから」

そういつて、女は闇のなかに走り去った。

自分も女を追おうとして渾身の力を込めて立ち上がる。

そして…

ドルフェスは、両手を伸ばしてベッドの上に起き上がっている自分に気が付いた。

毎度のことながら、全身が汗でぐっしよりしている。心臓はまだ耳の中で鑼を鳴らし、頭がくらくらするのはこのところ馴染みになった貧血のせいだろう。

青年は深いため息をついて額の汗を拭った。そこで、あらためて両手を眺める。

最近の医療技術は、たとえ引きちぎられたものでもくつつけられる。と医者が豪語していた通り、取れた両手を青年の腕に戻していた。人工細胞を使った継ぎ目の部分が他と少し色が違うことと、腕が1・5 cmばかり長くなった事を除けば、この手が一度は持ち主から離れたなんて嘘の様だった。

あの事件から二ヶ月が経っている。

両手は戻ったが、相棒のゾルゲは不帰の人となっていた。

ドルフェスより前にいた彼は、身体を縦に三枚におろされた形で即死していたのだった。

青年は意識が戻るとすぐに警察の事情聴取に応じ、自分が見たも

のをつぶさに語ったが、白い死神は、いまだにハンティングを続けていた。

そしてドルフェスは、二日前にアンジェラを帰し、今日から仕事に復帰する。

献身的な母性愛と賛美された母は、その職業がトサマールの首相秘書と知れた途端、初の先進国首脳会議を控え、社会的な話題に敏感になっていったマスコミの寵児となった。

病院でも自宅でも、彼女めあてで取材が押しかけ、ドルフェスは落ちつかないリハビリ期間を過ごした。おまけにイメージアップを計る市長から、早く帰るようにとの矢のような催促があり、忍耐の極みに達した青年は、予定より早めに職場復帰を決めて、御母堂にお帰りを願ったのである。

「お前は無茶をするから、心配なのよ」

帰りぎわ、後ろ髪を引かれる様な表情でアンジェラは言った。

「大丈夫、あんな目にあっただよ、無茶なんてしたくないさ」

母を安心させようと、ドルフェスにはっこり笑ってみせながら、そう請け合う。

勿論その言葉に嘘はない、が、彼は、相棒と一度は切り取られた両手の仇を討とうと、心に決めていた。

そのためには、やはり、母に側にいられるとやりにくいのだ。

「本当に、無茶したら駄目よ」

念を押す母に、息子は大きく頷いた。

「ああ、俺は父さんの子だよ、母さんに嘘はつかないよ」

決めぜりふに父の名を出すと、母はしぶしぶ頷いた。

「判ったわ、でも、お父様は、一番大事な約束を守って下さらなかったって事、忘れないでね」

アンジェラは、そう釘をさして帰っていった。

母の後ろ姿を見送りながら、ドルフェスは少し胸が痛んだ。

夫をはやくに亡くし、女手一つでここまで自分を育ててくれた母に、逆縁の悲しみを見せるところだった。だが、この仕事を続けるかぎり、その可能性は常についてくる。

それでも、ドルフェスは警官を辞める気にはならなかった。

これはおそらく父親に似たのだろう。

連合警察機構の捜査官だった父は、ドルフェスが母の胎内にいるとき、犯人追跡中に殉職したと聞く。

父が守らなかった約束とは、必ず生きて帰る、ということだった。

——そんな事気にしてた日にやあ、何時まで経ったって嫁さんもらえねえぜ——

ゾルゲが前に言っていた言葉が思い出された。時々ドルフェスからかつて楽しむ事を抜かせば、いい相棒だった。彼には確か、奥さんと2人の子供がいたはずだ。ドルフェスの入院中に葬儀は終わり、ゾルゲの家族は、親戚を頼ってベースを出ていったと聞かされた。

ゾルゲの残された家族を思うと、やはり結婚なんてしないほうがいいような気がしてくる。母を残すことを恐れるような自分には、そんな事出来るわけが無いに違いなかった。

ドルフェスは首を振った。過ぎたことや、これからあるかどうか判らないことを何時までも考えている暇は無い。

——約束よ、忘れないでね——

目覚ましに熱いシャワーを浴びながら、ふいに夢の女の言葉を思い出した。

新鮮な夢だった、後半はともかく、初めて死なない女に会えた。腕のなかに飛び込んできた感触と明るい笑顔を、青年は宝物のようにつまみしめ、久しぶりに幸せな気分浸った。

「あーらD・D、もう大丈夫なの？」

分署のロッカールームに入った途端、入口から女が声をかけてきた。

誰かはすぐに判る。エミーだ。ドルフェスはそつとため息をついてから振り返った。

「やあエミー」

エミーはにつこりと笑いながら近づいてきた。

肩の線で真つ直ぐに切った褐色の髪が歩くたびに揺れる。

大柄だが均整のとれたプロポーション、身体の線が強調されるデザインタイトスーツから伸びるすらりとした腕と足。猫を思わせる整った顔たち。

——これで性格さえ良ければ文句なしの美人なんだが——

エミーの、何か企んでいるらしい笑顔をみつめながら、ドルフェスは逃げだしたい様な気分になった。

「心配したのよ、あたし」

擦り寄らんばかりに身体を寄せて、彼女はドルフェスの目を覗き込む。

その目は、満面に浮かべた微笑みとは逆に、決して笑ってはいない。

青年は背筋に寒いものを感じた。

「あたし、何度もお見舞いに行ったのよ」

「ああ、母から聞いたよ、どうも有り難う」

少し逃げ腰になって青年が答えると、エミーは当然といった表情で頷く。

「そう、お母様に全部シャットアウトされたの。よっぽど貴方を愛しておいでなのね」

——そあらきた——

「貴方と結婚したら、あのお母様と折り合いをつけるのが大変でしょうね。恋人に教えてあげたら？」

エミーはそう言いながらしなだれかかってきた、この行動がどうにも理解できない。

「どんな人かしらね、あのお母様と上手くやって行けるようなひとって」

青年の胸に片手を置いて、肩に頭を置こうとする。

「よせよ、君には関係ないだろう？」

少し逃げ腰になって、ドルフェスは半歩あとずさった。

エミーが急に真面目な顔で頷く。

「その通りね」

彼女はくると表情を変えながら、面白そうに青年の顔をしげしげと眺めた。からかうような視線が、何だか落ちつかない気分させられる。

「エミー、俺に何か用があるのか？」

たまりかねてドルフェスが口を開くと、赤毛の女はゆっくりと首を振った。

「あたしは別に無いけど、部長があるみたい。貴方を選んでたわ」

「え?!」

青年は、慌ててロッカールームを飛び出した。

「それを早く言ってくれよ！」

後ろから、エミーのわざとのんびりした声が飛んでくる。

「部長が呼んでいるのは署長室よ、間違えないでね」

ドルフェスは返事を返さずに、通り過ぎかけていた通路を左に曲がった。

角の向こうでエミーのけたたましい笑い声が響いてくる。何があるなに面白いんだか。青年には、あの赤毛女が考えていることがさっぱり判らなかった。

——同じ女で、ああも違うものかね——

今朝の夢の女と、エミーを比べてみる。

雲泥の差かもしれない。

初めて見た彼女の笑顔は、死にかけていた時の微笑みとは180度イメージの違う、華やかな力強さを持っていた。

夢のなかでの甘やかな抱擁を思い出して、青年は口許を緩ませて

いたが、すれ違った婦人警官に変な目で見られて真っ赤になる。

——ひよっとして俺、危ない奴？——

夢の女に固執している自分に気付いて、ドルフェスは少し慌てた。確かに、夢のなかでは彼女は自分の恋人らしいが、現実の世界では彼女は存在していない。あくまでも自分のイメージの産物なのだ。だからこそ彼女は、理想そのもので美しい。

署長室のドアにたどり着いたドルフェスは、深呼吸を一つしてからノックをした。

「ドラゴ・ドルフェスです」

ノックに反応して点滅しているインターホンに向かって、青年は名を乗った。声紋が確認され、中からはすぐに返事がある。

「お入りなさい」

「はい」

ドアの中央にはめ込まれた金属プレートに軽く指先をあてると、ドアはスライドして開く。ドアの向こうは、防弾ガラスで仕切られた小部屋があり、ガラスを透かしてセーレオ部長がこっちを見ていた。

部長に軽く一礼して、黒檀の机に肘を掛けるようにして立つ署長と、こちらに背を向けて署長と話している白いスーツの男を見る。

男の後ろ姿を見た途端、何とも形容しがたい懐かしさを感じた。

何だ、あいつじゃないか、何時来たんだろう。と思ってから、全然知らない男だと気が付き、自分の気持ちに戸惑う。

こんな事は初めてだった。

ガラスの向こうで、セーレオ部長が手招きをしている。いつの間にか立ち止まっていた青年は、促されて歩きだした。

セーレオ・カシムはドルフェスのいる第一課の刑事部長だ。

アルゴル系の国家でありながら、アース人種が多いこのトサマール星系で、割合と珍しい純粋なアルゴル人の彼は、癖はなく刃物を

受け付けない、と言われるほど硬い純系特有の紺色の髪をオールバックにして、背にたらし髪を、額から掛けたアルゴル風の紐で編み留める、何時もの髪形にしていた。

身長は2m近く、幅も厚みもある大柄な身体を包む地味なグレーのスーツとその古風な髪形は、アンバランスだが彼らしい雰囲気醸し出している。

その側で青年に背を向けて立っている男は、大柄なアルゴル人に負けない程背が高い。引き締まった細身の身体を光沢のある純白のスーツで包み、広い肩の上には豊かな金褐色の髪が波うっていた。ドルフェスがガラスドアを開けて中に入ると、男はゆっくりと振り返った。

頭の中に雷が落ちる。

目が、男の目から離せない。

喉の奥に何か熱いものがこみ上げてきて、青年は無意識に口許に手をやった。

真っ白になった頭のなかで、涙を流しそうになっている自分に気付いて、必死に飲み下す。

絹糸の様な金褐色の髪、秀でた額、すっきりとした顎、高い鼻嶺。そしてアーモンド型の、^{けふ}煙るような金褐色の瞳。

白いスーツの男の顔は、あの夢の女そっくりだった。

「D・D…」

惚けた様に突っ立っていた青年は、誰かに名を呼ばれて我に返った。

「し…失礼しました。……ドルフェスです」

慌てて男から目を離し、大きく一礼する。目の端に、驚いた様に自分を見ている男の顔がチラッと見えた。

その表情を、自分の不躰な態度への驚きと受け止めて、青年は顔を赤らめた。

「ハンサムを見たら、誰だつて見とれますわよね？」

柔らかなハスキーボイスが、男の後ろから流れてきた。黒檀の机を背にして、25分署署長モセ・ナディーラがドルフェスに笑いかけていた。

一見するととても警察署長には見えない小柄な女性は、セーレオとは正反対に極端に混血の進んだ結果といえた。

クリーム色の髪を短く刈り込んだ髪形の似合う小さな顔は皺ひとつ無く、まるで少女の様に張りがあるが、彼女はこの部屋の中にいる男たちの誰よりも、はるかに年上だった。他種族との混血が数世代に渡って繰り返されたモセの家系は、普通人の2倍は寿命の長い人間を生み出し、彼女は既に80歳を越していたが、時間はまだ、ナディーラの外見に何の影響も与えられないでいる。

「Mr津川。彼が今回の唯一の目撃者ですわ」

大きな男二人に挟まれて、ひとまわりは余計に縮んでみえる署長は、にこやかに男に微笑みかけてから再びドルフェスの方を見た。ドルフェスは彼女に見つめられると、何時もエレメンタルスクールの校長室に呼び出された様な気分になる。

「ドルフェス刑事、こちらの方は連合警察機構の特別捜査官、津川混警部です。今度の化け物騒ぎの為に、連合から派遣されていらつしゃいました」

ツガワ・アキラ……その名をとて聞き馴染のあるように感じる。署長に紹介されて、日系アース人の名を持つ男はドルフェスに軽く微笑みかけた。その笑顔が少しぎこちないのは、彼の目がまだ驚いた余韻を残して見開かれたままの所為だった。

そしてその視線はドルフェスに向けられている。

青年はどぎまぎしながら、男の視線を避けて署長の方を見た。

まるで危ない趣味を持つ者同士が運命の恋人を見つけた様な、妙な雰囲気醸しだしている二人の男を目の前において、ナディーラ

とセーレオは一寸顔を見合わせた。

彼女は小首を傾げて、まじまじと二人を眺めてから、ドルフェスに指令を下す。

「Mr. 津川は今事件の捜査に、貴方の協力を希望しておいでです。先進国首脳会議も近い上に、数日後にはアルゴル中央政府からの視察団が、まずこのコーチに来ることが正式に決まりました。で、早急に解決するよう本部のほうからもうるさいほど言ってきていますわ。だから、ドルフェス刑事、お願いしますね」

につこり笑った署長の後を継いで、セーレオ部長が重い口を開いた。

「津川警部の協力要請によって、君は今事件解決まで警部の部下として貸し出されることになった。勿論第一課も引き続き捜査を続行するがネックは君達だ、よろしく頼む。では津川警部、まだまだ半人前の男ですが遠慮なく使ってやって下さい」

連合警察機構の警部は、セーレオ部長に軽く敬礼をして挨拶にかえ、ナディーラには右手をとってそれに口ずけた。

少女のような署長の顔が気障な挨拶に真っ赤になる。

「まア」

「おほん!!」

自分がされた様に赤くなったセーレオが咳払いをする。

「失礼、貴方の様にチャージミングな御婦人に会えたのは久しぶりなので」

津川滉は端正な容姿に極上の微笑みを浮かべて、署長に会釈した。「嬉しいわ、女性として扱って頂くなんて何年ぶりですかしら。では、御活躍を期待しておりますわ」

署長の言葉に津川は今度は正式の敬礼を返した。

「微力ですが力を尽くします。良い相棒もお借り出来ましたから」

津川言葉に、署長は微妙な笑みを浮かべる。

「そうですか。そういえば、ドルフェス刑事のニックネームをご存じでいらっしゃるんですね。先程呼んでいらしたでしょう?」

ドルフェスはさっき自分を呼んだのが津川だった事を初めて知った。

津川滉は戸惑った様な表情を浮かべてから、慌ててにっこりする。「彼は有名人ですからね、ミドルアースから来る途中、星間メディアのニュースバックで見たんです」

警部はもう一度敬礼すると、ドルフェスを促して署長室を辞した。

3 Nostalgia・Paic — 懐かしさの錯乱（後書き）

此処からが始動です。

読みにくいですが、お付き合いの程。

4 Memory・Impulse——記憶の衝撃波——（前書き）

滉との初仕事

ドルフェスは、前を歩くアース人から感じている、奇妙な懐かしさに、まだ混乱していた。

彼が夢の女そっくりだった驚きからはどうにか立ち直ったが、張りのある声や、流れるような動作、良く動く目。赤面ものの気障な所業まで、嬉しくなる様な懐かしさがこみ上げてくる。やはり彼の顔のせいだろうか。

ぼんやり歩いていると、不意に津川警部が振り返った。

目線は自分より少し高い、夢の女に見下ろされているような気がして変な感じがする。

「…え…？ あ…何ですか警部？」

どぎまぎしながら聞くと、津川はひとなつっこい笑顔で笑いかけってきた。思わず心臓が飛び跳ねる。笑顔もそっくりだった。

「D・Dってのが呼び名だったよな。俺は混まぎって呼んでくれ」

「は…アキラですか…？」
「そう、敬語も一切不要にしてもらいてえな、肩凝こってしょうがない」

いきなり砕けた調子で喋りだした混は、また唐突に、じっとドルフェスの顔を覗き込む。

青年は自分の顔が赤くなるのを感じた。彼は青年の動揺には気付かず、少し眉をよせて考えていたが、微かに頷うなづいてから思い切ったように問い掛けてきた。

「竜造寺って名を聞いたこと無いか？」

「へ…？」

目を点にしていると、アース人はまた照れたように笑いながら、自分の言葉を消そうとするように右手を振る。

「いや、何でもない。気にすんな」

ドルフェスは曖昧な返事をした。竜造寺などという名には聞き覚えはない。だが、その名を聞いた途端に感じたものは、懐かしさと嫌悪感の入り交じった奇妙なものだった。

アース系人は、ベースシティにはかなりの割合で移民していた。ベースシティはアース人によって作られた都市と言ってもいい。だから滉の名前が、姓が先にくるアースの一地方の者なのにも違和感を感じなかった。

しかし、青年が育ったのは首都星トサマール。アース人はトサマールにはあまりいない。青年もアース人のハーフだが、母方の血筋を重んじるアルゴル系の社会では、アルゴルのクォーターとしての意識のほうが強い。

血筋で優劣が決められる階級制度は、百年以上も前に払拭されているが、やはり、アルゴルの血筋かどうかという事がそこではかなりのウエイトをしめていた。

それなのに何故、アース人の彼を懐かしがったり、聞いたこともない様な名前に、妙な感情をもったりするのだろうか？

——俺はどうかしてる——

彼は、この妙な感覚を、滉が夢の女にそっくりな所為だと思った。「……から、連れていってくれないか？」

「え？」

物思いにふけていたドルフェスは、滉の言葉を聞き逃した。

「すみません、何でしょうか？」

「君の相棒だったゾルゲ・カステイヨの墓参りがしたいんだ、連れて行ってほしい」

滉は別に気を悪くするでもなく、もう一度繰り返す。

「ゾルゲの？ 判りました。郊外だから、少し遠いですよ」

ドルフェスの言葉に滉はにっと笑った。

「OK、街の観光も一緒に出来るって訳だ、よろしくたのまあ」

滉は、自分の車をミドルアースから持ってきてあると言った。
連合警察機構捜査官の車は、特殊な装備を積んでいるので、出向
先の惑星に持ち込む捜査官も多い。

公務中は全ての税関、入国審査がフリーパスになる捜査官の特権
を活用するのである。

二人が駐車場へ向かって通路を曲がると、そこにエミーが立って
いた。

――

また何か厭味を言われる。

ドルフェスは、よりによって滉にそれを聞かれるのは嫌だった
しかしエミーがそんな事に頓着するはずもなく、暫くは出会い頭
で驚いていたが、すぐに面白そうに唇の端を引き上げる。

が、彼女が口を開くよりはやく、滉がエミーの前に進み出た。

「やあ、赤毛の可愛い子ちゃん、俺は君の名が知りたいな」

「エミーよ、エミー・テラー」

声を掛けられるのは当然といった態度でエミーは滉を見上げた。

「ここは美人の宝庫だねえ、署長といい君といい、目の保養になる」
滉の言葉にエミーはちらりと視線を流す。

「あんなお化けと一緒にしないでよ。で、貴方はだあれ？」

「俺は滉、ミドルアースから来たんだ。ところで、お近ずきの印に
今夜食事でもどう？」

エミーは、さりげなく髪に絡められた滉の指を、そつと外して微
笑んだ。

「考えとくわ、じゃあね」

エミーは妖艶な流目を滉に向けると、上機嫌でドルフェスの脇を
すり抜けて歩いていく。急におとなしくなったエミーの後ろ姿を、
青年は狐につままれた様な気分で、見送った。

滉はもう興味なさそうに歩きだしている。青年は慌てて後を追っ
た。

エレベーターを下りて地下駐車場に入ると、いきなり嬉しげに吠える犬の聲が響いてきた。K9警察犬の犬でもいるのかと、ドルフェスが回りを見回していると、滉は彼の背を軽く叩いた。

「俺の犬だ。見てな、驚くぜ」

まるで悪戯つ子の様な笑いを口許に浮かべて、滉は短く口笛を吹いた。犬の声は一声高く鳴くと、エンジンの動く音がして、それが次第に近づいてきた。音のほうを見れば、真っ赤なスポーツカーが走ってくる、ウィンドウがすべてブロンズガラスのため運転手は見えないが、その車は滉にぶつかりそうな程近くまで寄って停止する。

そして一声

「オン!!」

ドルフェスは初め、中に犬が乗っているんだと思った。が、滉がにやにやしながら車のボンネットに手を置くと、再び鳴き声がして、車が前後に細かく車体を揺らしはじめる。

「俺の愛犬、兼、愛車のネプチューンだ」

明るい色の髪を楽しげに振りながら、滉は車の天井を撫でた。すると、車は甘えた唸り声をたてて左右のドアを開ける。

その中のシートには、何も乗っていないかった。

「け…けーぶう?!」

「滉」

「あ…きら…これは?!」

滉は、点目の上にあんぐりと口を開けたままの青年を、嬉しそうに眺めていた。

「昔飼っていた犬が死んだんで、その性格を車のコンピュータに移植したんだ。これは便利だぜ。呼べばこの通りすぐ来るし、俺の言うことしか聞かない。おまけに一度走った路は絶対に忘れない。寂しいときは話し相手にもなるしな」

「そーですか…」

それにしても、なんて派手な車だろう。

流線型のボディは燃える様なスカーレットを地色に、サイドに金色のラインが2本、後ろにいくほど太くなり、リアは金色になっている。バンパーから下はメタルブラックといった調子で、天井は全面メタルガラスのサンルーフ。

その前に立つ純白のスリーピースの男は、満面に笑みを浮かべて自慢げに愛車―この場合愛犬と言うべきだろうか―を撫ぜている。まるで何かのポスターかCMの一場面の様だった。

「乗れよD・D、乗り心地は保証するぜ」

臨時の上司に促されて、ドルフェスはこわごとと助手席に座った。運転席に滉が乗り込むと、ドアは勝手に閉まり、身体に動力炉の振動が伝わってくる。

まるで犬の呼吸の様だ。まさか、噛みついたり、尻尾を振る機能まであるなんて言うんじゃないだろうか。

滉の悦に入った表情を見ると、訊ねたら頷きそうな気がして、青年は何だか怖かった。

「ネプチューン、ベースシティの地図は覚えたか？」

元気なお返事と共に、サイドボードのディスプレイにベースの道路地図が浮かび上がる。

「よし、いい子だ。D・D、目的地は？」

ドルフェスが警察の共同墓地を示すと、地図に赤い点が灯り、ネプチューンは静かに駐車場の出口に向かった。

地図をインプットされたネプチューンは、正確に墓地への路を進んで行く。お陰で多少暇になった滉は、ドルフェスに矢の様な質問を浴びせた。

青年には馴染みのない、一風変わった質問の仕方をする男だった。まずは例の死神の事から、詳しく何度も同じことを繰り返して、ほんの些細な事も鮮やかに浮かび上がらせる。

ドルフェスは、再び奴と対峙している様な気分になり、無意識に

左腕を撫ぜ始めていた。

「腕痛むのかい？　ずっと撫ぜてるけど」

滉に指摘されて初めて気がつく。そういえば、入院中にアンジェラにも言われたことがあった。手首を切られてからついた癖だと答えると、滉は妙なことを呟いた。

「された事が同じだからかな」

青年がどういう意味か聞く前に、滉はにっと笑って次の質問に移ってしまった。

「そういえば、署で会った赤毛の女。お前さん振りでもしたのかい？　凄い目で見てたじゃないか」

いきなり痛いところを突かれて、深くため息をつく。

「冗談じゃ無いですよ。振られたのは俺のほうです。しばらく付き合つて、ある日、貴方といってもつまんないから別れましょって、言われてバイバイです」

「それにしては、何か恨みの籠もった視線だったぜ」

「判りません。あれ以来俺の顔を見たら必ず厭味を言っんです」

困惑した青年を見ながら、滉は同情のこもった微笑みを浮かべた。

「ああいうタイプは執念深そうだから、気をつけろよ」

「なるべく近寄らないようにしています」

諦めの境地に達した答えに、微笑んだまま頷いた津川は、それから分署内の人間についての質問を始めた。矢継ぎ早に飛んでくる問いに、生真面目に答えながら。ドルフェスはディスプレイの横に小さなホログラフフォトスタンドがはめ込んであるのに気付いた。

水晶の棒の様なデザインのスタンドの中に浮かび上がった、董色のワンピースを着た栗毛の少女が、横座りをして微笑んでいる。

夢の様に美しい少女だった。

糖蜜の様な栗色の髪は、ふんわりと細い肩をくるむ様にしてまつまり、首や手足、身体の全てが風にも耐えられないのではないか、と思われるほど華奢でほっそりとしている。

肌は透き通る様に白く、整った細面の小さな顔に、微笑みを浮か

べた唇の薄紅色が鮮やかに映え、細い眉の下で、真っ直ぐに滉を見つめる瞳は、身に着けたワンピースよりもっと澄んだ紫色だった。白い肌に紫水晶のネックレスが良く映える。精霊とか妖精といった、この世の者では無いような儚く淡い雰囲気をもとって、彼女は幸せそうに微笑んでいる。

質問に答えるのも忘れて、ドルフェスが少女の姿に見とれているのに気付いた滉は、何故か苦しげに眉を寄せそのまま流れ去る街の景色に目をやった。

その表情は、ドルフェスが今まで見ていた人懐っこいおどけた笑顔からは、想像がつかないほど苦渋に満ちた、思い詰めたものだったが、それに青年が気付くことはなかった。

青年は、ネプチューンの淋しげな鼻声で我に返った。慌てて滉を見ると、アース人は今までと同じ人懐っこい笑顔を浮かべて彼を見つめた。

「美人だろ？」

「済みません、お話の途中でぼんやりして」

詫びる青年に、滉は人差し指でこめかみを掻きながら口を尖らせた。

「D・D、敬語はいらなくていいでしょ？」

「はあ…済みません」

生真面目な答えに、滉はため息と共に苦笑いをした。

「ま、いいか」

再び質問を始めようと口を開きかけたとき、ネプチューンが得意げに二声吠えた。二人は窓の外に目を転じた。アース風の白い墓標が整然と並んだ光景が道路の両側に広がっていた。ベース市警察職員専用墓地である。

ベースシティの市警察の職員で殉職したものや、退職後希望した人々が此処に眠っている。

殉職したゾルゲは、家族の希望で火葬にふされ、分骨されて此処に眠っていた。

ゾルゲの墓標の前で、二人は暫し跪いて黙禱を捧げた。

黙禱の後、じつと墓標を見つめる滉の、静かで深い光をたたえた金褐色の目を見ながら、ドルフェスは、彼が何故ゾルゲの墓参りをしたい、と言いだしたのか判った様な気がした。同じ警官として、職務中に倒れた彼の仇を討つ。その決意を固める儀式なのだろう。数日前、青年も又同じ様にこの墓標の前で、故人に約束した事を思い出す。

青年はこのアース人を、顔のことは横において、何だか好きになってきた。彼となら、必ずゾルゲの仇が討てるに違いない。ドルフェスはそう確信した。

「行こうか、D・D」

顔を上げた滉は、再び明るい笑顔で立ち上がった。

「ゾルゲにお前さんを借りるよって言ったら、半人前だからしごいてくれて言ってたぜ」

おどけた口調に思わず吹き出す。

「彼なら、きつとそう言うでしょうね」

冗談にあいずちを打ったとき、いきなり甲高い女の悲鳴が響きわたった。

「?!」

二人は弾かれた様に、声のほうへ走りだした。

白い墓標の列を2〜3列横切ると、広葉樹の大木が涼しげな影を広げて立っている。

その陰から白い服を着た少女がよろめきながら走り出てきた。少女は二人を見つけると、助けを求めて両手を伸ばした。

「ラウが!! ラウが!!」

二人の男を見て気が緩んだのか、彼女はそのまま崩れるように膝を突く。

「D・D、その子を頼む!!」

相棒の肩をパンと叩いて、アース人は少女が走ってきた方へ向かう。

ドルフェスは少女を助け起こしながら、白いスーツが大木の後ろの坂を駆け降りて行くのを見守った。

「ラウを助けて！！　お願い、ラウを！！」

恐怖に身を震わせながら、少女はドルフェスの服の袖を握りしめた。

「大丈夫、落ちついて。もう安心です」

しがみつく小柄な身体を、力づけるように抱きしめて同じ言葉を繰り返してやる。小刻みに震えながらも、彼女は小さく頷いた。

少女の背中を撫ぜながら、青年は滉の後ろ姿を目で追っていた。

100m程先で、滉は少女を追ってきたらしい5〜6匹のダリルバダス犬に囲まれていた。

アルゴル原産のこの動物は、性質や飼育目的がアースの犬と良く似ているため、一応犬の部類に入れているものの、その姿形は似ても似つかない生き物である。

大きさは子牛ほどもあり、首は長くそのまま先細りの鼻面になる。目は大きく正面に並び、小さい耳は頭の側面に張りついたように付いており、この生物が音よりも視覚と嗅覚に頼っていることを語っていた。

毛足の長い丸い背中、丈夫そうな前足と後ろ足。鼻から長い尻尾にかけてのフォルムはアースのオオアリクイを連想させるが、ダリルバダス犬の最大の特徴は前足の内側にある一対の手であった。筋肉を前足と共用しているため、前足が邪魔になっただけで力が出せないものの、訓練を受けたダリルバダス犬は、簡単な武器をこの手で扱うことが出来た。

今も、滉を囲んでいる連中は、何やら四角い箱を抱えている。それがこの犬用のレーザー発生装置ではないかと思っただけで、ドルフェスは背筋に冷たいものが流れる。

少女を抱き抱えながら、一応パラライザーを構えた青年は、滉の援護をする事も出来ない自分を呪っていた。

銃刀法の徹底により、凶悪犯罪発生率の比較的低いベースでは、

警官も殺傷力のある銃火気を持つことはない。

犯人の抵抗力を奪うだけならば、パラライザーかニューロロッドで十分だからである。

勿論、武装した犯人に対処する狙撃部隊もあるが、普通の警官はそんな物を持たない事を自慢にしていた。自分がいかに勇気があるか示せるからだ。今のドルフェスは、20mも届かないパラライザーの射程がもどかかった。しかし、少女を置いて行くわけにも行かない。青年は口惜しさにきつく奥歯を噛みしめた。

凶悪な唸り声を発する犬達に囲まれながら、アース人は何を思ったのか銃も構えずに立っていた。

涼しい風が金褐色の髪を優しくなぶり、日の光を受けてその髪はあらゆる色に反射した。ドルフェスからは見えない彼の表情は、人好きのする笑顔から、剃刀の刃を連想させるような不敵な殺気をたたえた冷酷な微笑みに変わっている。

彼の全身から、底知れぬ気迫がみなぎり、まるで炎のように立ちのぼった。

犬たちは、動物特有の感覚で、常人とは違う相手だと判断した。遠巻きに取り巻きながら隙を伺う事にして主人の指示を待つ。人間には聞こえない笛の音がして、この男を殺せと命令する。リーダー犬はゆっくりと男の回りを回りはじめた。

冷たい微笑みを更に深めて、滉は目だけでリーダー犬の動きを見ていた。

「俺は殺生はしたくないんだが、お前の飼い主は酷い奴だな」

そっぴいながら軽く目を閉じる、全身にみなぎっていた殺気が少し弱まった。犬たちは一斉にレーザーのスイッチを入れた。

「ヴァオ!!!」

2、3匹の犬が、向側の犬のレーザーに撃たれてのたうち回った、標的の男が高く飛び上がり光線を避けたからだ。男は着地と同時にリーダー犬に向かって走り、再び跳躍して踵で犬の後頭部に飛び下りた。

「ギャヴー！」

白い泡を血とともに吐きだして、犬は四肢を痙攣させながらもどりうつて転がる。リーダーを討たれた犬たちは、四散する代わりに一斉に滉に襲いかかった。

「殺生ばかりさせやがる！！」

一声叫んだ滉は、V字型にした指で一番近くの犬の目を突き、それを力点にして回転するように飛び上がり次ぎにきた犬の鼻面を両足で蹴る。

骨の碎ける音と共に声も上げずに絶命した犬の身体を踏んで、高く飛び上がると、飛びかかってきた2匹に蹴りと手刀で応酬する。

勝負は一瞬のうちに終わっていた。

「可哀相に……酷えことさせやがって」

犬好きの滉は、心から自分が殺した異形の犬たちを哀れんだ。

ふと見ると、レーザーに足を撃ち抜かれ、気を失っていたらしい1匹がよろよろと立ち上がって元来たほうへ歩き始めていた。犬に気付かれ無いように気配を殺してそつと後をつける。

しかし、犬の持っていたレーザー発射装置が青白い火花を吹き出すといきなり爆発した。悲鳴を上げる暇もなく、犬の上半身が吹き飛ぶ。

明らかに、犬が帰ることで居場所が知れることを恐れる何者かに自爆させられたのだ。同時に後ろの犬たちの死体も次々に爆発する。証拠湮滅の為に違いなかった。憤怒の形相で滉は犬が向かっていた方向を睨み付けた。

腕時計に仕込んだ通信機のスイッチを入れると、愛犬の元気な返事がかえってくる。

「ネプチューン、リーダーでこれから墓地をでていく車を見張れ、そいつがいたら、トリトンで後を追え」

ネプチューンは心得たと言わんばかりの返事を返した。通信を切り、その手で髪をかきあげようとして、指が血糊で汚れているのに気づき顔をしかめる。

「犬つてのは、こんなに可愛いのに、酷い奴だ」

一片の愛情も持たない主人によって、ただの殺人機械に仕込まれた犬たちの不幸を、滉は本当に哀しんでいた。

ドルフェスは、素手で犬の群れを倒したアース人の姿を驚嘆の眼差しで見つめていた。それは少女も同じらしく、初めは恐ろしさで目を向けていることも出来なかったが、犬たちが倒れると、安堵とも感嘆ともつかないため息を一つした。

「凄い、あの人……」

そう呟くと、太陽光を7色に乱反射する髪のを、うつとりとした眼差しで見つめる。

少女を助けて立ち上がると、滉が大きく手を振った。それに答えて手を振り返した時、青年はデ・ジャヴを感じた。

——前にもあった？——

滉と同じ事をした。此处じゃない違うところで、同じような状況で。

相手すら特定できる強烈なデ・ジャヴ。

ドルフェスは自分の中に今までと違う記憶があることに戸惑いを感じていた。

4 Memory・Impulse——記憶の衝撃波——（後書き）

ドルフェスを、流れが捕らえました。

犬を粗末にする奴は……

墓地は現場検証の為の警官達に、悠久の死者の眠る静けさを一時破られていた。

知らせを受けて駆けつけた担当部署の同僚たちに、簡単に状況を説明したドルフェスは、少女が気づかうラウと言う人物を探しに行った滉から、その人の無残な最後を知らされた。

犬たちが来た方へ30mばかりいった墓標の陰で、彼はレーザーで撃ち抜かれた上、牙に噛み裂かれて息絶えていたのだ。恐らく少女を逃がすために、その身体を楯にして犬の前進を防いだに違いない。死体収容バックに遺体を収めてから、初めて少女にラウの運命を教えると、彼女は遺体の入ったバックに取りすがって泣きじゃくった。

取り乱す少女をなだめながら、取り敢えず分署に戻る事にする。

墓地は25分署の管轄ではなかったが、連合警察機構の捜査官が事件の当事者であるため、少女の事情聴取を25分署で行うことに異議を唱える警官はいなかった。

二人が助けた少女は、何と副首都星コーチの首席議会議長カルアリヤータ・ハダルの孫娘カルアリヤータ・レアナであった。

ベースシティの警視で、殉職した父の墓参りに来た彼女は、突然あの犬たちに襲われたらしい。

レアナのボディガードのラウは、幼い時から共に育った幼なじみでもあった。

事情聴取に立ち会った署長は、持ち前の人柄のいい明るい笑顔で少女の不安を和らげながら、18歳未満は苦手だとドルフェスにぼやいた滉の、やりにくそうな質問の仕方を助けていた。

事実レアナは、事件の経過を聞いたびに、判らないを連発して泣きだした。長い時間をかけてやっと聞き出したのは、彼女の素性と、

ラウの職業、何故墓地にいたか、といったはなはだお粗末なものだった。犬たちを操っていた者は、彼女も見えてはいないらしい。

分署の正面玄関ロビーで、知らせを聞いて駆けつけてきた母親と感動の再会を果しているレアナを眺めながら、滉とドルフェスは身も心も疲れ果てて、クッションのきいたソファに沈み込んでいた。

「やでやで…疲れた」

あまりの埒の行かなさに、何度か痼癢を起こしかけた滉は、本当に疲れたらしく、先ほどから同じことを呟いている。

「何せ15歳の女の子ですからね、ショックが大き過ぎたんですよ」
慰める様にドルフェスが話しかけると、滉は金褐色の髪をかきあげた、人工光の下では彼の髪は7色には光らない。

「俺は18歳未満は金輪際！ 御免だね、やはり女は大人の方がいい。女だと思つて優しくすればピーピー泣くし、子供扱いすればすねる。それに比べて署長の柔らかな物腰と毅然とした態度、懂れるね、やっぱ女はあであなくっちゃ魅力がない」

難しい年頃の扱いにほとほと嫌気のさした滉は、顔をしかめてぼやく。と、二人の後ろから静かなハスキーボイスが発せられた。

「まア、こんなお婆あちゃんを、まだ魅力的って言つてくださるの？ 嬉しいわ」

振り向くと、ナディーラ署長がにっこりと微笑んでいた。ドルフェスは慌てて立ち上がる。津川は微笑み返しながら一寸小首を傾げて挨拶にした。

「当然です、女性の本当の魅力は熟女になつてから滲み出てくるものです、ましてやその美貌が若いまま保たれているなら最高でしょう？ 女性の理想と言えますよ」

署長は恥じらう様に頬を染めて小さく笑う。

「褒めて頂いても何にもでませんのよ、でもこんなに嬉しいがらせて下さった方は初めてですわ、亡くなった主人のプロポーズを思い出します」

少し遠い目をして思い出に浸つてみせてから、携えていた文書パ

ツドを差し出しす。

「担当部署の76分署から、現場検証とダリルバダス犬の解剖結果、レーザー発射装置の分析検査結果、それにモトル・ラウ氏の検死結果の報告書が送られて来ましたわ」

「早いですね」

感心しながら素早くデータに目を走らせる。

ドルフェスは、滉の目がレーザーの項目で暫し止まったのに気が付いた。

「76分署から、事件の事情聴取を取りたいと依頼が来ています。お嬢さんの調書は私から送っておこうと思いますけど。Mr津川。貴方の方から調書を送って頂ければ有り難いと思いますわ」

署長の申し出に、津川はゆっくりと立ち上がって頷いた。

「判りました、私の事件報告は書類作成の後、76分署に送っておきます。今日はあの地獄の攻め苦の様な調書取りに付き合って頂いてとても助かりましたよ。有り難うございました。もしお忙しくなれば、この星の到着記念のささやかな晚餐にご招待したいのですが、いかがですか？」

美貌のアース人の誘いに署長は夢見る乙女のようにため息をつく。
「貴方とお話していると、まるで若い娘に返ったようですね。男の方に誘っていただくのがこんなに嬉しいなんてすっかり忘れておりました。でも、折角のお話ですが、今夜は息子夫婦の家に招かれておりますの」

申し訳無さそうに微笑むと、またこの次に、と言い残して、年齢と外見がアンバランスな署長は小さく会釈してその場を去った。

振られたフェミニストはドルフェスに一寸肩をすくめてみせた。

不意に腕時計が静かな鈴の音を発てる。

「ネプチューン、見つけたか？」

吠え声の替わりに鈴の音が響き、青年にはそれが得意満面の犬の表情を連想させた。

「D・D、夕飯を食ったら、鼠取りといこうぜ」

不敵な笑いを浮かべて、彼はゆっくりと歩きだす。

通路を曲がると、後ろからボディガードに偉そうに命令しているレアナの声が聞こえてきた。

「あの人がなくなっちゃったわ。連れてきて、私を助けてくれた人よ、連れてきて！」

二人の男の足は、我知らず早まった。

7つある月のうち一番大きな第二衛星ライトと最も小さい第五衛星シヨーウトが、共に青白い光を寝静まった街に投げかけている。エルカサル地区12番、このブロックはトルファルガー地区の惑星内線の空港と隣接している為、各種の旅行代理店や貿易商、運送、宅配等の企業が軒を並べていた。もう少し空港近くの幹線道路沿いなら、他都市からの観光、ビジネスの客を見込んだ商店街やホテル等が立ち並び賑やかなストリートがあるが、ビジネス街のこの辺りにはもう人影は無かった。

そんな静まり返ったビル群の狭間を、一台の黒い車が滑るように進んでいく。

不思議なことに、街灯のスポットに浮かび上がる姿で車と判別出来るものの、モーター音もエンジンの排気音もいつさい聞こえない。まるで亡霊を運ぶ幽玄の国からの乗り物の様である。

不気味な車のドライバーズシートでは、外側の雰囲気とは全くそぐわない賑やかな恰好の男が、嬉しげにサブシートの相棒に車の自慢を垂れていた。

「どーだい、ネプチューンの忍び足モードは。そこらの猫よか静かなんだぜ。このままで300kmは軽く出せるし、ドアの開け閉めだって無音です。それに外装の変装コートはあらゆる探知装置の目から姿をくらませることが出来るのさ」

「そーですか……」

かれこれ1セクレット（アース時間で90分のコーチ標準時間）の間、彼は愛車の自慢を続けていた。

まずかつての愛犬ネプチューンの事に始まって、外装の素材がどうした、エンジンの駆動は何、どんな能力があるか、e t s…。犬好きとメカフェチの合体に、あいつちをうつ青年は骨の髄まで疲れを感じいた。

憧れの人ナディーラに振られた滉は、ドルフェスと夕食を共にし、その時レアナ襲撃の犯人のアジトを突き止めたとドルフェスに言った。

ネプチューンの偵察、追跡用子機トリトンが事件の後墓地から逃げるように走り去る車に取りつき、最終停止位置から通信を送ってきたのだ。小さいながらも働き者のトリトンは建物内部を隈なく踏破し、内蔵されたスキャナーで、そのアジトと思われるビル内部の正確な見取り図をネプチューンに伝える。その中に、大量の銃火機の反応を見て、滉は何処かのテロリスト組織であろうと、あたり前のように言う。

先進国首脳会議の為に、トサマールとコーチはかなり早い段階で厳重な警戒体制を敷いた。元々厳罰主義の銃刀法で銃火機の持ち込みが厳しく制限され、銀河内の星系国家でも治安の良さで名高いトサマールならでわの早業であった。

これによって各国の政府要人を狙うテロリストの出鼻をくじくのに成功したものの、深く静かに潜行する彼らには、警戒体制に多少疲れがでてくる今ぐらいが一番の狙い目だと、連合警察機構の警部は言うのである。

今日のレアナ襲撃は、当然、世間を騒がせる事に喜びを感じる手合いが、サミット―滉は古風にそう呼んだ―前のグローミングアップとして、レアナの祖父カルアリヤータ・ハダルに何らかの圧力を掛ける為で、ターゲットは恐らく近日中にコーチを訪れるというアルゴル中央政府からの視察団であろうと思われる。

噂によるとその視察団にはアルゴル政府のかなり大物の要人が加わ

っているらしい。その人物に何かあれば、トサマールどころかアルゴル多民族共和国家そのものに、強い衝撃を与える事は必至と言えた。

そんなことにならないように、先手必勝、今のうちに不逞の輩は退治しておこう。

まるで飲み会の話でもするように、滉は物騒な話を楽しげに語った。

それで、二人は忠犬ネプチューンに乗って、トリトンが送ってくるマーキングパルスを手繰って、このビジネス街にやって来たのである。

しかし、この際限のない愛車自慢は何かならないものだろうか。ネプチューンの多彩な能力に感動して、つい褒めてしまった自分を、青年は深く反省していた。

——言わなきゃ良かった——

それに、戦闘服と称して滉が着替えたラフな服は、昼間の純白スリーピース以上にとんでもなく派手な服だった。

六芒星の柄が全面に幾何学模様で、襟から裾に向かって黒から金に変わるグラデーション模様のジャケットに、真赤のシルクのソフトシャツ。光る素材の黒いズボン、足首までの黒革ハーフブーツには踵と爪先に金の金具が付いていた。

どんな神経があればこんな恰好ができるのだろうか？

滉の趣味は青年の理解を超えている。

ふと、捲くり上げた滉の左手首にプラチナと紫の石でできたブレスレットが光り、青年はそれに見覚えがあると思った。

目の端にあのホログラフスタンドが入り、ああそうだ、と合点が行く。水晶の柱のなかで微笑んでいる少女が同じようなネックレスをしていた。幾重にも巻きつけているところを見ると、同じ物かもしれない。

あの少女と滉はどんな関係なのだろう。

これだけのべつまくなしに喋りまくる男だが、自分の事には、全

く触れない。せいぜい女の趣味はどんなタイプだとか、犬と何年暮らしたとか、上司に頑固者がいて話が合わない、と言った程度だった。

ドルフェスにしても、プライベートをあれこれ詮索する趣味はないが、あの妖精の様な少女と、歩く広告塔のごとき派手さの滉が並んで立っている姿を想像すると、あまりのアンバランスさに余計な考えが頭をもたげてくる。

ネプチューンが甘えた鼻声を発てた。

「よし、着いたぜD・D」

滉は親指を立てて合図した。

「ネプチューン、地下駐車場の見取り図を出してくれ、勿論、上の透過図も付けてね」

主人の命令に、忠犬ネプチューンはディスプレイに付近の見取り図を映し出す。ベースシティは各ブロック毎に地下駐車場が有り、それぞれのビルは地下で繋がっている。又、地下は網の目の様な通路がはしり、何処からでも目指す場所へ行くことが出来た。

今ネプチューンが止まったのは、目的のビルから2ブロックほど離れた地下への入口だった。

「D・D、打合せどおりに俺が下、お前さんが上、気張って参りましょう」

ディスプレイの下からマイクロディスクを引き出して腕時計にはめ込む、これで見取り図を何時でも見る事ができる。

滉の作戦はいたって簡単だ、地下から滉が換気ダクトを伝って忍び込み、十分な時間を見計らってドルフェスがネプチューンと共に正面のシャッターを破って乗り込む、中には数人の男女がいるだけなのでたいした反撃も無いと思われる。

トリトンの報告では地下と正面以外に屋外に出る道は無いらしいから、後はゆつくりと階上に追い上げてからめ捕ると、いうものだ。「ひとつ伺ってもよろしいですか？」

ドルフェスの堅苦しい言い方に眉を寄せながら滉が頷く。

「何で応援を要請しないんですか？　ここは25分署の管轄ですし、対テロリストの作戦行動なら捜査令状も即座におりるはずです。それに、人数の多いほうが漏れが少ないでしょうし、思わぬ反撃を受けたときでも対処が早いと思うんですが？」

左腕に何でも鍵開け器という便利道具を取り付けながら、滉は口をへの字に曲げた。

「まあね、正論でいきやあそうなるわな」

しきりに頷きながら、器械の調子を見る。

「だがね、考えてもみなよ。奴さん達は作戦の出鼻を俺たちに挫かれてるんだ。俺が連合警察機構から来たつてのは先刻ご承知のはずだ、何せ宇宙港に着いた時からIDカードを見せまくっているからな。で、その俺に、よりによってとつぱなに係わっちまった。じやあ、どうするとおもう？」

「報復行動ですか？」

答えに鼻で笑う。

「そうそう骨のある奴なんて居るかよ。テロリストなんて連中は、見栄っ張りで臆病だ。ええかつこしいの餓鬼どもが、はつきりと身の危険を感じたらすることあひとつ。逃げるのさ、尻に帆掛けてピュツとね。ほんで安全なところに逃げ込めたら、あつかんべーのもりで報復する。逃げた言い訳にな」

視可外線感知用のスクリーングラスを掛けて、にやりと唇を引き上げる。

「大物つて言われる奴ほど、逃げ足は早いぜ。生存本能が発達してるんだなきつと」

「…まるで、ベースの警官はとろいつて仰ってる様に聞こえますが…」

時間が惜しいのは判ったが、滉の言い分を聴いていると市警に任せてたらテロリスト達が全員逃げだしてしまう。と、言われている様な気がして甚だ面白くない。

「とんでもない、相手の逃げ足の方が早いだけさ」

意味は変わらないと思う。

「それに、俺が心配しているのは人間の夜逃げじゃない。コンピュータの方さ」

「え？」

「でかいアジトにや必ずある、おいしい情報ソースがたっぷり入ったコンピちゃんだよ。連中にしてみても生命線だ、大慌てで整理してるとこだろうぜ。全部消されちまったら悲しいよな。ところが、我等が働き者トリトンにはハッキング能力迄は無いんだ、せいぜい微電流を流してコントロールを出来ないようにするくらいでね、今現在そうやって時間を稼いでいてくれてるんだ」

「そんな事したらデータは……」

「ああ、長いことやってたらぶっ飛ぶよ。だから急いでるんだ。ネブチューン、ネレウスをくれ」

サイドボードの下から手のひら大の黒いカプセル型の器械が吐きだされる。滉は嬉しそうにポケットにねじ込むとドアを開けた。

「対コンピュータ用のマシンさ。光ケーブルに取り付けりゃハッキングデータを銀河連合のメインバンクに放り込む智者だ。さつき話したろう？」

怪訝な表情のドルフェスに滉は少し唇を尖らせる。そういえばそんな話しも聴いたような気がするがすっかり聞き流していて覚えていない。

慌てた青年はにつこり笑って誤魔化す。

「判りました」

車内から出た滉は、無音で閉まったドア越しにドルフェスを覗き込んだ。

派手な服がすんなりと似合う、上背のある細身の身体。金褐色の髪、顔の半分を黒いスクリーングラスが隠し、それが逆に整った顔を強調している。

神様に贖罪されている人間にいるんだな。青年は思わず見とれてしまった自分に照れた。

「それと、もう一つ。理由があるんだ」

「？ 何ですか」

「俺は、犬を可愛がらない奴は、絶対許さん。この手でお仕置きしてやる」

「はあ？」

ドルフェスは、やはり神様は公平だと思った。外見に比べてこの人を食った性格。ドが付くくらいの犬気違い。

「じゃっ、ソルティドールで会おう」

軽く手を振って、地下への入口に姿を消す。

主人が地下へと姿を消すのを見送って、ネプチューンはゆつくりと進みはじめた。

「ネプ、お前の御主人様はどういう人なのかね」

何となくサイドボードを撫ぜながら、殆ど無意識でネプチューンを縮めて呼び、それが子供のころ飼っていたアース産の犬の名だった事を思い出した。

ネプは大きなアース産のピレネー種の白い犬で、よく背中に乗せて遊んでくれた優しい犬だった。

ネプが死んだ時の悲しさは言葉では言い表せない程だ。

ネプチューンはドーベルマンとか言っていた、今でもそうだが忠実な犬だったんだろう。混が愛犬を車にしてまで側に置こうとした気持ちが良い判るような気がする。

「ネプチューン。お前って、幸せな犬なんだな」

勿論、と言っている様な返事が返ってきて、青年は微笑みながらサイドボードを撫ぜ回した。

ライトとショートの間を、第3衛星のサーアドがゆつくりと進んでいく。金色に輝くこの月は、昼でもその光を地表に投げかけ、惑星コーチの空を駆けてゆく。

7つの姉妹星のなかでも最も動きの早い月である。

その光が、ビルの谷間の闇をそつと押し退け、黒く変装したネプチューンの背を照らした。

ドルフェスに乗せたネプチューンは、アジトと目されるビルの斜向かいの路地にひっそりと身を隠していた。

ビルは10階程度の普通のビルである。

店舗になった一階のシャッターにカクテルグラスを持った女の横顔が大きく描かれている。

——ソルティードル——

宅配便の会社だと照合したデータには書かれていた。

さほど大きな会社ではないが、ビルは10階すべてがソルティードルの事務所として使われているらしく、他の会社は入っていない。ここが本社ではないという事だし、この手の会社の事務所としてはスペースの取りすぎではないか？ 疑りの目で見れば確かに変な感じがする。

トリトンによれば、シャッターの向こうは店舗兼カースペースで今も3台のバンが駐車されている。

その中の一台が今日あの哀れな犬たちを墓地へ運んだのだった。

2階から上は非常階段とエレベーターで上げれる。2基のエレベーターは人間用とバンがそのまま入る巨大な業務用が有る。

ドルフェスはそれを使って上に上がり、混と合流する。ネプチューンは逃げだしてくる者を、一階で待ち構えて捕らえておく予定だった。

問題の銃火器は、6階の一室に有るらしい。トリトンが武器庫のドアに細工してロックが解除出来ないようにした、と言うことなので、銃火器での反撃はあまり気にしないでもいいかもしれない。

——俺、これしか持っていないから——

ドルフェスは一寸心細げにパラライザーを眺めた。

コトリ…。

グローブボックスが静かに開く。

中から大型の拳銃がそつと吐きだされる。

「これは？」

膝に落ちた拳銃を驚いて眺めていると、ディスプレイに銃の取扱方法が表示される。

「これを使えって言うてるのか？」

ネプチューンの鼻声が返ってきた。

ドルフェスは困惑した。こんな物を扱ったことはない。それは旧式パウダーの無煙火薬式の銃ガンだった。レーザーではなく弾丸を発射するタイプの銃で、弾は24発入りの弾倉に入り、既に装填されていた。

口径も大きいし、第一かなり重い。

うまく撃てるはずが無い。

「ネプチューン。有り難いけど、俺には無理だよ」

すまなそうに青年が言う、しかし、件の名犬は何を思ったか、再びグローブボックスを開き、更に数個の弾倉マガジンを吐きだした。拳銃と5個の弾倉を膝に乗せて、ドルフェスは困り果てた。

「ネプ、使ったこと無いんだ」

青年の懇願の声は不機嫌な犬の唸り声の反撃をうけた。

何が何でも持っていていけ、と言わんばかりのネプチューンに、深い嘆息で答える。

「判ったよ、持っていくよ」

ディスプレイが明滅し、読め、といっている。青年は諦め顔で銃を取り上げ、操作を覚えはじめた。

ふと、台尻のところに字が彫ってあるのに気が付いた。

アース文字で

――D・D――。

誰かのイニシャルだろうか、自分の呼び名と同じD・D。流れる様な飾り文字は、青年の気持ちを奇妙にかき立てる。

――まただ――

墓地で感じたのと同じ、強烈なデ・ジャヴ。

車のなかで、この銃を持って、行動開始の時を待っている。傍らに黒い犬が居ないのが変な感じがする程、そのデ・ジャヴは鮮明な

記憶だった。

——どうしたんだ俺は？——

彼は今、はつきりと自分の物ではない記憶が、自分のなかにあることに気づいた。

ドルフェスは、犬に崇られているのかも

6 B a t t l e B e g i n n i n g — 戦闘開始 — (前書き)

ムーンライトノベル読者の方々へ。実は、Angel Cryと時代は違いますが設定は連動しています。

6 Battle・a・Beginning——戦闘開始——

1セル（1セクレットに対して1／6の時間、約15分）が過ぎた。

ネプチューンはそろそろと路地を抜け出し、ソルティードルのシヤッターの前に行く。

ボンネットが観音開きを開き、その中からブラスター砲が迫り出してくる。

ドルフェスは肝を潰した。

戦車が装甲車に装備される物で、50cmの鋼鉄を軽く焼き切る威力がある。

当然エネルギーの消費量も大きく、普通のバッテリーなら一撃で空になる。間違っても乗用車に取り付ける様なものではない。が、ネプチューンは嬉々とした雄叫びを一声吼えたと、シヤッターに向けて砲撃を開始した。

機関銃掃射の様に盛大に光線をたたき込まれたシヤッターは、紙屑が燃えるように粉微塵に吹き飛ぶ。当然その向こうの車達も哀れなスクラップと化し、それぞれの動力炉が誘爆して火球が出口から吹き出しネプチューンを襲う。

素早くレーザー砲を収納した車は炎の舌を涼風であるかの如く受け流し、そのままゆっくりと炎のなかに進みだした。

火災探知機が警報を鳴らし、スプリンクラーが勢い良く消火液を噴射しはじめ、たちまち炎はその勢いを失っていく。

滝のような消火液のなかを平然と進む黒い車は、正に地獄から来た死神の使者を思わせる。

ドルフェスはサブシートに埋まるようになりながら、呆気に取りれて一連の出来事を眺めていた。わずか三呼吸ほどの時間で、1階のフロアーは廃墟となってしまった。

「何も此処までしなくても……」

思わず声が漏れる。

ネプチューンは、フロアー奥にあるエレベーターの前まで行き、スプリングラーの雨など気にもせずドアを開けた。

「じ……じゃあ行ってくるよ」

青年はネプチューンに声を掛けて車外に出た。

自分は生まれる時代を間違えたと思う、猛り狂う戦士としての血は、人が建前や理屈抜きで、もっと荒々しく純粋であつた時代にこそ真価を発揮する。

津川滉にとつて、戦うということは生きている事に他ならない。

平穩無事な世界など、彼にとつては拷問にも等しい退屈極まりないものなのだ。じつとしていたら息が詰まる、何か楽しいことがしたくてたまらない。

楽しいことは戦うことだった。

それも1対1の、己の力全てを出し合う様な戦い方がいい。

命のぎりぎりのところで初めて相手と出会える。そして、相手が強ければ強いほど心からの敬意と愛情と感謝が沸き上がる。戦いの歓喜のなかでこそ、自分は生きていると実感出来るのだ。

だから今、滉は幸せな気分浸っていた。

地下でネレウスを光ケーブルに取り付けた後、トリトンと合流してゆつくりと、ここ、6階まで登ってきた。別段身を隠したりする気はないから、監視カメラなど気にもせず堂々と全フロアーを見て回り、さて上に上がろうと階段に來ると、男が一人彼を待っていた。滉より頭一つは大きいごつい男である。二人は廊下を挟んで向かい合った。

対峙する男は凶悪な面構えに残忍な冷笑を浮かべ、胸の当たりで両腕を交差する。

ジャキッという音とともに、右手の甲に沿って白銀に輝く刃が飛びだし、男の冷笑が更に深まった。

連合宇宙軍特殊機甲師団。

俗に人間戦車と呼ばれるサイボーグ部隊の白兵戦用の装備である。機甲兵上がりか、装備を手に入れるために入隊したか、いずれにせよ人殺しが3度の飯より好きな手合いに違いない。

「逃げるんなら、今のうちだぜ」

と、言ったのは滉であった。彼は相変わらず武器らしい武器一つ持たず、無造作に立つてにやにや笑っている。

「なんだとお」

自分の言うはずの台詞を取られた男は、色の悪い顔に血の気を昇らせ更にどす黒い顔になった。案外単純な男らしい。

「何だ、やっぱりそう考えてたのか。芸のない奴だな」

再び滉の舌刀が飛ぶ、男の顔が更に赤みを増し赤黒く上気した。

「この……切り刻んでやる」

腕の剣を見せ付けるように光らせて、男が睨みつけてくる。だが滉は、肩を竦めたただだった。

「よしとけ、俺はエゼルと五本勝負で三本勝てたぜ」

「誰だそれは」

奇妙な自慢に、思わず聞き返してくるから、素直に答えてやる。

「俺の家族」

そして口の端が更ににやりと上がる。

「剣の腕は、てめえの遥か上の元英雄さ」

さも莫迦にした様に、男の額に太い血管が浮かび上がった。

「五月蠅、体制の犬め!!」

歯ざしりしながら呻くように言い返したが、すぐには動けない。

身構えもせずは無防備にただ立っていながら、このアース人には一分の隙もなかったから…

「犬は嫌いか？だからあんな風に粗末にするんだな」

滉の口許に浮かんだ微笑が、ぞっとするほど険悪な冷笑になる。

男にはスクリーングラスに隠れた派手な男の目が、底光りを発しながら自分の顔に据えられている様な気がして、思わず背筋に冷た

いものが流れた。

「俺は犬が好きだぜ、だからお前らは大っ嫌いだ」

「ほざけ!!」

ついに耐えきれなくなった男が、アームナイフを振り上げて一気に突き刺す。特殊合金製の刃はまるでケーキを切るように壁ごと滉を貫いたはずだった。だが、合金刀は虚しく壁に突き刺さっただけで、滉の顔が男の顎の下あたりでにやりと笑っている。

「この!!」

そのまま壁ごと真つ二つにしてやろうと力任せに腕を振り下ろす。しかし、それが滉に届く前に強烈なアッパーカットが炸裂し、同時に両足を蹴り払われて男はたわいもなくひっくり返った。

「なんでえ、こんな程度か」

さも失望したと言わんばかりの滉の口調にかつと頭に血が逆流する。

「おのれ!!」

首だけで跳ね上がるようにして起き上がり、左手を軸にして足を振り回し、滉の足を狙う。

これは簡単によけられたがそんな事は予想済みだ、サイボーグは腕だけでそのまま高く跳び上がった。

「くたばれ!!」

頭上から一撃を見舞う。が、派手なジャケットに包まれた腕が交差した形で突き出され、合金刀を受け止めた。

「?!」

驚く暇もなく、腹部に衝撃を受けて弾け飛ぶ。間髪をいれず再び滉の蹴りが繰り出され、顔面を襲う。さらに、男の頭上まで飛び上がった滉の肘打ちと膝蹴りが後頭部に炸裂し、唯一生身の部分を強打され、男は昏倒した。

「やっぱ弱え」

物足りないといった表情で、滉は首を振る。この物騒な男はこの程度ならウォーミングアップ位にしか感じていない。

彼はジャケットの埃を払い落としながら、右袖が切られているのに気が付いた。

「ふん、ま、一寸はやるんだな」

滉のジャケットは特殊素材でコーティングされた物で、これだけで防弾と断衝をかねたプロテクターになっている。

至近距離でレーザーを撃たれたり、ナイフで刺されても弾き返せる便利物なのだが、それに綺麗な穴が穿たれているのだから、この男の太刀筋はそれなりに鋭かったと言えた。

滉の右腕がモゾリと動く。

合金刀に切り裂かれたジャケットの穴から、逆三角形の小動物の頭が突き出された。

「キュイ？」

その穴からすると出てきた物は、鈍い銀色のオコジョに似た小型ロボット、トリトンである。

先程合金刀を受け止めたのはこのトリトンであつたらしい、滉はトリトンの頭を撫ぜながら顔をほころばせた。

「そっか、お前がいなかったら腕無くなってたんだな。ありがとう、リセットにならずに済んだよ」

そう言いつつポケットをまさぐって細いワイヤーロープを取り出しトリトンにくわえさせる。

「ついでにこいつを縛っておいてくれる？ 目え覚めて暴れられるとうつとおしいからね」

「クウ」

ネプチューンの息子は可愛いお返事を返して、ロープをくわえたまま主人の身体を伝って床に下りると、伸びている男の方へ走っていった。

くるくると小器用に男をがんじがらめにしていくオコジョの姿を、目を細めて眺めていた滉は、さりげなく腰に手を伸ばし振り向きざまに手にしたものを後ろに放つ。

階段の踊り場からすさまじい悲鳴があがり、一人の男がスクリュ

ードライバーに肩を貫かれて壁に縫い付けられていた。

その足元にはレイガン——小型のレーザー銃——が転がっている。二跳びで階上の男の前にきた滉は、無慈悲にも男を釘付けにしているドライバーの把手に足を乗せた。再び男が悲鳴を上げる。

「やっぱ、プラスドライバーは良く刺さるな」

滉はそんなことをうそぶきながら、男に屈み込む。

その時、階下からズンという爆発音が響き、火災報知器と盗難警報機が同時に鳴りだした。

ネプチューンの突入が始まったらしい。

すさまじいベルの嵐を聴きながら、滉は首をすくめた。

「マア、ネプチューンちゃんったら。派手なこと」

——これであいつが居れば完璧なんだが——

ふと詮ない考えが浮かんで滉は自嘲した。

——こればかりはどうしようもない——

足元で男が呻いた。滉の自嘲が冷酷な微笑に変わった。

「なあ兄さん、俺聞きたいことがあるんだ」

激痛に歯を食いしばりながら、男は睨み返してきた。

「警察の使いつ走り風情に話す事など何もない」

「いいねえ、そういう気骨のある返事って好きだぜ」

そう言いつつ乗せた足でドライバーの把手をぐりぐりと動かす、たまらず男は悲鳴を上げた。

「よう兄い、ファントムって奴は知ってるか？」

ドスの効いた声で聞く、男は首を振った。

「知ってる癖に。あんたらの使ったレーザーに、トルメチウム元素が使われていた」

又首を振る。グリツと足が把手を動かした。悲鳴が上がる。

「言いたくなくちゃ言わないでもいいぜ、その替わり、こっちの腕も貰うことにしよう」

そう言いながら腰からもう一本ドライバーを取り出す。

男の無事なほうの腕にそれを押し当てた。

何をされるか悟って男は恐怖に小さな悲鳴を上げた。

「マイナスドライバーは先が広いから一寸、痛いぜ」

嬉しそうな含み笑いをしてみせながら、ドライバーを持つ手に力を込める。男の全身に震えが走った、足元から異臭が立ちのぼる、どうやら恐怖の余り失禁したらしい。

「汚ねえ奴」

滉は眉をひそめた。

ふと、鳴り響く警報ベルに掻き消されながら、微かに誰かの悲鳴が聞こえた。

それがドルフェスの声と思い当たり、滉は立ち上がった。声は遙か上から聞こえてくる、10階で合流する予定だったのを思い出し舌打ちする。

どうやら何か面倒な事態になっているらしい。

駆け上がろうとして一寸足を止め、行きがけの駄賃に男の鳩尾みぞおちに蹴りを入れて気絶させておく。

「トリトン、こいつも縛っとけ」

トリトンにそう言い捨てて走りだした。

＊

ドルフェスは自分でもみっともない声を出していると思った。

しかし止まらない。膝は笑ってしまい動くこともままならない。

エレベーターを降りてすぐ、目の前にいきなり踊り込んできた生き物を見た途端、彼は恐慌状態に陥ってしまった。

それはダリルバスク犬らしかったが、とてもじゃないがまともな神経で見たいと思うような代物ではない。

先ず目に飛び込むのは横に並んだ六つの目で、次ぎに尖った牙が歯並び良く並んでいる恐ろしげな3つの口。

後は普通の2倍位の身体と太い尻尾だが、青年にはそこまで見る余裕はない。

昔聞いたアースの神話にこんなのがいた。奇妙なことに頭の端でそんな事を考えた、確かケルベロスとかいった。

頭が3つある地獄の番犬。

そのケルベロスが醜悪な姿を青年の目の前に現している。

化け物としてはかなりオーソドックスで、話しに聞いたぐらいではたいして恐ろしくも無いが、これが実際に御対面となると別である。

しかも出会い頭で何の心の準備も無かったから、青年はまったく成す術もなくただ悲鳴を上げるだけだった。

——聞いてない！ 聞いてない！ 聞いてないよぉー！！ トリトンの嘘つき！！ こんなのが居るなんて言ってなかったじゃないか——！！——

頭の中はそう叫んでいた。

犬というものは、怖がる相手を馬鹿にして更に脅かそうとする意地悪なところがある。

このケルベロスも例に洩れず、悲鳴を上げてすくみ上がっている青年を見て、威嚇するように3つの頭で唸りながらじりじりと近寄ってくる。

思わず後ろにさがる、だが閉じたエレベータードアにぶつかってそれ以上さがれない。

青年は息を呑み、お陰で悲鳴が止まった。

エレベータードアを背負って、ケルベロスと睨み合う。どうやらすぐには襲ってこないと判って少し気が落ちついてきた。

——目を離したら最後だ——

頭のなかでそんな声が聞こえた。ドルフェスは脂汗をかきながらケルベロスの真ん中の頭の双眸を睨み付け、ゆっくりと手を腰に伸ばし、パラライザーを握りしめると、思い切って突き出しトリガースイッチを入れた。

ビシッ！！

右肩に衝撃を受け身体が宙に泳ぐ。

パラライザーを撃つより一瞬早くケルベロスの巨体は跳躍し、前足が彼の身体をなぎ払ったのだった。

ドルフェスは床に強か頭を打ちつけて、目の前が真っ暗になった。

「こんなのにびびりやがって、情けない」

ドルフェスはそう呟いている誰かの声で我に返った。

目の前にあのケルベロスの顔があった。思わず小さな悲鳴を上げて飛び退く。

だが、化け物は動かない。

「？」

しげしげと眺めてから、漸く相手が死んでいるのに気が付いた。

虚ろに見開かれた3対の目の少し上あたり、3つの額それぞれに親指位の太さの穴が開いている。恐ろしげな口はだらりと舌を垂らし、涎と血が混ざり合って滴っていた。後頭部は砕け散り、血と脳漿をまき散らして怪物は自分の血で作った池のなかでこと切れていた。

青年は、何が起ったのか訳が判らず、呆然として化け物の死体を見つめていた。

同じように、化け物とドルフェスを、啞然、といった表情で眺めている男がいた。

言わずと知れた津川滉である。

滉は全速力で10階に駆け上がり、エレベーターホールへ飛び込んだ。

その時四発の銃声が響き、ホールの半分を占めていた巨大な生き物の頭が爆発し、四肢を痙攣させながらゆっくりと横様に倒れ込むのが目に入った。

横転した怪物の向こうで片膝付きになって拳銃を構えていた青年は、ついぞ見たことも無いような落ちつきはらった表情で立ち上が

り、死んでるのを確かめるように怪物に屈み込む、と、急に悲鳴を上げて跳び退き、そして今度はうるたえながら覗き込んでいる。

――何だあいつ？――

奇妙なドルフェスの行動に首を傾げながら、滉は自分も動揺しているのに驚いていた。

拳銃を構えていたドルフェスの表情は、滉が永い間面影を偲んでいたある男のものとそっくりだったからだ。

ドルフェスに驚かされるのは2度目である、まず署長室で、そして今。

初めてドルフェスを見たとき、幽霊かと思つて心底から驚愕した。今も、亡霊を見たような気分だった。

だが滉は、もう一度その亡霊に会いたかった。

「警部！！」

泣きそうな声で青年が叫んでいる。転がるようにして走ってくるその姿には、さっきの面影は微塵も無い。

滉はこっそりため息をついた。

「D・D、たいしたもんじゃないか」

にっと笑つて立つている滉の側に来て、ドルフェスはやっと人心地がついた様な気がした。

ホッとしてみると改めて冷や汗が流れてくる。

女の子のように泣きだしたりへたり込んだりしないで済んで良かったとつくづく思う。

「何なんですかあれ。俺聞いてませんよお」

つい愚痴が洩れる。

滉はばやくドルフェスに返事をせずに、死体の検分に近寄った。

「へえー」

思わず目を見張る。

怪物は3つの頭と、心臓にそれぞれ一発ずつ弾を受けていた。

滉の聞いた銃声は四発、弾痕と一致する、つまり一発も外さなかったということである。

能管を砕き、心臓を破裂させ、これ以上無いくらいに完璧な殺し方。

至近距離とはいえ、短時間で続けざまに見事急所を撃ち抜いている腕は大したものだった。

離れたところでまだ拳銃をぶら下げたまま、こつちをこわごわ見ている青年のところに戻って、臨時の上司は青年の射撃能力を褒めた。だが、それに対するドルフェスの反応はまた奇妙なものだった。

「えー?! 俺知りませんよ。警部が助けてくれたんでしょう?」

「...じゃあ、お前さんが持つてる物は何だよ」

そういわれて初めて自分の持つているものに気が付いた。といった表情でしげしげと拳銃を見つめている。

どうやら無我夢中で撃つたらしい何にも覚えていない、青年の答えに滉の方が当惑した。

「あんだね...」

呆れ返って口を開きかけたとき、腕時計の通信機からネプチューンの声がけたたましく響いてきた。

「?!」

ホールにトリトンが駆け込み、滉の前でチイチイと鳴いてから再び階段のほうへ走りだす、ただならぬその様子に滉ははっとして舌打ちした。

「しまった! 行くぞ!!」

脱兎の如く走りだした男の後を、慌てて青年が追う。

非常口からビルの屋上に出て、滉は息を飲んだ。

頭上一杯に白い巨大な飛行船が浮かんでいた。

青白い月の光を受けて夜空に浮かび上がる白い巨鯨。

その船腹にはイルミネーションランプで文字が浮かび上がる。

「ミウル・クルム・クルム」

アルゴル文字でそう綴られていた。

「でえ、なんつー大時代な物持ち出してきやがった」

あまりの事に呆れている滉の後ろから、やっと追いついたドルフエスが顔を出す。

「あれ、服屋の広告船ですよ…でも何でこんなところに…？」

滉の足についてこれずに、肩で息をしながら青年は眉を寄せた。

「D・D、銃を貸せ！」

いきなり滉が喚いた、同時に手が突き出される。

「早く！！」

「は…はい！」

ただならぬ滉の剣幕に、青年は言われるまま、まだ握っていた拳銃を差し出す。

それをひつたくるようにして受け取り、いきなり飛行船めがけて連射する。

ドルフェスは、この男の狂態に度肝を抜かれた。およそ今までの滉らしからぬ振る舞いだった。

ふと、滉が狙っている先を見ると、簡易ロフトが一機屋上から飛行船に繋がられ、その中に数人の人間が乗っているのに気が付いた。恐らく彼らが、ここをアジトとしていたテロリスト達なのだろう。その中でこちらを向いて笑っている男が印象的だ。

男は口を開けて笑っている。

何より目立つのは肩までの白い髪。他の者達よりも頭一つは大きい韋丈夫で、均整の取れた体つきをしている。

「ファントム！！」

無駄と知って撃つのを止めた滉が吼えた。

白髪の男は、さも小馬鹿にしたように耳に手をあてて見せた。
「逃げれると思うなよ！！」

再び怒鳴る。白髪の男の哄笑はまだ止まらない。男は笑いながら、そうそう、といったジェスチャーをしてみせ、後ろに立っていた人物の肩を抱いて前に出した。

「う…?!」

途端に滉が呻き、ドルフェスは目をみはった。

白髪の男に肩を抱かれたまま、冷たい微笑みを浮かべていたのは、ネプチューンのコンソールにあったホログラフの少女だった。

二人が見つめる内に、ロフトは飛行船の中に飲み込まれ、飛行船はゆらりと動きだす。

風がはるか下方から、パトロールカーと消防車のサイレンを運んで来るのをドルフェスはぼんやりと聴いていた。

「くそ!!」

吐き捨て、滉は手を伸ばす。

「トリトン!!」

滉の腕にトリトンが飛びつく。

「追いかける!!」

言うなり手のなかで丸くなったトリトンを握りしめ、滉は渾身の力を込めて、飛行船めがけて放り投げる。

しかし、その途端。飛行船は紅蓮の炎を吹き出して爆発した。

6 B a t t l e B e g i n n i n g — 戦闘開始 — (後書き)

炎の中に消えた美女

7 Phantom of the Breath — 亡霊の息吹 — (前書き)

真夜中の騒動の後は…

トルファルガー地区上空での飛行船の爆発により、ベースサイトは、その夜三時間に渡って、一切の通信施設が使用不能になった。地下を走る光ケーブルは辛うじてその機能を保ったが、その他の物は長、短、マイクロ波、レーザー、星間通信の次元波に至まで悉くが、空中に散布されたらしい何らかの物によって攪乱されていた。

これによって市内はある程度の混乱をもよおしたが、以前からの外出自粛規制のお陰と市民生活の大部分が光ケーブルを使用していたので、事故等は最小の被害で収めることが出来た。

大きな事故が予想された、空港や宇宙港は、幸い都市時間に対応した、最終便の離発着直後であったため、間一髪で事なきを得た。むしろ最も混乱したのは警察と消防署であったと言える。

特に、連合警察機構の警部が強行捜査に乗り込んだ、ソルティードールのビルに急行した市警察隊と消防車は、上空の爆発とともに本部からの通信がいつさい入らなくなったうえに、目の前のビルは燃えだすは、上から炎は降ってくるはというような散々な目にあったのである。

このことと同じようなことが市内の各地で起こったらしかった。

津川滉は、曲がりなりにも警部の肩書を持っていたので、取り敢えずその場の指揮をとり、事件の収拾にあたった。

そして、ドルフェスは今、25分署の窓から、オレンジ色のナイティを名残惜しげに脱ぎながらゆっくりと昇ってくる朝日を眺めているのである。

昨夜は途轍もなく忙しかった。

滉のお陰で忙しかったのだが、滉のお陰で無事に生きているともいえた。

爆発の瞬間、滉はドルフェスを横ざまにひっ掴むと、まだ開いていた非常口に飛び込み、炎の舌を逃れたのだった。

二人がさしたる怪我もなく、縛っておいた二人を引きずって降りてきたところ、下の連中の騒ぎに出くわした。

その後のことは語るべくも無い。

「よう、ここに居たのか」

後ろから滉がのんびりと声をかけてきた。

青年が振り返ると、コーヒーの入った紙コップを両手に持った滉が、にっと笑いながら歩み寄ってきた。その表情や動作にも多忙な一夜の疲労は微塵も現れていない。

「ご苦労さん。飲むかい？」

差し出されたコーヒーを礼を言って受取る、滉は近くにあった椅子を引きつけて、背もたれを抱え込むように座った。

「やれやれ、あんなに知らないとは思わなかった」

昨夜捕まえた二人の事だった。

署に連行したテロリスト二人を、滉とドルフェスは一晩中尋問していたのだが、脅しや司法取引、果ては医師付添いの上での催眠暗示による、強制自白等の強硬手段を用いてもたいした成果が上からなかった。彼らはまるつきりと言っていいほど情報を持っていなかったのである。尤も、逃亡した幹部クラスと推測されるロフトに乗っていた連中を逃がす時間稼ぎのために、置いていかれたような奴らなのだから、期待を掛けるほうが無理ともいえた。

「結局判った事ってのが、組織の名前と幹部の名前、それに合言葉ってんだから……全く。ネレウスが大体のデーターを手に入れてくれるからいいようなものの。あたし尋問下手なのかしら、自信無しちゃったワ」

妙な女言葉を使いながら滉がぼやく。

青年は吹き出さないように苦勞してコーヒ―を飲み込んだ。

滉の尋問はどちらかというところ拷問に近く、あのサイボーグですらすぐに音を上げて命乞いを始めた程だった。しかも、それを何時も道りにこにこしながらやる、といった実にアブノーマルなやり方だった。医者が止めなければ自白剤も使っていただろう。

――本当に正体の掴み所がない人だ――

彼は心のなかで嘆息して窓の外に視線を移した。

オレンジから金色へと衣替えを始めた太陽の側には、まるで女王に額づく侍女の様に第6衛星セイнтаと第1衛星ファーストアが白い影を見せている。

「あの合言葉、何でしょうね……」

ふと思いついて、青年は呟いた。

「トロイの木馬……か？」

「はい」

青年は窓外を眺めながら頷く。

「あれは、俺に対するあの野郎の戦線布告さ」

滉が意外なことを言った。

「え？」

思わず振り返り、そこに見慣れない、殺気だった男の表情を見て、一瞬背筋が凍りつく。

「今度は何を企んでやがるのか……」

どすのきいた凄味のある声が、地獄の底から響いてくる様に聞こえる。

何時もの、おちゃらけている程の明るさは影もなく、全身から重い圧迫感が発せられていた。朝焼けの光を写す金褐色の髪は赤く燃え上がる炎を連想させ、同じ色の瞳が煉獄を覗くかのように暗い光を湛えていた。

だが、それはすぐに苦笑いに代わり、滉はふっと目を閉じた。

言葉もなく立ちすくんでいた青年は、部屋が明るくなったような気がしてほっと息を付く。

「ほんとに、腹立つ奴だよな」

そう言つて目を開いた男は、もういつもの滉に戻っていた。

「俺は此処に化け物の調査に来たつてのに。…あんなのに出くわしちまったら、本来のお仕事が出来ないわ。余計なことしなきゃ良かったわ、クスンクスン」

再び変なお姉エ言葉になりながら、滉は椅子から立ち上がる。

「何していいか判らん、取り敢えず飯喰いにいこう」

そう言いながらふらりと部屋を出ていく滉の後ろを、ドルフェスは釈然としない表情でついていった。

再び真つ赤なボディに戻ったネプチューンは、しきりに空腹を訴えるアース人と寝不足の現地人を乗せて、一路、20セクレット（惑星コーチの1日）営業のレストラン目指し、夜明けのベースステイを軽やかに走っていた。

「ネプチューン、早くしてくれ。死にそうだ」

ハンドルに突っ伏してか細い声でばやく滉に、忠犬はおざなりな鼻声で答える。

ネプチューンは機嫌が悪かった。

彼の子機であるトリトンが、飛行船の爆発に巻き込まれて、煤けた姿で帰ってきたからだった。かすり傷さえついてはいなかったが、わが子の哀れな姿に、ネプチューンはとても心を傷めていたのである。

だからネプチューンは、哀れっぽい滉の声に、たいして興味をしないしなかった。

そんな主従のやり取りをぼんやりと聴きながら、ドルフェスは水晶の柱の中で微笑んでいる少女を見つめていた。

彼女は儚げな雰囲気をもとい、幸せそうに微笑んでいる。

何故、ネプチューンの中に飾られている少女が、あの白髪の男と共にいたのだろう。彼女は何者なのか？ 滉とはどんな関わりが有る

のか？

滉と言え、先程の彼の様子は何だったのだろう、今までそれほど凄く恐ろしい殺気を発する人間を見たことは無い。

ドルフェスは疲労のため半分閉じかけた目を臨時の上司に向けた。ネプチューンにぼやき続けるアース人は、あの時から青年の顔をまともに見ようとしなかった。

もしかしたら、すっかり自分の感情をドルフェスに見せてしまったことに照れているのかも知れない。

青年には、あの燃え上がる紅蓮の炎の様な滉こそ、本当の彼の姿ではないか、という様な気がした。恐らく、白髪の男への憎悪があの殺気となって発せられたのに違いない。

そして、白髪の男は長年の滉の敵、何てことは馬鹿でも判ることだが、で、あれば何故、滉が大切にしているらしいこのホログラムの少女が、白髪男と共に逃亡したのかという疑問が再び首をもたげてくる。

ひょっとして、彼女は誘拐されて無理やり連れていかれたのかも知れない。

そうならば納得がゆく。

しかし簡易ロフトでの彼女の様子はそんな風には見えなかった。青年は微かに首を振ると、眠たそうな大あくびをひとつした。いくら考えたって、自分は何も知らないのだ。きっと、じきに滉が話してくれるだろう。

ドルフェスは気楽に構えることに決めて、寝不足で乾いてしまった目を休めるために、軽く瞼を閉じた。

視界一杯に、薄紫の花びらが、強い風に煽られて舞っている

花びらは、回りを囲んだ薔薇から宙に蒔かれていた。

息が詰まりそうな薄紫の風花の乱舞。

遠く遙かに、青い水平線がかいま見える。

ふと気がつくと、薄紫の花びらとともに、金褐色の髪が風に舞っていた。

薔薇の茂みのなかから長い金褐色の髪だけを覗かせて、あの女がうずくまっている。

「どうした？」

そつと訊ねると、彼女は俯いたまま首を振る。

「あの子、行ってしまったわ」

涙に濡れた、かすれた声。胸に錐が突き刺さった様な痛みが走る。彼女の嘆きが、そのままこちらの悲しみとなって、心臓を締め上げる。二人はかけがえのない友を失ったのだ。

「もう帰ってこないわ、元々自分が居るべきところを思い出したのよ」

小刻みに震える細い肩に、そつと手を置いて軽く揺すつてやる。

「大丈夫だ、きつと帰ってくるさ」

慰めの言葉に、女は激しく首を振る。

「私たちの事なんてもう忘れてるわ！もう、戻りっこない」

まるで小娘の様に泣きじゃくる女の姿に、たまらなく愛しさがこみ上げてきて、思わず後ろから腕を回して、女が抱え込んでいた膝ごと抱きしめる。

女の肩がビクツと震え、腕のなかで一瞬身を硬くする。

そんな女の身体を包み込み、腕に軽く力を込め、そつと耳元に囁く。

「大丈夫だ、きつと帰ってくる。もう泣くな……」

頬に押し当てた女の頬が、微かにこくりと頷いた。

「うん……D・D」

そして首を巡らせて、柔らかな薄桃色の唇をこちらの頬に押し当てる。

今度はこちらがびくりとしたが、初めて受ける暖かで柔らかい感触に、ふつふつと幸せな気分が沸き上がり、何かを失った苦痛が薄れていくのを感じた。

心臓はアップテンポで飛び跳ねて、気恥ずかしさに頬が上気してくるのが判る。

もう少し、この愛撫を受けていたい。

そう願いながら、女を抱く手に力を込めた。

いきなり後ろから突き飛ばされたような衝撃を受け、ドルフェスは何かに嫌というほど頭をぶつけた。

「て……………」

痛みに呻きながら目を開けると、車外の景色が矢のように流れていく。ネプチューンは物凄いスピードで街を疾走していた。

「?!」

驚く青年に、何だか楽しそうな滉の声が飛んだ。

「よう、やつとお目覚めか？ 気をつける、もう一撃くるぜ」

間髪をいれず、第二撃が襲ってきた。

とっさに両手を付いてサイドボードに頭をぶつけるのを防ぐ。さつきはこれをまともに食らったらしい。

「もういいネプチューン、俺に寄せろ」

バックミラーに映る、後ろから追突してくる車を見つめながら、滉が静かに言った。

遠吠えと共にハンドル周辺のコンソールパネルに光が灯る。

「D・D、歯ア食いしばれ、舌噛むぞ！」

言うが早いか、滉はブレーキペダルを目一杯踏み込み、急ブレーキを掛けた。

激しい衝撃と何かが壊れる爆音の様な音が車内に轟く。ネプチューンの急停止のために後ろの車は車体前部を大破させて、開いたボンネットから煙を吐きだしながら、のたうつかの如くスピンを始める。

その時にはもうネプチューンはフルアクセルで離脱していた。

「人にカマを掘るんなら、死ぬ気で来い」

中央分離帯に突っ込み、火球と黒煙を吹き上げる車を見ながら、
滉が吐き捨てる様に言う。

いきなりスピーカーから、ハイテンポな音楽が流れだした。その
リズムに乗って、ネプチューンは夜明けの街路を疾走してゆく。

「な……?! 何なんですかア。いったい……?!」

起き抜けの一撃から、訳も判らずシートベルトとサイドボードに
しがみついていたドルフェスが、情けない声を上げる。

「悪いが、その面でそんな声ださないで来れ。死にたくなる」

苦虫を噛みつぶしたような顔で、滉が言う。

目は、炎上する車の黒煙を割って飛びだしてきた車をちらりとね
めつけ、左手が素早くシフトチェンジして、ネプチューンはさらに
加速した。夜が開けたばかりのこの時間帯は、まだ他の車もなく、
ネプチューンと追跡車輛だけがすさまじい速さで突っ走っていた。

「顔は関係ないですよ。一体なんでこんな事になってるんですかア
?!」

加速度によってシートに押しつけられながら、ドルフェスは食い
下がった。

「顔が大事なんだ。お前の面はな!!」

負けずにしつこく言い返しながら、ハンドルを右に切る。右手の
ビルの間から、猛スピードで飛びだしてきた車が、肩すかしを喰っ
て中央分離帯のところで体制を建て直し、後続の車とともにネプチ
ューンを追ってくる。

「3台も?! どうして追っ掛けられてるんです? 一体あいつら
は何者なんです?!」

何故どうしてを連発する相棒には答えずに、滉はネプチューンに
怒鳴った。

「ネプチューン、まだ分析できねエのか?」

ディスプレイにはW A I Tと表示された。滉は舌打ちしてハンド
ルを左に切る。

「警部! 教えてください。何が起こってるんです?!」

必死な声を張り上げて、青年が聞く。

「白髪頭の爺いが悪戯を仕掛けて来たんだよ」

にやり、と滉は笑った。楽しんでいるらしい。

「悪戯ア?! これが?!」

青年は目を丸くした。後ろの車はどう見てもこちらの命を狙っている、これが悪戯だなんてどうして言えるのだろう。

「ハードボイルドみたいなこと言わないでください」

惘然と言うと、滉が明るい声で笑う。

「そーいやあ、まだ茹で卵も喰って無エや。腹減ってたの思い出した」

ネプチューンが落ち着いた洋館風のレストランの前を通り過ぎた。それを横目で見ながらため息をつき、

「これで4件目だ。恨むぜ爺い」

地獄のそこから響いてくる様に口惜しげな声で呟く。

不意に左側サイドウィンドウに光の柱が見えた。ドルフェスが驚いて振り向いたとき、右前方にも光が閃く。

「レーザーで攻撃してる?! なんてこった! 本当に殺す気だ!」

後ろの車から身を乗り出して、銃身の長いレーザーライフルを構えている派手なアロハシャツを着た男を見、青年は悲鳴のような声を上げた。

「だからア、そういう声を出すなっつーてるんだよ。殺しにきてるのに決まってるだろうが。しっかりしてくれよ、頼むぜD・D」

D・Dと言う呼び掛けに妙に力を入れて、津川滉は車をジグザグに走らせはじめる。

「さっきから言ってる、爺いって誰なんですか?」

上司に嘆かれて、少ししゃっきりしようと思ったのが、ドルフェスは深呼吸を一つしてから滉に訊ねた。

「お前さんも昨日見たろう? 白髪頭の糞親爺だよ」

「あのテロリスト?! じゃあ報復ですね」

「いんや」

十字路に来た、アース人は素早いハンドル裁きで右手の道へ入る。
「後ろの連中はどうか知らんが、あいつはこれくらいで俺が死ぬなんて、考えちゃいないだろうよ」

だから悪戯と言ったんだ、と言うような口調である。

「付き合い長そうですね」

厭味のつもりでドルフェスが言う、アース人はけらけらと笑った。

「おお、150年前からだぜ」

——どこまでが本気なんだろう——

ドルフェスは深くため息を付いた。

レーザー攻撃は、もう一台の車からも始まり、時々ガンという音が車内に響きだした。

ネプチューンの外装は、宇宙船に使用される特殊合金が使われている、と昨夜滉が言っていたが、レーザーを何度も浴びては何時まで耐えられるか判らない。

それに、もうそろそろ道路にも他の車が出てくる時間だし、暴走車が3台も連なって走っていれば、交通課も黙ってはいないだろう。
ドルフェスはだんだん焦ってきた。

「どうにかならないんですか？ このままじゃ一般人を巻き込んでしまう」

「今やってる。ネプチューン、どうだ？」

ディスプレイの表示が変わり、IMITATIONと綴られた。

アース人は大きく頷く。

「やっぱりな、人間使ってねえや。なら、遠慮なく」

左手がコンソールの上を走る。ボンネットが開き、昨夜ソルティードールのシャッターを吹き飛ばしたレーザー砲がせりあがってきた。
「ネプチューン、タイミングとトリガーは任せた。いくぜ！」

言うが早いか、アクセルとブレーキを同時に踏み込み、絶妙のバランスで360度ターンをする。ネプチューンの雄叫びが響き、ブラスター砲が立て続けに2度火を噴いた。瞬く間に追手の2台とも

が爆発し、推進装置が制御を失って車体を高くはね上げる。

「一丁上がり、だね」

回りながら得意気に滉が言う。だが、次の瞬間、その得意顔が引きつった。

高く跳ね飛んだ2台の車は、空中で衝突し四散した。そしてその破片が辺りのビルや道路に散らばり、それぞれが更に爆発し、辺りは火の海となったのだった。

炎の向こうで、後ろから走ってきた青い車が慌てて横道へ逃れていくのが見えた。

「くう!!」

滉が呻き、全方向の制御ノズルを開いて、ネプチューンはその場に停止した。

「置き土産付きとはね」

バックミラーに映る炎の海を眺めながら、ため息まじりに滉が言う。

「何でこんな事を...?!」

啞然とするドルフェスに滉が答える。

「嫌がらせだよ」

コンソールパネルのランプが点滅し、通信機から少し鼻にかかった様な女のアルトの声が流れてくる。

『滉、滉。応答して、何処に居るの?』

「おう、魅羅^{みら}か?」

『そうよ、暴走車と火災発生のお知らせが来てるわ。何かあったの?』

「俺だ俺だ。ファントムの御挨拶を受けてたんだ」

『あの狒々親爺。来てるの?』

通信機の向こうで、女が吐き捨てるように言う。

それを聞いて滉がにやつと苦笑する。

「ああ、その様だ」

『とにかく、現在そちらに交通課と消防車が向かってるわ。私もす

「行くから、待ってて頂戴ね」

念を押すように言うのと通信は切れた。

「やれやれ……」

大きく息を吐き、滉はシートに身を沈めた。そして呆然としたまま自分を見つめているドルフェスの視線に気づくと、再びにやりと笑いかけた。

「聞きたいんだろう？あいつらのこと」

青年がゆつくりと頷く。

「当然です」

前髪をかきあげて、滉は天井を仰いだ。

サンルーフを透かして、第4衛星セアカンドウが白い姿を浮かべている。

「あの白髪爺いは、ファントム。趣味でテロリストもするが、本業は武器の密輸商だ。現在、全銀河系で指名手配にしたいNo.1の極悪人だが、多数の星系国家の軍部に深く食い込んでいてなかなか手が出せない。替え玉も多くてすぐには尻尾を出さない上に全銀河系組織暴力団の影の総元締めだ。んで、さっきの奴らはあの爺いのペツトさ」

「何故、あんなに簡単に殺したんですか？ 捕まえれば何か掴めたかも……」

「ネプチューンがイミテーションって言っただろう？ あれはアンドロイドだよ。俺たちは人間モドキって呼んでいる。商品名はファントム・オブ・ザ・ブレス。バイオエレクトロニクスで作りだした戦闘マシンさ。脳味噌には作戦以外何もインプットされていないし、捕まえれば自爆する。今みたいにアンカーボムを仕込んで、あたり一面に迷惑を振りまく奴も居る。なかなか高い商品なんだが、爺さん俺のためには散財してくれる气らしい」

滉の説明に、ドルフェスは言葉が出なかった。

何だか途方もなさ過ぎて実感が沸いてこない。まるで安手のペーパーブックの様だと思う。

ふと、サイドボードのホログラフが目にとまり、ドルフェスは思い切って口を開いた。

「彼女は、誰なんですか？」

滉がふいつと横を向き、青年から顔を背ける。

暫く無言の時間を置き、やがてため息とともに言葉を吐きだした。

「その女は、ダフネ。津川ダフネ。俺の女房だ」

「ええ?!」

ドルフェスは目を見張った。

滉の妻だという少女は、幸せな笑顔で滉を見つめ、滉はその視線から顔を背けている。

ネプチューンの後ろに広がった炎の海の間から、漸くパトロールマシンと消防車のサイレンが響いてきた。

7 Phantom・of・the・Breath——亡霊の息吹——（後書き）

美女の意外な正体。そして新たな女の影

二人の男は、消防車が消火作業にあたっているのを、車に寄り掛かって立ちながらぼんやりと眺めていた。

滉は、ダフネ、というあの少女の名を口にしてから、むつつりと黙り込んでしまっている。

ドルフェスも、ダフネが妻だという滉の意外な言葉と、ファントムという男の途方もない話で頭が一杯だった。

滉に聞きたいことは山ほどあったが、何から聞いたらいいのか全然まとまらない。結局彼の隣でぼけつと火を眺めていた。

現場検証に当たっている警官たちのなかから、一人の男が二人のところにやって来た。

「津川警部。自分は25分署交通課勤務、カウル・タウスです。事情をお伺いしたいのですが、署まで御同道願えますか？」

敬礼をしながら、タウスは滉に訊ねた。片手を上げて挨拶に応じながら、連合警察の警部は首を振る。

「いや、後ほどこちらから報告書を出させてもらうよ。今は人を待ってるんだ、調査の途中でね」

軽く微笑みながら答えると、タウスは再び敬礼をして去っていった。

遠く頭上からクラクションの音が聞こえる。

ドルフェスは上を見上げた。辺り一帯は全車線通行止めとなっていたが、交通量の多い幹線道路であるために、取り敢えず上空に迂回路を設け、交通課のマシンが整理に当たっている。

立ちのぼる黒煙を避けて流れる車の列が、のろのろと頭上を通り過ぎていくのが見えた。

ふと、その車の列から一台のパトロールマシンが離れ、こちらに

向かって降りてくるのに気が付いた。

マシンは二人の立つネプチューンの横に滑り込み、運転席のドアを開ける。

その中からぬつと現れたごつい男は、なんとセーレオ・カシムだった。

「ぶ…部長…？」

意外な人物の出現に、ドルフェスは思わず背筋を伸ばす。

第一課の鬼部長と仇名されるセーレオは、何時も通りかつちりと背広を着込み、きびきびとした動作で二人に近づいて来る。

「津川警部。私の気のせいか、貴方が来られてから、何だか事件が多くなっているようですね」

形式通りきつちりと敬礼をしてから、セーレオ部長はそう切りだした。思わず滉が苦笑する。

「全く、うつかり蜂の巣をつついてしまったと認めますよ」

「まあ、早めに見つかって良かったと言っておきましょう。これは昨夜の報復ですか？」

セーレオの問い掛けにアース人は頷いた。

「そう考えて差し支え無さそうです。ネプチューンのデーターを分署のコンピュータに送っておきますから、こちらの正当防衛は立証出来るでしょう」

「そうしてください、こちら手間が省けて助かります。なるべくなら、もう少し穏便に事が収まってくれば、これに越したことはないんですがね」

そう言つとセーレオは現場の主任と話してくることにわってその場を立ち去った。

「結構腹の出来た部長だね」

感心したように滉が言つた。

「有り難うございます」

上司を褒められて、ドルフェスは何となく嬉しくなった。

「しかし、事件が多くなつたつてのは痛かつたな」

「実際そうですからね」

青年が頷くと、滉はがしと頭を掻いた。

「あの爺いの所為だ。ほんとに、腹立つ奴だよな」

そう言っただけ大きく伸びをする。

「誰が、腹立つの？」

不意に滉の後ろから女の声が出た。何となく甘ったるい鼻にかかったようなアルトの声である。

いつの間に来たのか、滉の後ろに黒髪の女が立っていた。

「おう、お前か」

顔だけを後ろに向けて、滉が笑いかける。女は白い手を伸ばすと滉の首に巻きつけ、伸び上がって赤い唇を男のそれに押しつけ、軽く音を立ててすぐに離れた。

「お・は・よ」

突然のキスシーンにドルフェスはすっかり動揺してしまった。

「えっと…あのう…その…」

真っ赤になってしどろもどろになっている青年に、いきなり女が飛びついてきた。

「D・M!!」

——えーっ?!?!——

女を首からぶら下げて、ドルフェスは何にも考えられなくなり、点目のまま滉に救いを求める。

「おいこら、馬鹿娘。人違いだよ」

笑いながら滉は、女の襟首を掴むと、猫でも持つようにして、ドルフェスからひきはがした。

「え、そうなの？」

きょとんとした顔で滉を見た女は、にっと笑うと誤魔化すようにドルフェスの肩をポンポン、と2〜3度叩き、澄まして滉の横に立った。

「失礼いたしました。知人とよく似ておいでだったものですから」
そういつて軽く頭を下げた女を、あらためて見てドルフェスは又

少し驚いた。

まるでモデルの様にほっそりとして背の高い女性で、絹糸の様に艶やかな黒髪は膝よりも長く、色の白さを更に際立たせていた。歳は自分と同じぐらいか、淡い色のスーツに身を包み、落ち着いた大人の女といった雰囲気漂わせている。

そして何より彼を驚かせたのは、その面差しが滉に良く似ていたせいだった。

滉よりも幾分線の細い感じで、女らしい柔らかさを持つてはいたが、端正な造作は生き写しといえた。

彼女は、ドルフェスがぼかんとした顔で自分を見ているのに気づき、少しはにかんだ微笑みを浮かべた。その笑顔が別の女性のものとなる、青年は不意にホログラムの少女を連想した。

「ごめんなさい、気を悪くなさったかしら？」

アルトの声が心配そうに訊ねてくる。

「え、いいえ」

慌ててかむりを振る。見とれていたとは言にくいので、ドルフェスは顔を赤らめながら大きく一礼して名を名乗った。

「25分署の刑事でドラゴ・ドルフェスです」

黒髪の女は、思い当たったように微かに頷いた。

「貴方がドルフェスさんですか。私は竜造寺魅羅^{りゅうぞうじ みら}、連合司法局の検事です。今回は津川警部の秘書として、この任務に当たっています」
魅羅の言っていることの不自然さに、ドルフェスは首を傾げた。

「あの、検事さんが、警部の秘書なんですか？」

「どこの世界に警部の部下になる検事が居るんだろう？ 納得がない様子の青年に、黒髪の女検事はため息とともに頷いてみせ、
「そうなんです、任務にプライベートを持ち込むなんて良くないと思うんですけど。何しろ実の父親には逆らえませんか。仕方なく、秘書をやっていますの」

「と言って、魅羅は可愛く笑ってみせる。ドルフェスは再び点目になった。」

「へ？ 実の父？」

聞き返す青年に、魅羅は笑顔で答える。

「ええ、私、滉の娘です」

「あ？！ 魅羅！ てめえ言いやがったな」

滉が慌てて魅羅の胸座を掴む。

「あら、いけなかった？」

魅羅は少しも動ぜずに艶然と笑っている。

「つたりめえだろ、こぶ付きじゃあ女にモテねえだろうが」

「まあ、お父様。お母様を裏切るの？ 何時ものことだけど」

「喧しい！！」

掛け合い漫才の様な会話を始めた二人を前に、ドルフェスは、一人静かに混乱していた。

「え…こぶ付きがけーぶで、実の父で…だから、検事が娘で…へ？ で…キスしてて…え？え？――」

シヨツクの連続でぐちゃぐちゃになった頭のなかは、容易には纏まらない。

ドルフェスは、兄弟程度の歳しか離れていないように見える親子を、ぼんやりと見つめていた。

「ちよつと、滉、ドルフェスさんが困ってるわ」

父親を平気で呼び捨てにしながら、魅羅がこちらを向く。

「困らせたのは、お前だろーが」

文句を言いつつ、多少照れたように顔を赤らめている滉の様子に、ドルフェスは思わず吹き出してしまった。

「何だよ」

無然とする滉を見て、今度は魅羅がけらけらと笑いだした。見た目の雰囲気とは裏腹に彼女は途轍もなく明るいつつ性格らしい。

「とにかく、これから暫くの間、私たちはチームなんだから、仲良くして下さいね。ドルフェスさん」

ひとしきり笑ってから、魅羅はにっこり笑って握手を求めてくる。
「あ、D・Dと呼んで下さい。ニックネームなんです」

魅羅に答えてドルフェスがそう言つと、黒い瞳が微かに見開かれた。

「D・D…」

そう呟く魅羅の後ろから、滉がか細い声を出した。

「魅羅あ腹へつた。何か喰いに行こうぜ」

「そー言えば私もお」

魅羅はまた、けらけらと笑いだした。

魅羅を連れてきてくれたセーレオ部長に後のことは任せて、再び走りだしたネプチューンは、空腹の3人を乗せて、レストラン求めて軽やかに走っていく。

その車内でドルフェスは、血の繋がりという事実を痛感していた。滉が良く喋るのは判っていたが、魅羅は父親の2倍は喋りまくる。滉の話しにあいづちをうち、アルゴル風の建物が有ると面白がる。飛行船の爆発に巻き込まれて、遠くへ飛ばされ、傷だらけになって帰ってきたトリトンを労わって膝に乗せて撫ぜたり話しかけたりしかというと、昨日市警本部に置いてけぼりにされた恨み言を滉にぶつける。

見た目がしつとりとして落ち着いた感じのする分、実態との落差は激しかった。

ドルフェスは、魅羅の中に、間違いなく滉の遺伝子が伝わっていることを実感した。

——似た者父娘——

彼はしみじみとそう思った。

「私、滉が25分署に腰を落ち着けた訳が判ったわ」
ネプチューンの後部シートから、妙に納得した様な声で魅羅が言う。

「何だ？ 藪から棒に」

滉が怪訝な顔をする。

「モセ署長って、モ口滉の好みだもの」

「余計なことをぬかすな、腹が減る」

不機嫌に答える父親に、からかうような笑みを浮かべて娘は言葉をつなげた。

「だあってえ、滉が25分署から帰ってこなくなったから、私、本部署長に散々厭味を言われたのよ。で、誰が御意にかなったのかなって思ってたんだけど、さっき挨拶に行ってるほどって思ったの。ナディーラって、素敵な人ね」

最後の言葉はため息をまじえた、夢見るような口調になっていた。ドルフェスは一瞬背筋を走ったものが何か判らなかった。

「魅羅、お前：病気が出たな」

滉が嫌な予感に眉をひそめた。

魅羅はこつくりと頷いた、目がとろんと潤んでいる。

「勿論よ。滉の好みは私の好みなんだから。私、ナディーラに恋しちゃったわ」

大量の悪寒が一個師団ほど背中を駆け抜けていった。ドルフェスはシートベルトを握りしめ、恐る恐る魅羅を振り返った。

花の顔を桜色に染めた黒髪の美女は、うっとりモセの面影を追っている。

「やめとけ、セファートやミドルアースと違ってここはそういう事に偏見がある」

「あら？ アルゴル人って、顔さえ良ければ性別も相手の人数も関係ないんでしょ？」

彼女は不思議そうに首を傾げた。

「そりゃ、昔のアルゴス王家と、それに毒されてる主星の連中だけ。一般のアルゴル人はノーマルなの」

「べーっ、私諦めません。必ずナディーラを振り向かせるわ」

決意を込めて白い手を握りしめ、天を振り仰ぐ。

父娘揃って、50年前からの美女に一目惚れしなくても良さそう

なものだ、ドルフェスから見れば、外見はどうあれ自分の3倍は年上の女性は、恋愛対象の外にあった。尤も、もしかしたら滉は署長と歳が近いかも知れない。まあとにかく、父娘の趣味はドルフェスの理解を越えている。

青年はイメージを完璧に裏切っている父娘を見ながら、そつとため息をついた。

「あつ？　そういえば、あの狒々親爺、こっちに来てるんですって？」

忌々しげに魅羅が言う。

「そーだよ」

同じくらい憎たらしそうに滉が口を歪める。

「ダフネ見つかった？」

ドルフェスは、ホログラムへ視線を移す。

「お前ね、実の母親くらいお母さんって呼べないの？」

「いいのよ、私が二十歳になったとき、名前で呼び会いましょうねって、二人で決めたんだから。母さんもその方が若返るって言うってたわ」

平気な顔で魅羅が言い返す。滉は父として深くため息を付いた。

「ダフネの奴、どういう育て方をしたんだろうな」

「滉が居なかったから悪いのよ」

「俺の所為じゃない…」

「そう。悪いのはあの狒々親爺よ。で、昨日何があったのか教えて頂戴？」

ドライバースートの背に手を掛けて、魅羅が身を乗り出したとき、ネプチューンがオンオンと鳴きながら減速しはじめた。前方にレストランの看板が見える。

「ま。飯喰ってから、ゆっくり話してやるよ」

何となくホツとしたような声で滉が言う。魅羅は又、けらけらと笑いだす。

ドルフェスは、そんな父娘のやり取りを聞きながら、新たに判明

した、魅羅よりも年下の少女に見えるダフネが魅羅の産みの母。というショックを必死になって押さえつけていた。

「何ですってエー！　ダフネが？！あの爺様と？！　まさか！！」
目をつり上げて魅羅が怒鳴る。

テーブルの上に並んだコーヒークップやミルクピッチャーが、まるで魅羅の剣幕に怯えるようにかたかたと音を立てた。

3人はやっとありついた食事の後、コーヒーを飲みながら、ドルフェスが昨日から今朝にかけてのあらましを魅羅に話して聞かせているところだった。

別に滉が喋りたがらないわけではないのだが、魅羅がドルフェスにばかり訊ねるので、自然ドルフェスが話し手になってしまっていた。そして、飛行船でファントム達が逃げる段にきて、ロフトに乗っていたダフネの姿を話したとき魅羅が怒鳴ったのである。

明るい日差しを受ける窓辺で、朝日を後光の様に浴びる魅羅は、黒髪を艶やかな紫色に輝かせながら、全身に怒りを漲らせていた。

「D・Dに怒鳴ったって仕方無いだろう？」

のんびりとした声で滉がたしなめる。魅羅は激しく首を振った。

「信じらんないわ！　あり得ないわ！！　正気じゃないわ！！」

娘の言葉に滉はゆっくりと頷いた。

「勿論正気じゃ無いだろうな」

魅羅は気を落ち着かせるために、コーヒーを一口飲み込んだ。

「じゃあ、何らかの細工をされていたって事ね？」

「そうだろう？　正気なら殺されたって一緒に居るはずがない。あの爺い、俺に見せつけるために何かしたんだらうよ」

黒髪のアース人は眉を寄せて頷いた。

「あいつ滉に嫌がらせするためなら何でもするものね」

それで納得したのか、魅羅は再び黒い目をドルフェスに向けた。もうさっきまでの怒りは影をひそめてしまっている。彼女は劇的に

気分を変える事が出来るらしい。

「でね、その後どうなったんです？本部署からは綺麗な花火が見えたわ。後で飛行船が爆発したって聞いたけど？」

魅羅の問いに、青年は頷き、爆発のときの様子を話した。

「変なの、あの時、星間通信まで不通になったのよ。飛行船一隻の爆発で空中散布された物でそんな事になるかしら？」

不思議そうに小首を傾げる魅羅の可愛い仕種に、ドルフェスは少し赤くなりながら首を振る。

「さあ、俺には判りません」

「何も散布されちゃいないだろうよ」

滉が在らぬ方を見ながらぼそりと呟く。

「え？」

ドルフェスは滉を見た。アース人はカップを片手にそのままの姿勢で言葉を続ける。

「爺いは、穴を掘って逃げたんだ。あいつの奥の手さ」

「そっかー。いつもの手ね。だから電波が混乱したんだわ」

魅羅が納得したように頷く。

「あの、でも地上にはあの時、もう警官や消防車が来ていたんですよ。どうやって穴を掘ったんです？」

納得がいかないドルフェスが、かむりを振りながら聞き返す。そんな青年に、今度は魅羅がくすつと笑いながら答える。

「地面には掘らないわ。掘ったのは空中よ」

「はあ？」

ますます判らなくなった青年は、ぽかんと口を開ける。

魅羅はその顔が面白いと言ってけらけらと笑いだした。

「魅羅さん……」

ジト目になってドルフェスがいじける。魅羅は慌てて咳払いをした。

「コホン。えつと詰まりね、詳しくは私も判らないから、ちゃんと説明できないんだけど。空中に穴を掘るって言うのは、次元に穴

を開けてそこに逃げ込んだってことよ。宇宙船のハイパージャンプと同じかな？」

「惑星上でそんな事できるんですか?!」

「普通なら無理でしょうね。重力場とか何とかややこしいらしいから。でも、あの爺さんなら出来るのよ」

理屈なんて知らない。と言わんばかりの魅羅の説明に、ドルフェスは混乱しながら取り敢えず頷いた。

「そうなんですか…」

「そうなのよ」

たたみかけるように魅羅が頷いてみせる。青年はこっそりため息を付いた。

気のせいかもしれないが、何となく何かもつと別の理由があるような気がした。この父娘は何かドルフェスに隠していることがある。ドルフェスはぼんやり窓を眺めている滉の横顔を見ながらそう思う。

「ミウル・クルム・クルム…」

その滉が、またぼそりと呟いた。

「何それ？」

魅羅が訊ねると、滉はやっと二人のほうへ顔を向けた。

「飛行船に書かれていたアルゴル文字だ。D・D、お前さん服屋の名前だつて言つてたよな？」

「ええ、ベースでは結構名前の通ったメーカーです」

「知ってる。ニュースで言つてたわ。K・D・Dでしょ？ カジユアル・ドレス・ドラマティックだっけ。アース系資本のアパレルメーカーよ。アルファベットをアルゴル文字にして、それをマークにしているの。結構いい服多いわよ、実は私、このスーツ昨日その直営店で買ったの、似合うでしょう？」

ドルフェスの後を取つて魅羅が一気に説明する。滉は空になったカップを皿に戻し、やれやれとため息を付いた。

「見た事の無い服だから変だと思ったんだ。お前本部で何やってたんだ？」

「ぼやく父親に、魅羅は唇を尖らせる。

「暇だったの。書類整理が終わったら、後待ってただけだったんですもの」

「ああ、悪かったよ。ところで、その服屋の車が、表の駐車場に止まっている」

ドルフェスと魅羅は、思わず窓の外を見た。

先ずとても目立つネプチューンが入る、その他は数台の普通の車が止まっている。ドルフェスはその中に、見覚えのある青い車を見つけた。

「あの青い車……」

「流石D・D、伊達に刑事はやってないね。そう、さっき火事の向こうで横道に入った車だ。そして……」

顔は動かさず、視線だけで後ろを示す。

「あれの運転手が、俺の後ろのほうのカウンターに居る、気づかれるなよ」

低い声で滉が注意する。

2人ともさすがに今度はすぐ見るような間抜けた真似は思い止まり、さりげなく滉の顔を見るようにして肩越しにカウンターを眺めた。

30程のテーブルが並んだ、ミドルアースのアーリアアメリカン調の装飾をした店内には、朝食の客はそれほど入っていない。背の低い、お碗を伏せたような形のメンテナンスロボットが、清掃と給仕のためにもそもそと動き回っているのが目についた。店の奥にはカウンターバーがしつらえられ、そこにこちらに背を向けて、二人の男が座っていた。

美貌のアース人は、金褐色の瞳を細めて自分によく似た娘を見る。「さて魅羅ちゃん。カウンター奥の鏡に映っている顔に見覚えは有りませんか？」

背後で後ろを向いている男の顔を、振り向きもせずはどうやって見たのか、滉は微笑みを浮かべながら頼杖を突く。

カップを持ち上げて暫く何か考えていた魅羅は、ゆつくりと父と同じ微笑みを浮かべると、バックから手帳型のシステムコンピュータを取り出した。

手早く立ち上げると二・三キーを叩き、何事かを打ち込んでいく。ドルフェスは、にんまりと悪巧みをするかのように微笑み会う父娘の顔を、交互に見つめながら首を傾げた。

8 T o ・ R e t t u r n ・ T o ・ O u r ・ S u b j e c t — 閑話休題 —

ついに魅羅の登場です。Angel Cryにも、同時登場。見比べてみてください。

9 Junction — 分岐点 — (前書き)

魅羅が美人なのを忘れやすいのです。

カイマン・グレーは相棒のコスタと共に、カウンターで不味そうにエスプレッソを飲みながら、後ろから聞こえてくるけたたましい女の笑い声を交えた会話に聞き耳を立てていた。

黒髪の女は、さつきから喋りっぱなしだ。

カイマンは眉をひそめた。

たいした美人だが、あんなけたたましい女は好きではない。女はもつと控えめで従順なのが好きだ。そうしたら心の底から愛して、天国に行くまで可愛がってやるのに。

黒髪の男が何か言い、赤毛の派手な服装の男がぼそぼそと答えている。

黒髪の男はまだ20代のはじめぐらいの歳らしい。見るからにぼーっとした、大して取り柄も無さそうな奴だ。

しかし赤毛の男は油断がならない。

津川滉の名前はここの所だいぶ知れ渡っている。

かなり荒っぽい捜査の仕方やその良く目立つ容貌と相まって、Bomb・Bay「爆薬庫」というく符牒で囁かれている男だ。

ただ妙なのは、時々あの男を女だったと言う奴が居ることである。

——確かにあの面なら、女にも見えるな——

あの馬鹿でかい男が、捜査のために女装している姿を想像して、カイマンはくっくつと笑った。

「おい……」

隣に座っていたコスタが、肘を突付く。

「動くぞ……」

三人は笑いながら席を立ち、女が清算して店を出ていく。男たちはゆらりと立ち上がった。

連中の乗った派手な車は、のんびりとエルカサル地区へと走ってゆく。

このまま行けば昨夜、津川滉が手を入れたソルティドールに着くはずだ、今もあの店は警官たちが取り囲み、現場検証が続いているはずである。

カイマンにはテロリストが何をしていようが関係はない。

彼にとって重要なのは、今日この仕事がつまく出来るか？ということだけである。

一日中連中の後ろを付け回って、それを報告する。何だか馬鹿みたいな仕事だが、たったそれだけで一人頭7万クレット（銀河内共通高額通貨。10クレットで平均的なサラリーマン家庭の2ヶ月分の収入に相当する）も貰えるのだ。それだけ有れば3年は豪遊出来る。しかもその依頼主というのが、裏の世界で飯を喰っている者なら、必ず一度は耳にしたことがあるDark Bishop「闇司祭」別名ファントムと呼ばれる男なのだから、これから彼の羽振りも良くなるに違いない。Dark Bishopの仕事は一度でもしたことがあると言えば、何処に行っても結構いい顔が出来るのだ。それに、ひょっとして仕事ぶりがいいとか、気に入ったとかで、今後もお近づきに成れるのなら、それこそ裏世界で怖いもの無しだ。夢を際限なく広げながら、カイマンはむふむふと一人でにやついている。

「曲がるぞ…」

コスタが陰気な声で言う。

この男は何時もこうだ。どんな時も生気のないつまらなそうな顔をして、ぼそぼそと話す。こいつが顔に血の気を登らせるのは、女をいたぶるときだけ。

女と言えば、この間の女はなかなか良かった。若く美人で、いい味をしていた。コスタと二人で十分に楽しませてやったから、今頃は幸せに包まれて天国に居ることだろう。

——おっと、仕事仕事——

カイマンは緩んだ口許を引き締めた。

路地に入った車の後について曲がる。この辺りはビジネス街で、味もそつけない四角くて背の高いビルが並んでいるだけ……。そのビルの狭間の路地には、もう目標の車の影は見当たらない。

「?!」

慌てて車を走らせ、あちらの路地こちらの路地と、真っ赤なスポーツカーを捜し回る。しかし、何処に雲隠れしたのか、連中の車は姿を消していた。

「しまった!」

間に2、3台の車を入れてつけていたのに、どうやら気付かれていたらしい。

カイマンは青くなった。

こんな簡単な仕事をしくじってはDark Bishopに合わせる顔がない。

「くそ!!」

絶望感に目の前が真っ暗になり、両手でハンドルを殴りつける。苛立つ相棒の姿を、コスタはどんよりと濁った目で無表情に眺めていた。その目がふっと外を見る。

「……女……」

「何言ってんだこんな時に」

相棒に向かって、苛々と噛みつくように言う。

「連中の女……」

コスタはだるそうに顎をしゃくった。

示されたほうを見て、カイマンは目を見張った。あの黒髪の女が、すぐ側の路地できよきよと回りを見回している。

女はこちらに気が付くと、手を振りながら駆け寄ってきた。カイマンは慌てた、尾行しているのにこんな所で顔を会わせてしまった。これはこれからやりにくくなる。かといって、知らぬ振りをしても疑われるだけである。

——ままよ——

カイマンは車を止めた。

「ねえ、一寸困ってるの、助けてくだらない？」

女はほっそりとした身体を折り曲げて車内を覗き込んだ。長い髪が肩から滑り落ちてサラサラと音をたてる、近くで見ると途轍もなくいい女だった。

何となく胸の辺りがもやもやとしてきた。後ろでコスタが喉をならしているのが聞こえる。

カイマンは、この女を捕まえて行こう、と即座に腹を決めた。そうすればDark Bishopだつて褒めてくれるに違いない。

「どうしました？お嬢さん」

なるべく人当たりの良さそうな笑顔で、警戒心をおこさせないように答える。女ははにかむような微笑みを浮かべ、路地の方を振り返りながら口を開いた。

「車が故障してしまつたらしいの。私一人なものだから、何処をどう見たらいいのかも判らなくて……よろしかったら、一寸見ていただけないかしら？」

しめた。男どもは何処かに行っているらしい。カイマンはほくそえんだ。このまま車に放り込んで連れていってしまおう。

「いいですよ」

女はホッとしたように微笑んだ。

「良かった、どうしようかと思つていたんです」

二人の男は、そつと目配せをしながら車から出た。これで女が歩きだしたら、二人でからめ捕つてしまえばいい。こんな女独りなら楽勝である。

「車は何処です？」

気付かれないようにそつと女の後ろに回り込みながら、猫なで声で尋ねる。女はにっこりと微笑むと、人指し指を真っ直ぐ上に付き立てた。

「あそこ」

「え？」

頭上からヒューっという風を切る音と共に、何か大きなものが落ちてきた。

グワツシャン！！！！

大音響をたてて、真っ赤なスポーツカーが、今まで自分たちが乗っていた車を押し潰して着地する。

「な……?!」

度肝を抜かれた二人の男に向かって、魅羅は困ったように首を振り、

「推進装置がいかれて、さっきから真上にばかり動くんですの。どうしましょう？」

白々しく嘆いてみせる魅羅に、カイマンは掴みかかった。

「このアマ……！」

けらけらと笑いながら、魅羅はカイマンの手をすり抜けると、素早い動きで男の背後に回り込んだ。

カイマンの首筋にひやりと冷たい金属の当たる感触がした。何処に隠し持っていたのか、ナイフよりも少し長めの刀を男の首筋に押し当てて、魅羅は妖艶な微笑みを浮かべる。

「暴力はいけませんわ。不幸な事故です」

「な……何を……」

さえざえとした光を発する刀身に、身体を硬直させながら男はやつと声を絞り出す。

その問いには答えずに、彼女は奇妙なほど丁寧な口調で男に言い聞かせる。

「動かないで下さいな。でないと、貴方がラングレス星で殺した女の子の二の舞になりますよ」

魅羅の言葉に、カイマンは冷や水を浴びせられた様な気がした。

「そちらの方も、お仲間が大事だったらそこから動かないで。尤も、もう無駄だけど」

カイマンを見捨てて逃げようとしていたコスタは、路地から出て

きた滉に行く手を阻まれて立ち往生していた。

「よう、コスタ・メグロー。それに、カイマン・グレー。そろそろ年貢の収め時ってやつだぜ。おとなしく観念しな」

「Bomb Bay:」

「窃盗2回、強盗4回、詐欺5回、誘拐、殺人3回、婦女暴行が12回。現在3つの星から指名手配中。これは二人合わせての数字だけど、裁判なら245年の刑期を求刑するところね。特にラングレスでの婦女子誘拐。輪姦の末、殺害は許せないわ。女の敵は、お仕置きよ」

凄味をきかせた低い声で、魅羅が罪状を並べていく。

「べ…ベースでは何もしていないぞ。たとえ何処かの星で手配中でも、発見した星で何もしていないければ、連合は手を出せねはずだぜ？」

喘ぎ喘ぎ言い返すと、魅羅はくつくつと含み笑いを洩らしながら赤いリボンのようなものを取り出した。滉の後ろから出てきたドルフェスが、魅羅からそれを受け取ると、手早くカイマンとコスタの手首に巻きつける。

カイマンは心底から震え上がった、この赤い物は連合司法局の簡易逮捕令状だった。一旦付けられれば専用の解除機でなければ外せない、特殊な発振器が組み込まれており、何処まで逃げてても必ず居場所をつきとめられるという代物である。もう手錠を嵌められたのと同じことだった

「はい、これで貴方たちは連合司法局の管轄に入りました。3つの星からの指名手配が有効よ」

刀を喉から腹に移し、正面に回った魅羅はにっこりと笑う。

「越権行為だ。」

呻くカイマンに、魅羅は憐れみを込めて首を振ってみせた。

「いいえ、現時点で貴方がたに掛けられている容疑は、テロ行為で

す」

「何…?!」

意外な事を言われて、二人は絶句した。

「連合警察機構警部、津川滉氏は今朝、昨夜の捜査に対するテロリストからの報復を受けています。貴方たちの車はその襲撃現場より逃走、その後津川警部の車を尾行していますね。これは、何らかのテロ組織に係わっている人物である可能性が高い、ということになりますわ。身元調査のため、是非とも私達と同行していただきます誘拐と贖金とテロは、どんな時でも無条件に連合の管轄に入ることになっている。」

特に、政治的なイベントが控えている今の時期、テロリストへの追求は厳しくなっていた。ましてや確かに怪しげな行動を取っていたのだから、疑いは当然だ。

「ぬ…濡れ衣だ…!」

無駄と知りつつも、何とかこの場を言い逃れようと、カイマンが首を振った。

「貴方がたには黙秘権が…」

聞こえない振りをして権利を読み上げようとした魅羅を、滉が制する。

「タンマ」

「どうしたの?」

「黙秘権を覚えて弁護士を呼んでもらう前に、聞きたいことがある」
明るい笑顔を浮かべて、二人の獲物を見ている滉に、魅羅が仕方なさそうに頷く。

「OKボス。でも、私が言わなくても、権利はあるのよ」
「判ってる」

滉は二人の男を壁際に立たせると、形相を一変させた。まだ笑ってはいた、しかし、もう明るい人好きのするものではなく、氷のように冷たい笑に、目だけが炎のように強い光を放っている。

魅羅は刀を鞘に収めて一歩後ろに下がってはいたが、カイマン達は

滉の目に射すくめられて動けなくなっていた。

「さてと、お前らファントムに何を言われてきたんだ？」

低いドスの聞いた声で滉が聞く。直立した姿勢のまま男たちは首を振る。

「知らん、俺は何も知らん」

「じゃあ、何で俺たちをつけていたんだ？」

カイマンは、ありったけの気力でにやっと笑い返したつもりだった。残念なことに彼の主観に反して、唇はほんの少し引きつっただけである。

「さ…さあな、俺たちはそちの姉えちゃんと、お近ずきになりたかっただけだね。なにせめつたに居ねえような別嬪……」

ズサツ！！

耳元の壁に蹴りこむ様に滉の足が突き出され、カイマンは言葉を途切らせた。

「連れを褒めてくれて有り難うよ」

長い足で壁に寄り掛かりながら、低い声で礼を言う。しかしその声は、言葉とは裏腹に怒りを抑えかねて震えを帯びている

「だがな、魅羅の亭主になりたかったら、少しは素直になったほうが身の為だぜ。あいつは気に入らない男は簾巻きにして川に放り込むんだ」

ドルフェスは、横で魅羅が『ひどおい』と小声で呟くのを聞いた。昨日一晩見ていたから少しは馴れたものの、滉の尋問は刑事がしているというよりは、暴力組織の幹部が脅している様だ。青年は何だか二人の男が気の毒になってくる。

「へ…へ…」

せいぜい悪たれた風を装って、カイマンはひきつった笑いを洩らす。

それに釣られたかのように、滉の冷笑が更に深まる。

ジャリ…

壁に掛けられた足が微かに動き、ぱらぱらと壁の外装が剥がれ落

ちる。そして、踵の当たる所から壁に亀裂が走り、カイマンの頭の後ろまで達した。

「ひ…」

辛うじて保っていたカイマンのポーズは、その亀裂を見て完全に崩れさった。

滉の冷笑を浮かべた表情、決して笑っていない目、そして壁の亀裂。それらを交互に見て、次にこうなるのは自分だと確信した。

「あ…わ…」

腹の底から震えが上がってきた。歯の根が合わなくなり、自分にもがちがちいつている音が聞こえる。膝が笑いだし、カイマンはずるずると壁を背負ったまま座り込んだ。隣に立つコスタもまた、そのありさまを見て声もなく震え上がっている。

「どうだいおっさん、少しは俺に協力してくれる気になったかい？」

脅しの効果があつたことに気を良くした滉が、少し明るい声を出した。カイマン達はこくこくと頷いた。

「わ…判った、話す…何でも話す」

「よし命は助けてやるさ。答え次第でな」

足を下ろし、腕組みをした滉は、カイマンとコスタをそれぞれ睨めつけた。

*

華やかに繁栄し、銀河内でも有数の治安都市と言われるベースシティにも、巨大都市の宿命と言ふべきか、犯罪の温床であるスラム街は存在する。

かつてこのトサマル星系が、アルゴル帝国の手によって入植開拓の歴史を開いた時、惑星コーチに始めて作られた、移民のベースキャンプが原型となっている旧市街がそれである。ミドルアースを模した幾何学的なビル群が立ち並ぶ新都心に比べて、街の南西に位

置する旧都心の町並みは、古びて煤けた、うねるようなラインを見せるアルゴル風の建物が多く、まるで200年も昔のアルゴル帝国に迷い込んだ様な印象を与える。

ユルカ・エルアルゴア——アルゴルの祝福——その昔ここはそう呼ばれた。今はジャクトーナ——旧都——区と区分けされている。

太陽の未練気な朱色の裙も、訪れた夜の闇のベールのなかに消えたところ。この街は眠りから目覚める。きらびやかなネオンのあいだを、怪しげな男女がさんざめき、頹廢的な雰囲気醸しだしていた。そしてそんな表通りから一步裏通りへ踏み込めば、都会の真ん中に居るとは信じられないような暗闇が滞っている。

滉とドルフェスは、その裏通りの一角に、暗闇に身を隠すように佇んで表通りを伺っていた。^{たまた}

尋問に半日を費やして、カイマン達から絞り出した情報は、期待していた程ではなかった。

潜伏していた酒場で、Dark Bishopの代理人と名乗る見知らぬ男から、『今日一日津川滉達を尾行してその様子を教えるように』と依頼されたという。

今夜16セクレットに再びその男と会い、金を貰う約束になっている。

嫌になるほど頼り無くて簡単だった。今夜来る奴を、この二人を囷にして捕まえてしまえば、ファントムへの糸口が掴めるに違いない。

少なくとも、ドルフェスにはそう思えた。

しかし、滉はそれからずっと臭い顔をしている。尋ねても『後で話す』と言い、曖昧な笑顔が返ってくるだけだった。

「滉が考えてることなんて、どうせ何でもこんなチンピラに私たちの尾行をさせたのか？ てなことよ」

事も無げに魅羅が言った。

滉が相手にしてくれないので、仕方無く魅羅と無駄話をしていたドルフェスは、首を傾げて黒髪の美女を見た。

「そんな事ですか？」

「そうでしょ？ 単純な男なんだから」

彼女は実の父親に対して、かなりの偏見を持っているらしい。

でも、それならすぐにでも話してくれるのではないだろうか？

青年の疑問に、今度は魅羅が首を傾げ、結局話しはそれっきりになった。

そして、日暮れを待って、滉達はカイマンが男と会う約束の場所に赴いたのである。

「魅羅さんだけであの連中を抑えておけるんでしょうか？」

少し離れたところで、時間まで二人を見張っている魅羅を心配して、ドルフェスは滉に尋ねた。表通りの光に端正な横顔を浮かび上がらせて、アース人は鼻で笑った。

「はっ！ 連中如きが逆立ちしたって魅羅には勝てねえよ。あいつの小太刀は俺でも避けきれん。ああみえても如月流風火流影剣…つまり、アースの古武術の免許皆伝だ。持ってる刀は名刀大志津の脇差しだしな」

そんなことを言われても、何のことだかさっぱり判らない。ただ魅羅がかなりの腕前を持っているという事だけ理解しておくことにする。

「警部。そろそろ教えてください。何が気になっていたんですか？」

青年は古代彫刻の様なアース人の横顔に問い掛けた。骨董品がドルフェスの顔を見る。

「辻褄が合わないんだ」

「え？」

「チンピラに尾行させたこと、昨日俺たちの前に姿を現したこと。今朝の人間モドキ。ついでに犬を使った少女誘拐未遂」

滉は指を折りながら並べ立てた。

「全部爺いの悪戯って言っちゃえばそれで終わりかも知れないが、なんかひつかかる。でキーはトロイの木馬だろう」

「はあ……」

判然としない説明に、困って滉の顔を見る。滉はため息を付いた。

「だから、人間モドキは、あの爺さんらしい悪戯だった。でもな、何時ものパターンでいけば、これは昨日の晩、奴が姿を現す前に来るものなんだ。順番が逆なんだよ」

「姿を見られたから、挨拶代わりって事もいえませんか？」

「いいや、あの爺いの挨拶なら、俺が分署に居るときを見計らって、分署を爆破する」

「……」

「前にやられた事が有るんだ。伊達に長いこと付き合っているわけじゃない、手の内なら大抵判っている。だが今回は何かちぐはぐなんだ、まるでもう一人別口が介入しているみたいだ。しかし、矢印はみんな爺いを指している。指しすぎていくくらいにな。あの18歳未満の誘拐未遂にしても、爺いなら絶対にする訳のないお粗末さ、なのにアジトにいた。御丁寧にダフネ付きで」

淡々と語る滉の眉が微かに寄せられる。

「それに、あのチンピラ達にわざわざDark Bishopの名前まで出して、俺たちをつけさせる必要が何処にある？ あんなド素人を使うよりペットでしたほうが何倍も効率がいいだろうに。まるで『僕の姿を見て』てなことを耳元でがなり立てられているような気がするんだ」

「じゃあ、此処に代理人が来る、と言うのは畏なんでしょうか？」

ドルフェスは何だか胸騒ぎがしてきた。暗闇から自分を見ている誰かの眼があるような感じがして、薄ら寒くなる。そんな青年に対して、滉は優しい笑顔を浮かべた。

「十中八九そう見てもいいだろうな。爺いは俺を混乱させておいて、もつと別の事を進めているのかもしれない。もしかしたら…ポセイドンの海蛇…」

滉が何か思いついたように口籠もる。

青年はどうしたのか聞こうとしたが、その時魅羅が男達を引き立てて来た。

「そろそろゼロ・アワーよ」

「OK」

哀れな囚人達はよろけながら歩いてくる。頭の上で両手を組み、その手をマグネット手錠でおさえられ、更に互いの肘を交差した形に組まされて引っつき合っている。かなりきつい姿勢なので、顔には脂汗が浮かんでいるのが、ほのかな光に浮かび上がって見える。

「よし、解いてやれ」

「逃げないかしら？」

懸念する娘に、滉はにつこりと笑ってみせた。

「大丈夫。なあに、もし逃げればネプチューンのブラスター砲がモノを言うってだけさ、それくらいこいつ等も判ってるよ。な？」

言葉の最後はカイマン達に向けられたものだった。男たちはこくこくと怯えた表情で頷く。昼間何度か逃亡を試みたが、全て無人車のネプチューンに先回りをされ、連れ戻されてしまった。

その時必ずネプチューンのボンネットには、あのブラスター砲が鎌首をもたげていた。

羊を追う牧羊犬よろしく男たちを狩るネプチューンを見て、主従が楽しみのためにわざと逃がしていると、ドルフェスは確信している。

滉の楽しみは別として、彼らにはその時の恐怖感がしっかりと刷り込まれている。

手錠を外された二人は、びくびくしながら顎をしゃくる滉に従って、表通りの入口に立った。

9 Junction——分岐点——（後書き）

簡単アルゴル語講座

ミ・ラ⇨輝き

ユルク⇨栄光

ユルカ⇨祝福 or 聖人

ミ・ラ・ユルク・エルダアル・ユルカ・アルゴア⇨輝ける栄光を受けしアルゴルの聖人。

10 Cait・Sith — 利口な猫 — (前書き)

サラリーマンは最強なのです

街のざわめきは、店々の扉から洩れる音楽や、女たちの甲高い嬌声と混じり合い、ねつとりと身体にまとわりついてくる。何時もならば心地よい薄暗がりのなかも、今は魔物が潜み自分を狙っているような気がする。カイマンは乾ききった喉をごくりと動かした。

自分たちが捕まり、全てを白状してしまったことは、もうDark Bishopの耳に入っているかも知れない。なら、これから来る奴は、きつと殺し屋のはずだ、きつと口を封じに、いやもうべらべら喋ってるんだからおとしまえを付けに来るのに違いない。

カイマンは落ち着かなく回りを見回した。ここから逃げたかった。しかし、逃げてもある犬の化け物の様な車に追いつかれる。何処にも行き場はない、棺桶の中に片足を突っ込んでいる気がする。

「おい……」

コスタが身じろぐ。カイマンは俯いていた顔を上げた。一瞬、身体中の血が凍りつく。

客を取り込もうと媚びた笑いを浮かべて、道行く男たちに絡みつく淫売の間を避けながら、一人の男がこちらに向かつて歩いてくる。きつちりと整えた髪、地味なスーツにアタッシュケースを持ったその男は、およそこんな場所には不釣り合いだった。

ビジネスマンが商談に向かうように、余所見一つせずに進む男の青白い顔は、不気味なほど無表情だ。

「Mrカイマン、それにMrコスタ、今日はご苦労さまでした」

Dark Bishopの代理人は、二人の前に立つと几帳面にお辞儀をした。

「さて、これは今日の報酬、14万クレットです」
アタッシュケースを持ち上げてみせる。

「それでは、今日津川滉が何をしたか、教えてください」

落ち着いた声でそう尋ねられ、カイマンは背中に氷の塊を入れられたような気がした。手のひらに汗が吹き出す。

何とか適当なことを言って誤魔化せるだろうか？しかし代理人のさえざえとした紺色の目は、彼に嘘をつく勇気を与えなかった。

「えー…その……」

「ごによごによと口のなかで言葉を探していると、代理人は彼を覗き込むように首を傾ける。

「どうなさいました？何か不都合な事でもございましたか？」

どきんと心臓が跳ねた。

「い…いや…あの今日は…」

「はい？」

「今日は、俺に捕まって、全部話しちいました」

男のすぐ後ろから滉が言った。

「おや、津川警部ですね？」

代理人はいきなり背後に現れた滉に少しも動ぜず、振り向きもせずにはんの一瞬口許に微笑を浮かべた。

その笑顔を見て、カイマンはへなへなとその場にへたりこんだ。

唇の端だけをV字型に引き上げた微笑みは、この世の者とは思えなかった。

滉は無造作に男の両手を持つと、後ろ手に組ませて手錠を掛けた。

「ところで、あんた一人？」

無表情に自分を見つめる男を、元の裏路地に引き立てながら滉が聞く。

男は首を傾げた。

「さあ、どうでしょう？」

「ま、取り合えず、あんたは俺の虜だ」

そう言う滉に、再び男が首を傾げる。

「さあ、どうでしょう」

むっとした滉は、男を乱暴に押した。男はつんのめり、二三步踏鞆を踏んだ。

「流石は爺いの代理人さんだ。憎まれ口の使い方が旨いね
うっかり腹を立てかけた自分を自嘲するように言いながら、また
元のようにカイマン達に手錠を掛けているドルフェスと魅羅を振り
返る。

「滉に厭味を言うのは、とっても楽しい事なのよ」

おどけたように魅羅が返事をする。滉は苦笑した。

「そーか、俺って温厚で怒んないからな」

うそぶきながら、男たちを路地のなかに引き入れてゆく。

滉は3人を壁際に立たせた。

Dark Bishopの代理人は、不気味なほどおとなしい。

まるで何事もないような無表情を崩さずに、これまた何の感情も浮かべていない目をぴたりと滉の顔に当てている。何となく居心地が悪くなり、滉はドルフェスを振り返った。

「D・D、護送車でスタンバっててくれ、ネプチューンじゃ全員乗れないからな」

「判りました」

ドルフェスは頷いて、反対側の入口に置いた護送車へ行くこととした。

男が口を開いた。

「おや、Mr龍造寺ではないですか？ 貴方もこちらにおいでとは、津川警部も御心強いでしょうね」

青年はそれを、魅羅に向けられた言葉だと思ったが、男の目はドルフェスに据えられていた。滉が顎をしゃくり、魅羅を示す。

「龍造寺さんはこっちだぜ」

滉の言葉に男は首を振った。

「いいえ、お嬢様ではありません。そちらにいらっしゃる方ですよ。代理人は相変わらずドルフェスを見つめている。

「いつ時代の話だ。龍造寺の旦那はもういないぜ」

いらいらした様に滉が言う。龍造寺の名が出てきてから、滉の表情は奇妙に強張っていた。

男が初めて仮面の様な無表情を崩し、業とらしく驚いてみせる。
「ああ、そうでしたね。これはお人違いを致しました。お許しを。
Mr龍造寺には、私の主人の希望により長い旅に出ていただいたの
でした」

途端、滉の腕が伸び、男の胸ぐらを掴んで乱暴に揺さぶった。

「何だと！！ 今なんて言った？！」

「確か貴方にも、同じ様に旅に出ていただきましたね。ご無事のお
帰り何よりです」

「こ…この野郎！！ お前等か？！ お前等が殺したのか？！！」
男の体を高々と釣り上げ、まるで篩ふるいにかけられるようにがくがくと揺
さぶる。魅羅までもが刀を抜いて男を睨み付けていた。

ドルフェスは、すっかり取り乱した滉達を、怪訝な表情で見つめ
ていたが、体のなかで警報が鳴っていた。胸騒ぎがしてしょうがな
い。ふと、滉の剣幕に怯えたように、壁にへばりついている男たち
の姿が目に入る。

何か妙だ。

カイマンが、くつついているコスタから、必死で体を離そうとも
がいている。

コスタはぴんと直立して大きく目を見開いていた、その体が次第
にがたがたと震えだす。

「コスタ、おい、どうしたんだよお、コスタ」

カイマンは相棒の異変に恐れおののきながら、繫げられた体を何
とか解こうと身をよじった。

コスタは全身を硬直させ、激しく震えながら、口の中で何事か呟
いている。

「Dragon…Maker…Dragon…Maker」

呟くたびに声は不明瞭になり、ぐるぐると喉が鳴りだす。手足の
筋肉が膨れ上がり、肘に挟まれたカイマンの腕に激痛が走る。

「痛てえ！！ 痛てえよおコスタあ！！」

カイマンが悲鳴を上げた。ドルフェスはパラライザーを構えて男

たちの所へ走った。

「どうしたの?!」

ようやく、異変に気付いた魅羅が振り返る。

「どおら…おん…めえ…くあ…!!…どお…ごお…ん…むえ…くあ…!!」

コスタは口から 垂らしながら次第に声を大きくしていく。

ビシ!

何かが壊れる音が響いた。手首を押さえていたマグネット手錠が、ビスを飛ばしながらはじけ跳び、コスタは自由になった両手を頭上高く差し上げた。

「あ…わ…こ…コスタ…」

相棒から開放されたカイマンは、そのままへたり込み呆然と仲間の変貌を見つめた。逃げようにも腰が抜けてしまい、両足が力無く地面を引っかくだけである。

コスタの体は異常に膨張しはじめていた。大きく開いた目と口は、次第に左右に切れこみ、同時に鼻と顎がぐうつと前に突き出してくる。

膝が奇妙に曲がりはじめ、股と脛の筋肉が繋がっていく。爪先立ちになっていた足は、履いていた靴を引き裂いて甲と踵がぐうつと延び、5本の指には鋭い爪が延びはじめた。胴も引き延ばされる様に伸び上がってゆき、バランスを崩した上半身は前のめりとなり、地についた両手もまた、足と同じように指が曲がり爪が生えてくる。同時に肩の肉が盛り上がり、ビシっという音と共に突き出した骨が血を滴れさせながら、金属のような光沢のある角に変わっていった。異様な変形は短い間だったが、それを見つめる者たちにはゆっくりと変わっていくかの様に思える。

ドルフェスはパラライザーを構えたまま、シネムービーよろしく異形の者に変わっていく男を、全身を総毛立たせながら見つめてい

た。

滉もまた、男の胸ぐらを掴んだまま呆然とその有り様に見入っている。

ただ一人、Dark Bishopの代理人だけが、宙ぶらりんになりながらあのV字型の微笑みを浮かべて、コスタの変身を見守っていた。

「ぐーあうー…うえーがあー…!!」

コスタの声はもはや人の声ではなく、身の毛もよだつ獣の咆哮となった。かつて人間であった事を偲ばせるのは、わずかに体に引つ掛かった服の切れ端と、変身でも変わらなかった、瞳の灰色だけだ。てらてらとした粘膜に覆われたような肌は、爬虫類を思わせるが、全体のフォルムはその巨大さと肩の角を入れなければ毛のない猫の様である。

「なんだありや…」

意外な事の成り行きに呆れ返った様に呟いた滉は、はっと気が付いたように掴んでいた男の顔を見る。

「てめえ、細工してやがったな。そうか…これがポセイドンの海蛇か?!」

男はぶら下がったまま、唇の切れ込みを深くした。

「さあ、どうでしょうか」

気の無い返事は無視して、滉は振り返った。

「ネプチューン!!」

滉が吼え、ネプチューンがそれに応じる。

「伏せろ!!」

金縛りにあつたようにコスタの変身を見つめていたドルフェスは、滉の声と同時に魅羅の体当たりを受けて路上に転がった。

「うわあ!!」

「動かないで!!」

間髪をいれず暗闇を引き裂いてネプチューンのレーザー砲がコスタであつた化け物に炸裂する。

「ギグオアー!!」

咆哮が響き、壁が砕け散った。砕けた壁の向こうから、女たちの悲鳴が上がる。

化け物は胴体の半分をえぐられてのたうち回っていた。しかし、まだ死んではない。ネプチューンの砲撃を、本能的に避けたのだ。恐ろしいほどの反射神経である。

「ちい!!」

滉は激しく舌打ちすると、掴んでいた男を思い切り良く壁に叩きつけた。後頭部を強打されて男は声もなく失神する。既に魅羅は、大志津を抜き放ちドルフェスを庇って、のたうち回る怪物を睨み据えている。

男をその場に放り出して、ドルフェス達の所へ駆け寄った。こんな街中ではもうネプチューンのレーザー砲は、被害が大きくなりすぎて使えない。

「魅羅、この場合はD・Dを連れて逃げろ!!」

「滉は?!」

「何とかする。このままじゃ公衆の迷惑だ」

魅羅は大志津を構えなおして半歩後づさった。いきいきとした弾んだ声で言い返す。

「得物も無しであいつを殺すなんて無理よ。滉こそ早いとこネプチューンに戻って、パルスマシンガンでも持ってきてよ」

「お前、本当に俺と同じ性格してるな」

つくづく感心したと言うように滉は首を振った。魅羅が小さく笑う。

「閑吼もそう言ってたわ」

父娘の会話はそこで打ち切られた。深手を負った化け物は、憎悪に燃えて肩の角を振り立てて突進してくる。二人は素早く身をかわす。

再び魅羅に突き飛ばされて路上に転がったドルフェスは、背後から迫ってくる化け物の姿に、声にならない悲鳴を上げた。

「！！！！！！」

「何してるの？ 逃げなさい！！ 滉に武器を取ってきて！！」

腰を抜かさんばかりに恐怖におのく青年に向かつて、魅羅の鞭のような叱責が飛ぶ。と、同時に化け物が凄まじい悲鳴をあげる。えぐられた傷口に滉の蹴りがたたき込まれたのだ。レーザーで焼ききられた組織で蓋をされていた傷口は、あっけなく裂けてどす黒い血を吹き出す。苦悶の悲鳴を上げる化け物の喉に、魅羅が大志津を突き刺した。

胴と喉から血を吹き出しながら、化け物は激痛に狂った目をドルフェスに向ける。

「ドアウオオン…ウエエアア！！」

コスタであった時と同じく、化け物は不明瞭な言葉を叫んだ。まるで始めからその目標はドルフェスであったかのように。

「D・D！ 逃げろ！！」

滉の声に、その場にすくんでいた青年は、慌ててパラライザーを構えた。夢中でトリガースイッチを押す。しかし、化け物の突進は止まらない。

「馬鹿野郎！！ なにやってんだ！！」

間一髪のところを横ざまに飛び込んだ滉の蹴りが、化け物の顔面を捕らえ、鼻を挫かれたそいつはゴロリと一回転をして、第二撃を避けた。しかし、逃げた先に待ち構えていた魅羅が、首筋に大志津をたたき込む。新たな血が吹き出した。だが、その前に切られた喉はもう血が止まっている。凄まじい回復力である。

「駄目だわこりゃ、D・D、得物持ってきてくれ、気長にしてたら腹の傷まで塞がりそうだ」

まるで世間話でもするような口調で、滉がドルフェスに言う。穏やかな声音を聞いて青年の舞い上がってしまった頭が少し冷えた。

「は、はい！！」

「よいしいお返事だ。頼むぜ」

「はい！ あ、そうだ、これ！」

走りかけた青年は、ベルトに差し込んでいた拳銃を取り出した。
昨夜ネプチューンに渡された拳銃である。

「警部のすよね、お返しします」

それを見て、滉は目を見張った。

「そいつはどうしたんだ？」

「ネプチューンが寄越したんです。でも、その後返しても受け取ってくれなくて」

「そうか」

滉は頭に血がのぼっていて、ドルフェスは何を持っているかも気付かなかった昨夜の自分を内心恥じた。

「俺は射撃は下手だ。持ってる、行け！！」

突き飛ばされるように肩を押されて、青年は走りだした。

ドルフェスを追って、再び突進を始めた化け物に、魅羅と滉が挑みかかる。

カイマンは、瓦礫に半ば埋まりながら、恐怖のため発狂寸前だった。

「コスタあ…コスタあ…」

力無く相棒の名を呟きながら、化け物となったコスタと、津川滉達の死闘を見つめていた。

此処から逃げたかった、しかし、瓦礫に足を潰され、もはや這うことさえ出来そうにない。失神したくても、足の痛みが目を覚まさせる。カイマンには何処からも救いの手は差し延べられそうに無かった。

どうしてこんな事になったのだろうか？ コスタはどうなってしまったのだろうか？ 何が起こっているのだろうか？ 頭のなかは疑問で一杯だ。

コスタとはもう5年もコンビを組んでやってきた、無口で無愛想で変な奴だったが、自分とは馬が合った。昨日だって二人で仕事を受けて、後は何にも変わってない。だのに何故、あいつはあんな化

け物に変わってしまったのか。

「コスタよおー…」

コスタは体中を何箇所も立て続けに切り裂かれ、激痛に悲鳴を上げていた。苦痛の為に伸ばした顎の柔らかい部分に、黒髪の女の刀が突き刺さる。

脳に達する程の深手を受けて、コスタの目がかつと見開かれる。

「コスタよお…可哀相に痛てえだろうなあ…」

化け物になった友を哀れんで、カイマンの目から、自分のため以外には流したことのない涙が滲み出た。

「お友達を助けないのでですか？ 貴方なら出来ますよ」

「ひ…?!」

不意に氷のように冷たい声がした。

瓦礫の向こうに、捨てられた人形みたいにぐったりと座り込みながら、あの男が見つめている。口許にはあの不気味な微笑みをうかべて…。

カイマンの中で、何かが弾けた。

——そうだ、あの後俺たちは女を引き合わされた——

この男が連れてきた女たちとホテルにしけこんで、そこでカイマンは素晴らしい力を手に入れたのだ。何でこんな事を忘れていたのだろう？

——女は何て言った？——

女は、カイマンと一つになりながら、何か言葉を呟いた。あれは何だった？

路地の向こうから、黒髪の男が何か抱えて走ってくる。そうだ、

女はあの男を殺せと言った。あの男の名は…。

「Dragon Maker!!」

カイマンはゆらりと立ち上がった。もう何も怖くなかった。身体中から力が湧き出てくる。足も痛くない、ほら、こんなに跳べる。

「?!」

ドルフェスは、いきなりコスタと同じことを叫んで立ち上がった。カイマンに、戦慄を覚えて立ちすくんだ。

カイマンは操り人形の様な、妙に生氣のない動きでふわりと飛び上がった。千切れた片足だけがその場に残され、呆然と見つめるドルフェスの前に、3本足の化け物が着地する。

上から見えない糸に引つ張られるように、醜惡な腕が上がり青年の頭上に振り下ろされる。節くれだった指の先から鋭い爪が長々と伸びていた。

以前相棒のゾルゲが死んだ時のように、自分の体も引き裂かれてしまう。そう思ったとき、ドルフェスは無意識のうちに抱えていたものを頭上にかざしていた。

ガキツ！ という音と、強い衝撃が両腕に伝わった。

ドルフェスはチタン製の六尺棒で、振り下ろされた爪を受けとめている自分に驚いていた。

ぐいっとその棒が持ち上げられる、青年は、そのまま力を込めて棒を頭上に放り投げると、思いつき後ろへ転がる。何も考えてはいなかった。ただ体がそうしろと教えている。今まで彼がいた場所で化け物の爪が空を切った。

「D・D！！」

異常に気が付いた滉が、こちらへ走ってくる。ドルフェスの放り投げた六尺棒を拾い上げて、化け物に向かって振り下ろす。

棒は空中で7つの部分に分解し、化け物の首に絡みついた。ミドルアースのアジア地区に古来より伝わる武具、七節棍である。しかも手元のスイッチで節を繋ぐ鎖に電流が流れる仕組みになっている。高電圧の電流を首から流されて、化け物は魂切る様な悲鳴を上げながら跳ね上がった。

七節棍を素早く外した滉は、一動作で元の棒に戻し、即座に相手の左目にたたき込む。唯一カイマンであった名残を見せる茶色の目に、チタン製の合金棒が吸い込まれるかの如く深々と突き刺さる。

「ネプチューン！！」

ネプチューンから射出された細いワイヤーが七節棍に絡みつぎ、それに高圧電流が流された。

紫電一閃。

スパークした青白い光が路地の暗闇を追い払い、一瞬全てのものを白と黒のコントラストで覆いつくす。

その光の中で、化け物の断末魔の悲鳴が長く尾を引いて響きわたった。

光は唐突に消え、強い光に慣れた目に暗闇が黒い手を被せる。

ドルフェスは目を瞬かせなら立ち上がった。微かな光の中では未だ何もハッキリとは見えない。手を伸ばし、壁に触るとそれに寄り掛かって体を支える。

「グオオオオガアアアー！！！！！！」

凄まじい咆哮が上がり、不意に消えた。

表通り側の入口に仁王立ちとなっていたコスタの成れの果てが、首の有ったところから夥しい血を吹き出しながらぐらりと揺らぎ、前のめりにゆっくりと倒れていく。光で目が眩んだところに乗じて、魅羅が化け物の首を切り落としたのだった。

「D・D、血が出てるぞ！」

滉に肩を掴まれ、青年は振り返った。

太股に激しい痛みを感じて、ドルフェスは少し呻く。避けきれずに化け物の爪を足に食らったらしい。

「警部…俺、死ぬかと思った…」

手早く止血をしてくれる滉の背に手を乗せて、ドルフェスは安堵のため息をついた。

「はは、なかなかどうして、たいした逃げっぷりだったぜ」

笑いながら立ち上がった滉は、口に指を当てて短い口笛を吹いた。小さな軽い音をたてて、ネプチューンがワイヤーを回収する。

青年は初めてカイマンであった化け物の末路を見た。左目に突き

立った七節棍から薄い煙があがっている、電撃による高温で棒の回りの肉が黒く焼けただれ、まだプスプスと音をたてていた。同じように爪や角、体のあちらこちらからもうつすらと煙がたちのぼり、辺りには肉の焼ける臭いがたちこめている。

滉が無造作に七節棍を引き抜くと、焼けただれて固まった身体は、そのままの形で横態にどたりと倒れた。

「魅羅、こちら辺を縄張りして野次馬を追っ払っておこうぜ。地元が来るまでまた足止めだ」

表通りや崩れた壁の向こうから、何かとこわごわ覗いている人々を顎で示して言う。魅羅はハンカチで丁寧に大志津を拭いながら振り返った。白い顔や、淡い色のスーツにも返り血一つ受けていない、彼女の驚異的な反射神経が伺われた。

赤い唇がにっこりと微笑む。

「私、警官じゃありませんから、縄張りの仕方を知りませんのよ」

滉は口をへの字に曲げた。

「じゃ、教えてやるから勉強しな。D・Dが怪我した、手が足りないんだよ」

「超過勤務よ、過労死しちゃうわ」

「大丈夫、お前ならすぐ生き返るよ」

まるで何事もなかったかのように軽口を飛ばしている父娘を、ドルフェスはぼんやりと眺めていた。恐怖から脱した虚脱感の為に身体が酷くだるい。

「D・D、ネプチューンに乗っている、後で医者に連れてってやるよ」

滉にそう言われて、ドルフェスは手を上げて礼の代わりにし、ネプチューンに戻ろうと歩きだす。しかし、壁から離れて一歩踏みだしたものの、青年の身体はそのまま崩れるように前へ倒れた。

「D・D?!」

驚いて駆け寄った父娘は、青年の身体が火のように熱いことに気付き、思わず顔を見合わせた。

「酷い熱…」

額に手を当て、魅羅が呟いた。滉はドルフェスの太股の傷を見た、傷口は紫色に変色し黒い血が固まりかけていた。原因は間違いない、化け物の爪である。何らかの毒が爪から出ていたのだ。

「おや、どうかなさったのですか？」

背後から、嘲るような冷たい声がした。二人は振り向きもしなかったが、声の主は判っている。

「てめえには、色々聞きたいことがあるぜ…」

怒りの込もった震える声と共に滉はゆらりと立ち上がった。

V字の微笑みを浮かべて壁によりかかっていた男は、顎を蹴り上げられて強か後頭部を壁に打ちつけたが、不気味な笑みはその顔から消えない。

「八つ当たりはみつともないですよ」

平然と言つてのける男の胸倉を掴み上げて、滉は男の目を睨み据えた。

「お前等何を企んでいる…」

「早くMrドルフェスを手当てしないと大変ですよ」

相変わらず滉の問いには答えずに、男は再び無表情に戻った、ただ今度は目に面白がつている光が浮かんている。

「へえ、よくD・Dの名を知ってるな」

「彼は有名人ですからね。お母上もとても美しい」

Dark Bishopの代理人はそう言う喉の奥で低く笑った。

「…の野郎…！」

唸り声よりも早く、滉の拳が代理人の横っ面を一殴りする。

「滉、D・Dを早く病院に」

魅羅の言葉にはたと我に返った滉は、凄味を効かせて代理人に笑いかけた。

「引かれ者の小唄は後でゆっくり聴かせてもらうぜ。魅羅、こいつをネプチューンに連れていけ」

そう言いながら男を放り出そうとした、が、足元でカチャリと何かが音をたてた。

いつの間に外したのか、男を拘束していた手錠が転がっている。

「お嬢様のエスコートは無用に願います。私はもうお暇いたしますから」

胸倉を掴まれてぶら下がっていることなど、全く意に解してはいないように男は腕時計を見ながら言葉を続けた。

「貴方様とMrドルフェスの御葬儀には、是非私も出席させて頂きます。どうぞよろしくお願いいたします」

「何だと！ このや…！！」

怒り狂った滉の声は途中で途切れ、金褐色の瞳が当惑の光を浮かべて見開かれる。

「滉?!」

魅羅が悲鳴に近い金切り声を上げた。

熱で朦朧としていたドルフェスはその声で目を開け、男を掴み上げたまま凍りついたように直立している滉を眺めた

全てが夢のなかのような気がする。

アース人の細身の身体が弓なりに反り、金と黒のジャケットに包まれた背中から何かが突き出ている。それは黒い毛に覆われた腕。指の曲がった獣の手。

その手がおもむろに開かれ、5本の指から猫科動物特有の鉤状に湾曲した爪が飛び出し、深々と滉の背中に食い込んでいった。

「お…お前は…?!」

かすれた声で滉が呟く、Dark Bishopの代理人の顔に初めて満面の笑がひろがった。引き延ばされた薄い口は、舌なめずりをする捕食動物を思わせ、細められた紺色の目には赤い光が混じり、青紫色に変わっていた。まがましい死神の笑。

「私のことは、ケット・シーと御記憶ください」

力を失った滉の手を、まだ形が変わっていない方の手で払いのけながら、男は滉の耳に囁いた。

「御安心を、貴方様の旅にはMrドルフェスもすぐに御同行される
はずです。では、良い旅を」

背中に突き抜けた腕が、背骨を掴みながらゆっくりと引き抜かれる。金褐色の頭がぐんと後ろに仰け反った。

「滉あ！！」

絞り出すかのような魅羅の叫びが、暗い路地に響きわたった。路地の向こうでネプチューンが狂ったように吼えだしている。

半分気を失いかけながら、ドルフェスは滉の心臓を掴みだした男の青紫に脈動する瞳を見つめた。

ケット・シーと名乗った男は、滉の心臓から滴り落ちる血を樂しげに嘗めながらドルフェスを見た、残忍な光りを浮かべたその目は、あの白い死神のものと同じだった。

全身に震えが走る。

一度逃れた死神の手が、再びドルフェスを捕まえるために伸ばされたのだ。

「Mrドルフェス、そのままでは苦しむだけ無駄というものです。私が無事死神の馬車にお乗せいたしましょう」

ケット・シーは低く笑いながら青年に向かって歩きだした。胸に大きな穴を穿たれて、全身を血で染めた滉の身体が藁人形のように仰向けに転がる。

焦点を失った滉の金褐色の目が虚空を見つめていた。虚ろな視線がドルフェスのそれと合う、死相が浮かんだ顔が、夢の女の死に顔と重なる。

ドルフェスの中で何かが弾けた。

喉の奥から、号泣とも、悲鳴ともつかない叫び声が迸る。

——モウ、二度トアイツガ死ヌノハ見タクナイ——

目の端で魅羅が大汗を抜くのが感じられた。彼は何も考えられなかった。腰に手を伸ばし、指先に触れたものを掴み出す。大型の拳銃がしっくりと手に馴染む、そのまま無造作に構えて、死神の目

を見た。

悲鳴のような犬の鳴き声と共に、路地に横たわる暗闇を引き裂いて銃声が轟いた。

10 Cait・Sith — 利口な猫 — (後書き)

滉が、死んだ？

11 S a d n e s s ・ N i g h t — 哀愁の夜 — (前書き)

残された人々は……

私、知ってたわ。

貴方が私を見てたこと。

ずっと前から。きつと、初めて出会った時から。

貴方の視線が嬉しかった。この世界でたった一人、私を私として見ていてくれた人。

あの日。

私が死ぬために用意された白い部屋で。

約束したわね。また遊びましょって。

私、帰ってきたわ。皆も揃ったわ。

貴方だけがないの。

私たち、あんな事でお終いなの？

本当にもう会えないの？

帰ってきて、私を抱きしめて。

いつまでも待っているわ…

私の…D・D…

客船シルクアルド号は、恒星トロンテクルの重力場から離れながら、跳躍ポイントまでの道のりをしずしずと進んでいた。

衛星軌道から降りないことを前提に建造されたこの船は、巨大な美術品と讃えられ、華麗で豪華な船体と共に船内の全てにわたって、アルゴルの美意識の粋が集約され、乗客もまた俗世間とは無縁なハイスエティな階級の人々に限られている。

そしてそのメインロビーでは、旅人の心を慰める晩餐会が連日のごとく開かれていた。

静かな音楽が流れるなか、優雅に裳裾を引きながら、貴婦人たちがささやく様に会話をかわし、紳士達のエスコートで蝶が舞う如く踊る。

中流以下の人々には天界の宴とも思われ、モラトリウムを信奉する人々には神への冒瀆とも言えるこの宴は、平等を建前とする銀河社会にも、昔のように家柄や血筋によって成り立つものではないにせよ、歴然とした階級の差が現在にもあることを物語っていた。

そんな華やかな空間を、霊切る様な悲鳴が引き裂く。

貴婦人たちの色とりどりの花のなかで、一際異彩を放っていた黒百合の如き麗人が、いきなり胸を押さえて叫んだのである。

彼女は目を見開き、苦悶に眉を寄せ、全身を貫く激痛に身体を弓なりに反らせて悲鳴をあげつづけた。

何事かと振り返る人々のあいだをぬって、この場にはそぐわない地味なデザインのメンズスーツを着た長い黒髪の女が、貴婦人に駆け寄っていった。

しかし女がたどりつかないうちに、激痛に耐えかねた彼女は糸が切れたようにふらりと後ろへ倒れかかった。

思わず息を呑んだ人々は、次におおきく安堵のため息を漏らす。

さらに、さざ波の様に起こったため息は、美しさに対する感嘆を現すものである。

いつの間に背後に回ったのか、一人の貴公子が気を失った貴婦人を抱きとめていた。

黒髪に黒いドレスをまとった美女を軽々と抱き上げた彼は、腕のなかの女性とは正反対に、豪奢な金銀の糸で飾られたアルゴルの民俗衣装を身にまとい、黄金の髪の目も覚めるような美貌の持ち主。

まるで古代の王侯貴族がそのまま現れたかの様な気品のある姿は、抱き上げた貴婦人の美しさと相まって、一服の絵を思わせた。

貴公子の素性を知っている者ならば、その表現が正に的確である

と答えるに違いない。

彼は優雅な微笑みを浮かべて、まわりに立ち尽くす人々に目を向けた。

「私の連れは少々疲れたようです。今宵はこれにて」

そついい残すと、彼は、一人を抱き上げている事など感じさせない、軽やかな身のこなしで踵を返し歩きだした。

思わず道を開けた人々に軽く会釈をして、人込みを抜けロビーを出る。

声もなく立ち尽くしていた人々は、呆然とその後ろ姿を見送っていたが、彼が扉の向こうへ姿を消すと、忽ち雀のさえずりのように噂と憶測を飛ばしはじめた。

通路へ出た金髪の貴公子の横に、先程駆け寄ろうとしていた黒髪の女が肩を並べてくる。

「閑吼、彼女はどうしたのだ？」

貴公子の問い掛けに女は首を振りかけたが、はたと気がついたように眉を寄せた。

「ひよっとしたら、父に何かあったのかも……？」

貴公子はアクアブルーの瞳を見開いた。

「滉か？」

「ええ、たぶん……」

女はじつと貴婦人の顔を見つめた。女としては少し低めの声が、彼女の知的な雰囲気強調し、より女性らしく感じさせる。

ここにもし、ドルフェスが居会わせたとしたら、きっと驚いたに違いない。

なぜなら、閑吼と呼ばれたその女は、容姿から姿形まで、滉の娘、魅羅にそっくりであった。

貴公子がそんな閑吼の横顔をちらつと眺めて、口を開く。

「ふむ、尋常な様子では無かったな。さては、あやつめ。死んだのかな？」

言葉の内容とは裏腹に、彼は至極あっさりと言い放った。

女が膝よりも長い髪をうるさそうにかきあげる。その顔は、貴公子が抱き上げている貴婦人にも生き写しだった。

「判りませんが、おそらく魅羅から何か言ってくるでしょう」

貴公子はため息とともに首を振った。

「こんな時に難儀なことだな」

「何とか手を打ちます。それにしても、御前にこんな御雑作をかけたなんて知ったら、彼女はさぞ悔しがるでしょうね」

女の古めかしい言葉に、貴公子はくすつと笑った。

「気絶する御婦人を抱きとめるのは、私の得技の一つでね。実に、妻には随分鍛えてもらったからな」

「ああ、香花様ですね。昔は父もよく抱きとめたと言っていましたよ。歩きながら倒れるのが得意技だったとか？」

「滉の前は亜唯の役目だったそうだ。しかし、私が一番多かったと思っている。何せ長年連れ添ったのだ」

彼の得意げな言葉に、閑吼は面白そうに笑った。

「大事なお仕事だったんですね。あ？」

「どうした？」

「唇が動いている……」

閑吼の言葉に彼は腕のなかの貴婦人を見下ろした。

確かに彼女の唇は微かに動いていた。何かを伝えようとするのかの様に。

あの女が笑っている。

薄紫の薔薇の向こう。

金褐色の瞳が同じ色の髪と共に、日の光を受けて7色に輝く。

「ねえ、聞いて。私たちに家族が増えるのよ」

晴々とした笑顔が、華やかな髪の輝きよりも際立って目に飛び込んでくる。

「名前は何てしょうか？なんてね、私一人じゃ決められないわね」

照れたように笑いながら、女は後ろを振り返る。

「あ…来るわ、あいつ物凄く照れてるから面白いの、貴方もからかってやればいいわ」

彼女は笑いながらしなやかな手を伸ばして、薔薇の向こうの小道を歩く人影を呼ぶ。

名残惜しい気持ちで女に手を伸ばす。

しかし、その手が触れる前に、女は苦悶に眉を寄せその場にうずくまる。

髪が華やかな輝きを失い、赤茶けた褐色に変わっていく。

心臓が驚掴みにされた。女に何が起こったのかは判っている。

彼女の細い体には、死に神の息吹がかかっている。

——神よ——

壊れ物を扱うようにそつと女の体を抱き上げる。

ぐらりと上体がかしぎ腕のなかに倒れ込んだのは、女ではなく、滉だった。

「滉…なに？ 何が言いたいの？」

ドルフェスは、涙に潤んだ魅羅の声で夢のなかから引き戻された。
「いいの、滉。声を出さないで。読めるから」

滉の頭を膝に抱き上げてそう言いつつ、魅羅は血の溢れだす滉の唇に、自分のそれを押し当てて深く吸った。すぐに離れ、口のなかに吸い取った血を外に吐きだす。

「何？ りゆう…ぞう…じの…猫…ね」

心臓を掴みだされながらも滉はまだ生きていた、驚くべき生命力で彼は娘に何かを伝えようとしている。

「D・D？ 彼を守るの？ 判ったわ」

自慢していたスーツを、父親の血で真っ赤に染めながら、魅羅は無理矢理微笑んで見せたが、黒い瞳からはとめどなく涙が流れていた。

「ええ…待つてるわ。大丈夫もう子供じゃないのよ」

魅羅が不意に滉の頭を抱きしめる。最後のメッセージを伝え終えて、滉は娘の腕のなかでこと切れたらしかった。

「おやすみなさい。お父さん…」

ドルフェスが聞いた限り初めてまともに滉を父と呼んで、魅羅は血溜まりの中で、滉の頬に口づけをした。

ドルフェスはその光景を美しいと思った。

再び暗闇が青年を包み込んでいく。

冬枯れた薔薇の園。

薄紫の花は影も無く、ただ灰色の枝が風に揺れている。

揺り椅子に女は座っていた。

近づく、女は振り返り、青ざめた顔に微笑みを浮かべる。

「知ってるわ…滉が死んだのね…」

ため息とともに褐色の瞳は閉じられ、揺り椅子がか細い音を立てて揺れる。

「可哀相に…」

女が呟いた。

「ネプチューンが啼いている」

号泣するかの如き遠吠えが長く尾を引いて響き、その声に引き戻されて、青年は目を開いた。

サンルーフから、ほの暗い街灯に照らされたビルが、影のように後ろへ流れていくさまが見える。

ネプチューンは啼きながら夜の街を走っていた。

辺りすべてが幻想の様に感じられる。

身体には力が入らず、吐く息が自分でも火のように熱い。

全身の関節が軋んで、リクライニングされたシートに横になって

いることさえ苦しい。

頭に何か冷たいものが巻かれている、触ろうとしてわずかに腕を動かしただけで、心臓に鈍い痛みがはしった。

「う……」

苦痛に、思わず声がもれる。

「苦しいの？」

ドライバースシートから魅羅が顔を出した。

顔や手の血は拭われていたが、彼女の服はまだべっとりと血糊で汚れていた。

「もう少しの辛抱よ、すぐ病院に着くわ」

力づける様に魅羅が語りかけてくる。ドルフェスは、微かに頷いて返事にした。

「安心して、今最高のお医者様から解毒の方法を教えて貰うから」

魅羅がそう言った時、柔らかな声が流れてきた。

『サン・ザ・サンより、リトル・ムーンへ、応答せよ。サン・ザ・サンより、リトル・ムーンへ』

「来たわ、待っててね」

魅羅はコンソールに向き直り、通信機のマイクスイッチを入れた。

「こちらリトル・ムーン」

回線がつながり、相手が話します。

『魅羅、分析は終わりました。データはこれでいいんですね？』

「ええ、そうよ閑吼、ドルフェスの血液データはそっちに送ったとおりよ」

ユルクと呼ばれた相手は、魅羅よりは幾分トーンの低い、女性とも男性ともつかない、中性的で柔らかな声で答えてきた。

『大丈夫です、かなり特殊な毒物ですがこの量なら何とか持ちこたえるでしょう。ただ、高熱が3日は続くと覚悟してください』

閑吼の返事に魅羅は安堵のため息をつき、ドルフェスに向かって指でOKサインを出してみせた。

「判ったわ。今、警察病院に向かつてるの、入院させるべき?」

『当然です。遠くの名医より近くのヤブって言うでしょう? 僕が着くのは7日後ですからね。僕の送った処方箋を医師に渡してください。それで大丈夫、彼に今必要なのは、清潔なベッドと包帯、優しい看護婦さんですよ』

魅羅はほうつとため息を付いた。

「私にも、清潔な服とシャワーが必要よ」

閑吼は通信機の向こうで低く笑った。

『父さんなんてほっとけばいいのに』

「そうはいかないわ、何か言おうとしてたんだもの。それにあんな……」

思わず魅羅が絶句する。閑吼は優しく言葉を続けた。

『万事派手好みの人ですから、結構楽しんでたかも知れませんが、父さんは何て?』

奇妙な会話だった。閑吼の言葉には、滉の死を悲しむ気配は微塵もない。魅羅もまた先程の慟哭とはうって変わって、結構さばさばとしている。

「それがね、さっぱり判らないの。ドルフェスを護れと、龍造寺の猫だって」

『後はすぐ戻るから待ってろ、かな?』

「その通り、勝手な言いぐさよね」

魅羅と閑吼はくすくすと笑いあった。

「ところで、ママは?」

『今のところ、鎮静剤で眠っています。父さんは貴方にダイイングメッセージを残すために、全部ママに肩代わりさせたみたいですね。パーティーの会場で悲鳴を上げて倒れたんですよ、びっくりしました』

さして驚いてはいないような口ぶりで、閑吼は淡々と話します。

「やっぱり、じゃないかと思ったわ。ママ、起きたら激怒でしょうね」

『まあ、なんとかなだめておきますよ。それより、龍造寺の猫つて
いうのが気になりますこんな判事物はあまり得意ではありませんけ
どね』

「私の頭の程度じゃさっぱり判らないわ。ママが起きたら聞いてみ
て、滉のことは、ママが一番判ってるもの」

通信機の向こうで閑吼は微かに笑い声をたてた。

『ママに言わせれば、知りたくもないのに筒抜けだって事らしいで
すよ』

閑吼の背後から、微かに音楽が聞こえてきた。

『ああ、こちらは後15分少々でワープに入ります。この手の船は
超高次空間航行が長いから、しばらく連絡は出来ません。くれぐれ
も気をつけて、貴方がリセットになるのを感じるのは願い下げです』

>

「判ったわ。でも早く来て…心細いの」

魅羅の声が、初めて不安気に震えた。

『扉を開いて…今夜は僕が貴方を抱きしめています。サン・ザ・サ
ンより以上』

通信が終わわり、魅羅は長いため息をつきシートに沈み込んだ。

「魅…羅さん…」

苦しい息の下から、ドルフェスはやつと声を絞り出した。

「すみ…ません…俺のせ…いで…警部は…」

魅羅は振り向くにつこり笑ってみせた。

「何言ってるのよ、気にしないの」

「でも…警部は…」

「大丈夫よ」

魅羅が、ドルフェスを励まそうと言葉を続けようとしたとき、通
信機から女の声が炸裂した。

『魅羅！ 滉の糞馬鹿野郎はどこ?! 目茶苦茶痛かったわよ！

滉!!! そこにいるんならさっさと出てらっしゃい、このあんぼん
たん!!! 人前で大恥かせて、どうしてくれるのよ!!!」

魅羅は弾かれたように通信機に向き直った。

『ママ、おちついて…』

向こう側で閑吼が慌ててなだめている、だが激昂した女には何も耳に入らない。

『滉！ あんたに振り回されるのは真つ平よ！ 痛いんだったら一人でやってなさいよ、聞こえてるの？！ 男らしく出てらっしゃい！！』

「ママ、滉はリセットになったのよ」

魅羅が言う。女の声が1オクターブ跳ね上がる。

『リセットオー？！ だろうと思っただわ、あの女ったらしの大馬鹿野郎！ 何でくたばったのよ！！』

女の台詞は誠に辛辣であつた。

あらん限りの罵声を並べ立てて、心行くまで死者を鞭打つ女に、魅羅は滉の死に至るまでの顛末をてんまつをかいつまんで話して聞かせた。

しかし、女の怒りは収まらない。

『この大事なときに、あいつのヘマで余計な仕事まで押しつけられるわけ？！冗談じゃないわよ。ダフネまでさらわれて、のんびり死んでる暇なんて無いのよ！こんなちんたら鈍くさい船に乗ってるつてのに、私に何しろつてのよ？！あのだ間抜けの唐変木！！』

通信機の向こうから響きわたる悪口雑言を聞きながら、ドルフェスは何となく笑いがこみ上げてきた。

嬉しさと懐かしさが入り交じった変な気分だった。

久しぶりに会った友が、昔通りで安心した。そんな感じた。

そして同時に、望み通りに目的を果たした様な深い満足感が広がり、嬉しすぎて涙さえ滲んでくる。

滉に会ってから、初対面の人間を懐かしがる、などという変なことが起こるように成っている、これもデ・ジャヴの一つかもしれない。

気分が良くなり、ドルフェスは口許をほころばせた。

しかし、すぐに滉の死に顔が浮かび、嬉しさは半減する。

魅羅は、ママと呼んだ女をなだめるのは諦めて、嵐の過ぎ去るのを黙って待っていた。女は滉の娘を相手にしていることなどお構いなしに、物凄い早口で爪先から頭のとっぺんまで、魅羅の父親を罵り倒してやっとな落ちついた。

『あーすつきりした。で、死体はどうしてるの？』

魅羅はそれまで呼吸していなかったかのように、大きなため息をついて口を開いた。

「ネプチューンのトランクの中に入ってるわ」

『早いところ始末しておきなさいよ。あんなものすぐ腐るわよ。特にそっち、これから夏でしょう？』

とんでもない言いようである。

ドルフェスは仰天した。

身内の死を悲しむどころか、さも邪魔くさそうに腐るだの始末しろだのと言う、彼女の神経が信じられない。

しかし

「えー。あんなスプラッタ死体、もう触るの嫌よ」

魅羅の答えも物凄い、先刻まで死体を抱いて泣いていた人物とは思えない。

『ネプチューンに手伝ってもらいなさい。そっちに居るのはあんなだけなんだから、仕方ないでしょ』

「でもお…」

ぼやく魅羅を、無視して言葉を続ける。

『で、魅羅。阿呆のダイイングメッセージは何？ あいつ何か言いたいから、私に肩代わりさせたんでしょ？』

ドルフェスは女の言葉の奇妙さに、眉を寄せた。滉の所為で痛かったとか、肩代わりさせたとかいうのはどういう事なのだろう？

『さっき魅羅から聞きました。ちょうどママが起きたら伺おうと思つてたんですよ』

向こう側で閑吼が口を開いた。

『何なの？』

『龍造寺の猫だそうです、後はドルフェスを護れ』

『何よそれ、ドルフェスてのは誰？』

『父さんの部下ですよ、現地調達の。怪物に集中的に狙われて怪我をしたんで、目下のところ僕の患者です』

閑吼の答えに、女は小さく『ふうん』と興味なさそうに唸った。

「私には、滉の言ったこと、さっぱり判らないの。ママ判る？」

魅羅が自信のない声を出す。

『龍造寺の猫…ね』

女はしばらく考え込むような沈黙を置いて、次に納得したようなため息をつく。

『テラ暦生まれは古いこと言うわ…』

「え？」

『ネプチューンのライブライイで、鍋島の猫騒動って引いてご覧なさい。伝奇趣味の滉なら、コレクションにきつと持ってるわ。ミドルアースの古い昔話よ』

「昔話？」

『ああ、知っています。化け猫でしょう？ 飼い主の仇を討つために妖怪になる猫の話』

閑吼が口を開いた。それを聞いた途端、魅羅とドルフェスはつと息を吸った。二人の脳裏には、毛のない猫の様な怪物に変わった、カイマン達の姿が浮かんでいた。

『まあ、よく知ってたわね。そうよ、その猫の飼い主が龍造寺。まわりくどい言い方するから、とんだ判事物だわ』

「ママ、化け猫ってあいつらのこと？」

『スプラッタちゃん達だけじゃないと思うけどね。滉の心臓を持っていた奴、何て名だったっけ？』

「ケット・シー」

『ユーロ州の化け猫の呼び名でしょ？ そこから連想したのかもしれないけど。魅羅、2匹のスプラッタちゃんは、ドルフェスって坊やを狙ってたのね？』

「そうよ」

『でも、滉がスプラッタちゃんになる前の連中を尋問したときは、そんな事吐かなかった訳でしょ?』

「ええ、こつそり自白剤も使ってたけど、何も出てこなかったわ」

『自白剤：相変わらず、考え無しのド阿呆ね。それでもそいつ等が変身するなんて判らなかった、て、ことは…?』

『メンタルブロックかな?』

閑吼が呟いた。

「え?」

『本人も全く知らない。キーワードを聞くかして初めて思い出すんですよ』

「キーワード…」

鸚鵡返しに呟く魅羅の声に、ドルフェスは姿を変えるときのコス
タの呟きを思い出した。

そして、カイマンが叫んだ言葉。

「Dragon Maker…」

『今誰が言ったの?!』

いきなり女が怒鳴った。

『魅羅、今の声は誰?!』

「ドルフェスよ、彼はスプラッタちゃんが変身する時一番近くに居
たの。何か聞いてたんだわ」

『Dragon Makerって言ったわね。何でそんな名が今頃
出てくるのよ。あの糞爺イ』

女は通話機の方こうでファントムを口汚く罵った。

滉の関係者は、気性の激しいタイプの女性が多いらしい。しかも
ファントムに対してはかなり下品な口調になる。もっとも、この女
は全般的に口が悪いが。

通信機から静かな音楽が流れはじめた。

『ママ、もうタイムリミットです』

落ちつきはらった声で、閑吼が割り込んできた。

『魅羅、35時間後に又通信をください。アクセスポイントは△356、詳しいことはネプチューンが記憶しています』

『その時はちゃんと聞かせてよ。ドルフェス坊やからもちゃんと聞いておきなさいね。それと、まわりの人間は滉を含めてすぐに信用しちゃ駄目よ。いいこと、化け猫はひと…』

女の声は途中で途切れ、ノイズに掻き消された。

「やれやれ、ママは相変わらずね」

ため息とともに魅羅は独りごちた。

「今の方達は…？」

ドルフェスはそつと身体をずらして、楽な姿勢になりながら魅羅に訊ねた。

「閑吼とママのこと？」

「うん…」

「閑吼は私の兄よ、お医者さんなの。ママは滉の妹で私と閑吼の義理の母。今のところは津川家の女王様ね」

魅羅はくすくすと笑いながら、ドルフェスにウインクしてみせた。

「そういえば、何で魅羅さんは龍造寺なんですか？ 警部は津川なの…」

ドルフェスは思わず、気になっていたことを訊ねた。

「私達、ある事情で養子に出されたの。子供のときに」

「警部とはくらしてなかったんですか？」

「そうよ、滉はいなかったもの」

「そういえば、そんな事を前に話していた。」

「ごめん、立ち入ったことを聞いて…」

ドルフェスは素直に詫びた。魅羅はけらけらと笑いながら、手をひらひらと振った。

「気にしない、気にしない。養子先はママのところだったから何も肩身の狭いことなんて無かったもの」

魅羅は懐かしむように遠い目をした。

「ママともそんなに長くは一緒に居られなかったけど、養父の龍造

寺が、実父以上に子煩悩な人でね、ママの後を引き受けて、私たちをどんな子供でも及ばないくらい可愛がってくれたわ。素敵な人でね、ママを心から愛していて、一生再婚しなかったわ」

他人の家をせんさく詮索する気は無いが、魅羅の話は何かちぐはぐだった。ドルフェスは首を傾げながら、当たり障りのない質問をする。

「その方…もう亡くなったの？」

魅羅はこくと頷いた。

「宇宙船の事故だね。アルゴルの首都星ユルクレーナからの帰りに…身内はもうあの人だけだったから、とても悲しかったわ」

彼女は黒曜石の瞳を悲しげに伏せた。

「親と呼べる人すべてに死なれてしまって、私たち本当の孤児になっってしまったの、あれほど寂しくて心細いことは無いわ」

——あれ？——

今度こそ、頭が混乱してきた。魅羅の言っていることは、まるで滉もダフネも今ママと呼んでいた女も、皆死んでしまっているように聞こえる。

いや、熱の所為だ、それで変なふうに聞き間違いをしているのに違いない。ドルフェスはもつと頭がハッキリしたらもう一度聞いてみようと思った、間違っただけまでは魅羅に悪い。それにしても、何であんなふうに聞こえたんだろう？

怪訝そうに見つめるドルフェスの視線に気づいて、魅羅は慌てて微笑んだ。

「私の初恋の人なのよ？」

「え？」

意外な言葉に驚いた。

魅羅は悪戯っぽく舌を出した。

「龍造寺の父があんまりカッコ良かったから、他の男なんて全然魅力無くなっちゃったのよ。」

だから、可愛い女の子の方が好き？私は年齢制限無しなのよ」

「そうなんだ…」

何だかどつと疲れてきた。ドルフェスは頭がくらくらしてくるのを感じて、深く息を吐きだした。

胸が苦しい。“ママ”の声を聴いていたときには拭われる様に消えていた、鈍い心臓の痛みが戻ってきていた。

——私の初恋の人……——

何故か魅羅の言葉が頭の中でリフレインされる。

胸の苦しさは、毒のまわりの為だけでは無いような気がした。

何となく切ない。

魅羅の明るさが、ひどく申し訳ない。

——マイッタナ……——

頭のなかで、そんな言葉が聞こえた。

——ああ…警部は俺のせいで死んでしまったのに…魅羅さんは氣を使ってくれている——

ゆっくり世界が回りはじめた。暗闇が冷たい手を伸ばしてくる。

滉の、何時も笑っていた顔が目には浮かぶ。ドルフェスは眠りに落ちながら、あの笑顔をもう一度みたいと切望していた。

*

ネプチューンは暗い街をひた走っていた。街路樹のアーチをくぐり抜け、ウインドウに月明かりがまだらに落ちる。

魅羅はドライバーズシートに座り、そんな光景にちらりと疲れた視線を泳がせて、ネプチューンのサブシートに寝かせたドルフェスを振り返った。

彼は眠ったらしい、熱のために大粒の汗を浮かべ、荒い息を吐いている。額に巻きつけたアイスチューブなど焼け石に水のような気がした。

そのくせ顔は蠟細工みたいに白い。

滉は彼を守れ、と言が残した。確かにあの二匹はドルフェスを狙

っていた、そしてケット・シーと名乗ったファントムの代理人もまた、ドルフェスのことを殺そうとしていた。

何だか何かが起こりはじめている様な気がする。滉は何か気づいていたのかも知れないだから、ことさら彼を守れと言ったのだ。

魅羅は不安気に唇を噛んだ。

閑吼に側にいてもらいたい。魅羅は心からそう望んだ。

自分でも妙に思うほど自信がなかった。今この惑星コーチで彼女は一人ぼっちだった、頼りはネプチューンしか居ない。何とも言えない不安が心の中で重い石に変わってゆく。

たまらなく寂しかった。ドルフェスに訊ねられるまま、身の上話などを話してしまったのも、何とか気を紛らわしたいからだだったが、その話し相手も眠ってしまった。

魅羅は閑吼を思い浮かべながら、彼の乗る船を探すように空を見上げた。

ふと、見えない腕が両腕を抱きしめる感触を覚えて、魅羅は物思いから我に返った。

「扉を開いて、今夜は僕が貴方を抱きしめています」

閑吼の優しい言葉が思い出された。言葉どおり、彼は魅羅を抱きしめている。魅羅の表情がゆっくりと解け、微かな微笑みが広がってゆく。

たとえ暗黒の空間に隔てられていても、常に自分を抱きしめてくれる腕がある。何も恐れるものなど有りはしない。

魅羅は深いため息をついて不安を追い払おうと努めた。

滉と一緒にいて、置いていかれたり途中から一人でしななければならない事なんて、今までだって山ほどあった、一人だけの任務だっただけのことがある。

今更小娘の様に怖がっているなんて馬鹿馬鹿しい。それに、今は無理でもじきに援軍はやって来るし、ドルフェスにしても、さつきケット・シーを撃退した腕前を見るかぎり、回復すればなかなかの戦力が期待できるだろう。そう、何も不安になることなど無いのだ。

魅羅は自分に言い聞かせるように、楽天的な事ばかりを並べ立てた。それにしても、ドルフェスには驚かされた。

魅羅は思い出して少し微笑んだ。

滉の心臓を片手に持ったケット・シーが、ゆらり、と魅羅とドルフェスに迫ってきたとき、青年は奴の額に拳銃の弾をたたき込み、重症を負った奴は、そのまま路地の暗がりへ姿をくらました。

なんてそっくりなのかしら

あの時、まだ硝煙の煙を立ちのぼらせる拳銃を片手に持ったまま、気を失ってしまった青年の顔を見つめながら、魅羅はどうしてもかの人の面影を偲ばずにはいらなかった。

いつも血と硝煙の匂いをまとって、どれほどの危険のなかにも苦笑を浮かべて入っていく男。魅羅と閑吼に大志津大小一振りを残し、彼女の男性観を歪めてしまった男。

滉を太陽にたとえるなら、彼はまさに影そのもの、光のあるところに必ずあつて、彼らを助け見守っていた人。

「見た目以外は全然違うけどね」

恐らく滉も同じように感じていただろうギャップを考えて、魅羅はすこし笑った。

きつと始めは、ナディーラの気を引くために借りることにした部下だったに違いない。始めて彼を見たとき、滉はどんな顔をしただろう。それに、後から来る連中はどんな顔をするのか。

「絶対教えてやらない、見て驚けばいいんだわ」 楽しい想像をしながら、ドルフェスの寝顔を眺めていると、コンソールパネルから静かな呼び出し音が響いた。

「こちらリトルムーン」

魅羅の返事に答えて、パネルスクリーンにメッセージが表示された。

「DV、シャドーマザーよりベース、リトルムーンへ」「わお」

魅羅は思わず歓声をあげた。

「現在321ε98q689を航行中。到着は120時間後の予定」

120時間なら、コーチの時間でいえば80セクレット、約4日である。

「ほんと？嬉しいわ」

心からホッとしたように魅羅はため息をついた。文面は淡々と続いていく。

「ビッグサン、は回収完了、コンティニュー中」

魅羅はメッセージに向かってうんうんと一人で頷いていた。が最後の文面に顔をしかめた。

「身だしなみをきちんとする事、風邪をひかぬように気をつけること。無理は控えること。到着まで待機。シャドーマザーより以上」

「マザー…私を何歳だと思ってるの…？」

世にも憎々しげに魅羅が呟く。

ネプチューンが嬉しそうに吠えはじめた。魅羅が顔を上げると、赤いプラス模様が見える。

言わずと知れた赤十字マーク。形のあまりのシンプルさの為に、ときに銀河内に広がった医療のシンボル。ネプチューンはスピードを早めた。

11 S a d n e s s ・ N i g h t — 哀愁の夜 — (後書き)

A n g e l C r y 読者の方へ。

ついに閑吼の登場です。見比べてみてください。

女の冷戦は、怖いのです。気合が入っている人は特に。

息が苦しい、首が痛い。

誰かが首を絞めている、誰かが俺を殺そうとしている。

全身にぶつけられる、すさまじい殺気。恐ろしくて身体が動かない。

何で？

「お前さえ生まれなければ良かったのよ」
誰だ：

「死んでしまえ、お前なんて死ねばいいのよ」
苦しい、止めてくれ。

顔が倍に膨らんでいるような気がする。肺が空気を欲しがり、血を止められた頭はジンジンと痺れていく。

自由を求めて両手を延ばす、柔らかく太い腕に触れた。いや、こちらの方が小さいのだ死の瀬戸際にいるこの体は、幼く小さなものだった。これでは相手の腕は振り払えそうにない。もはや甘んじて死を待つばかりだ。

目を開いて、首も折れよとばかりに渾身の力で締め上げてくる、

殺人者の顔を見た。

血が凍った。

焦点の定まらない黒い目を血走らせ、黒い髪を振り乱した痩せぎすの女。

生気のない白い顔は、とても見慣れたものだった。

女は色のない唇に、凍りついた微笑みを張りつかせたまま、口を開く。

「早く死になさい。お前なんて要らないのよ」

呪文のように一本調子な声が、鬱血して破裂しそうな頭に、耳鳴りと共に響いてくる。

手足が痺れ、顔がかあつと熱くなり、次に痺れながら冷たくなつた。

苦しさが消え、浮遊感と共に全身が冷えてゆく。

このまま死ぬのか…そんなに要らないモノだったのか…

そうだ、あんたは弱すぎた。

生きてゆく為の重さに耐えきれずに、俺を殺し、自分も殺してしまつた。

弱すぎた可哀相な女…

——母さん——

絶望感と暗闇が来た。

「どうしたの？」

涼やかな声に振り返ると、淡い空色の日傘をさした女性が立っていた。

その人は、日の光に透けてしまいそうな、儚げな美しい人。

ふんわりとした金髪を白いレースでまとめ、栗色の瞳に優しくな微笑みを浮かべて、こっちを見ている。

——天使だ——

そう思った。

天使は微笑みながらゆっくりと近寄ってきた。

日傘を下において、白い腕が優しく伸ばされる。

天使の祝福を待つて、彼女を見つめた。

天使が微笑む、白い手がそつと抱きしめてくる。

「貴方に、私の太陽と月をあげる。二人には貴方が必要なのよ」

彼女の微笑みが光となって辺りを覆いつくし、全てが白い光のなかに消えていった。

部屋一杯に光が溢れている。白い壁に光が反射して目が痛いほどだった。

ドルフェスは眩しさに目を瞬かせた。

「D・D、目が覚めたのね」

枕元で声がした、首を巡らせてそつちを見る。

天使に良く似た黒髪の女が、嬉しそうに笑っていた。

「ここは何処だ…?」

青年は自分がどこにいるのか判らなかった。

「病院よ、もう大丈夫、貴方まる3日間眠りっぱなしだったのよ」
少し鼻にかかったアルトの声。

ゆっくりと、包みを開くように記憶が鮮明になってきた。

彼女は魅羅だ、自分は何と呼んでいたっけ…?

「リル・ダイアナ…」

ふいに黒い瞳が衝撃を受けたように見開かれた。

「D・D、今なんて言ったの?」

ドルフェスはもう一度繰り返そうとして困惑した。何だかとても呼び慣れた名を言ったような気がしたが、次の瞬間にはきれいさっぱり頭のなかから消えてしまっていた。

「あれ…? 俺、何て言ったっけ?」

「リル・ダイアナって私を呼んだのよ。覚えてないの?」

魅羅の声には心なしかひどく切迫したものがあつた。

「ごめん…。まだ頭がぼうつとしてて…」

「そう…」

いぶかしむような目でしばらくドルフェスを見つめていた彼女は、諦めたようににっこり笑った。

「とにかく、目を覚ましてくれて嬉しいわ。おなか空いてない? ご飯にはまだ間があるけど、起きたら果物ぐらいなら食べていいって、お医者さんが言ってたから、何か剥きましようね」

いそいそと用意をしに立ち上がる魅羅の後ろ姿を眺めながら、ドルフェスは三カ月前同じように病院で目覚めた時の事を思い出し

ていた。

そういえばあの時も起き抜けに何か言ったらしく、母が真っ青な顔で何といったと詰め寄ってきた。何を言ったかはさっぱり忘れてしまったが、考えてみると、あの時から自分のなかで何かが変わってきたような気がする。

それにあの女の夢も、死に際の彼女の夢から別バージョンを見るようになったのは、あの後からだったとあらためて気がついた。そして、さっきの夢は何だったのだろう。あんなのは自分の記憶にはない。とりとめのめない悪夢と言えばそれで終わりかもしれないが、それにしてはリアルすぎた。

また、この頃感じるデ・ジャヴは何なんだろう。知っているはずのない記憶に戸惑ってばかりいる。まるで自分のなかで眠っていた別の何かが目覚めたように……。

そこまで考えて、ドルフェスはぞとした。自分のなかに別の何かがいる。考えられない事だが、夢も、デ・ジャビュもその記憶だとしたら？

もしそうなら、それは何者なんだろう？

夢をつなぎ合わせるなら、子供のとき母親に殺されかけて、天使に会い、あの女とすごしてその死を見取った人物というところか。デ・ジャビュを加えればその人は、滉と行動を共にしていた、とも思えた。

滉と……。滉の死に顔がまざまざと思い出された。あの時頭のなかで誰かが叫んだ。

もう二度とあいつが死ぬのは見たくない……と。

不安が心を満たしていく、いつも笑っていた滉、自信に溢れ強かった滉。その滉が死んでしまった。自分を残して、魅羅を残して。この先どうしたらいいのだろうか？ 滉さえも簡単に殺す相手に、自分は何の力もない。その上得体の知れない誰かが自分のなかにいるとしたら？

「はい、どうぞ」

目の前に、皿一杯に盛られた果物が差し出された。

「え…？」

きょとんと目を丸くして、ドルフェスは皿を見つめた。その向こうで魅羅がにっこりと微笑んでいる。

「魅羅風フルーツパライススペシャルよ。ハイ、あーんして」

果物の一切れをフォークで刺して口許に持つてくる、爽やかな香りに誘われて、ドルフェスは無意識のうちにぱくりと頬張っていた。甘酸っぱい果汁が口のなかに広がり、頬に走る痛みとともに、空っぽの胃を自覚する。

クーキュルルルルル…

持ち主の自覚に応じて胃が自己主張を始めた。

いきなり響きわたった怪音に、目を点にして見つめあつた二人は、次の瞬間爆笑した。

「や…まいったな、おなか減っちゃって」

ひとしきり笑い転げてから、真っ赤になりながら青年が弁明した。

「もーお茶目なおなか。こうなりやもう大丈夫、どんどん食べて」

笑いすぎて涙を浮かべながら、魅羅はドルフェスの口へ矢継ぎ早に果物を放り込んだ。

——馬鹿馬鹿しい——

口一杯に果実を頬張りながら、ドルフェスは首を振って不安を打ち消した。

自分の中に誰かがいるなんて、単なる気の迷いだ。毒で体が弱っていたから気力が萎えていたのに違いな

。果実が腹に納まると、落ち込んでいた気持ちが少し前向きになってきた。

夢やデ・ジャビュは、いつか落ちついたら専門のセラピストにでも相談すればいい。そう、自分にはそんな事よりもしなければなら

ない事があるのだから。

「魅羅さん。俺、かなわないかもしれないけれど、きっと、警部の仇を討つてみせるよ」

決意を込めてドルフェスは、きっぱりと宣言した。

「へ…？何それ」

魅羅は気の抜けた返事をした。

「俺では役不足なのは判っているけど、俺のせいで警部は死んだんだ、あんなに良くしてくれたのに何もできないなんて嫌だ」

苦い思いを吐きだすように決意を述べる青年に対して、魅羅は不思議そうな顔で覗き込んできた。

「まだ熱があるのかしら？」

白い手をドルフェスの額にのせる。

「魅羅さん、ふざけないでくれよ」

折角の決意表明をうわ言あつかいされて、青年はむかつぱらをたてて魅羅を咎めた。

「だって貴方があんまり変なこと言うから。いつ滉が死んだの？」

「え…？」

意外な言葉に今度はドルフェスが絶句した。

「夢を見たのね、ずいぶんうなされていたから。安心して、滉はちゃんと生きてるわ」

子供にするように優しく青年の髪を撫ぜながら、魅羅はにっこりと笑ってみせた。

「本当に…？」

惚けたようにドルフェスは呟いた。

「じゃあ、警部のダイニングメッセージや、車のなかでのママという人との通信も、すべて夢？」

「貴方を病院に運んだとき、兄や叔母と通信してたのは現実よ。ついでに言つと私の身の上話もね、覚えてる？」

黒い瞳が真っ直ぐに青年の目を覗き込んできた。その目には嘘を言っている様な影は微塵もない。

「うん。でも、あの時死体がどうしたとか言ってなかった？」

「ひどい熱だったから、記憶が混乱してるみたいね、滉が殺されてたら、私が悠長にここでのんびりしてるはず無いでしょう？」

そういつて、魅羅は極上の微笑みを浮かべてみせた。

「なら、今、警部はどこにいるんだ？」

青年の問いに、初めて魅羅の瞳に困惑した光が浮かぶ。

「それは…」

病室のドアのインターホンがやわらかなベルを鳴らした。

「あ…はい」

慌てて駆け寄った魅羅が、小さな歓声を上げて訪問者を招き入れた。

長身の魅羅の影から、頭一つ半は小さいクリーム色の髪が見えた。

「ドルフェス刑事、お元気そうでなによりだわ」

25分署署長、モセ・ナディーラが、いつもと変わらぬ笑顔を浮かべて入ってきた。

「署長」

世にも嬉しそうな顔の魅羅が、モセの後ろにつつと擦り寄るように立つ。さらにその向こうに褐色の髪が見えた。

「え…？」

何となく嫌な予感がした。

「D・D、また入院したって聞いたから、心配してたのよ」

はたして、魅羅を押し退けるようにして現れたのは、真っ赤なジャケットをはおったエミーだった。

何時ものように唇の片端だけ上げる笑みを浮かべ、探るような目でドルフェスを見つめていた。まさか署長の前で厭味を言いもすまいが、予測の出来ない相手だけに、青年は我知らず体を固くしていた。

そんな青年の脅えを肌で感じてか、エミーは皮肉な微笑みを唇の

両端に広げた。

「素敵な看護婦さん付きでご満悦みたいね、安心したわ」
来たな、とドルフェスは内心首をすくめた。

しかしその他は何も言わない、さすがにTPOはわきまえているらしい。

「ジャクトーナの12分署から連絡を受けた時は本当に驚きましたのよ」

にこやかにモセが口を開いた。

「だって、25分署の職員がバズーカ砲で街を爆破した。なんて言われたんですもの、私腰が抜けてしまいましたわ」

くすくすと笑いながら、モセは大げさに首を振った。

「津川の捜査はいつも派手すぎて、地区担当の署長さん達の頭痛の種なんです」

魅羅が申し訳無さそうに、口を開く。

「確かにその様ですわね。でも、初日のソルティードルで、彼の仇名の意味をよく噛みしめましたから、もう、何が来ても平気ですわ」

混の仇名Bomb Bay―爆弾庫―は警察関係者の中でも有名ならしい、魅羅は深くため息をついた。

「ご迷惑でしょう？ 申し訳ありません」

「いいえ、楽しいくらいですわ。あら、こんな事、私が言ったら不謹慎ですわね」

モセは悪戯っぽく笑いながら首をすくめた。

「嬉しいですわ、今までそんな風に言ってくださった方はいませんでしたもの。モセ署長は度量の大きな方ですね。津川も喜ぶと思いますわ」

ドルフェスは、あくまで慎ましく、嗜みのある態度でさりげなく混をこき下ろして、自分の点数を上げてゆく魅羅の巧みさに呆れた。
混と違って、^{からめて}搦手からじわじわと迫っていく手法は、喉を鳴らす猫みたいな感じがして何だか可愛い。

「そうそう、Mr津川から、今朝ほど連絡が有りましたのよ」

署長の言葉に、ドルフェスは一瞬心臓が飛び跳ねる。

「あの化け物を追跡中とかで、しばらく戻れない、と貴方がたに伝えて欲しいと仰っていらしたわ」

不思議なことに、魅羅は奇妙な顔をした、だがすぐに微笑みを浮かべて頷いた。

「まあ、こちらに連絡すればいいでしょうに、津川の不精にも困ったものですわ。お忙しいモセ署長に伝言係みたいなことをさせてしまつて、私からお詫び申し上げます」

そう言つて頭を下げる魅羅を、酷く冷たい目でエミーが見つめていた。

しばらくの歓談ののち、モセは院長に会うために病室を出ていった。ふらふらとついて行こうとした魅羅は、すぎるようなドルフェスの視線に気づいてやむなく留まる。

ドルフェスは、署長というセーフティロックが居なくなったエミーと、二人きりになるのは何としても避けたかったのだ。

案の定エミーはまるで値踏みするように、魅羅を爪先から頭まで根眼付けた。

魅羅にしても、エミーの敵意に満ちた視線は始めから判っていた。黒髪の美女は、赤毛の女をまるつきり無視して、ドルフェスに微笑みかける。

「D・D、苦しくなくて？」

「ああ、大丈夫」

「果物もつといかが？ まだたくさんあるわよ」

ふと、枕元のサイドワゴンに、何か光るものがある。首を巡らせると、見たことのあるクリスタルの置物が目に入った。

ネプチューンのサイドボードにあった、ダフネの3Gフォトスタンドだった。

「魅羅さん、これは？」

ドルフェスが聞くと、魅羅は悪戯っぽく、くすつと笑う。

「お守りよ。貴方が健やかでありますように」

滉の奥さんの写真が、何故自分のお守りになるのだろう。青年が首を傾げていると、完全に無視されていたエミーが苛々と口を開いた。

「綺麗な付き添い婦さんに随分御執心みたいね。D・D」

どきつとした。エミーが居たことを完全に忘れていたのだ。

「何言ってるんだよ」

慌てて言い返すと、エミーの冷たい視線と真っ正面からぶつかる。

「あら、貴方が嬉しそうだから思ったことを言っただけよ。彼女が新しい恋人さん？」

エミーの言葉に、魅羅がきょとんとドルフェスを覗き込む。

「な……何を馬鹿なこと言ってるんだよ、魅羅さんに失礼だろう？」

思わず赤くなりながら、ドルフェスは否定したが、エミーは片方の眉をひょいと上げただけだった。

「ずいぶんむきになるのね、お母様の事お話ししてあげたの？ 彼女が苦勞する前に理解してもらわなくちゃね」

「エミー、魅羅さんは津川警部と一緒に来られた銀河司法局の検事さんだよ」

魅羅の身分を明かしても、エミーはかけらも怯まない、むしろ皮肉っぽい薄笑いをさらに深めただけだった。

「ふうん。銀河司法局の検事さんが、ただの地方都市の平刑事を随分甲斐々々しく看病してくれるのね、果物食べる？ 苦しくない？」

本当、お優しい方ね」

奇妙な節を付けて、歌うように刺のある言葉を並べてゆく。

ドルフェスはうんざりして、言い返すのも嫌になってきた。

「どうしたの、D・D。検事さんと話してるときはあんなにこにこしてたのにあたしにはだんまりなの？」

得意になってエミーが詰め寄ってくる、とたんに、魅羅がたまり兼ねたように吹き出した。

「な……何よ」

「だあってえ。貴方のほうがずうっとD・Dに御執心みたいだから」
エミーの目尻が、きりきりとつり上がる。

「何ですって……?!」

「私にはそう聞こえるわよ」

黒い瞳と褐色の目が、真っ向からぶつかり合った。

「おあいにく様、あたしは誰彼かまわず優しくしなくちゃならない程、男に不自由してませんから」

「そうね、自分に振り向かない男なんて許せないって感じよね。でも、そんな男のほうが余計気になるんじゃないこと？」

魅羅のすっぱ抜きに、エミーの顔がさつと赤くなった。

「よ……よくもまあ、そんな根も葉も無いあてこすりが出来るわね、呆れたわ」

「ああ、貴方には負けましてよ。何にやきもちを焼いてるのはかは存じませんけれど、私がD・Dの側に居るのがお気に召さないなら、はつきりそう仰ったらよろしいんじゃないか？」

馬鹿丁寧な口調で魅羅が答える。慇懃無礼なその言い方は相手の神経を逆撫でし、エミーは憎しみに満ちた目で魅羅を睨みつけた。魅羅はそんな視線など塵ほども感じていない様に、穏やかに微笑んでいる。

はつきり言ってこの勝負、魅羅の方に分がありそうだ。

「馬鹿馬鹿しい、誰が焼いてなんているもんですか。男なんて履いて捨てるほど寄って来るわよ。そんな、デート中に他の女の名を呼ぶような男、こっちから願い下げだわ」

魅羅が、そんなことしたの？　と言いたげにドルフェスを見た。全然覚えがない青年はふるふるとかむりを振った。

「どうせ貴方もダイアナの身代わりなんでしょう。ね、D・D？」
いきなり矛先が自分に向けられて、ドルフェスはきょとんとした。ダイアナなんて女は全然知らない。しかし、そのとたん魅羅は嬉しそうににっこりと微笑んだ。

「嬉しいわD・D、そんなに私のこと思ってたの？」

白い腕が滑るように首に回される。

「ダイアナって私のニックネームよ、リル・ダイアナ。さっきもそう呼んでくれたわね」

そう言いながら赤い唇が近ずいてくる。

「え？ あの…魅羅さん？！」

「魅羅って呼んで…」

艶っぽい声でそう囁く、ぐいっと首に回された腕に力が込められ、
どんだ唇が近ずいてくる。

——えー？！——

唇に、魅羅の赤い唇が軽く触れる。赤ちゃんにするフェザーキス
頭が真っ白になって硬直しているドルフェスにの顔中に、魅羅は
キスの雨を振らせた。

「とんだ茶番だわ。どうもお邪魔様でした！」

絡み合う男女の姿を見せつけられて、怒りに真っ赤になりながら、
エミーは大腿でドアに向かって歩きだした。荒々しく開閉スイッチ
を叩き、開ききるのもどかしく隙間に身体をねじ込む。

「D・D、夜中に死体の始末をする様な検事さんと末永くお幸せに
！！」

せめてもの捨て台詞にそうわめくと、赤毛の女は足音も荒く去っ
ていった。

ドルフェスに絡みついたまま暫くその足音を聞いていた魅羅は、
ゆっくりと満足げな笑みを満面に浮かべた。

「ふん、見た目にしか自信が無いくせに、天下を取ったような顔し
てるからよ」

いままで見たことの無い冷やかな視線でドアの向こうを見ながら、
魅羅は吐き捨てる様に呟いた。そして硬直したままのドルフェスに
向き直ると、顔中でにっばりと笑ってみせた。そんな仕種はまるで
悪戯っ子の様だ。

「あー、面白かった」

満足のため息と共に呟いて、ふとドルフェスに気がつき、

「あら、御免ね。口紅着いちやったわね。こんなのナディーラに見られたら変な誤解されちゃうわね」

一人で喋りながら青年の顔中に着いた口紅を拭き取っていく。

「私、ああいう女って大っ嫌いな。すっとしたわ。今の顔見た？ おっかしいの」

楽しそうにけらけらと笑いだす魅羅を、大円に見開いた目で見つめながら。青年はただエミーをからかうダシにされたことを理解するとともに、言いようのない憤りがふつふつと沸き上がってくるのを感じていた。

「魅羅さん…」

「何？ D・D」

楽しい悪戯の余韻に黒い瞳を輝かせながら、無邪気に魅羅が顔を上げた。

何か文句を言ってやろうと口を開きかけはしたものの、彼女の余りにも天真爛漫な表情に、怒りを露にするのをためらってしまふ。

「俺って一体何なんでしょうね？」

思わずそんな遠回しな言葉を口にする。

魅羅は不思議そうにドルフェスを見ると、覗き込むように顔を近づけてきた。我知らず鼓動が早まり、視線が形のいい唇の上に行ってしまう。赤い唇が確認するようにゆっくりと動いた。

「何って…？ 貴方はD・Dでしょ？」

まだ毒が回っているのかと言わんばかりの魅羅の返事に、ドルフェスは深い嘆息をもらした。

「まあ…その通りなんだけどね…やれやれ、後が怖いな」

「あの女？ そうね、蛇みたいにしつこそうだから、きっと仕返しを考えてるでしょうね」

納得したように頷きながら、魅羅はドルフェスの肩をポンと叩く。

「頑張るのよ、D・D！」

力強く励ましてくれたのはいいけれど、その原因は誰のお陰なんだろう？ 全身にひろがる脱力感とやるせない怒りを持て余しながら

ドルフェスは枕に深く顔を埋めた。

「今度顔をあわせたとき、どんな厭味を言われることが…」

そんな愚痴を呟きながら、ふとエミーの捨て台詞を思い出す。

——夜中に死体の始末をする検事さん——

背中を冷たいものが流れた。

エミーは何を言ったのだろう？ 魅羅が夜中に死体の始末をしていた？ まさか。 ただの嫌がらせだ。 かしこいくらなんでも、意味もなくあそこまで突拍子も無い事を言うだろうか？ それに一つだけ思い当たる節はある。

——早いとこ始末しておきなさいよ、——すぐ腐るわよ——

——えー、あんなスプラッタ死体もう触るの嫌よ——

魅羅と叔母との会話がリフレインされる。

魅羅は熱のせいで見た夢だといった。 本当にそうなんだろうか？ もしあれが現実だったら、エミーの言った死体とは滉の事だ。

ドルフェスは眉を寄せた。

魅羅が滉の死体を始末したとして。 何で滉の殉職を隠しておく必要があるのか、何で夜中に一人でこっそり始末なんかしたのだろう、理由が判らない。

病み上がりの自分に気を遣ってくれているのだろうか？ それにしてはすぐに判ってしまう様な意味のないことだし、魅羅が嘘をついている様子など微塵もない。 彼女は自信を持って滉は生きていると言った。

「どうしたの、D・D？ また苦しくなったの？」

考え込んでいる青年に、魅羅が心配そうに声をかけた。

「あの…魅羅さん」

「なに？」

訊ねたいがハッキリさせるのが何だか怖い。

「いえ…何も」

ゴニョゴニョと口のなかで言葉を濁していると、再びインターホンが鳴らされ、モセ署長が戻ってきた。

魅羅の顔がパツと輝く。

「もう戻らなければならぬので、ご挨拶していこうと思って」

柔らかなハスキーボイスと共に、小柄な彼女がドルフェスの前に進んできた。例によって魅羅が後ろに擦り寄っている。

「お気遣い有り難うございます」

「もう毒は抜けたと院長さんが仰ってらしたわ、2、3日中には退院できるそうですよ」

にこやかにそう言いながら彼女は魅羅を振り返った。

「Mr. 津川から今度連絡があったときには、ドルフェス刑事の回復をお伝えしておきますわね」

「まあ、有り難うございます」

魅羅は世にも嬉しげな声を出した。

「モセ署長とめぐり会えて、私たち幸運でしたわ。ご親切が身に滲みます」

極上の笑顔で答える魅羅を見ながら、ドルフェスは署長が滉からの伝言を持ってきたのを思い出し、心から安堵のため息をついた。

大丈夫、滉は確かに生きている。エミーの言ったことは、ただの嫌がらせだ。

ホッとして気が楽になった青年は、滉のお陰でどの星でも如何に冷たい扱いを受けるかを訴えて、モセの気を引こうとしている魅羅を改めて見つめた。

黒髪に黒い瞳、落ちついた雰囲気の見た目とは正反対の、天真爛漫な性格。

少女のようで、大人の様で、気が強いわりにはしゃやうり出る事はしない。くると変わると変わる表情は本当の彼女がどれなのか判らなくする。それに無邪気でめげないとてつもない明るさ。

付き合いの浅い相手には、つつい構えてしまう自分が、いつの間にか親しげに口を利いている。そんな、暖かで親しみやすい笑顔。不思議な女性だ。

これで男より女の方が好きとは、何とも勿体ない…。

ふと魅羅と視線が合い、ドルフェスは真っ赤になった。

魅羅は目だけで笑いかけると、モセとの会話に戻っていった。

愛しい片思いの相手を、全身全霊で引き止めていた魅羅だったが、さすがにモセは腕時計を見て肩をすくめた。

「Miss 龍造寺とお話していると、時間のたつのも忘れてしまいますわ。お名残惜しいですけど、もう戻らなくては」

「私こそ楽しかったですわ。お忙しいところを有り難うございました」

ちらりと残念そうな表情を浮かべて、すぐに笑顔で隠しながら魅羅が答えた。

「さて急がなくては、テラー刑事に置いてゆかれたら、私歩いて帰らなくてはなくなるわ。ドルフェス刑事、お大事にね」

品のいい仕種で別れを告げると、モセ署長は去っていった。

正面ロビーまで送っていった魅羅は、病室に戻るなり深々とため息をついた。

「何てエレガントなのかしら、ホントに素敵」
かなり熱が高そうだ。

「あんなレディ滅多に居ないわ、絶対ものにしてみせる！」

決意も新たに、魅羅は天を仰いだ。そんな魅羅の様子を見ながら、ドルフェスは密かに嘆息した。

まったく、彼女をこんな風にしてしまった、竜造寺という人物はどんな男だったのだろう。あの夜の記憶の半分は疑わしいが、魅羅の弁によれば、他の男がカスに見えるほどカッコ良かったらしい。

そこでふと気がついた。竜造寺といえば、初めて会った時、滉が竜造寺を知っているかと聞いていた。ケット・シーも自分に向かって竜造寺と呼んだ。

何だか無性に竜造寺に興味を覚え、青年は口を開いた。

「魅羅さん」

「何？」

「こんな事聞くのは失礼かもしれないけど、竜造寺って人はどんな

人だったのかな？」

うつとりとモセの面影を抱きしめていた魅羅は、そのまま夢見るように答えてきた。

「男のなかの男よ」

「ああ、そーですか……」

聞くんじやなかった。ドルフェスが後悔していると、魅羅がポンと手を叩いた。

「そーいえば、私その事で貴方に聞きたかったんだわ」

椅子を引き寄せ枕元に座る。

「ママと話してたとき、Dragon Maker って言ったでしょ？ ママがうるさいの訳を聞けって」

ドルフェスが、カイマンとコスタが変身する時にそう言ったのだと教えると、魅羅はなるほどと頷いた。

「ケット・シーの奴が貴方を龍造寺って呼んだわ、それがキーワードだったのね。でも、何でD・Mなのかしら？」

魅羅はしきりに首を傾げている。

「D・Mって？」

「Dragon Makerの略よ、私は彼をそう呼んでいたの」「彼？」

魅羅は口許に手をあてた。

「ごめんなさい。貴方は何も知らなかったのね」

わずかに体を動かして座りなおすと、魅羅はゆっくりと話した。た。

「Dragon Makerは私の義父、竜造寺龍也の仇名なの。アースで最も怖い男なんて事も言われていたわね。沈着冷静で、銃の名手で、剣の達人で、背が高くて苦みばしったハンサムで、欠点といえば、人間不信と女嫌い。と言うよりは、女はママ以外目に入らないほど熱愛していたって事かな？ 政治家の寄り集まりだった銀河連合に、司法機関を組み込ませて、現在の銀河ネットワークの原型を作った人よ。Dragon Makerは銀河に跨がる龍を

作ったの。でも龍を造る者が作り上げた最高の龍は、彼自身だって言う人もあるわ。性格は正反対なくせに、彼は滉の親友であり、仕事上でも最高のパートナーだったわ。滉ってすぐ暴走するからD・Mは散々苦労したって言ってた」

楽しそうにくすくすと笑い、魅羅はその人を探すように窓へ顔を向けた。

「滉やママの行くところなら、たとえどんなに危険なところへでも困ったなって感じで笑いながら飛び込んでいくのかっこいいでしょ？ 私が生まれるずっと前に、ママを助けるために片腕をなくしたって聞いたわ、彼の義腕の冷たい感触を覚えてる。よく力のセーブが出来なくて、義手でグラスを砕いてはママに怒られていたっけ…」

「大切な人だったんだね」

「そうよ、私たち全員にとって、無くてはならない人だった。最高の理解者で、最大の保護者。そして絶対無二の親友。それがD・Mだったわ」

ドルフェスは、悲しげに眉を曇らせた魅羅の横顔を綺麗だと思った。

「考えてみれば、一番貧乏籤を引いた人よね。滉とママに振り回されて、あげくの果てには、私と閑吼を育てなくちゃならなかったんだから。おまけに私たちが苦労しないように、あらゆる事をしてくれて、自分は、何の見返りも受けないうちに死んじゃった…」

「宇宙船の事故だったね」

「ええ、銀河司法局と警察機構の設立を果たして、各分局の設置の為にアルゴルのアルタイル・アルナスルに会いに行った帰りに、乗っていた船が爆発して…遺体のかけらさえ残らなかったわ。すぐにテログループが犯行声明を出して、アースの治安の要である竜造寺龍也を狙ったテロ活動だと言ったわ。勿論、そいつら全員、私と閑吼とエゼルとナゴフとアレクスで重犯罪専門の刑務所に終身刑で放り込んでやったわ。仇は討ったと思ってたのに…」

魅羅はうつむいてドルフェスの手をギュッと握った。

「それが…ファントムの仕業だったなんて…」

低い、怒りのこもった声で呻くように呟く。

「ケット・シーが言っていたわね、ファントムの希望で長い旅に出てもらったって。滉が逆上するのは当たり前よ。私だって出来るものなら、あの狒親爺を八つ裂きにしてやりたい。辛くてママには話せなかったわ。きつとママ、何も彼も放り出して復讐に飛びだして行くもの…」

きつくドルフェスの手を握りしめたまま、魅羅は微かに肩を震わせていた。

いつしか彼女の声はか細くなり、話し続ける言葉は殆ど独り言になっていた。

「滉がやられる前に、あいつの存在が判っていれば…みんなこんな目に逢わないですんだんだわ。」

滉やダフネ、ママとD・M、ケインにエミリ…みんな、ハッピーエンドになるはずだったのに…全部、ファントムが潰してしまっただ…」

打ちひしがれた様に、うなだれて肩を震わせている魅羅の姿を見ながら、ドルフェスは何と言っているのか当惑していた。

何があったのか、今の話だけではさっぱり判らないが、家族がファントムの所為で引き裂かれる様な悲劇があったんだろう、そして大切な人が失われ、両親の戻った現在でもその傷は癒えること無く血を流し続けている。

青年は泣くのをこらえている様な魅羅の姿を、可愛いと思った。ふとその姿が、夢で見た泣きじゃくるあの女のうずくまった後ろ姿とダブる。

何だか、たまらなくいじらしくなってきた、肩に触れようと空いている方の手を伸ばした。

そのとたん。

「ファントム！ 待つてらっしゃい、必ず息の根を止めてやる…！」
病室中に響き渡る、魅羅の気合の入った雄叫びが炸裂した。

「ああ、すつきりした」

さっぱりすつきりした顔をして魅羅が頭を上げた。にんまりと笑みを浮かべる彼女にはさっきまでの嘆きはかけらも無い。

「？ どうしたの、D・D？」

手を伸ばしかけたまま凍りついていたドルフェスは、呆然と静止した形のまま、ゆっくりと後ろに倒れてゆき、深々と枕に顔を埋める。枕と友達になりながら、青年は少しでも同情した自分を、心から哀れんでいた。

竜を造る寺の龍なり。
龍造寺は誤植です。

13 A・Visitor — 訪問者 — (前書き)

真夜中の病院は……角を曲がると何に出くわすかわかりません。

たとえ如何に医学が進み、医療機器が発達し、看護体制が機械によつて整備されていても、その治療を受けるのが人間である以上、最終的にはやはり人によつて管理されなければどうにもならないものである。

特に夜は、容体の激変する患者も出る場合が多く、常に医師や看護婦を悩ませてきた夜勤の苦役から、なかなか開放してくれそうにはない。

ラウラはモニターを見ながら、こつそりあくびをかみ殺した。

婦長はこちらに背を向けて、ポータブルコンピュータでカルテでも見ているようだ。他の看護婦達は巡回に出て、ナースステーションには二人だけしか居ない。

モニターに、それぞれの病室を覗いてゆく同僚たちのハンディライトの光が、踊るようにちらちらと映る。

退屈だった。今夜は患者たちの容体も安定しているし、今日明日の切羽詰まった患者はこのフロアーには居ない。

昨日まで階上の集中治療室にいた怪我をした刑事と言う人も、今夜は回復してこの普通病棟に介添人と一緒に眠っている。

何でも、特殊な毒物中毒で、あと二日は意識が戻らないはずなのに、もうすっかり回復してしまったらしい。

あまりの速さに、あと二日は検査のため留め置かれると言う事だ。だが、そんな事は医者が気にしていればいいのだ。

ラウラには、別のことが気になっている。

介添人がやたらに美人なアース人で、刑事の男もまだ若い。しかもアース人の希望で夜も部屋に入っているのだ、何となくむずむずするような好奇心を掻き立てられてしまう。

ラウラはそうつとその部屋のモニターに目を向けた。
ベットの真上に据えつけられたサーモグラフモニターカメラが、
眠っている患者を映し出している。

患者の完全な看護の為に24時間の看視管理を理想とする病院と、
フライバシーを主張する患者側との妥協の結果、微妙な体温変化を
見続けるものの、人を映すものではないと言う訳だ。

まあ、ラウラにとっては、単なるいつものモニターである。

——何だ、つまらない——

ラウラは期待を裏切られて唇を尖らせた。

ベットには患者の男が一人で眠っていた。用足しにでも立ったか、
介添人の姿はない。

——サーモモニターカメラなんて外からは見えないしはつきり映る
訳でもないんだから、気にせずにキスでもしちゃえばいいのに——
不謹慎な事を考えながら、ラウラはこらえきれずにそつと欠伸を
した。

続けてもう一つ。

そのとたん、モニターが一斉にブラックアウトした。

「婦長——！」

ラウラの悲鳴に近い叫びに、弾かれたように婦長が振り向く。

「モニターが！ どうしましょう?！」

「ラウラさん、落ちついて。消えたのはカメラモニターだけ? 他のは? チェックしてください」

冷静な声で婦長に指示されて、ラウラは慌ててその外の計器類に
目を走らせた。

「心電図、脳波計その他すべて正常です。カメラだけが消えていま
す」

「判りました。貴方は引き続き監視をしてください。私は当直
の先生に報告して、システム管理会社に修理を頼みます。いいこと、
落ちついてね。映像が無くたって、たいして変わりはないんで
すからね」

そう言つて婦長は電話を取り上げた。しばらくボタンを叩いていたが、困惑したようにため息をつく。

「どうしたんですか？」

「電話が通じないの。内線も外線もだめよ」

ラウラは体が震えてくるのを感じた。自分の所為のような気がしてきた。退屈だと言っただけで、人のプライバシーを覗きたがつたから罰が当たったのではなからうか？

「わ…私、上の階に行つて先生に報告してきます。それと、上でもこのこと同じか見てきます」

思わずラウラはそう進言していた。婦長がゆっくりと頷く。

「そうね、そうしてもらえる？ それと、上で外線が通じるようなら、管理会社に連絡して頂戴」

「判りました」

急患の時以外は走るな、という規則も忘れて、ラウラは廊下を駆けだした。

エレベーターではまだるっこしい、非常階段を使うことにして廊下をダッシュする。階段でもその勢いを殺さずに、一気に駆け上がろうとして、ふと踊り場に人が居るのに気がついた。

一瞬患者だと思つたが、そうでは無い事はすぐに判つた。

その人物はかっちりと白いスーツを着込んだ、背の高い男だった。ぼんやりとした非常灯の下で、彼の金褐色の髪が鮮やかに浮かび上がる。

誰かの付添いだろうか？ そう思いながら通り過ぎようとした時、男の腕がすつと目の前に伸ばされた。

「今晩は、お嬢さん」

「あの、済みません。急ぎますので通してください」

男の腕で通せんぼをされた形になって、ラウラは立ち止まった。

「何かあつたのですか？」

男の問いに、ラウラは顔を上げた。男の金褐色の瞳が真っ直ぐに自分を見つめている。思わず鼓動が早まった。真近かで見ると何と

いう美貌の持ち主だろう。

「あ…あの、え…と。別に何でもありません」

やっこの思いでそう答えると、男の目に微笑みが浮かんだ。>

「可愛い人だ」

「え？」

「花盗人は罪になりますか？」

そう言いながら男の腕が背中に回された。

「あの、私一寸仕事が…」

彼女の抗議に男は答えず、端正な顔が迫ってくる。

唇が塞がれて、たくましい腕に抱きしめられながら、ラウラはぼんやりと、この人なら嫌じゃないなと思った。頭の芯がくらくらしてきて、何だか気が遠くなってくる。

微かに、誰かの悲鳴を聞いたような気がした。

*

ドルフェスは何となく慌ただししい廊下の気配で目を覚ました。

誰かが廊下を走っていく。急患だろうか？このところ病院に泊まり慣れたせいか、始めのころのような不安感を感じない。ただ3日も眠っていたのと、昼間あまり動かなかった所為か、いったん目が覚めてしまってもう寝られそうになかった。

ベッドの上に体を起こし、隣で眠っているはずの魅羅を見た。しかし、持ち込まれた簡易ベッドの上に魅羅の姿はない。

——トイレかな……——

はねのけられた毛布をぼんやりと眺めながら、そんな事を考える。床に月明かりが白く映っているのに気付き、ゆっくりとベッドから立ち上がった。さすがに長い間寝ていたせいか頭がくらくらする。しばらくベッドのパイプに掴まって立ちくらみが収まるのを待っていると、窓にコツンと何かがぶつかる音がした。

「？」

風かと思った、だが続けてもう一度。

誰かが窓めがけて小石の様な物をぶつけている。青年はそつと窓に近寄った。

第7衛星のレイフトが青白い3日月の横顔を見せ、その下に第4衛星のセアカンドウが10日月の姿を浮かべている。二つの月の光で、下界はわりと明るい。そして、第3衛星のサーアドが、金色に輝きながら東の空から駆け上がってくるのが見える。

——合が近いんだな——

何年かに一度、それぞれ周期の違う7つの月達が一カ所に寄り集う時がある。今年は確か、ベースシテイの真上でその天体ショーが開かれると、何かで読んだ気がする。

再び窓に小石がぶつけられた。

寝起きの頭でぼうつと月を見ていた青年は、何で窓まで近寄ったのか思い出して下に目をやった。

まず木々の梢が見え、自分の病室が3階だと判った。患者の精神衛生のために、さほど背の高くない樹を林にして病院を囲んでいる。その木々の間に小さな広場が有り、月光に照らされて白い人影が立っていた。

サーアドの光がその人物をさらに浮かび上がらせ、髪が赤く輝く。滉だつた。

何時ものようににと笑いながら、何か大きなものを抱えている。

「警部……」

夢の一場面の様に、白い三つ揃いを着込んで、滉は片手を上げて手招きしていた。

「何ですか、警部」

窓の開閉スイッチを探して青年が慌てているうちに、滉は抱えていたものを持ち直すと背中を向けて林のなかに歩きだした。

「待つてください、警部！」

梢に見え隠れしながら去ってゆく滉の後ろ姿に、ドルフェスは思わず叫んでいた。その声が聞こえたかのように滉が振り返った。腕

に抱えている大きなものから、だらりと何かが垂れ下がっている、それが人間の手足と気が付いてドルフェスは息を呑んだ。

滉はもう一度手招きすると、今度は振り返らずに林のなかに消えていった。

ドルフェスは今見たものをにわかに信じられずに、窓に張りついたまま鼓動の早まった胸を押さえていた。

あれほど見たいと思っていた滉の笑顔だったが、あの抱えていたものは何だったのか？確かに人間だった。しかも、よく思い出してみるとあれが着ていた服に見覚えがある、そうだ、あれはこの看護婦の制服だ。

こんな夜中に、滉が看護婦を抱えて？いったい何をしていたのだろっ？

混乱した頭を抱えて窓から離れようとしたとき、どこか遠くで甲高くか細い悲鳴のような音が聞こえた。

——？！——

人の悲鳴のような、猫の鳴き声のような、長く尾を引いて消えていく音は、不気味な静寂を残してドルフェスの不安をかきたてる。

——急患だ、きっと大怪我なんだ——

脳裏に浮かんだ妄想を打ち消すために、ドルフェスは自分に言い聞かせる。

もう悲鳴も、走る足音もしない。耳が痛くなる様な静けさだけが辺りを覆っている。

——もう寝よう——

ベッドに向かって歩きだす。

カツン……

微かに足音のような硬い音が聞こえた。

カツン……

規則的にゆっくりとその音は近づいて来る。

カツン……

間違いなく足音だ。魅羅が帰ってきたのかもしれない、しかし、

その足音には何か非人間的な不気味なものがあつた。

――看護婦さんだ――

そう思いたかったが、看護婦はあんな音はたてない、面会人が来る時間ではない。

今までに聞いた病院の怪談が、頭のなかでぐるぐる回るのが必死で抑えながら、闇のなかで体を硬くしていると。

ポウ…

目の端に光を見て、青年は顔を向ける。

サイドワゴンの上のクリスタルが、微かに光りはじめていた。

――どしええー……

追い打ちを掛けるような現象に、ドルフェスは完全に凍りつく。

光はだんだん強まり、部屋のなかを薄紫の光で満たす。

「あ…わ…」

廊下の足音は次第に近づき青年の恐怖をさらに煽る。

光は部屋中に溢れると、クリスタルの前に更に強い輝きが人型を形作りはじめた。一瞬強い閃光が走り、光は長い紫色のローブをまとった女の姿になる。

「ひ…?!」

もうだめだ。驚愕に見開いた目で、女の姿を見つめながら、青年はそう思った。

逃げだそうとしても膝が笑って動けない、震えが全身を走り、もうそんな醜態を恥じる気力さえ沸いてこなかった。

女がゆっくりと振り向く。

「わ…」

目が逢いませんように。と願いながら慌てて目を閉じる。

そんな青年の耳に、涼やかな声が響いてきた。

「D・D、怯えないで。ごめんなさい、驚かせてしまったわね」

幽霊に話しかけられてしまった、しかも自分の名前を知っている。

「私はシャドウ、貴方のお守りです」

何なんだいったい。名乗る幽霊なんて初めて聞いた。

「D・D、目を開いて、私を見て。私のことはご存じのはずです」
優しい声にうながされて、ドルフェスは恐る恐る目を開いた。紫の光に包まれて、女がこちらを見て微笑んでいる。その顔に見覚えがあった。

「あ…ダフネ…」

女はゆっくりと頷いた。クリスタルの中の彼女と同じ儂げな笑顔。
「ごめんなさい、こんな風に驚かせるつもりは無かったんですが、急がなければならなかったの。D・D、着替えてください、滉さんが待っています」

「え、警部が？」

「はい、下で貴方をお待ちしています。さあ急いで、魅羅ももう戻るでしょう」

その言葉に頷いて、急いでクローゼットに駆け寄った。現金なもので、相手が知っている顔となるとスムーズに体が動く。

慌てて寝巻を脱いでから、はたと気が付いてダフネを振り返った。彼女は気をきかせて後ろを向いていた。何となく安心して掛けてある服に手を伸ばす、怪物に裂かれてしまった服に代わって、センスのいいカジュアルスーツが入っていた。魅羅の見立てだろうか、サイズもぴったりで動きやすい。

手早く着替えを済ませてダフネの側に戻ると、彼女はじっとドアを見つめていた。

「ダフネさん」

ドルフェスが話しかけるとダフネは首を振った。

「私のことはシャドウと呼んでください。私はダフネの影です、本物はファントムと居るのをご覧になったでしょう？」

言いながらずっと右手を伸ばし、ドルフェスの手に触れようとした。しかし、その手は青年の手を突き抜けてしまう。

「?!」

「ほらね、これはホログラムです。ある意味で言えば、貴方が驚かされた通り、私は幽霊かもしれませんね」

そう言いながら寂しげな微笑みを浮かべて、シャドウは微かに肩をすくめてみせた。

光で形作られた彼女は、いつそう儚い雰囲気にもまれて、まさに精霊と呼びたいような清らかな美しさを発している。

夢の様に美しい、初めて3Dフォトを見たときの感動があらためて沸き上がってくる。3Dよりも大人びてはいるが、とてもじゃないが魅羅の様な大きな子どもがいるとは思えない。

我を忘れて見とれていたドルフェスに、シャドウははにかんだ様に少し頬を染めて後ろを指し示した。

「D・D、お手数ですが、クリスタルを持ってください」

「え、あ…はい」

言われるままに紫に輝いているクリスタルを持ち上げる。

シャドウは頷くと、緊張した面持ちでドアを見つめた。

未だ続く足音はドアのすぐ外から聞こえる。

カツ…ン…カツ…

止まった。

開閉スイッチを操作する音がしてドアが開く。

「やあ、ここに居たのか？」

立っていたのは滉だった。

「警部」

ほっとした。滉が微笑みながらこちらを見つめている。

「ダフネも一緒か？ 迎えにきた、さあ行こう」

そう言って手を差し出す。ドルフェスは促されるままに一歩踏み出した。シャドウの細い腕が目の前に伸ばされ、行く手を塞ぐ。

「？」

驚いてシャドウを見ると、彼女は口許だけで微笑みながら滉を見つめていた。

「滉さんが、私を、ダフネ、と呼ぶの？」

奇妙に区切りながらそう問い掛ける、滉は困ったように肩をすくめる。

「どういう事だ？ そんな事より早く行こう、ケット・シー達がつて来る」

手招きするように腕を動かして、滉が答える。シャドウはほほと小さく笑う。

「ケット・シーなら、もう来ているではありませんか」

「何？」

「貴方にしては、随分お粗末なお芝居ですね」

滉の顔が奇妙に歪む。

「変なことを言うなよ、ドルフェス早く行こう」

青年ははつと息を呑んだ、滉は一度もドルフェスと呼んだことは無い。それに、始めて滉の着ている服に気がついた。窓の下に居た滉は白いスーツだったのに、この滉は黒い服を着ている。

「違う、警部じゃない……」

思わず呟いて、必然的に達した結論に血が凍る。目の前に居る者の正体が判った。

「ケット・シー……」

力無く呟く声は、情け無いほど震えていた。

「私がついていますが、大丈夫」

優しくシャドウが力付ける。

滉が、いやケット・シーが降参したと言うように肩をすくめた。

「やれやれ、女王様には叶いませぬね。いかにも私はケット・シーですよ、津川警部の真似は私には下品すぎて上手く行きませぬね」

滉の顔のまま、唇の両端が奇妙に持ち上がりあの不気味な笑い顔を作りだす。端正な顔にはあまりにもそぐわない微笑みは、悪魔のそれを思わせた。

「滉さんの魂は、貴方よりもずっと高級よ」

シャドウは夫を擁護してかそんな反論をすると、おもむろにきつと強い目でケット・シーを見据えた。

「貴方は私を女王と呼びましたね、では女王として命じます、お下がりのさい、貴方は私の前に出られる様な者ではありません」

凜とした声でシャドウが言い放つ。

ケット・シーはV字の微笑みをさらに深めて首を振る。

「そうは参りません、私の主人はMr・ドルフェスを連れてくる事を望んでいます」

シャドウなど歯牙にもかけずに、ケット・シーはドルフェスに向かって歩きだそうとした。

不意に、その顔から不気味な笑いが消え、微かに両目が見開かれた。

「私はお下がりなさいと、言っただけです」

柔らかにシャドウが口を開く、その声には威厳すら感じられる。

「何をなさったのです？」

今まで見せたことのない獰猛な目つきをして、シャドウを睨む。

「体が動かない？ 後ろに下がることは出来ますよ。下がって立ち去りなさい。貴方は私の命令には逆らえないはずですよ」

シャドウの言葉に従うのは業腹なのか、ケット・シーはその場を動かない。相手を睨む双眸は、金褐色から青紫に変わり、シャドウの発する光を反射して更に濃い紫となって脈動している。

ドルフェスは固唾を呑んで、シャドウとケット・シーの対決を見守っていた。だがしだいに、握りしめたクリスタルが心地よい暖かさを発して、青年の気持ちを落ちつかせ、ドルフェスは何か武器があれば、シャドウの加勢ができると考えた。

ケット・シーに気づかれぬように目だけでベッドの回りを探している。

有った、自分の枕の下から、ネプチューンに渡された拳銃が覗いている。

手を伸ばせば十分に取れそうである、そう、後一歩だけ前に出て体で隠せば気がつかれるずに取れるはずだ。

青年はそうつと体をずらして枕元に近づいた。

ケット・シーは、シャドウを睨み据えながらやつと口を開いた。

「私に命令できるのは、私の主人のみ。他の方のお言葉には従いか

ねます」

苦々しく言い返すケット・シーの口調には、もう人をあざ笑うような余裕の響きは消えている。

何故なのか判らないが、ケット・シーは全身の自由を奪われていた。

前に進もうとしても指一本動かせない、体は意思に反して後ろへ下がろうとし、その場に留まっているだけで全ての筋肉が悲鳴を上げている。

激痛を伴う程の身体の抵抗に、ケット・シーはぎりりと奥歯を食いしばった。

一呼吸すること、体がコントロールを失い人型を保てなくなっていく。

背中の皮膚が変化し、ぞわぞわと黒い剛毛が立ち上がり、ゆつくりと体が膨張しはじめる。まるで調教師の前の猛獣だと思い、屈辱にかつと血が逆流する。

「なるほど、奥様はたいした魔法をお使いになれる…」

せめてもの腹いせに、そんな皮肉を言っただけ。

シャドウは可憐な笑顔で応酬する。

「聖なる結界とでも申しておきましょう、ドルフェスに指一本触れる事は許しません。さあ、お下がりがなさい！」

ぴしりと打ち下ろされる鞭の様に、シャドウの叱咤が激痛と共にケット・シーの身体に打ちつけられた。

必死で打開策を探していたケット・シーは、にやりと笑いながらゆつくりと後ずさりしはじめる。

「なるほど、私では女王様には役不足の様ですね。ではまた、後ほどお目どおりさせて戴きましょう…」

ドアがケット・シーの動きに合わせて閉まりはじめ、その姿を隠してゆく。

咄嗟に拳銃を掴み、閉まりかけたドアの隙間に数発撃ち込む。

「ククク…」

気味の悪い笑い声が聞こえ、ドアが閉まる。青年はドアに駆け寄り、壁に背を付けて外を伺った。

音が聞こえる。2カ月前、ゾルゲと共に聞いたあの呼吸音がドアの向こうから流れてくる。

背中を冷たいものが流れた。しかし、同時にゾルゲの顔が脳裏をかすめ、恐怖感は腹の底から湧きだしてくる怒りに取って代わる。何時も旨そうに煙草を燻らしていた相棒。

すぐにからかうくせに、何かあれば親身になって相談に乗ってくれた先輩。

そのゾルゲを、青年の手首諸共、ぶら下げた肉塊の様に切り裂いた化け物が外にいる。

青年はドアの開閉スイッチに手を延ばした。

「D・D、お待ちなさい」

シャドウの制止を無視して、スイッチを押す。

再びドアが開き、青年は引き金に掛けた指先に力を込めて、ドアに向き直った。

ドウ！！

「ギャンー！！」

銃声とともに激しい悲鳴が上がり、ドアの向こうに立っていた人影が、後ろに吹き飛んだ。

「え……！？」

ケット・シーを仕留めたと思って一歩踏みだしかけた青年は、倒れている人物を見て愕然がくぜんとした。

虚ろに目を見開き、胸を朱に染めて大の字になっていたのは、ケット・シーではなく看護婦だった。

「身代わり……」

慌てて回りを見回したが、非常灯が照らしだす廊下にはもうケツト・シーの姿はない。

「何てこった…」

青年はがつくりと肩を落とした。ろくに相手を確認せずに撃つために、罪もない人を殺してしまった。刑事として、いや、人としてではならない殺人の罪を侵したのだ。怒りに任せてとんでもないことをしかしてしまった。

青年は呆然としながら、ふらふらと看護婦の死体に歩み寄った。

「D・D！ 避けて！」

悲鳴の様なシャドウの叫びに、ドルフェスははっと我に返った。

「うわ！！」

いきなり目の前に延びてきた物に驚いて、とっさに後ろに転がる。それは今まで青年の頭が有ったところを虚しく切り裂いた。

転がった勢いで背面回転をして、どうにか四つん這いになりながら体勢を立て直す。その目に写ったものは、糸に引っ張られるように立ち上がる看護婦の姿だった。

「D・D！ 撃って！ 額を狙うのよ！！」

後ろからシャドウの声が飛ぶ。が、ドルフェスは口を開けて看護婦を凝視していた。

看護婦は虚ろな目のまま、ゆっくりと両手を振り上げる。その手は異様なほど延びており、五本の指からはその指よりも長い爪が、刃物の様に光を反射している。

「看護婦まで…」

「D・D！！」

ドルフェスはシャドウの声に弾かれて引き金を引いた、看護婦の後ろの非常灯が砕け散る。死美人となった看護婦の唇に不気味な微笑みが浮かぶ。

「Dragon Maker…」

またあの言葉だ。

何故自分をDragon Makerと呼び殺そうとする？

理不尽な事に対する腹立ちが沸き上がり、青年は今度は慎重に引き金を引いた。

「ギャウン!!」

悲鳴とともに、頭の半分が砕け散った看護婦が宙に弾け、再び仰向けに転がる。

四肢は激しく痙攣し、次第に小刻みとなり、床の上に長い腕がだらりと延びた。

「早く脱出しましょう」

縦膝のまま看護婦の死体を見つめている青年の横に、シャドウがふわりと現れる。

「シャドウさん…何故みんな出てこないんだ？ こんな大騒ぎしているのに…」

回りの病室のドアを見回して、シャドウは首をすくめた。

「物騒な事には、誰も近寄りたくは無いですよね？ 病気の時はなおさらです」

納得していない青年の視線を受けて、シャドウは悪戯っぽく微笑んだ。

「本当は、ドアがロックされていて出てこれないんです」

「え？」

「私がやりました。病院のシステムコンピュータにハッキングして、私たちが脱出するまで開きません。他の方々に御迷惑をかけてはいけませんものね」

少しはにかんだように笑う彼女は、魅羅の仕種と良く似ていた。

そういえば、初めて魅羅を見たとき、3Dのダフネを連想したのだ。

「!?! 魅羅さんは？」

「私たちの脱出路を作ってくれるはずだったんですけど、どうやら手こずっているようですね。大丈夫、あの子は自分の身は自分で守れる子です」

自信を持った母親の顔で、シャドウは娘に対する信頼を示してみせる。

「さあ、貴方が長居するだけ、迷惑を被る人が出てきます。脱出しましょう」

シャドウに促されて、ドルフェスは廊下の向こうに明るく浮かんでいるエレベーターホールを目指して歩きはじめた。

しかしシャドウは、ふわふわと目の前に浮かぶと首をふってみせる。

「階下にも、恐らくケット・シーの手が回っているはずです。こちらへ……」

片手で右の通路を示す、そのまま先導する様に動きだした。導かれるままドルフェスはシャドウについて歩きます。

前方には普通病棟と本館とを繋ぐ連絡通路が、窓から差し込む月明かりに明るく浮かんでみえた。

両面がガラス張りになった通路を、中程まで差しかけたとき、シャドウが腕を延ばしてドルフェスを制止した。

「どうしたんですか？」

答えはシャドウからではなく、本館の入口から発せられた。

「お待ち申し上げておりました。再び御目文字させて戴く光栄に浴し、恐悦至極に存じます、女王様」

ケット・シーが、暗い通路の入口で慇懃に頭を下げていた。人形は保ってはいたものの体は既に黒い毛で覆われ、先程よりも2倍の大きさになっている、そしてその顔は人のそれではなく獰猛な野獣そのものである。

足元に白っぽい物が在る、よく見るとそれは仰向けに転がされた魅羅だった。

「魅羅さん!？」

通路に黒髪を扇の様にひろげ、魅羅はぴくりとも動かない。

「貴方は猫と言うよりは狐みたいですね。お名前を変えられたら？ホックス・テイルなんてお似合いよ」

落ちつきはらった声でシャドウが皮肉を言う。

ケット・シーは楽しそうに喉で笑うと魅羅の腕を掴んで持ち上げ

た。

「う…ん」

ぶら下げられた魅羅は、薄く目を開いた。

「マザー…ごめん、しくじったわ…」

か細い声で詫げる娘に、シャドウは優しく首を振る。

「いいのよ魅羅。ケット・シー、それ以上私の娘に手を触れないで」

「お嬢様はお転婆が過ぎるのでお仕置きをさせて戴きました。Mr・ドルフェスとご一緒に、私の主人の所へ来て戴きましょう」

シャドウは口許に手を当ててホホツと上品な笑い声をもらした。

「嫁入り前の娘を、殿方と一緒に余所様のところへ行かせる、などということを許したら私が夫に叱られます」

ケット・シーはやれやれと首を振った。

「それではお嬢様にも、死んでいただく事にしましょう。津川警部の様に」

「まあ、滉さんは死んでしまったの？」

息もできないほど動揺している青年の横で、平然としたままシャドウが小首を傾げる。

「ええ、3日前にお美味しく心臓を頂かせて貰いました」

ドルフェスの脳裏に、心臓をえぐられた滉の姿がまざまざと浮かび上がった。しかしおかしい、それならさっき見た、白いスーツの滉は何だったんだ？

「そう、ところで、何故あなたの御主人は、ドルフェスが欲しいの？」

微塵も平静さを失わず、シャドウは予てからの疑問を口にした。

「彼をDragon Makerと呼び、殺して死体を持っていきたがっているのはどうして？」

「さあ、どうでしょう」

得意なお惚けで首を傾げる。

「答えなさい、貴方は知っているはずです」

シャドウの口調が厳しいものになった、そのとたん、ケット・シ

「は後ろに飛びすさつた。」

2、3m後ろに着地したケット・シーは、片手に魅羅の頭を持ち、片手で彼女の首に長い爪を押し当てる。

魅羅は苦悶に眉を寄せている。両腕はだらりと垂れ下がったまま奇妙な具合に歪み腫れ上がっている。ぶらぶらと揺れている両足もまた、同じように捻じれ、骨が砕かれていることを示していた。

「魅羅さん動けないんだ…」

ケット・シーの残虐な仕打ちに、青年は奥歯をかみしめた。心の底から憎悪が沸き上がってくる。

「Mr・ドルフェス、お嬢様の命と引換えに、貴方がこちらに来てください。奥様、貴方が私に御命令なさったらどうなるか、もうお判りでしょうね」

獣相は表情を表さないが、青紫の目が残忍な光をたたえて、楽しそうに脈動している。

「く…」

ドルフェスは拳銃を持ち直すと、ケット・シーに狙いを付けた、しかし魅羅が邪魔になって撃つことが出来ない。ほとんど初心者の中には、魅羅を避けてケット・シーの額に弾を撃ち込むような芸当は出来そうに無かった。諦めて銃を降ろし、シャドウを見る。

「シャドウさん、俺行きます。魅羅さんを見殺しには出来ない」

「駄目です」

にべもないシャドウの言葉は、青年にはひどく冷淡に聞こえた。

「しかし、このままでは魅羅さんは…」

ドルフェスの抗議には答えずに、シャドウはケット・シーに顔を向けた。

「ケット・シー、貴方の御主人はファントムではありませんね」

返事はない、ケット・シーは目だけでにやにや笑っている。

シャドウは優雅な物腰で会釈をして艶然と微笑んでみせた。

「今宵は貴方に会えて、とても有意義な夜でしたわ。でもそろそろお暇いたしましょう」

「ほう、お嬢様は見殺しですか？ 冷たい母上ですね」
ケット・シーの口調には、どこへ逃げれるものか、といった嘲りが滲み出ていた。

勿論ドルフェスも、魅羅を見捨てて逃げる気など毛頭無い。意を決してケット・シーの方へ歩きだした。

不意に後ろで異様な気配を感じ、とつさに振り向く。
不気味な光景が展開していた。

虚ろな目の看護婦たちが、先程の看護婦と同様に長く延びた腕と爪を振りかざして、ドルフェスの背後に迫って来る。

「うわー!!」

思わず悲鳴を上げてしまう。

「シャドウさん後ろ!!」

シャドウは前を見たまま頷いた。

「あちらもそうです」

「え？」

再び前を見て、またもや驚愕する。

魅羅をぶら下げたケット・シーの後ろに、やはり同じように変貌した看護婦たちが、わらわらと現れた。

「可哀相に… 私たちのせいですわ」

シャドウがため息まじりに呟いた。

その声を聞きながら、ドルフェスは看護婦たちを凝視していた。
知らない顔も多いが、明らかに知っている顔もある。以前入院したときに世話をしてくれた看護婦たちが、数人混じっていた。

「あの人達、知っている… 何でこんな事に」

「貴方を殺すために、ケット・シーがみんな化け猫にしまったんです。」

シャドウの言葉が終わらないうちに、看護婦たちは一斉に襲いかかってきた。

「Dragon Maker!!」

掛け声のようにあの名前を叫ぶ、前後から長い爪が振り下ろされ、

ドルフェスは死を覚悟した。

「ΔεΩ…」

シャドウが口のなかで何やら呟くと、彼女の身体の輝きが強さを増し、辺りに紫の光を投げかける。

「ギャウン!!」

看護婦の一人が、片腕を切り落とされてのたうち回った。他の看護婦たちも見えない壁にぶち当たって撥ね飛ばされる。

「D・D、その腕を拾ってください。気持ち悪いでしょうけど、大事なサンプルです」

訳が判らないまま、足元に転がっていたまだぴくぴくと痙攣している腕を持ち上げた。血の滴る節くれだった手は、とても女のものとは思えない。

あまりの気味悪さに直接触るのは気後れし、長い爪を指でつまむ。そこで、足元の異変に気がついた。

自分の足の下から、太い亀裂が放射状に広がっていく。

「何だ!？」

驚いて飛び上がり、今度は身体が宙に浮くことに驚いた。

「わ? わ!?! わー!」

身体が左右に漂うたびに、天井やガラス窓にひびが入っていく、どうやら自分の回りに球形のバリヤーが張られているらしかった。しかも重力まで遮断して。

「ほお…奥様の魔法ですね、今度はバリヤーですか」

感心したようにケット・シーが声を掛けた。無様に漂っているドルフェスの横で、シャドウがにつこりと微笑む。

「ええ、これが私の出口ですよ。魅羅、痛いでしょうけど、もう少しの辛抱よ、急行に乘る必要も無さそうよ」

暗号めいた言葉を優しく娘に言つと、シャドウはバリヤーを押すような仕種をした。ぐらりと球体が揺れ、ガラス諸共壁を破って外に飛びだした。

「シャドウ! 待ってくれ、俺は魅羅を!! うわー!!」

悲鳴とともに、ドルフェスは3階の窓から下に落下していった。

13 A・Visitor — 訪問者 — (後書き)

やっとダフネⅡシャドウの登場です。

彼女は……猫被ってますね（笑

14 Resuscitation——起死回生——（前書き）

前回はバイオハザード。さて今回は？

暗闇のなかに、男が立っている。

トレンチコートを肩に引っかけ、ダークスーツを着て、腕組みをしている。

皮肉な薄笑いを浮かべた顔は、何てこった、俺だ。

しかし何て冷たい笑い方だ、こんな顔を俺はしたことはない。はずだ。

そいつが口を開いた。

「女を助けたいんなら、まず、一人前に、自分の身を守れるようになってからにしてみたいもんだな」

なんだそりゃ？

「何時まで津川のお荷物になっているつもりだ？ 自分のことは自分でやれ。授業終わり」

そいつは言いたいだけ言うところりと踵を返して歩きだした。闇に身体が隠れていく。

ちよつと待て、戻ってこい。何が言いたいんだ、俺にどうしろって言うんだ。

お前は何者だ。ひょっとしてお前が元凶か？

お前が……

「Dragon Maker!!」

ドルフェスは、自分の声にはたと我に返った。横でシャドウが驚いたように見つめている。

「シャドウさん……」

惚けたように見つめ返すと、シャドウはくすつと笑った。

「驚いた、貴方も化け猫になったかと思いましたよ」

「え…？」

「でも、なるべく静かにね、ケット・シーに見つかったら、もう逃げ道は無くてよ」

やんわりとたしなめられて、ドルフェスは頭を掻いた。

「済みません」

素直に謝ってしまう。ドルフェス達は林のなかの茂みに身を潜めているところだった。もつとも、シャドウはホログラフなのだから、実際に隠れているのはドルフェス一人と言える。

「俺って呑気ですね、どうもうたた寝をしてみたいですよ」

自嘲し、本気で反省する。シャドウがケット・シーの後ろに滉が居たから、魅羅は大丈夫だといった言葉に安心して、滉との待ち合わせ場所である此処でうかうかと居眠りなどしてしまった。

「あんまり緊張しすぎると、人間って眠くなるらしいですよ。命の瀬戸際には特にね」

好意的な解釈で、シャドウは青年を慰めた。

「それに、ほんの一瞬だったみたい。頭がかくんと落ちて、すぐに Dragon Maker って」

どうやって投射しているのか、シャドウは茂みの木の葉のなかで光も発せずに浮かんでいる。

薄紫の髪や目、身体を木の葉が透けるその姿は、まるで本当の妖精のようだった。

この人が滉の妻であり、その上魅羅ともう一人閑吼という人の母親だというのは、実際に話していても信じられない。シャドウに見とれながら、ドルフェスは優しい言葉に感激した。

「本当に済みません。皆さん俺のために苦労しているのに…」

自責の念にかられてもう一度謝ると、シャドウは首を振った。

「貴方のためだけじゃないわ、いいえむしろ、貴方の災難は私達のせいかも知れない」

「え…？」

シャドウは寂しげな微笑みを浮かべて、ドルフェスを見つめた。

「この事件の発端は、ミドルアースで私が攫われたことに始まっていると、滉さんは考えています。ダフネが、と言ったほうが貴方には判りやすいかしら」

言いつつ小首を傾げる。

「自宅に奇怪な化け物が乱入してきたの、門の側で植木の手入れをしていたのよ。エゼルも間に合わないくらい門の側に居過ぎたんです。迂闊だったわ。そこでダフネの意識は途切れて、私がトレースしても見つかりません。滉さんはダフネの行方を探して、此処の異変を知ったの。そして…後は貴方が見聞きしたとおり」

かい摘みすぎた説明は、返ってドルフェスを混乱させた。

「警部は化け物の調査に、連合から派遣されて来たのでは無いんですか？」

「ええそうよ、連合のメインコンピュータのGENが、滉さんと魅羅を此処に派遣したんです。ダフネ誘拐の時、私が記録していた化け物たちが、ベースのバイオクリーチャーによく似ていたから。事件の関連性を認めるということになったの。ダフネはファントムと居るのが、確認されました。私としては全身鳥肌が立ちそうな事ですけどね」

滉達が来た理由は判った。でも、何だか混乱が納まらない。

「ダフネさんと貴方は違う人なんですか？」

「違うと言えば全く違うし、同じと言えば同一人物であると答えましょう。詳しいことはもつと安全な所へ行ってから、きちんとお話します、今はこれぐらいしか言えませんが」

きっぱりと言い渡されてしまうと、それ以上聞くことが出来なくなってしまった。

「判りました」

不承不承頷く、と、シャドウはくすくすと忍び笑いをもらした。

「貴方は素直ね。同じD・Dでも、こうまで違うのかしら」

「え…？ D・D？」

「貴方の災難の源、龍造寺龍也のもう一つの仇名です。彼の名前を平たく伸ばすと、Dragon Make Temple of
だから頭文字を取って、D・Dって光さんが付けたんです。私たち4人だけの特別の名前よ」

「光さん？」

「混さんの双子の妹。魅羅達はママって呼んでいるわ」

青年は、威勢のいい怒鳴り声を思い出した。

「ああ、あの人ですか。何だか凄く元気な人だった」

「ふふっ気が強くて優しく、ちよつと気まぐれだけど、根は真っ直ぐな人よ。貴方も一度会えばきっと好きになると思います。とても魅力的な人なの」

ドルフェスははたと気がついた。

「この拳銃、彼のですか？」

持っていた拳銃を見せると、シャドウはにっこりと頷いた。

「ええ、光さんが彼に送った銃です。ネプチューンのお守りだったはずだけど、きっと貴方を見て、彼が帰ってきた様な気になったのね。あの子はD・Dが大好きだったから…」

「え？ どういう事ですか？」

青年の問いに、シャドウはきょとんとした子供っぽい仕種で、まじまじと見つめ返してきた。

「もしかして…誰も貴方に言っていなかったのかしら？」

「何をです？」

「貴方が、龍造寺龍也に瓜二つだっていうこと」

シャドウの言葉に、ドルフェスはかくんと口を開けた。

「ええー！？」

ケット・シーは魅羅をぶら下げたまま、連絡通路に穿たれた大きな穴を憎々しげに見つめていた。

折角作った操り人形たちも、バリアーの衝撃でもう使い物にならない。

変形も解け、ただの骸となつて転がっている。

もつとも、始めの変化の時に、固体としての生命活動は停止していた。この女達はもとも素地が弱すぎた。

まあ、破裂しなかっただけマシというものだろう。

病院の周りに居るはずの部下達からいずれ連絡が有るだろうが、これで三度、ドルフェスを取り逃がしてしまった。主人は何というだろう。

ケット・シーは首をすくめた。ドルフェスを殺し、奴の首を持ち帰ることが至上命令なのだ、こんな津川の小娘などおまけにもなりはしない。

めんどくさい。せめてもの腹いせに、切り刻んで食っておこう。

津川滉の心臓は美味かったし身体によく馴染んだ、この娘もさぞ美味い血肉を持っているに違いない。

「ではお嬢様、私のなかで生きてもらいましょう」

残忍な喜びを感じながら、ケット・シーは喉を鳴らした。

「父親の許可なしに、んな事をしてもらっちゃあ困るぜ」

声に弾かれてケット・シーは振り返った。

信じられない人物がいる。

「津川警部……!？」

厭味な白い三つ揃いを着て、滉がにやにや笑いながら立っていた。

「ああそうさ、俺の心臓はお前さんの口に合ったみたいだな。魅羅まで食いたがる所を見ると、さぞ美味かったんだろう？」

「ええ確かに、あんなお美味しい心臓は、今までいただいたことは有りませんよ。またいただけたら夢のようです」

滉は笑いながら一歩踏み出した。

「そうか、俺もお前さんの心臓が欲しいぜ。もつとも、毛だらけの

心臓じゃあ食うこたあできねえな」

滉の右手が一閃し、ケット・シーの左頬を何かがかすった。

「!？」

鋭い痛みを感じて、頬が切り裂かれたことが判った。カランと金属が床に落ちる音がして、背後の床にメスが転がる。

「いい目つきだねえ、お前さんのそんな目が見たかったんだ」

憎悪に満ちたケット・シーの視線を真っ向から見据えながら、滉は冷たい笑いを更に深めた。

「私の顔に傷を作るとは……」

「許せねえってか？ 皆同じこと言いやがるな。ま、心配すんなって。毛だらけで、どこに怪我したかわかんねえよ」

言い終わらないうちに、再び右手がメスを飛ばし、今度は反対側の頬に痛みがはしる。

「ま、左右あつたほうがバランスいいだろ？」

ケット・シーはわなわなと体を振るわせた。

「お戯れが過ぎますね。お嬢様のお命は惜しくないのですか？」

脅し文句に滉はぽんと手を打った。

「さあそこだ、俺の女房は頭いいだろ？」

にやつと笑いもう一步前が出る。

「お前の主人とやらがファントムだったら、魅羅を楯に取るような無駄はさせない」

「なんですって？」

ケット・シーは間拔けた返事をした。

「それに、俺が死んだなんて思うはずが無い」

青紫の腫が探るように細められた。

「この間はお前のはつたりに見事ひっかかった。お蔭で心臓も新品さ。今夜はお前の番だ、大事な箱入り娘を傷物にしてくれた慰謝料、きっちり払ってもらうぜ」

アース人は殆ど上体を動かさずに、ゆっくりと間合いを詰めてくる。と、その足取りが一瞬にぶり、冷笑が強張った。明らかに傷を

追っているのを隠している。

得たりと、ケット・シーの目が細められた、恐らく自分がもぎ取った心臓を、クローン臓器を使つて移植し、その傷が塞がっていないのに違いない。

たいした生命力だが、それならば自分の敵ではない。ケット・シーは慎重に滉との距離を計りはじめた。

魅羅は両手足の激痛が、何処かに吸い取られるように消えてゆくを感じ、次第に意識を取り戻した。全体重が掛けられ、千切れそうな気がしていた首の痛みも、同時に消えていく。

感謝で涙が滲んだ。

唯一無二、この世に身体を分け合つて生まれてきた、閑吼の献身が痛みを取り除いてくれている。

津川家に生まれた双子は、触覚を繋げ合つ事が出来、互いの感触や痛みを自分の身体に移し替える力がある。今、閑吼は何百光年もの隔てをこえて全身に魅羅の痛みを引受け、彼女に活力を与えていた。

「貴方は不死身でいらつしやる」

ケット・シーの声が聞こえた。

魅羅は薄く目を開けた。薄暗い廊下に滉の白い姿が鮮やかに浮かび上がっている。その姿が左右に揺れるのは、ぶら下げられた自分がぶらぶらと揺れているせいだろう。

閑吼と感覚を交換している魅羅には、閑吼が横たわっているらしいベッドの感触しか感じられない、目だけで揺れる大きさを量り、彼女は肩と腰にそつと力を加え、ケット・シーに気付かれぬ様に身体を揺れを大きくしていった。

「本当に驚きましたよ、私の主人が、貴方には気をつけると言った意味がやっと判りました。地獄の門から戻ってくる方法を是非ともお教え願いたいものですな」

饒舌になったケット・シーとは反対に、もう滉は口を開かなかった。間合いが詰まった瞬間に、全精力を込めた一撃を仕掛ける、もはやそれ以上の余裕は無いに違いない。そしてその時が奴の最後だ。ケット・シーはぐるぐると喉を鳴らして、滉が近づいて来るのを待った。

滉の右手から、矢継ぎ早に数本のメスが飛ぶ、ケット・シーの獣の目は、待ち構えていた攻撃を正確に捉え、業と片足を浮かせると、身体をそらせてよけるのと同時に、猛然と突進してきた滉の胸目掛けて、泳がせた足を突き出した。

足は五本の爪を刃物の様に伸ばし、それ自体が一個の生き物の様にぐうつと伸びる。足の形は変わり、手のように指を広げて、つぎが当たっているはずのアース人の胸に飛び込んだ。

意外なことが一気に起こった。

もはや逃すまいとほくそ笑んだケット・シーは、爪を白いベストに弾かれた。にやり、と片頬を引き上げた滉が、その足を蹴り上げる。

バランスを崩したところに、無力にぶら下がっているだけと思っていた魅羅が、反動を利用してぐいと身体ごと横に揺れる。思わず魅羅に引つ張られる形になり、辛うじて踏みとどまったものの、魅羅を掴んだ腕を泳がせて無様に空を漕ぐ。

と、その時、それまで動かされなかった滉の左手が一閃し、風きり音と共に何か大きなものが、魅羅をつかんだ腕を持ち主から切り離す。

「ギヤウンー!!」

ケット・シーは激しい悲鳴を上げた。

背後の壁にガツキと大きな鉈なたが突き刺さる、滉はこれを背中に隠していたために上体を動かさなかったのだ。

手負いの獣は残った手で、まだ鉈を投げた体勢の滉に振り降ろす。滉は片腕でその爪をはたき飛ばし、そのまま後ろへ飛ぶと、両手を支柱にして宙返りを打った。

着地したとき、反動で壁まで転がっていた魅羅を庇うように、娘の肩に優しく手を乗せている。

こんな動きが怪我人に来るはずがなかった。

ケット・シーは大急ぎで黒い血が吹き出る傷口を皮膚の組織で覆いながら、凶悪な牙を覗かせて滉を睨み付けた。

不死身のアース人は、ちいつと大袈裟な舌打ちをしてみせた。

「外したか。頭狙ったのによ」

悔しげに眉を寄せたが、すぐに気を取り直したらしい。

「ま、いつか。茨城童子にしちゃあ毛深すぎるが、慰謝料の手付けとして、この腕をもらっとくぜ」

まだ蠢いている腕に、魅羅の小太刀を突き立てて滉が言う。

「訳の判らない事を…」

齒の間から呻くように声を絞り出す、滉は更々にんまりと笑った。

「猫に昔話を話しても無駄だねえ。三歩歩けば忘れるんだから」

「それを言うなら、三年飼っても三日で恩を忘れるでしょ？」

転がったまま魅羅が茶々をいれた。

「怪我人は黙つとれ。さて、お次は蚤だらけの首といこうか？」

ゆらりと立ち上がる、ケット・シーはじりじりと後づさった。

信じられないが、滉は怪我一つしていない。油断させるためにその振りをしたのだ、クローン？ まさか、自分ほどの生命体を作りだせた現在の科学力でも、記憶を完全に移植させたコピーを作る事は出来ない。印象の強いエポック的な事か、または常に同じ記憶を伝達させて言った場合のみだ。しかし、クローン以外にこんな短期間で、心臓をえぐられた身体を元に戻すことは考えられない。

「なるほど、貴方は本当に不死身だ…」

賛美ともとれる呟きがケット・シーの口から漏れる。

滉はゆつくりと首を振った。

「いいや、俺はもうとつくに死んでいる。言うなりやゾンビだ。一度死んだ人間が、二度も死ぬ訳やねえだろう？」

「2000年前に…ですか？」

滉の眉がぴんと跳ね上がる。

「ああ、それだ。お前の首を貰うのは後にして、竜造寺を殺した張本人の名前を聞かしてもらおう。ま、ちょっと見当は付いてきてるんだがね」

連絡通路に開いた穴から、ホウホウと鳥の鳴き声の様な声が響いてきた。

途端にケット・シーは身を翻して跳躍し、穴の端に三本足で着地する。

「上等な猫は、犬よりも主思いなものですよ。ではいずれまた、改めて」

言うなり、黒い獣は穴に身を投じた。微かに草を踏む音がして、猫が地面に降り立った事を知らせる。

「ちっ!!」

激しく舌打ちした滉は、魅羅を抱き上げると、小太刀に刺したままのケット・シーの腕を、無造作に娘の膝に乗せる。

「汚い!!」

痛みが無くなって元気なものの、骨の碎かれた両手足の動かせない魅羅は、顔をしかめて父親を睨み付ける。

「服ぐらい買ってやるから我慢しな。大事なサンプルだ。それより、どうもD・Dが見つかったらしい、急ぐぜ」

「うん」

「よし、いい子だ」

素直に頷く魅羅の頬に軽くキスすると、滉は人一人抱き上げているとは思えない速さで廊下を走りだした。

*

かくんと開かれたドルフェスの顎は、外れたんではないかと思う

くらい長い間、開けっ放しだった。

シャドウは口に指を当てて回りを見回している。

「しー、声大きいわ」

「すっ…すびばせん…でも…俺が…？」

どうにか答えたものの、停止した思考回路はそう簡単には動かない。

「俺が？」

青年は馬鹿みたいに繰り返した。シャドウはにっこりと頷く。

「ええ、初めて見たとき、私本当にびっくりしました。警察署でネブチューンに乗ってきた時よ、クリスタルで見てたんです」

「はあ…」

「それに、滉さんがD・Dって呼んでるし、彼が生き返ってきたかと思いました」

「はあ…」

「すぐに違う事は判りましたけど、貴方を見たら、光さんも閑吼も、きつとびっくりするでしょうね」

楽しそうにくすくすと笑うシャドウを、ドルフェスは口を開けたままぼんやりと眺めていた。

そう言われてみると、思い当たる節がある。署長室での滉は、自分の顔を穴が開くほど見つめていた。

その後の龍造寺を知っているかという問いも、やっと意味が判った。

人間モドキとのカーチェイスで、わめく自分に何で渋い顔をしたかも理解できた。

それに魅羅は、初めて会ったとき、D・Mと言って抱きついてきたではないか。

あれはそういうことだったのだ。

魅羅の言う男のなかの男、滉の親友、連合警察機構の生みの親。それが自分と同じ顔をしていた…？

同じ顔でふと思い出した。あの夢。

「シャドウさん…そのD・Dってトレンチコートにダークスーツなんて着てました？」

はたして彼女はにっこりと頷いた。

「ええ、彼のトレードマーク。滉さんは古臭いつて散々腐していたけど、D・Dは大人の男の着るものだっていって、知らんぷりしてたわ」

「俺、その人見ました」

「え？」

意外な言葉に、シャドウの目が見開かれた。

「さつき、うたた寝したとき、夢で…」

ドルフェスは自分の言った言葉に自信無く首を振った。

「まさかね…俺、彼の事全然知らないのに…」

「彼、何か言いました？」

「何時まで津川のお荷物になっている、自分のことは自分でやれ、と…」

ドルフェスを見つめながら、シャドウは頷いた。

「間違いなくD・Dだわ、同じ顔のよしみで貴方に助言してくれたんですね」

単純に納得して、シャドウはくすくすと笑った。魅羅の脳天気は母親譲りに違いない。

「それにしても、何てD・Dらしい言い方かしら」

「そうなんですか？」

「ええ、相手を自殺させたいのじゃ無いかと思うくらい、きつい皮肉を言う人でした。私もよく、とろいとか地味だとかって言われて泣かされたわ。アレクスもよくしょんぼりしてたし」

「え…？」

魅羅に聞いていたのと、何だかイメージが違う。

「気に入った相手には特に言うの、滉さんを女つたらしの脳天気とか、後先見ない猪男なんてね」

最高のパートナーの台詞とは思えない。

シャドウは懐かしそうに彼の話を始めた。

魅羅の話を聞くかぎりでは、滉の信頼に行動で答える、寡黙で冷静な男を想像していたが、けらけらと笑いながらシャドウの話す竜造寺龍也は、とんでもない皮肉屋で、愛情表現の代わりに厭味を言い、確かに滉と共に平気で危険をくぐり抜けるが、その前に必ず釘を刺す。どちらかと言うと、一言多いタイプの男だった。

しかも、滉と龍也の言い合いは幼稚園の園児達の口喧嘩の様だったと言われ、初めのイメージはがらがらと音を立てて崩れていった。頭を抱える青年の前で呑気に笑っていたシャドウは、ふと笑いを止めて素早く回りに目を走らせた。

「D・Dに言われたとおり、私ってとろいわ」

自嘲気味に呟くシャドウのただならぬ様子に、ドルフェスははつとした。

ホウホウ…

遠くで気味の悪い鳥の鳴き声が響く。回りの空気がピンと張り詰めた。

何かが居る。

闇のなかで、得体の知れない物が蠢いている気配が伝わってくる。

「こんなに近づくまで気がつかないなんて…」

シャドウの声が、闇に吸い込まれるように小さくなった。

青年は拳銃を持ち直し、冷静さを保つためにゆっくりと息を吸った。

「D・D、相手は2体。前と後ろ、左へ逃げて、ゆっくりと。バリアーで貴方の気配を消します」

シャドウの囁きに頷き、そっと身体を移動させる。藪の枝に触らないように気をつけて木の幹を回り込む、藪を抜けると視界が開け

だが、逆に身を隠す物が何もないことに恐怖を感じた。

「駐車場はどっち？」

シャドウの姿が、少し離れた木立のなかに現れ、右の方を指し示す。意を決して駆けだそうとすると、片方の手を突き出して、ゆっくりに、というジェスチャーをした。

月明かりの中を、身をさらして這うように進むのは、かなり勇気がいった。鼓動の早まる胸を抑えながら、どうにかシャドウのところにまでたどり着くと、彼女はふっと掻き消えてしまった

「シャドウさん！？」

「クリスタルの内蔵エネルギー温存のため、映像を切りました。大丈夫、クリスタルを持っているかぎり、私は一緒です」

静かな声が耳元で囁く。

「慎重にネプチューンまで移動してください。彼らは貴方を見つけています。目の前に現れたら撃つて、ただし乱射はしないで、弾も残り少ないわ」

一緒に居るとは言っても、姿が見えると見えないとでは大違いである。ドルフェスは暗闇のなかに立ち尽くして、沸き上がる恐怖感と必死で戦っていた。

どうしていいか判らなくなり、しんと静まり返った林のなかを見回して途方に暮れてしまう。

——自分のことは自分でやれ。授業終わり——

竜造寺龍也の、馬鹿にした様な冷笑が頭に浮かぶ。

——畜生——

ドルフェスはきつく唇を噛んだ。

滯に助けられ、魅羅に庇われ、今はシャドウに守られている。確かに津川のお荷物だと思う。

もう少ししっかりしなくては。

青年は長く息を吐きだすと、身体を低くして林のなかを歩きだした。

敵が自分を見つけているのならば、必ず何処から襲ってくる。

五感に神経を集中させて、一步一步、月明かりがまだらに影を落とす中を進んで行く。

ホウホウ…

鳥の聲がした、心なしか近づいている。

拳銃を握る手に、じつとりと汗がにじむ。あせつては駄目だ。ドルフェスは自分に言い聞かせた。どんな時でも、慌てる奴から死んでゆく。

——やばい時は、下っ腹にどーんと力を入れるんだ。肝心なのはな、俺はやれるって、信じることだ——

新米の時、ゾルゲかそう教えてくれた。ドルフェスは口を一文字に結び、ぐいつと前を睨み付ける。

来るなら来い、ゾルゲの仇を討ってやる。青年は心のなかで何度もそう繰り返した。

前方の木立がまばらになり、木々の間から駐車場が見えた。広い駐車場の中程に、懐かしいネプチューンの真っ赤な姿が在る。

もう少しだ。青年の足が我知らず早まった時。

ガササ…

右側の茂みが微かに揺れた。

どきりとして足を止める。そつと様子を伺うがもう音はしない。冷や汗を拭って、再び歩きだす。

ガサ…

今度は左側。思わず身体がすくみ、足が止まる。しかし、やはりしんとした林が広がっているばかり。頭上で、あの不気味な鳥が啼いている。

——猫に狙われた鼠——

ケット・シーを思い出しながら、そんな気がしてきた。

鼠だつて追い詰められれば猫を噛む。脳天に風穴を開けてやる。

ドルフェスは齒を食いしばり拳銃を持つ手に力を込めた。

ザザ！！

不意に頭上の梢が鳴る。上から殺気を感じたと思ったとき、無意

識に身体が動き、青年は転がるように前に駆けだした。

後ろで虚しく地面を掴む気配がした。振り向くと、青白い塊がうずくまっている。

「ひ…」

思わず悲鳴が漏れる、むくりと起き上がったそれは、3カ月前、ゾルゲの身体と青年の手首を切り裂いた白い死神だった。

何も考えないうちに腕が上がる。続けざまに3発、しかし当たらない。白い死神は青紫に光る目をあざ笑うように細めた。

「くそ!!!」

トリガーハッピーになり掛けるのをかろうじて自制し、ドルフェスは死神に背を向けて走りはじめた。

しかし、捕食動物の前からいきなり逃げだすのは、してはならないことの第一項目である。死神は、走りだした無力な獲物に向かって猛然と襲いかかる。

背後に迫る気配に青年が振り向いたときには、ぐいと伸び上がった死神の爪が、頭上から振り下ろされんばかりだった。

「うわぁ!!!」

叫んだ途端足がもつれて、ドルフェスは草むらに転がった。幸いにもそれで死神の爪を避けた形となり、死の爪は再び地面を引っかくだけに終わる。

転がりついでに茂みへ逃げ込んだドルフェスは、そのまま木立を楯にして走りだす。木々の間からライトの光とエンジン音が聞こえ、ネプチューンの遠吠えが高らかに響きわたった。

駐車場の低い囲みにたどりつきかけた時、目の前に死神が飛び下りた。拳銃を構えるより早く、赤い光線が走り、とっさに飛び退けた白い毛先を微かに焼いて、ドルフェスの後ろの木が燃え上がった。ネプチューンお得意のブラスター攻撃である。

「ネプチューン、俺まで殺す気か!」

倒れてきた木の幹を避けて、どうにか囲いを乗り越えながら、ドルフェスは折角の救い主に不満を表明する。

詫びのつもりか、鼻声でくくん啼きながら、ネプチューンが走ってくる。もう大丈夫だ、青年は安堵のため息をついた。が、互いに走り寄る車と人との間に、もう一匹灰色の影が走り出る。

「!?」

ネプチューンのライトを逆光で受けて、それは覆いかぶさるように伸び上がる。

「D・D、車の陰に!」

シャドウの声が耳元で叫ぶ。指示のまま、ドルフェスは2列に駐車された車の列に飛び込んだ。

ドン! と鈍い音がして、ネプチューンの急ブレーキが響く。目の端で撥ね飛ばされた灰色の塊が一端地を転がって、バックでひき殺そうとするネプチューンの車輪を逃れ、影が走る様に向こう側の列に飛び込むのが見えた。

死神といい、灰色の影といい、どちらも野性動物そのままの敏捷性と瞬発力を持っている。カイマンや看護婦達とは段違いに素早かった。

カン!

金属同士がぶつかる音が耳元でした。

嫌な予感を感じて目を上げる、はたして、すぐ側のボンネットに、死神が背を丸めて飛び掛からんとする瞬間だった。

「げ!?!」

だが死神はひらりと車の陰に飛んだ。追うように光線が走り、遙か向こうの柵を吹き飛ばす。

車の間に入ってこられないネプチューンは、ぐるぐると列の回りを走りながら、ドルフェスの側に近寄る化物達をブラスターで牽制していた。

「早くネプの所に行かなきゃ、被害が大きくなる」

外れ弾が柵を壊したり木を燃やしたりしている有り様を見ながら、青年は列の切れ目をめざして走りだした。

ドルフェスのスピードに合わせて、ネプチューンが併走する。ド

アが開かれ、飛び込めと言わんばかりに吠えたてた。

「よし！」

一台分の空間が開けた。ドルフェスがネプチューンに駆け寄る。再びその間に灰色の影が飛び込んでくる。

今度はネプチューンも容赦しなかった。まだ空中にいる奴の身体にブラスターをたたき込む。悲鳴も上げずに黒こげとなった灰色の獣は、褸屑みたいに車の陰に落ちる。ドルフェスは、ふう、と息をついた。途端、車が爆発した。

「うわー!!!」

爆風に飛ばされたドルフェスは、次々に誘爆していく車に撥ね飛ばされ、病院の正面ロータリーの入口まで転がり出た。

ようやく立ち上がり、傷一つ無いことに驚いたが、身体が薄紫に光っているのに気がつき、シャドウに感謝した。しかし、回りを見ると、自分だけのささやかな幸せに浸っている時では無いのが判る。「なんてこった……」

真っ赤な火柱の立ちのぼる駐車場を、しばらく呆然と眺める。

ネプチューンの姿は見えない、あの炎のなかで、爆発に巻き込まれてしまったのだろうか？

「ネプチューン!!!」

呼べど応えは無い。

「そんな……」

ドルフェスはふらふらと炎のほうへ歩きだした。その前に、炎を背にして、死神が立ち上がった。

「!？」

青紫の目が赤い炎よりも鮮やかに浮き上がり、きらりと火柱を反射する爪がドルフェスの頭上高く振り上げられる。

——来るな!——

声にならない叫びを上げて、拳銃が火を噴く。

「ウギヤーウー!!!」

弾は確かに死神の腹に吸い込まれ、青白く光る毛皮に黒い染みが

広がった、だが、死神の腕はその速度を変えること無く、青年の脳天目掛けて振り下ろされた。

——今度こそ、もう駄目だ——

ドルフェスは絶望した。

その瞬間、辺りが光に包まれた。

紫の光球に弾き飛ばされて、死神は一端大地に叩きつけられ、次に脱兎の如く近くの木立へ逃げ込んでいく。

「今のうちです。道路に逃げて。ネプチューンは無事です、回り込んで道路で貴方を拾います」

シャドウの声に励まされて、ドルフェスは転がるように走りだした。

白い影が木立の枝を、道路に向かって飛び移りながら移動しているのがちらとかいま見える。

頭の中はもう真っ白だった。

ただ前に向かって走る。それだけでさえ、何故そうしているのか判らなくなってきた。

つんのめりながら道路に飛び出ると、目の前に車が止まった。ドアが開き、運転席からサブシートに身を乗り出して、女の白い顔が突き出される。

「D・D！ これは何事！？」

エミーだった。

長い放浪の果てに、初めて懐かしい顔に出逢ったような気がして、ドルフェスは身体中の力が抜け、危うくその場にへたりこむところだった。

「エミー……」

この際相手が天敵のエミーであっても、ケット・シー達に比べれば砂漠のオアシス並に嬉しく思える。

「何なのよ、この騒ぎ」

エミーに説明しようと口を開きかけた時、ドアミラーに写る背後の風景に黒い大きな影が見えた。

——ケット・シー——

青年は無言のまま、エミーを押し込む様にして車に乗り込んだ。

「出せ！！ 逃げるんだエミー！！」

いきなり乗り込んできた闖入者に、エミーは褐色の瞳をつり上げて睨み付ける。

「説明を聞くまで動かないわ！」

常識に則って叩きつけられる抗議の声など、異常な世界からの逃亡者には頬に当たる風程の意味もない。ドルフェスは無言で窓を開け、迫り来る黒い影に数発たたき込んだ。

「くそお！」

当たっているはずなのに、ケット・シーの動きは変わらない。

「何それ！？ 拳銃？ どうしたのあんた！？」

エミーの声が跳ね上がった。ドルフェスは振り返りもせず怒鳴る。

「早く出せ！ 死にたいのか！！」

青年の剣幕に思わず氣勢を削がれたエミーは、泥と草の汁に汚れた背中を睨み付けて、乱暴にアクセルを踏み込む。

運転手の気持ちを素直に表して、車はすさまじい勢いで夜の街に走りだした。

14 Resuscitation——起死回生——（後書き）

多分。ダーシュオブケルベロス（ゲームしていないのであてずっぽうです）>br<Angel Cryのキャラがちらちら出てます。名前だけ（笑

15 A S U S P I C I O N 疑惑——（前書き）

矛盾した、二人の滉

火柱に赤々と照らしだされ、夜空に浮かび上がった病院の光景が、市街の建物の陰に見えなくなると、ドルフェスは自分の両肩を抱きしめてがたがたと震えだした。

血の気の失せた顔からどつと汗が吹き出し、真つ白な唇から、がちがちと歯のぶつかり合う音が聞こえる。

エミーは傍若無人に怒鳴ったかと思えば、みつとも無く怯える青年の、常軌を逸した態度に眉を寄せた。

「さあ、そろそろ説明って言葉を思い出して欲しいわね」
なるべく冷たく聞えるように、青年に向かって言い放つ。

「せ…つめ…い？　してほしいのはこつちだよ。何だってあんな化物に追いかけ回されなくちゃいけないんだ？　何で殺されるんだ？

あいつらは何なんだ？」

関を切ったように、ドルフェスは疑問を並べ立てる。

「俺が何したって言うんだ？　ただDragon Makerに似ているってのが理由なのか？　あいつは何をやったんだ」

「Dragon Makerって何よ？」

「龍造寺竜也だ、銀河警察機構の創始者だよ！　あいつの所為で俺は殺されるんだ！！　教えてくれよ！　何でなんだ！！」

逆上してわめく青年に、エミーも負けずに怒鳴り返す。

「あたしに怒鳴らないでよ！　知るわけないでしょ！」

ドルフェスは血走った目をエミーに向けた。前を睨み付けて、乱暴にハンドルを切る女の白い横顔が、対向車のライトに浮かび上がる。

青年は疲れた目を閉じた。

シートに身体を沈めると、自分でもおかしいくらい震えた吐息がもれる。

「ごめん……」

やっとそれだけ言うと、まだ握り締めていた拳銃を膝の上に置こうとした。だが、白くなるほど力を入れ続けた指はすっかり固まってしまつて、拳銃は身体の一部のように手に吸いついて離れなかった。

苦勞して指を引き剥がし、やっと自由になつたと実感した時、数台の消防車が、病院に向かって爆走して行くのとすれ違つた。

病院の惨状を思い出し、混達は無事に脱出したのか急に心配になつた。

そつといえば、先程からシャドウは何も言わない。落としたかと不安になり、ポケットをまさぐると、冷たく固い感触を見つけて安心した。

いや待て、冷たい？

ドルフェスは慌ててクリスタルを取り出した。透明な水晶体は走り去る街の灯りを反射してきらきらと光るが、もう薄紫の光は何処にもない。

「シャドウさん！？ シャドウさん！！」

目の前が真つ暗になつた。

たつた一つの頼みの綱が無くなつてしまつた。クリスタルは内蔵エネルギーの全てを遣い果たしてしまつたのだろうか？

「シャドウ……」

呆然とクリスタルを手に持つて、ドルフェスはシャドウの名を繰り返した。

「何よあんだ。どつかおかしいんじゃない？」

いきなりクリスタルを掴んで叫びだした青年に、エミーの冷たい声が浴びせられる。

「それ何？ 子供みたいにそんなの持つて何言つてんのよ」

ドルフェスは、エミーの声など耳に入らないかのように、俯いて

手の中のクリスタルを見つめている。

エミーは唇を尖らせた。

「そ、あたしには怒鳴る以外何も言いたくないわけね。よく判ったわ」

邪魔な前の車を、邪険にハンドルを切って追い越す。やっと顔を上げたドルフェスの目に入ったのは、目を怒らせて前方を睨む同僚。「ごめん、エミー。助けてくれたのに、悪かった」

素直な詫びの言葉を聞いて、エミーはアクセルを緩めた。

「別に、助けようと思ってたんじゃ無いわ。あんたが勝手に乗り込んできたんじゃない」

言葉のわりに、声音は柔らかになっている。

「君は、どうしてあそこに？」

ぼんやりと聞き返してくるドルフェスに、エミーは苦笑をもらした。

「あんた聞いてばっかりね。あたし、チェリー・リーと一緒に、近くのカフェテリアで休憩してたのよ、そしたらいきなりドカーンでしょ？ 何かと飛んできたのよ」

少し表情を和らげて、エミーはドルフェスに答えた。

「チェリー・リーは？」

2by4のシートには、二人の他はいない。

「置いてきたわ、遅いから」

あつさりと言い捨てるエミーの言葉に、ドルフェスは彼女の相棒の苦勞を思いやった。

「さあ、今度はあたしの聞くことに答えてよ。あの爆発、あんたがやったの？」

ドルフェスは、少し考えてから渋々と頷いた。

「原因は俺だろうな。ネプチューンが、化物から俺を守るためにやったんだ。いや、あの灰色の奴、俺を殺すため爆弾を仕込んでいたのかも……」

エミーは煙草を取り出して火を付けた、紫煙が車内にゆっくりと広

がる。

「さつきからずっと、殺されるって言うてるわね、どういうこと？」
「判らない…あいつは主人の命令で俺を殺すとした言わないんだ…」
再び震えだしたドルフェスの声に、エミーは慌てて質問を被せた。
「あんたのお大事の検事さんはどうしたのよ。守ってくれなかったの？」

つい声が刺々しくなる。ドルフェスは首を振った。

「魅羅さんは、あいつにやられて怪我をした。きっと警部が助けたと思う…」

そうあつてほしい、ドルフェスは強く願った。魅羅の明るい笑顔がもう二度と見られなくなるなんて、耐えられない気がする。

エミーは煙とともに含み笑いを吐きだした。

「ふふっ津川けーぶさんね、あの二人、できてるって噂あるの知ってる？」

「え？」

虚を突かれてドルフェスはぽかんとエミーの横顔を眺めた。

「あたしの又従兄弟、連合司法局にいるの。司法局じゃ有名なわよ、どんな時でも必ず一緒に派遣されるんですって。津川警部は女好きだから、もうただの仲じゃ無いだろうって」

聞いた途端頭に浮かんだのは、いわれのない近親相姦に腹を立てている魅羅の顔だった。彼女はきつと、如何に署長を慕っているか、力説することだろう。

ドルフェスは吹き出してしまった。

一旦笑いだすと、疲れた神経はなかなか笑いを止めてくれない。
ヒステリックに笑い転げるドルフェスを、失恋のショックと取ったエミーは、勝ち誇ったような微笑みを浮かべて憐れみの言葉を投げた。

「可哀相に、遊ばれてたのね」

笑いすぎた青年は、酸素不足で咳き込みながら、手と首を同時に振った。

「違う…違うよ…。警部は魅羅さんにだけは、絶対そんな事するはずがない」

「随分信じてるのね」

「信じるも何も…はは…二人は実の親子だもの…」

「何ですって？」

エミーはドルフェスの顔をまじまじと見つめた。

「エミー、前！」

前の車に追突しそうになり、慌ててハンドルを切る。

「騙されてるんでしょ、二人とも名前どころか経歴も生まれも違うのよ」

「魅羅さんは子供のころ養子に出されたんだ。お兄さんと一緒に、龍造寺龍也の所にね。本人にも聞いたし、俺は魅羅さんの母親からも聞いた。間違いないよ」

エミーはしばらく何も言わなかった。ドルフェスは手のなかのクリスタルに目を落とした。

二人の子持ちとは思えない美少女がクリスタルの中で笑っている。混の宝物。

そんな気がしてそっとポケットに戻る。

「ねえD・D、あんた龍造寺竜也って言ってたわね」

「ああ、どうも俺は、その人の所為で殺されかけてるらしい」

溜め息まじりにドルフェスは頷いた。エミーの声が氷水のように冷たくなる。

「あんた馬鹿じゃないの？」

「何だよいきなり」

むっとして目を上げた青年は、横目で睨み付けるエミーの目とぶつかった。

「警察学校で何習ってきたのよ。歴史の教科書にだって乗ってるわ」

「何が？」

「竜造寺龍也よ、銀河連合がまだ3連合って言われてた創立期に、司法局と警察機構の原型を造った人物よ。200年前の話だわ」

ドルフェスは頭を何かで強く殴られた様な気がした。

言われてみれば確かにそうだ。知識として埋もれていたものが、ドルフェスの頭のなかを駆け回った。

今まで魅羅達の身近すぎるDragon Makerの話ばかりを聞いていて、歴史上の人物である龍造寺竜也とは全くつながらなかったのだ。

言葉を失って動揺している青年に、エミーは追い打ちを掛ける。

「それにあの二人組、物凄く変よ。あたし昼間、死体の始末をしたって言ったでしょ？ あれ本当よこの目で見たんだから。2日前の夜中、あの真っ赤な車が走ってたの、あんた入院したって聞いてたし、見たことのない女が乗ってるから変だと思ってつけたのよ。そうしたら人気のない郊外まで出てトランクから何か引きずり出した。人間だったわ、ライトに照らされた顔は、間違いなく津川警部だった。あんなハンサム忘れっこないわ。あの女、死体にキスしてたわよ。それから車に戻って、とんでもないものがボンネットから出てきたわ」

レーザーブラスターの事に違いはない、ドルフェスはぼんやり考えた。

「あの車も変ね、犬みたいな警笛を鳴らして、レーザー光線で死体を蒸発させたのよ。ぼうつとしている間に、車は行っちゃうし、証拠は無くなってるし。第一見たものが信じられなかったわ。ところが、今日、署長が津川警部から連絡があったって言うたでしょ？ はじめはあの女の小細工だと思ってた。でも帰りに署長に聞いたら、間違いなく津川警部の声だったって言うじゃない、署長の電話には声紋分析機が付いているでしょ？ 小細工は通用しないのよじやあ、あの死体は何？ 訳が判なくなっちゃったわ。だからあたし、又従兄弟に連絡して調べたの。彼は司法局の人事課にいるから、連邦のメインバンクから職員の経歴を引き出せるのよ。そこで、変なデーターまで引っ張り出しちゃったのよ」

煙草を揉み消し、怪談話でもするように、エミーは声を落として

言葉を続ける。

「津川滉と龍造寺魅羅の経歴は、人事課が一寸引つ張りだして見る程度には、十分な位の薄っぺらさだったわ。でもね、同じ名前の、もつと豊富な経歴の持ち主が、200年前に居たのよ」

*

「なあに、あの女。D・Dと心中でもするつもり？ 警官ならもつと安全運転しなさいよ」

走り去るエミーの車を睨み付けて、魅羅は滉の腕に抱かれたまま憤慨していた。

「D・Dが走らせてるんだろ、ケット・シーに追いかけてるんだ仕方ないさ」

滉はロータリーの入口に走り出て、ネプチューンが走ってくる姿を見つめながら、腕のなかの娘を宥める。

ネプチューンは炎を回り込んで滉達の所へ来ると、済まなそうに鼻を鳴らした。ドルフェスを危険なまま街に飛びださせてしまったのは、自分のせいだと言っているような態度である。

「ネプチューン、気にすんな。取り敢えず追跡だ。シャドウ、位置は判るか？ 教えてくれ」

猛然と走りだしたネプチューンのスクリーンに、シャドウの姿が映し出される。

「現在東北東に直進中。ごめんなさい、私がしっかりしていなかったからこんな事になってしまったわ」

滉は恋女房に苦笑いで答えた。

「いいよ、元はと言えば俺が余計なことしてたから悪いんだ」

「そうよ、みんな滉が悪いのよ」

サブ・シートに横になった魅羅が息巻いた。

「何言ってやがる、お前のヘマも原因だ。何だってケット・シーなんぞにそこまでやられちゃったんだ？ お前らしくもない」

叱責する父親に、魅羅は白い目を向けた。

「滉の所為よ、看護婦抱えて出ていく滉を見て、てつきりケット・シーだと思ったの。それで、次に逢った滉に不用意に近づいてったら、そっちがケット・シーじゃない。あつと言う間に捕まったわ」

魅羅の首筋に鎮痛剤を打ちながら、滉は鼻でせせら笑った。

「ふん、お前がアホだ。光の言った事を忘れたのか？ たとえ俺に会ってもうかうかと信用すんなってな。親の言うことは聞くもんだ馬鹿娘。お蔭で閑吼がいらん苦労をする」

添え木を当てられて、応急処置を受ける魅羅は、不満下に頬を膨らませた。

「自分の事は棚に上げてよく言うわ。元々、滉が一番初めにやられたんじゃないの」

都合の悪いことは知らん振りして、滉は手早く魅羅の骨を継いでゆく。痛みは閑吼まかせの魅羅は、ジト目で滉の顔を睨んでいた。

「ところで、何で看護婦なんか抱えてたのよ」

滉はふつと苦笑した。

「ケット・シーが看護婦たちを捕まえてるのを見てね、可哀相だから一人くらい助けてやろうと思ってさ」

「ふうん…」

疑り深く滉をみつめて、魅羅はにやつと笑った。

「滉、口紅が付いてるわ」

「おう、そうか？」

気楽に答えて滉は口を拭う。魅羅の目が大きく見開かれる。

「あつきれたあ、マザーの居るところでよく出来るわね」

大げさに驚いてみせる魅羅に、滉はにやりと笑い返した。

「これはお駄賃さ、何せ命を助けてやったんだ。ガキのころお手伝いをしたら、おやつとおこずかいを貰ったろう？ 同じこった」

「よく言うわ、私が普通の娘なら、お父さん不潔！ お母さんが可哀相！ で親子断絶よ」

スクリーンから、シャドウの忍び笑いが聞こえる。

「ほれみろ、お母さんも公認だ。第一普通の娘なんぞ、昔も今も持った覚えはない。親孝行な元氣者なら、二人持つてるがね」

悪びれもせずに滉に言い返されて、魅羅は一寸言葉に詰まった。しかし、このまま引き下がるのは業腹だ。

「一つ伺いますけど。それがおやつなら、ダフネは何？」

滉が即答する。

「当然、主食」

完全に魅羅の負けだった。

おとなしく口を閉めた魅羅は、手足をぐるぐる巻きにされ、関節部に補助器具のパワーリストを取り付けてもらってやっと動けるようになってきた。

しかし感覚はまだ閑吼と交換されたままである。

「滉、ママ達と交信できる？ 私はもう大丈夫だって、閑吼に言いたい」

「魅羅、ナイスタイミングね。光さんからの通信が入っています」
シャドウの声と共に、呼びだし音が響く。

『THE MOONより、BIG SUNへ。THE MOONより、BIG SUNへ、滉聞こえる？』

「おう、光かあ」

滉がのんびりと答えた。

『何よ呑気者。この間は素敵なプレゼント有り難う、十分堪能させて貰ったわ。死ぬ瞬間をね』

光の厭味に、滉はにっと歯を見せて笑った。

「そうか、楽しんでもらえて嬉しいよ。ところで、何の用だ？」

大きな溜め息が通信機の向こうから聞こえる。

『一家団欒のところお邪魔して申し訳ありませんけど、閑吼から伝言よ。鎮痛剤はよく効いてます、完治するまでこのままで結構。ですってさ』

魅羅は慌てて身を乗り出す。

「あら、私はもう平気よ、閑吼に扉を閉めて、って言ったげて」

諦めきつた光の声が返る。

『閑吼が一旦決めたら、人の言うことなんて聞かないわ、判ってるでしょう？ まったく、変なところだけ親父似なんだから。私だつたらとつくに閉めてるわ』

光の言葉に滉は渋い顔をした。

「悪かったな。用はそれだけか？」

『後もう一つ。坊ちゃんが予定を変えたわ』

滉は口をへの字にした。

「何だと？」

『視察団より数日先行して一人でベースに降りるそうよ』

「お前警備主任だろう？ 何でそんな我儘許したんだ？ 大体イルダナフは寝てるのか？ なにやってやる」

返ってきた光の声は、話題の主との言い争いを表して刺々しい。

『あちらさんもあんたの跡継ぎ息子と同じで、てこでも動きやしないわよ。我儘の年季の入り方が違うわ』

「いつ来る？」

『あさつて、明日そっちの評議会に通達が行くはずだから、今夜は暇よ』

「バーロー！！ どんな連中が何企んでるのかも判んねえのに、今夜中に準備して先手を打つ様な芸当が出来ると思ってたのか？ あの古狸、何考えてやる！」

滉の怒声に、光は冷やかに答えた。

『知らないわ。頭が銀河大戦の時に戻ってるんじゃない？ 伝家の宝刀持ち出して悦に入ってたから、いい加減歳なんだからスタンドプレーは止めなさいって言ってやったら、プロポーズされたわ』

「何だそりゃ？」

『香花とD・Dの思い出を、お茶飲みながら話す伴侶が欲しいんですってさ。あんまり馬鹿にしてるから50年待ってって言ってやったわ』

「へえ」

『100年でも待つから考えてくれって。人をアルバム扱いして、腹が立つわ』

苦々しく話す光に、滉と魅羅は爆笑した。

「いいじゃねえか。貰い手があるうちが花つてもんだ。話は判った、今迷子を追跡中で忙しいんだ。できることなら、坊ちゃんを縄でふん縛つても予定通り来て貰いたいのが、何とか手を打っておく」

『ドルフェスって子？ ド素人なんだからあんまり苛めちゃ可哀相よ。じゃ、宜しく。THE MOONより以上』

通信が終わり、滉は大げさな溜め息をついた。

魅羅がにやりと笑いながら滉を見る。

「ママにD・Dの事話してないのね」

滉も同じように笑い返す。

「当たり前だろう？ 見て驚きやいいんだ。俺達だけがびっくりさせられるなんて、不公平だろう？」

「そ—よね—」

魅羅は満足げに頷き返した。

「シャドウ、迷子の車は何処に行ってる？」

「今25分署に着いたところよ。やっぱり安心できるのかしら。私はクリスタルと直結させるから連絡のときはアクセスNoを入れてください」

「OK、クリスタルは後どれくらい使える？」

シャドウはにつこりと微笑んだ。

「バリアーが2回程、後は奥の手が1つ」

「旨く行けば楽勝だが、下手を打つとちょい厳しいな。シャドウ、奥の手なんかで無理すんなよ」

夫の優しい言葉に、シャドウは嬉しそうに頷いた。

「出来るかぎりは」

スクリーンからシャドウの姿が消え、青い画面にドルフェスの位置を知らせる交点と25分署の見取り図が映し出される。

「さあて、忙しくなってきやがった」

溜め息まじりに滉は独りごちた。

＊

「さあ、これよ」

第一課のエミーのデスクにたどり着いたドルフェスは、エミーから一枚のフロッピイを渡された。

「貴方の大事な警部さん達の胡散臭さが、よく判るわよ」

勝ち誇ったようにエミーは、戸惑いを隠せないドルフェスの目を見据えた。

おずおずと自分のデスクに行き、端末のスイッチを入れる。

スロットルに飲み込まれたフロッピイが、モニターにデータを映し出す。

まず、連合警察機構と司法局所属の津川滉と龍造寺魅羅の経歴。

“ 津川滉・銀河標準年174年・アース生” アースの学校名が並び、“ 195年入局” それ以降は別記録参照とある。

魅羅のものも、“ 181年・アース生” とあり、“ 201年入局” とあるだけで、後は同じようなものだった。

「どう？ 34の男に、25の娘が居るの？ 9つの時の子？ 凄いわね」
ちくりと厭味を言ってから、ドルフェスの前に腕を伸ばしてキーを叩く。画面が変化して違う記録がスクロールされる。

「さあ、読んで。同姓同名さん達よ」

ドルフェスは画面に見入った。

“ 津川滉・テラ暦0074年生・テラ国J州州首都、第1中京都（通称グリーンシティ）・父、津川十学・母、ベルデ・兄、学・妹、光・0089年特殊教育課程卒”

「特殊教育課程？」

「この当時流行ってた睡眠学習の学校よ、14歳で卒業の筈だけど

1年留年してるみたいね」

“0091年テラ国際警察機構入局・0094年銀河大戦別記録参照・大戦時の活躍により、セファート、アルゴルの国賓待遇を受ける・109年銀河標準年10年没・享年35”

「死因は、宇宙ステーションの事故みたいね。死体も残らなかったみたい」

遺体回収不可の文字を見ながらエミーが言った。ドルフェスはぼんやり頷いただけだった。

「さ、次はこの人」

津川魅羅（竜造寺）の項目を指して、白い指が動く。

“銀河標準年1年・アース生・J州国東生・父、津川滉・母、ダフネ・兄、閑吼・養父、竜造寺龍也・養母、光・14年特殊教育過程卒・20年高等司法過程卒・同年アース司法局入局”

「たいしたキャリアよね、この後アルゴルに招かれて、54年には司法局長としてアースに帰ってる。確か龍造寺龍也が死んだ年はこの年よね。何したか判ないけど、次の年には国から勲章を貰ってる。そして、連合司法局の初代局長就任。龍造寺龍也の遺志を継いだってところかしら」

記録の津川魅羅は、あの脳天気な魅羅とは繋がらない。

「享年は89年、もう一つ家族の記録があるわ。結婚はしてないけど子供が3人、幻^{ゲン}、慧^{エイ}魅^ミ里、稀^{ケイ}胤^{イン}。父親は不明。書いて無いもの。

この人なら、津川滉の娘だけど、200年前の話よね」

エミーの声がドルフェスの頭の上を通り過ぎていく。

ドルフェスは混乱していた。

200年前の津川滉、津川魅羅の記録と、魅羅やシャドウから聞いた話が一致する。こんな事ってあるんだろうか？ 800年の寿命を持っていると言われるパストアス人でもないかぎり、200年前の人間が元気に歩き回っているなんてあり得ない。

待てよ、ひょっとして、コールドスリープと言うことは無いだろうか？ しかし、死体が見つからなかったという滉のほうがいいと

しても、魅羅には当てはまらない。

ドルフェスはふらりと立ち上がった。

「どこ行くの？」

「頭を冷やしてくる……」

歩きだそうとしたドルフェスの腕を、エミーの手が捕まえた。

「D・D、あの二人、信用しちゃ駄目よ。あんたが命を狙われてるのって、あの二人が仕組んでる事かもしれないわよ」

「まさか……？ あの二人が何でこんな平刑事を殺さないといけないんだ？」

エミーは声を落としてドルフェスに擦り寄った。

「目眩ましよ、アルゴルの視察団が5日後に来るわ。それを狙ってるテロリスト達と繋がりがあって、こっちの目を胡麻化すために騒動を起こして自分たちが事に当たって、信用させるってのはどう？」

ドルフェスは強く首を振った。

「あり得ない。絶対そんな事はない。第一無意味だよ」

ドンとドルフェスを突き放して、エミーは強い目で睨み付けた。

この期に及んでまだ判らないのかと言いたげな顔である。

「とんでもないお人好しだわ」

吐き捨てるように言い放ち、エミーはそのまま部屋を出ていった。ドルフェスは深く溜め息をつくと、よく考えようと思って、再び椅子に腰掛けた途端。

「キヤー……！」

廊下で、エミーの悲鳴が上がった。声に弾かれてドルフェスは駆けだした、腰に挟んでいた拳銃を構えて廊下へ飛び出す。通路の真ん中で、エミーが腰を抜かしてへたりこんでいた。

「どうしたエミー……！」

「あれ……あれ……なに……？」

震える手で指し示す方には、何か妙なものが転がっている。

「う……！？」

息が止まった。真っ赤な血だまりのなかに、人間だと思われるも

の、いや横に三分割された警官が放り出されたように転がっている。
「何てこった……」

追いかけて来たのだ。ケット・シーがこんな所まで。
壁に警官の血でアルゴル文字が書かれている。

”すぐにお目に掛かりましょう”

「ケット・シー……」

膝が笑ってきた。落ちつきなく回りを見回し、エミーの腕をひっ
掴むと、思いつき引っぱ張った。

「逃げるんだ！！ 君も殺されるぞ！！」

「何よ何よあれ！！」

「あれが、俺を狙ってるやつらの挨拶だ！！」

腰が抜けて立てないエミーを引きずりながら、ドルフェスは部屋
に入ろうとした。

しかし。

「Mr・ドルフェス、またお目に掛かれて光栄です」

背後から、聞き慣れた声が冷水の様に、ドルフェスに浴びせられ
る。

恐る恐る振り返ると、果して、未だ獣相のままのケット・シーが、
猫のようにうずくまって青紫の目に余裕の光りを浮かべていた。

「津川の奥様はいらっしゃらない様ですね。それは重畳、私も仕事
がしやすいというものです」

腹の底から震えが上がってくる。

何も考えないうちに腕が上がり、黒い獣に弾丸を放つ。

だがもう、そこにケット・シーは居なかった。

「何！？ なにあれ！？」

エミーがケット・シーの姿に怯えてすがりついてきた。

「何なのあの化け物は！？ 喋ってたわ！！」

「俺から離れるな！！ あの死体みたいになるぞ！」

勢いでエミーにそう怒鳴ったものの、当のターゲットは自分なの
だ、あの警官よりももっと酷い運命が待っているかも知れない。

たった一つの頼みの綱である拳銃を握り締め、ドルフェスはケツト・シーの姿を探して辺りを見回した。

——落ちつけ、眉間を撃ち抜けばあいつだって生きちゃあいない——
目の端で何かが動いた。銃口と一緒に顔を向ける。

「キヤー——！」

エミーの悲鳴をBGMに、白い死神が両手を上げて立ち上がっていた。

考える間もなく銃を撃つ。

「ミギヤー——！」

こめかみをかすった弾が、肉を大きくえぐり、死神は悲鳴を上げて跳びすさった。

——頭だ、頭を狙えば何とかなる——

少し自信がつくと、気持ちがり落ち着いてきた。ゆっくりと油断無く回りを警戒しながらエミーを半ば抱えるようにして廊下を歩きます。

警官の本丸である警察署の中で、突如起こった血の惨劇に、エミーはすっかり度肝を抜かれて震え上がっていた。

「ねえ、教えて、どうしちゃったの？」

弱々しくドルフェスの腕を掴んで、エミーは首を振った。

この女にもこんな可愛い所があったのか。ドルフェスは内心驚きながら、なるべく優しくエミーの肩に手を回した。

「俺にも判らない。答えてくれるかも知れない人は、ポケットのなかで黙ったままだ」

はなはだ頼り無い答えに苦笑しながら、ドルフェスはエミーを覗き込んだ。

大きく見開かれた褐色の瞳は、訴えるようにドルフェスを見つめた。

「津川よ、津川滉がやらしてるのよ。あたしがあいつを調べてるから、あんたと一緒に殺そうとしてるんだわ」

あくまで津川陰謀説を捨てずにいるエミーに、つい溜め息が出る。

「まだそんな事言ってるのか？」

「そうに決まってるもの！！」

始めの衝撃から立ち直ってきたエミーは、持ち前の負けん気でドルフェスにくっついてかかった。

「それしか考えられないわ。そうよ。あんたが狙われてるのだって、ゾルゲと一緒に何か見たからだわ。気がつかないことで、でも見ちゃいけないこと。それで狙われてるのよ。だからあいつは自分で近寄ってきたのよ。何か覚えてない？ きつとそうよ」

一気にまくし立てるエミーに、ドルフェスは首を振る。

「そんなことない、絶対違うよ」

反論する声にいまいち力が入らないのは、エミーの理屈に対して自分は滉を信じている以外には何も持っていないからだだった。

それでも、心のなかの声は滉を信ると言っている。

ドルフェスはその声に従おうと思った。

「君がどう思おうと勝手だけど、俺は彼を信じてる。何を言われたって変わらないよ」

きっぱりと言い切ったとき、後ろから笑いを含んだ声が発せられた。

「おや、仲間割れですか？」

とっさに振り向いたが誰もいない。いや、居た、ケット・シーの黒い身体が、どうやってそうしているのか天井に張りついて、ドルフェス達を見下ろしていた。

「ケット・シー… 何で俺を殺したい…？」

ドルフェスは力なく疑問を口にした。

「理由をお教えしましょうか？ 貴方は選ばれた方だからですよ。なに、すぐにこれでよかったと思われるでしょう」

何の説明にもならない事を言って、ケット・シーは片方の手を天井から離し、長い爪をこれみよがしに伸ばしてみせた。滉に切り取られた腕は、既に再生している。

「痛みも感じさせはしませんよ。貴方を苦しめるのは私の本意では

ありませんから」

青紫の目が流血の悦楽を期待して細められる、ドルフェスはその目を目掛けて引き金を引いた。

しかし、撃芯は虚しくかちりと鳴るだけで、唯一の守りが、弾切れであることを知らせる。

蒼白になった青年の頭上に、ふわりと天井を離れたケット・シーが、死の爪を振り下ろした。

「キャアー!!!」

エミーが悲鳴を上げたのと、見えない壁に弾かれてケット・シーが廊下の端まで跳ねとんだのは同時だった。薄紫の閃光と共に、ドルフェスとケット・シーの間にシャドウが現れた。

「ケット・シー、ドルフェスには指一本触れることは許さないと、言っただけです」

シャドウに向かって、ケット・シーは初めて牙を剥きだして威嚇の叫びを発した。シャドウは満足げな含み笑いで答える。

「おすまししてるより、猫はそうやって鳴いてるほうがよく似合うわ」

通路の向こうで、何か争っている様な物音と野獣の叫びが響いてきた。

「貴方のお仲間が、夫と対面した様ですわ、早く行ってあげないと、殺されてしまいましてよ」

シャドウは圧倒的な優位に立った余裕を漂わせて、ケット・シーに退散を促した。

黒い獣の青紫の瞳が屈辱に歪む。

ドルフェスの血を見なければ、この憤りは静まることは無いだろう。ほんの一瞬、隙があればあの無力な男の首が取れる。

ケット・シーは、再び襲ってきた全身の抵抗に、あくまで抗うことに決めた。

また廊下に獣の咆吼が響きわたった、そして、ばたばたと数人の

廊下を走る音が聞こえた、異変に気付いた署員達がおつとり刀で駆けつけて来たのだろう。しかし、パラライザーしか持たない彼らに化け物を止める力はない。警官を制止する滉の声と、犠牲になったらしい誰かの悲鳴が交差する。

「さあ、逃げましょう。猫は今無力です」

喧騒の中、シャドウは悠然とドルフェスに微笑みかけた。

「シャドウさん……」

「ごめんなさい、エネルギー節約のために、電源を切っていたの」
シャドウの言葉をケット・シーは聞き逃さなかった。エネルギーの節約。なるほど、何が発生源かは知らないが、ポータブルのバリアー発生機にこう何度も強力な障壁を作るエネルギーはあるまい。とすれば、後一回か二回あれば弾かれる覚悟でバリアーを張らせればこっちの物だ。

早くしたほうがいい、津川滉が部下を倒してやってくる迄には、目的を遂行していなければチャンスは無い。

廊下の向こうに数人の警官達が走り出てきた。

「どうした!」

「何事だ!？」

彼らはケット・シーの姿を認めてどよめきを発した。

「退がって、危ないわ!!」

ハラライザーを引き抜いて、ケット・シーに向かって構えはじめた警官達に、シャドウが制止の声を発する。

ケット・シーは行動を起こした。

黒い巨体が音もなく空に舞い、ドルフェスに飛び掛かる。伸ばされた爪が青年に達する前に、シャドウの腕がひらめき障壁が凶刃を弾き飛ばす。再び宙に舞ったケット・シーは飛ばされた反動を利用して、警官達の中に飛び込んだ。

「うわぁー!!」

「ぎゃ……!!」

盛んにパラライザーを撃ちはするものの、黒い獣には何の役にも

立たない。瞬きする間に3人が爪の餌食となつて血だまりのなかに崩れ落ちた。

生き残つた警官達が散を乱して逃げてゆく。

ケット・シーにとつて、ほんの少し憂さを晴らしただけのこと、逃げていく雑魚など何の関心も無い。

素早く踵を返し、血で汚れた爪を振りかざして、ドルフェスへと跳躍する。

また弾かれる、しかしその障壁が自分のぶつかった部分にしか張られなかったのをハッキリと感じ取つて、猫は喉を鳴らした。

シャドウはドルフェスの脇を通り過ぎながら、そつと耳打ちした。「次の攻撃のときには、クリスタルを床に投げて割つてください。

クリスタルの質量エネルギーを還元して、貴方を短距離レポートさせます」

「ええ!？」

驚く青年に、シャドウは鮮やかな微笑みを返した。

「私の奥の手。心配しないで、危険はありません」

笑顔に励まされて、ドルフェスはポケットのクリスタルを握り締めた。

獣が背を丸める、弓を引き絞るように毛皮の下の筋肉がぞわぞわと蠢く。それに合わせて青年も身構える。後ろ足が床を蹴り巨体が宙に舞い、ドルフェスはクリスタルを持った手を振り上げた。

その時。

「待ちな!！」

ドスの効いただみ声が、白い閃光とともにケット・シーに叩きつけられた。

「ウギヤー!！」

光に身体の半分を焼かれたケット・シーは、悲鳴を上げて床に落下した。焼けただれた身体を引きずるようにして起き上がった鼻先に、男が一人立っていた。

背が高く細身ではあつてもしつかりと筋肉質の韋丈夫、その髪は

老人のように白い。

「何をなさるのです？」

弱々しい抗議の声がケット・シーの口からもれた。男はにやりと顔を歪めると、ケット・シーを見ようとせずに、シャドウに顔を向けた。

「命を助けてやったんだ、有り難く思いな」

凶々しい冷笑をさらに深めて、下品なだみ声を発する。

「そっちの坊やが手に持っているもんを見な、あれを叩き割られた日にゃあ、てめえは異次元に放り出されていたんだぜ、津川の女房を甘く見てるととんだ事にならア」

「私は甘く見てなど…」

言い返すケット・シーに、ぎらりと男の視線が向けられた。

「てめえはそもその始めから間違ってるのさ。いい気になって津川の心臓なんぞを食っちまうから、D・Vの女主人の絶対命令を身体がきいちゃうのさ」

「何ですと…？」

「根性で撥ねつけてるみてえだが、津川の細胞を身体ん中に飼っている限り、てめえはあの女に頭が上がらねえって寸法だ。判ったらおとなしくしてな、俺は美人に話がある」

男はそう言い捨てると、シャドウに視線を戻した。

だみ声に似合った粗野な口調、加えて刺の生えたレザーの繋ぎに金具付きのブーツという、安物のアーティストかチンピラの様に見える男だが、その顔だけは全体の雰囲気に対して、かなり整った、気品すら漂わせるものだった。

どこことなく滉に似ている。ふとそう思って、ドルフェスは慌てて首を振り取り消した。

「こんな所でお目に掛かるうとは、思ってもいませんでしたわ」

シャドウが硬い声を出す。

その声に、妙に緊張した響きを感じ取って、ドルフェスはシャドウを見た。

そして、今まで見たことのない厳しい表情のシャドウに、男の正体の察しがつき、青年は不安になった。

果して、シャドウが再び口を開いた。

「わざわざ何の御用かしら？ ファントム」

ファントム！ 滉の宿敵。滉があれほどの憎悪を露にする相手。

それが、この男？

ドルフェスはあらためて男の顔を見つめた。ソルティードルでは遠目に見ただけで白髪頭しか判らなかつた。滉達は爺いと呼ぶ。

それが、こんなに若いとは。

ファントムが首をすくめた。

「いやあ、大した事じゃあねえんだがな。猫を拾いにきたついでに、美人の顔でも拝んで行こうかってな」

シャドウは口の端を少しだけ上げた。

「褒めていただいて嬉しいわ。でも、それなら貴方もう持っているのではなくて？ それとも、ダフネに飽きたのなら返して貰おうかしら」

ファントムはパチンと指を鳴らした。手袋にまで生えている刺が、照明を反射してきらつと光る。

いつの間にかファントムの後ろに誰か立っていた。

「こいつか？」

出てこいと言うようにファントムが顎をしゃくると、栗毛の女が彼の横に進み出た。嫌らしい程身体の線を強調したレザーワンピースは、大きく胸があいてる上にあちこちに穴が開けられ、素肌を露出させている。

フェイスペインティングの施された顔は能面のように無表情だったが、紛れもなくシャドウのものだった。

つまり、これがダフネに間違いない。

グルーピーの様なダフネの姿に、シャドウは眉を寄せた。

「なんて恰好…。ファントム。貴方の服の趣味、だんだん悪くなりますね」

ファントムは大口を開けて下品な笑い声を立てた。

「げひやひやひや、可愛いだろう？ 俺の人形だ。猫の飼い主からプレゼントされたのさ。俺の言うことあ何でもきくぜ、お望みならここでストリップさせてやるうか？」

ぐいっとダフネの腰を抱き寄せて、見せつけるようにキスをしてみせる。シャドウは嫌悪感に身体を震わせた。

「私に触らないで」

シャドウの様子にファントムは嬉しそうに手を叩いた。

「いいねえその顔、やっぱ中身があったほうが面白そうだ。どうだ？ この身体に入って、俺にかわいがられねえか、天国の気分にならせてやるぜ」

嫌らしい視線を隠しもせずに、ファントムはシャドウを嘗めるようにみつめる。

シャドウはそれに微笑みで答えた。

「結構です。滉さんというほうが幸せですもの」

「ベッドの上が？」

卑猥な当てこすりに、返答の限りでは無いといった態度で、シャドウはファントムの言葉を黙殺した。

白髪の男が、ダフネの頬を舐めながら、げへげへと笑う。

「俺がそんなに嫌なら、自分の身体を作れよ。ああ、そうそう。この身体が死ななけりゃ新しいのはできねえんだったな」

ファントムの目が見開かれる。

「てめえも、稀胤の餓鬼も、鉄の箱のなかでわめいてりゃぁいいんだ」

シャドウは答えずに、きつい目でファントムを見据えた。ドルフエスはその目に紛れもない憎悪を感じた。

ごくりと喉を鳴らす。と、その時。

「ファントム！！」

廊下に滉の雄叫びが響きわたった。

ドルフェスが振り向くと、滉が物凄い勢いで走ってくるころだった。かなり遅れてプロテクターのような物に身体を包んだ魅羅が見える。

「床上手な亭主のおでましだな」

にや付きながらファントムが言ったのと、到着した滉が手にしていたチエーンソーを振り上げて仇敵に飛び掛かったのは同時だった。しかし、すさまじい唸りを上げて、ファントムとダフネを横風にした刃は、何の手応えもなくファントムの身体を突き抜けた。

滉はスイッチを切り、にやつと笑う。

「相変わらずの姑息さだな。俺の前には本体で出る勇氣も無いらしい」

「女房ごと殺そうとするような男に、生身で会えるかよ。そっちこそ相変わらずの単細胞だな」

滉はダフネの姿に一瞥をくれると、軽く口笛を吹いた。

「古女房もこうして見ると新鮮だな」

「帰ったらてめえの人形にやってもらいな」

「止めとこう、うっかり頼んだら飯抜きで干乾しにされる。そのかわり、必ずその人形とやらを返してもらうぜ。俺のもんだ」

金褐色の瞳にざらりと凶暴な光が宿る。

「そんな時はその身体も返して貰う。稀胤が心待ちにしているからな」
下品なファントムの笑い声が廊下中に弾けた。

「そいつぁ楽しみだ。歓迎の準備をして待っててやらあ。さて、俺は消えるぜ、てめえが来ると喧しくっていけねえ」

ファントムの腕のなかに居たダフネの姿がかき消すように無くなり、ファントムもまた次第に影が薄れはじめた。それがふいに元の姿に戻る。

「おっと、何しにきたか忘れるところだった」

何やらしきりに首を振りながら、ファントムは腕組みをした。

「てめえの相棒の無愛想を殺ったのは俺じゃねえよ」

ファントムは後ろに顎をしゃくった、ケット・シーの姿はもう無

い。

「あの猫がとんだ濡れ衣をきせやがったが、俺はあいつの事は好きだったんだぜ。俺と同じように平気で人殺しができる奴だったからな」

滉はふんと鼻で笑った。

「それがどうした。お前の所為だ、何も彼もな。たとえば道で犬の糞を踏んづけても、お前の所為だ」

ファントムはおおげさに肩を竦めた。

「やれやれねちっこい野郎だぜ。いつまでも根に持ってやがる」

「たかが出来もしない濡れ衣晴らしに来たのか？ 暇な野郎だ」

「悪いかな？ ついでにもう一つ、俺は飯を食いに来た。そう言やあ何だか判るだろう？ 邪魔するなよ」

「たっぷりしてやる」

ファントムは下品な笑い声を残して姿を消した。

滉はドルフェス達に背を向けたまま暫くその場を動かない。

どんな表情をしているのか見ることは出来なかったが、背中から発される空気は、以前見た煉獄の炎の様な凶暴さに満ちている。

ドルフェスは、横に立ったまま滉を見つめているシャドウに目をやった。

憂いを含んだ視線は夫の背にそそがれ、滉と同じ苦しさを分かち合っている様に見える。

次いでさっきから凍ったように動かないエミーを見ると、彼女は胡散臭げに滉とシャドウを眺めている。ドルフェスはこっそり溜め息をついた。

気まずい雰囲気破って、魅羅がすつとんきような声を上げた。

「ちよつと、D・D！！ 何よそれ！」

「え？」

プロテクターの様なものをがちやがちやいわせながら、魅羅はドルフェスとエミーを引き剥がすように割り込んできた。

「私というものが有りながら。こんな女と何してるのよ！」

本気かどうか判らないが嫉妬に燃える目をしてドルフェスを睨み付ける。

「え？ あの…？」

しどろもどろになったドルフェスの横から、エミーが負けずに言い返した。

「何したって構わないでしょ、貴方みたいな胡散臭い人より、あたしの方がいいのよ、ねえD・D？」

「ああ、私の何処が胡散臭いのよ」

「さあ、御自分の胸に聞いてみたら？」

一触即発の女たちに挟まれて、ドルフェスが慌てていると、今度はシャドウが脳天来な声を出した。

「滉さあん、お家に帰りましょう。ブイヤベースが出来てるわ」

魅羅とエミーはつんのめり、ドルフェスは脱力し、滉は何時もの笑顔で振り返った。

「そりや嬉しいね。腹減ってたんだ」

氣勢を削がれて呆然とする魅羅達の前を、嬉しそうに献立を話しながら津川御夫婦が通り過ぎる。

ドルフェスは魅羅の前をシャドウが通ったとき、そっと「いい子ね」と言ったのを聞いた。ああそうか、と合点がいく。

魅羅はやり切れない雰囲気はなくすために、わざとエミーと喧嘩したのだ。魅羅の優しさを理解すると同時に、本気のやきもちで無いことが残念に感じる。

——俺、何期待してたんだろう——

自嘲するドルフェスの腕に、魅羅が自分の腕を絡ませてきた。

「さあ、行きましょう。もう安心よD・D。私が守ってあげる」
赤くなったドルフェスに、につこりと笑いかける。

と、反対側でエミーがドルフェスの腕を掴む。

「行くこと無いわよ、よっぱど危険だわ」

褐色の目と黒い目が再び火花を散らした。

「どういう意味かしら、さっきから胡散臭いだの、危険だのと。訳

の判らないことばかり言ってるわね」

魅羅を睨みながら、エミーはドルフェスの腕を引っ張った。

「さあね、知らないわ。こんな人に構わずに行きましょうよ」

魅羅の目がきりきりとつり上がる、本気で腹を立てはじめたのを察して、ドルフェスは慌てて女の戦いに割って入った。

「いい加減にしろよエミー、すまない魅羅さん、彼女ちよつと勘違いしてるんだ」

「どんな勘違いで侮辱されるのかしら、聞かせてもらいたいわね」
真顔になった魅羅が詰め寄ってくる。

恐れをなしたドルフェスが半歩後づさった時、滉ののんびりとした声がとんできた。

「おい、魅羅。遊んでないでそっちのお嬢さんにも来てもらいな」
唇を尖らせて、魅羅は父親を睨み付けた。

「何で、何で、なあんでえー！？ 嫌よ私！」

「ケット・シーとファントムの爺いに、俺達と一緒に見られちまってるんだ、他の連中よか危険度が高い」

思いつきりふくれっ面をして、魅羅は渋々エミーを見た。

「しかたないわ、いらっしやい」

しかし、エミーは首を振ってドルフェスにしがみつく。

「嫌よ、行きたくないわ」

「嫌がつてるわよ、止めときましよう？」

嬉しそうに魅羅が言う。滉はグレた目つきをして戻ってきた。

「めんどくせえな…後で化け猫になられてたら、夢見が悪いだろう？」

言いながら素早くエミーに当て身をくらわせ、腕のなかに崩れてきた身体をひよいと抱き上げる。

「行こうかD・D」

仰天しているドルフェスに、ウィンクをして、滉は悠然と歩きはじめた。

15 A S u s p i c i o n — 疑惑 — (後書き)

ついにファントム登場。服装はパンクロッカーですが。

16 A・HERO・WORSHIP (前書き)

親子の会話

16 A・HERO・WORSHIP

パンケーキは、フライパンの上で焦げてたわ。

D・Dの奴、得意なものもこの程度か、ですって、馬鹿にするわ。

だって仕方なかったのよ、焼いてる最中にダフネが言い出したの。

「私、滉さんと旅行に行こうと思うの。半年程、アルゴルとセファートを回って来ます」

滉達って、結婚して18年近くなるのに、まだまともにハネムーンもしていないのよ。だから、私。快く魅羅と閑吼を引き受けて、滉に浮気させたら駄目よっ、て言っただけなの。

パンケーキはその間に焦げちゃった。

焦げたケーキは、不吉の前兆だったのかも知れない。

あの日、滉達が旅立った翌日。今頃はステーションね、なんて言っただら身体を眩しい光が包むのを感じたわ。

——それっきり、私の半分は無くなってしまった。

宇宙ステーションは原因不明の爆発を起こし、滉達は星よりも遠い所へ行ってしまった。星に旅行に行った人が、自分が星になっちゃったなんて、笑い話にもなりやしないわ。

あいつつたら、本当に馬鹿よ。

——ああ…

…私の身体が壊れてゆく…

滉が居ないから。私の半分がもう何処にも居ないから…

ごめんねD・D、貴方が居るのに、滉が居ないと治らない。私の身体は治らないの。

悲しまないで、私を見ていてくれた人。

私が、滉の半分の存在だけで終わらなかったのは、貴方が見ていてくれたからよ。だから、ほんの少し待ってて、私達皆会えるわ。

きつと、何処かで…

約束よD・D、また、皆で遊びましょう…

光は、高く掲げられた自分の手を、ぼんやりと眺めていた。眠りながら誰かを探して差し伸べられた手は、ベッド脇の補助光に白く浮かび上がって見える。

「あの夢、しばらく見なかったのに…」

軽い溜め息と供に起き上がり、もう一度伸ばしていた手を見る。

夢の中で痛いほどこの手を握り締めていた、男の暖かく大きな手の感触が、まるで現実のものだったかの様に残っている。

手に残っている感触にあわせて、幻の手を握ってみる。

光の金褐色の瞳から、人前では決して見せる事の無い涙が、一雫こぼれ落ちた。

「D・Dの嘔吐き、待ってるって言った癖に」

そう呟いてから、すぐに自嘲の微笑みを浮かべる。

ルール違反をしているのは自分の方だったから。

普通の人間なら、とつくに終わっている人生のはずなのだ、それなのに、自分は反則の第2ラウンドを生きている。

一方的に龍造寺を責めるのは、手前勝手と言つものだろう。

光は顔にかかつてきた黒い髪をうるさそうに掻き揚げた。

龍造寺の死を知ってから、金褐色の自毛を喪服代りに黒く染め続けている。もし龍造寺が知ったなら、しつこい女だ、と笑うかも知れない。

それでも良い、それで少しでも天国で自分の事を思い出してくれるなら…

そこまで考えて、無性に腹が立ってきた。こんな女々しさは自分には似合わない。

「坊っちゃんが変な事言い出すからだわ」

光は苛立たしげに溜め息を付いた。

無性に誰かに八つ当たりをしたくなってくる。

あれこれ候補を考えて、ふと、滉は何をしているだろうと思った。こっそり感覚を延ばして、片割れの様子を探ってみる。

心地好い加速感に包まれて、滉はネプチューンのシートにリラックスして座っている。

むかついた。

「そう…私が悲しんでるってのに、あんたは呑気に笑ってんのね」

同情の必要は無いな。光はにやりと笑った。

滉に気付かれない様に、そつと手の甲だけ感覚を入れ替える。

その手を思いっきり抓ねりあげると、すばやく元に戻し、反撃が来ないようにイメージの扉をきつく閉める。

「ふん…だ」

鼻でせせら笑うと、気の済んだ彼女は、大きなあくびをしながら再び横になった。

起床時刻迄はもう少しある。

今度は夢など見ずに眠ろう、目が覚めたら又忙しい。

「痛つてえー！！ 何しやがるこのアマー！！」

ドライバースシートで呑気にシャドウ相手に話していた滉が、いきなり片手を振りながら怒鳴り声を上げた。

「ママ？」

後部座席から、魅羅が首を出す。

「そつだよ、あのアマいきなり抓りやがった。」

痛そつに手の甲を摩りながら、滉はいまいましたに口を尖らせた。

「くつそー。完全にシャットアウトしてやがる。憶えてるよ、必ず仕返ししてやる」

「光さん、どうしたのかしら」

デイスプレイスクリンの中で、シャドウが首を傾げた。

「きつと何か気に入らない事があったのよ。ママ、滉になら何しても良いって思ってるから、八つ当たりしたんだわ」

のんびりと魅羅が言う。滉は、深い溜め息をついた。

「八つ当たりで痛い目にあわされたらたまねえぜ。降りて来たらみてろよ」

恨みがましくまだ手を摩りながら、滉が唸る。

魅羅はけけらと笑いだした。

「無駄無駄、もう忘れてるわよ」

「許さん！！ 思い出させてやる」

悔しがる滉をひとしきり笑ってから、魅羅はサブ・シートのドルフェスに目を向けた。

賑やかな親子の会話をしりめに、彼はぐっすりと眠り込んでいる。長時間の緊張状態から一気に解放された彼の神経は、休息を求めて深い眠りを連れて来たのだった。

そして、その後ろの座席には同じ様に眠り込んでいるエミーが居た。尤も、こちらの方は起きたら煩い、という滉によって、ネプチ

ユーンに乗せられるなり鎮静剤をうたれて、強制的におとなしくさせられているのだが。

仲良く眠るベースシティの刑事コンビを見ながら、魅羅は、小さな溜め息をついた。

「何でエ、まだこの姉えちゃんを連れて来たのが気にいらねえのか？」

父親の声に、魅羅はかぶりを振った。

「確かにこの女は嫌いだけど、今更文句は言わないつもりよ。ただ、この大きな荷物、ふたつも抱え込んでどうするつもり？」

娘の言葉に、滉は軽く喉で笑う。

「D・Dもお荷物か？」

「今のところはね、だって、そう思っていないといつい活躍を期待しちゃうのよ、やっぱり顔の所為ね。おまけに仇名まで同じなんだもの、混同してしまうわ」

妙にしみじみとした口調で魅羅が言う。

「今頃になって、この顔に出くわすなんて思っても見なかったわ。ところが性格は正反対、かなりギャップが激しいわよ」

「生まれ変わりかも知れねえぜ」

滉の言葉に、魅羅はおどけた様に首をすくめた。

「D・Mが聞いたら怒るわよ、こんな軟弱者と一緒にするなっ、てね」

「あのオヤジならそう言うだろうな。けどなあ…この似方はただごとじゃあ無いぜ、子孫がクローンってな感じだね」

やはりドルフェスの横顔をみつめながら、冗談めかして滉が言う。魅羅は首を傾げた。

「D・Mには兄弟は…一応居なかったわよね、子供だって幻だけ…」

後の言葉は続かない、思い出すには辛い記憶だった。あの時の龍造寺の、悲嘆に暮れる姿は、今も魅羅の胸を締め付ける。

「コピーなら居たぜ」

滉の微かに冷笑を含んだ声が、魅羅の物思いを打切った。

「…思い出したいくない」

その男には、かつて散々煮え湯を飲まされたのだ。眉を潜める娘に、滉は苦笑した。

「ま、そう言うなって。旦那の親父って代物が旦那のクローンを弟として作ってたのは知ってるだろ？　それが竜司のボケだが。そもそも自分が人間以上の生き物になるってえ夢に執り付かれた奴でね、その為には自分の息子を実験台にする事にも全然ためらわねえ。世界中から科学者集めて、日々竜司のスペアを切り刻ませたりしてたんだぜ」

そう言う滉の顔は、苦笑とも嫌悪とも言えない奇妙な表情を浮かべている。

「お前の祖父さんを助けるために乗り込んだ所に、そのスペアの保管所があつたんだ…今思い出しても、気味が悪いぜ。なにせ…天井から床下までひしめくみてえに並べられたカプセルの中に、全部旦那が入ってたんだ…まあ、竜司だけどな…それも素裸で…」

親子はとつても寒い視線を交わし合い、どちらともなく肯いた。

「そう…それは大変な物を見たのね」

「ああ、あんな物何百と見せられたら人生嫌になるぜ」

「初めて聞いたわそんな話。だからママ、年に一回離婚してたのかしら」

「いにや、ありあ趣味だろ。ま、そんな家庭の事情だからな、クローンの一匹ぐらい世間に紛れ込んで、この坊っちゃんの先祖になった可能性はあるかもしれない」

父親の言葉に、魅羅は再び首を傾げ、暫く考えてから思い切ったように口を開いた。

「彼、私のことを、Little Dianaって呼んだわ」

「何だそりゃ？」

今度は滉が首を捻る。

「D・Mが、私を誉める時に使ってた呼び名よ小さな月の女神^{リルダイアナ}って

…」

滉は軽く笑って肩をすくめた。

「てエ事は、光がダイアナか…顔に似合わずロマンティストなんだよな、あの旦那」

魅羅は形の良い眉を寄せ。

「D・Dに聞いてみたけど、自分がそう言った事なんて全然覚えて無いのよ、どう思う？」

娘の問いに、肩をすくめて、滉は頭を掻いた。

「さてなあ、こんなに時間がたってるってなのに、本気でクローンってか？ けどな、コピーに記憶を移す技術は無いはずだぜ。部分的なもの以外はな」

魅羅は溜め息とともに大きく首を振った。

「やっぱり他人の空似って事にしておきましょう、およそ考えられないわ。アレクスじゃあるまいし」

「そうしたいのは山々なんだが、この坊っちゃん、何であの化け猫に殺されかかっているのが判らねえ。そして、あいつ等が何で俺達や旦那の事を知っているのか…魅羅、旦那の事故の時の検死は誰だ？」

不意に聞かれて、魅羅はきょとりと目を丸くした。

「エ？ 勿論、閑吼よ、私達がD・Mを他人に触らせるはずないでしょ」

「死体、見つからなかったんだよな…」

無言で肯く。

「あの宙域で見つかった旦那の義手が、死亡の決め手だったんだよな…」

「ええ…そうよ。あの事故の日、D・Mは私に通信をくれたわ。もうすぐ帰るって。戻ったら、皆で滉達のお墓参りに行こうって…約束したのに…」

涙を含んだ声が、赤い唇から漏れる。

うなだれた娘の頭に、ふわりと大きな手が乗せられた。

「俺も、お前達との約束を破っちまったよな。帰ったら動物園に行こうって言ってたんだよな」

魅羅の黒髪をくしゃくしゃに撫ぜながら、優しさを込めた目で見つめる。

しばらく成すが俚になっていた娘は、照れたような微笑みを浮かべて父親を見た。

「滉にとつて、私達はまだ十二歳の子供のままかしら？」

滉は微かに苦笑した。

「ああ、空港で半分むくれながら見送ってる、あのちび供のままだ……」

滉は遠い日々を懐かしむ様に、ふっと視線を空に浮かせた。

「滉もD・Mも、それ以外の約束は必ず守ってくれてたから良いのよ。それに、滉は帰って来てくれたもの」

健気な返事に微笑みながら、軽く頭をたたいて手を放す。

「帰ってきたと言おうか、帰ってこさせられたと言うか……」

「良いじゃない、今が幸せなら」

「ま、そーだな」

につこりと笑い会う親子は、性格も考え方も実に良く似ていた。「さて、もつと幸せになるために、もうちつとしっかり考えようぜ。疑問は山積みなんだからな」

「そうね、このD・DじゃあD・Mみたいな名推理は望めないものね。ほんと、似てるのは顔だけなんだから」

ドルフェスが聞いたら、奈落の底に落ち込みそうな科白をさばさばと言い放ちながら、魅羅は、なんとなく嬉しそうに青年の寝顔に視線を向ける。

滉はそんな娘の仕草に、微かに目を見開いたが、何も言わず、ゆつくりと微笑みを浮かべた。

「滉さん、魅羅。もうすぐD・Vのシールド圏内に入ります。お疲れ様でした」

シャドウの静かな声が流れて来る。

「ほいよ」

気楽に答えて滉は前方に目をやった。

道は郊外にさしかかり木々の深く生い茂った所を進んでいる。

その木々の枝葉の間に、アース風の洋館が見え隠れしはじめている。

「これでやつと飯にありつけるぜ。今夜の飯はブイヤベースにローストビーフ、ポテトとアスパラガスのサラダにジンジャーブレッドなんてね。ああ腹減った」

一気にまくしたてて一人肯く滉を横目で睨み、魅羅はスクリーンのシャドウにしかめ面をして見せる。

「マザー、滉の好きなものばかりじゃない」

「俺の女房だ、当たり前だろう」

「うー」

「魅羅、デザートはキウイプディングよ」

シャドウのとりなしに、好物を聞いた娘は幸せそうに肯いた。

「うふ…、だからお母さん好きよ」

「どういたしまして。追跡波遮断の為、次元シールドを四重に張るわ。魅羅、閑吼との繋がりが切れるから、しばらく痛いわよ」

気使う母親の声に、魅羅は元気に肯いた。

「願ったりよ、早く閑吼を楽しみにしてあげたいもの」

滉はコンソールパネルにちらっと目を走らせ、少し首を傾げた。
「シャドウ、気になることでもあるのか？」

スクリーンの中で、シャドウは小さく首を振った。

「いいえ、用心の為よ」

滉の金褐色の瞳にまっすぐ見つめられながら、シャドウはにっこりと微笑むと軽く顎に手を当てた。

「滉さん。私、こっちのD・Dに彼の顔の事話してしまったけど、いけなかったかしら？」

いきなり話題を変えられて、滉は微かに口許を引き上げた。金褐色の瞳と紫の瞳が一瞬絡み合い、夫婦だけの会話が成立したらしい。

「こいつが知ってたって、光と閑吼がびつくらこけばいいんだ。大勢にやア影響ねえよ。それに、お前のこった、当然そん時の顔は記録してあるんだろ？」

にやりと意地の悪い笑い方をしてみせて、滉はドルフェスに顔を向け、『勿論です』という答を聞いて、さらに笑みを深くする。

「さア、飯だ飯だ。魅羅、D・Dを叩き起こせ」

魅羅の笑い声が軽やかに弾け、ネプチューンの調子に乗った遠吠えがハモる。

フロントウインドウには、鳶の絡まる洋館が、古めかしいたたずまいを現わしていた。

＊

コポコポ…コポコポコポ…

耳元で奇妙な音が聞こえる。だがとても聴きなれた音だ。

体を何か柔らかい物が包んでいる。

とても暖かい…気持ちが落ち着いてくる。

ここは何処なんだろう？

心地好い眠気が纏わりついて、体が重い。でも不快感は無い、

これは何時もの事だ。

そう…ここはよく知っている所…安全な所だ…

睡魔が優しい手を差し伸べてくる、誘いに任せて眠ってしまおうか…？

——共鳴…切れた…？——

何処かから声が聞こえた。

——死んだの？——

——違う…——

切れ切れの声は、奇妙な緊張感を帯びている。興味が沸いた。眠くてだるい目蓋に、やっとと言う事を聞かせて目を開く。

一面の銀世界、青銀色に発光する壁が目の前にあった。

いや、壁ではない。細い糸のような物が繭の様に体を覆っている。

銀の糸は時折ふわりと動いて頬に触れる。柔らかくて気持ちが良い。

——データー……リンクして——

——…木馬には、何人入ったの？…——

——報告——

……

声は擦れて聞えなくなった。

もう駄目だ……眠くてこれ以上目を開けてはいられない。

目を閉じる、すうっと体が重くなる……

「おい、D・D。いい加減に起きろよ」

滉の声で青年は目を覚ました。

フロントウインドウから差し込む日の光に、思わず顔をしかめる。

初夏の陽光が、さんさんと車内に降り注いでいた。

「あれ……？」

ドルフェスは目を瞬いた。

車窓の外には、鮮やかな草の緑と、遠くに霞む防風林の新緑が優しいグラデーションを醸しだし、その上を覆う群青色に晴れ渡った空と競い合っている。

実にのどかな田園風景が広がっていた。

「ここは……何処……？」

「私は誰？なんて言うんじゃないぞ」

不機嫌な声で、つまらない冗談の様なことを言いながら、滉がドルフェスを横目で睨んでいる。

「警部……？俺、今まで寝てたんですか？」

何時間寝ていたんだろうと考えて、恐る恐る訊ねると、滉はがっくりと肩を落とした。

「やれやれ…」

滉の様子にドルフェスは不安を覚えた。

外の風景とは正反対の不気味な緊張感の中で、黒い瞳と金褐色の目が交差する。

「あの…警部？」

少し速くなつた鼓動を感じながら、もう一度口を開いた。が、滉は呆れた様に青年の顔を眺めているだけである。

ドルフェスはさらに加速した鼓動を抑えるように、胸に手を当てた。上司に睨まれた位でドキドキするほど気の弱い方では無いはずなのだ、（セーレ才部長に怒鳴られてもこんなに心臓に負担がかかったことは無かった）滉に見つめられると、どうしても心拍数が跳ね上がってしまう。

おまけに嬉しいような苦しいような変な気分になてくるのだから始末が悪かった。

そして真先に浮かんでくるのが、彼に嫌われたのでは無いかという不安で、次にもっと側に居たいという切なる願いが沸き上がってくる。

まるで初恋に胸踊らせる少年に戻つたような感じだったが、ふと、自分の初恋が夢の女に対してのものだったことに気がついて、青年は大いに焦ってしまった。

滉は確かに夢の女とそっくりだったが、彼はれっきとした男性なのだ。

それに自分には、勿論滉にも、同性を恋愛対象にする趣味は無いはずだ。きっと…

青年の目に、夢の女の顔がチラチラと浮かび、それがジト目で見つめる滉の顔と重なった。ひょっとして、現実には居ない女を恋い焦がれる余り、同じ顔なら男でもいいんだろうか…？自分はそこまで即物的なのだろうか？

一人で焦りまくつた青年は、助けを求める様に後部座席に目をやって、初めて魅羅が居ない事に気が付いた。

「あれ……？魅羅さんは？」

滉は再び溜め息を付き、諦めたように首を振った。

「降りたよ、2日前に」

「へ？」

滉の妙な言葉に、ドルフェスは点目になった。

「あの……？どどういう事ですか？それに、俺達これから何処に行くんです？」

訳も判らず疑問を連発する部下に、滉はぐいと顔を突き出す。

「お前、本っ当に憶えて無いのか？」

「え？」

ドルフェスの背中を、何か冷たいものが走っていった。

「俺、何かしました？」

「そーか、覚えてないのか。なら教えてやろう。お前が化け猫に襲われてから2日経っている」

険しい表情のまま、滉は口を開いた。そして言いにくそうに少し間を置き、青年の目を覗き込む。

「お前は2日前、寝ぼけて魅羅にキスしようとして投げ飛ばされ、それからおかしくなっていたんだ」

「ええ？！」

ドルフェスは驚きの余り立ち上がりかけたが、いかんせんネプチューンの中である。

当然、天井に嫌と言うほど頭をぶつけてしまった。

「あでっ……！」

ついでに舌も噛んでしまったらしく、口と頭を抑えてうずくまる。そんな青年の狼狽する様を、気の毒そうに見つめながら、妙にしみじみとした口調で滉が追い打ちを掛けてきた。

「俺達は、化け猫に追いかけて回された所為で、軽い精神錯乱を起こしてるんだと思ってな。一応医者に見せたんだが、お前がその医者を叩きのめしちゃって……」

ここでためいき。

「で、倅に連絡をとつたらトサマールにいい専門医を知ってるって事だったんでね。ま、お前さんのおっ母さんもあつちに居るって事らしいから、これからお前さんを連れていってさ、おっ母さんに詫びを入れようと思って、今宇宙港に向かつてるところだ」

滉の説明に、青年はただ呆然と聞き入っていた。

「そ…そうなんですか…」

そんな彼を励ますように、何時もの人好きのする笑顔を向けて、アースから来た臨時の上司は言葉を続けた。

ただしその内容は更に青年に追い打ちを掛けるものだったが…。

「まあ…ね。泣くは喚くは、あげくの果てには裸踊りまでする始末だったがね。ま、正気に返って何よりだ。善かった善かった、おめでとう」

余りの衝撃に目眩がしてくる、両手で顔を覆ってうずくまった。

「は、裸踊り…俺、そんな事やつたんですか…？」

滉は真顔で頷いた。

「ああ、俺と魅羅の前でいきなり脱ぎだしたんだぜ。お前、腰の辺りに変な形の痣があるんだな。蝶々みたいなやつ。生まれつきか？」

もう駄目だ…。青年は絶望のどん底に突き落とされた気がした。

確かに痣はある。滉の言う通りの形の…

混乱して真つ白になってしまった頭の中で、軽蔑しきった表情で自分を見ている魅羅の顔が浮かんできた。何だかそれが酷く辛いことのような気がして、ドルフェスはうずくまったまま硬直してしまつた。

『滉さん！』

ふいにシャドウの声が飛んできた。涼やかな声のなかに、何時になく厳しい響きが含まれている。

ドルフェスは思わず顔を上げた。

『滉さん、悪戯が過ぎます。D・Dが困っているじゃ無いですか』スクリーンの中で、シャドウが強い目をして滉を睨んでいた。途端に滉が弾けるように笑いだした。身をよじらせて苦しそうに腹を

抱えている。

「悪戯…？」

呆氣に取られて青年が呟くと、目に涙を溜め、息を切らしながら滉が文句を言う。

「シャドウ、面白いところで水を差すなよ」

楽しそうに言い返す夫に、彼女はさらにキツとした視線を向けた。
『滉さん。部下を苛めてどうするの、可哀相でしょ。まあ…そうしたくなる気持ちも判るけど…』

「そうだろう？ 何せこの顔だ、いっぺんこういうのをしてみたかったんだ。おまけに絶対厭味は返ってこねえんだぜ、楽しいじゃ無えか」

『そついうのを、江戸の仇を長崎で取るって言っんです。滉さん意地悪だわ』

「そこまで言うかお前？」

「…あのう…」

何故か夫婦喧嘩を始めた二人の会話に、ドルフェスは恐る恐る割って入った。

「どういう事なんでしょうか？」

首を傾げる青年を振り返り、黒い目のなかに朴訥な光りを見た滉は微かにバツの悪い苦笑を浮かべて頭を掻いた。が、すぐににやりと笑ってドルフェスの肩を叩く。

「やー、悪い悪い。お前さんの寝顔を見ていたらどうにも我慢ができなくってね」

「それで…からかったんですか？」

「悪かった。すまん」

全然すまなそうでない口調で滉が謝った。口調だけでなく、顔にも仕種にも、罪悪感のかけらも見当たらない。

「けーぶ…」

ドルフェスは拳を握り締めて、自分が味わった絶望の何分の一かでも言い返してやろうと口を開いた。

だが、いつもの人好きのする笑顔を満面に浮かべて彼を見ているアース人の視線に会うと、青年の決心はヘナヘナと萎えていく。

思わず深い溜め息が出る。

「どうした？D・D。具合悪いのか？」

きょとんと覗き込んでくる顔が、色違いの魅羅と重なる。

似ている、顔以上に仕種と性格がそっくりだ。

順番から言えば、こっちが源で魅羅は遺伝になるのか…？

何にしても、好感を持つてしまう傍迷惑という、対処に困る性格には頭痛がしてくる。

ドルフェスは再び深く長い溜め息を付いた。

「D・D、ほんとに大丈夫か？ シャドウ、どうしよう？」

不安気に眉を寄せた滉は、まるで子供のようにスクリーンに伺いをたてた。

『存じません。滉さんが悪いんじゃないやありませんか』

津川家の中で、一人良識を持つているらしい奥方は、夫に冷たい返事をした。

シャドウの態度におろおろしている滉を見ながら、わずかに溜飲を下げたドルフェスは、軽く息をはいて首を振った。

「いいですよ。どうせ俺、俺にそっくりな誰かさんの代わりの、玩^{おも}具^ぐなんですから」

何となくいじけた台詞になったが仕方ない。

途端に滉の大きな手が、嫌というほど肩をどやしつけてきた。

「良く判つてるじゃねえか。お前さんの取り柄はその素直さだ。その面で可愛げの無え皮肉を言うようになったらお終いだぜ」

物理的な衝撃に激しく咳き込みながら、ドルフェスは、何時まで素直な気持ちで居られるんだろうか？ といぶかしんだ。まあ、滉や魅羅の傍迷惑はエミーの陰険さ加減よりずっとましだとは思うが。「そつえば、エミーはどうしたんですか？」

当て身を食らって延びていた同僚の行方を聞くと、シャドウの優しい声が返ってきた。

「私がお預かりしています。心配しないで、彼女は大丈夫よ」

シャドウは、ドルフェスが二日間殆ど眠っていたと教えてくれた。その間ドルフェスとエミーは、シャドウの用意していた安全な場所
で過ごし、エミーを残して二人は宇宙港に向かっていると
言った。

「宙港に本当に向かっているんですね。でもどうして？」

念を押すドルフェスに、小声で「皮肉か？」と言い返しながら、
混は青年の膝にばさりと何か放り出した。

ドルフェスがそれに目を落とす、薄黄緑色の表紙に“要人警備要項”と表書きの付いたファイルである。

「？何ですかこれ」

首を傾げるドルフェスに、今度は混が手短に説明をする。

サミット開催の先触れである視察団の構成メンバーで特に大物の人物が、予定を大幅に変えて、トサマールではなくコーチの此処、つまりベースシティへいきなり降りてくるのだという。それも単独で
通達は二日前、お蔭で議会も警察も上を下への大騒ぎになっているらしい。

「それで、愛しのナディーラから、俺達にも歓迎式典の警備に加わってくれと頼まれたんだ。よく読んでおけよ、俺達の警備担当は東ウイングの屋上とフロアだからな。ついでに、俺達の下に三十人程
配属される。お前さんにも十人位は面倒みてもらっぜ」

「お…俺？無理ですよそんなの」

「ただっぴろい宙港をベースと衛星都市の警察だけで警備するんだ
ぜ、人手が足りねえんだ。お前二日も寝こけてたんだから元気だろ
？」

決めつける様に言い放たれて、ドルフェスはこめかみを引きつら
せながら車窓の外に視線を泳がせた。

回りは相変わらずのどかな田園風景が続いていた。

柔らかな初夏の日差し、華やかで初々しい若葉の輝き。

ドルフェスは、落ち込んでいる自分を、あざ笑うかのような平和な
光景に、はつきり言っ
て八つ当たりな苛立ちを感じる。

向上心が無いと言われるだろうが、自分の様な警官になって2年にもならないペーペーに、10人もの指揮を取るなんて出来る訳がない。視線を落とし、膝の上の警備要項をばらばらと捲りながら、青年はそつと溜め息をついた。

10km四方の広大な宙港に点在するターミナルに、それぞれ約500人の警官が配置され、警備内容や指揮系統が細かく記載されている。

特に嚴重なのは、通称東ウイングと称される東方に位置する発着ターミナルで、此処だけ700人もの人員が置かれていた。この員数の中に、自分と混も含まれている事になる。

警備は建物の屋上から連絡用のリニアラインのステーションを始め、各作業室、管制塔、非常口は勿論のこと、作業員の休憩室、格納庫や果ては地下のパイプ室まで物々しい警備陣が敷かれていた。

呆れた事に、到着するVIPは、宙港から今度は航空機に乗り込み、直接迎賓館に入るのだが、その護衛に空軍の戦闘機が五機も付くことになっている。

いったいこれほどまでの警備をしなければならない人物とは、どういう人なのだろうか？

「警部、今日降りてくる人って、誰なんですか？」

首を傾げながらドルフェスが尋ねると、混は口をへの字に曲げて鼻を鳴らす。

「我儘な英雄だよ」

「英雄？」

ますます判らない。混はそんな青年に優しい笑顔を向けた。

ドルフェスの顔がほんの少し赤くなった。

「お前さん『鋼鉄の天使』って知ってるかい？もう一つの呼び名は『黄金の救世主』とか言われてたと思うけど」

「へ？あれ、何処かで聞いたことがある……」

「そりゃそうだ、学校で習うからな。アルタイル・アルナスルってのは覚えてるか？」

「ああ、共和国の建国の英雄ですよね、初代大統領の。どうも歴史は苦手で」

言い訳をしながら頷き、ドルフェスは合点がいった様に滉を見た。「じゃあ、今日のVIPってというのは、アルナスル家の人なんですね」

アルタイル・アルナスルを祖とする名門家は、今もアルゴル政府中枢にあつて、強い発言力を持っていた。

そして彼らは、セファート王国との繋がりも深い。アルタイルの夫人が、セファートの王族の出だったからである。

そんな名家の人物が来るのなら、この物々しい警備の訳も当然と言えた。

納得している青年に滉は、

「ああ、アルナスルもアルナスル。アルタイル・アルナスル御当人さ」

とさざりと言い放つ。ドルフェスは仰天した。

「え？ でも、その人二百年前の人でしょう？」

滉は情けなそうに溜め息をついた。

「お前さん、本当に歴史が苦手なんだな。アルタイルの享年って聞いたことあるか？」

言われて青年は首をひねった。

「さあ…？ 知りません」

「知ってるわけねえよ。まだ生きている。自分の国の元国家元首のことだぜ、しっかり覚えておきな。はつきり言つて、社会科も苦手なんだろっ？」

ドルフェスは赤面して頭を掻いた。

「面目無い…でも、長生きですねその人」

照れ隠しに笑いながら、ドルフェスは感心してしきりに頷いてみせる。スクリーンからシャドウの忍び笑いが漏れていた。滉は諦めたように肩を竦めた。

「アルタイルはパストアス皇家の血を持っているからな、銀河で最

も長命な政治家だよ。あいつの寿命はあと二百年はあると言われている。とつくの昔に第一線を退いちゃあいるが、まだまだ中央政府内ではあいつの発言は絶対命令並に扱われてるしな。もつとも、それを一番嫌っているのは、当の御本人なんだがね。その癖……」

銀河最高のVIPを、まるで友達のように言いながら、もう一度肩を竦めてみせる。

「都合のいい時だけ自分の立場を利用して、こんな我儘を押し切っちゃまうんだから。まったく、回りの者が苦勞させられるって訳だ」

「でも、もし彼が此処で暗殺でもされたら大変な事になりますよね」
「そう。お蔭で俺達まで駆り出される始末さ。おう、そろそろ見えってきたな」

滉の言葉に顔を上げると、田園は海で途切れ、その向こうに白く輝く尖塔がそそり立つ平坦な島が浮かんでいた。

ベースシティを宇宙と結ぶ玄関口。ミ・ラ・クルスレーナ（輝ける紋章）宇宙港である。

*

『既にご存じの様に。』

ミ・ラ・クルスレーナ宇宙港は、七つのターミナルと百基の離着床。それを取り巻く様に設置された航空機の発着レーンやリニアラインのターミナルなどによって成り立ち。

それらが、ミ・ラ・クルスレーナという名の表す通り、上空から見下ろした時に第一期入植隊のシンボルマークを形作っています。

まさに、トサマール星系で最初の入植があつた我がベースシティの歴史と誇りを表した宇宙港といえるこの場所に、今日、ついに、母星アルゴルの栄光が降り立ったのです。

建国の祖。絶対王政アルゴル帝国を倒し、共和国を打ち立て、現在の平和を築いた英雄。

アルタイル・アルナスル閣下。

生きながらにして、既に伝説そのものとなった偉人の到来は、我等ベース市民にとってまさに、ミ・ラ・ユルクルドナ“輝ける栄光の時”そのものといえるでしょう」

部屋の隅に置かれた誰かの携帯TVから、人気キャスターのドラマティックな声が響いていた。

「D・D。お前、東ウイングの屋上にいたんだろ？ 御一行様見た？」

警備モニターの画面を眺めながら、TVのアナウンスに聞き耳を立てていた男が、のんびりとドルフェスに声をかけた。

「いいや」

ドルフェスが首を振ると、彼は小首を傾げた。

「宙港組じゃあ一番近くて見晴らしのいいとこだったんだろ？」

「離着床までは遠かったし、式典なんかすぐ終わって、さっさと飛行機に乗り込みしまったよ。それに、俺は報道陣を抑えとくので手いっぱいだったからね」

シャトルの到着する東ウイングの屋上。離着床側をびっしりと埋めつくした報道カメラの群れを思い出して、ドルフェスは忌ま忌ましげに溜め息をついた。

いったい、何処からあれだけの数の報道陣が湧いて来たんだろ？ ベースシティのTV局の見慣れたマークだけではなく。恐らく惑星コーチの各都市のTV局やひょっとしたらトサマールからも来ていたかもしれない。

いずれにせよ昔も今もTV局を駆り立てている不思議な数字、視聴率のために、機械の目達は、墜落防止強化樹脂ドームの壁にへばりついていた。

その大群はそのままこの迎賓館の外門にバトンタッチされ、今度はホロカメラを捧げ持った星間メディアの記者達を加えて、特殊力場を巡らせた瀟洒な柵の向こうから、中で行われている歓迎セレモニーの様子を伺っていた。

カメラは様々な形をしている。

固定型もあれば、浮遊しているものやタイヤで移動しながら、ゆっくりと鎌首をもたげて回りを見回しているもの等、みなすべて、てっぺんに立てた小旗から、レンズの捕らえた映像を中継車のカメラマン達に送っていた。

ドルフェスは、警備モニターの映像と、TVの上に浮き上がった正面玄関のホロを見比べてみた。

TVの中では、実際にはそこに居ないレポーターが正門の前に立つて、今夜のセレモニーの内容を説明している。

『スケジュールどおりならば、今中では、アルナスル初代大統領への、歓迎の晩餐会がとり行われている筈です』

「当たり前だよなえ。その為にコーチ中の政治家が集まって来てんだよ。お蔭で俺達まで駆り出されて、おっさん達が飯食う姿を見せつけられるって訳だ。やだねえ」

男は別のモニターに写る会食の様子を指さして溜め息をつく。

「仕様がなさ、トレオン、これも仕事だぜ」

ぼやく同僚に、ドルフェスは苦笑した。

「こんな事警備員にさせろよ。警官の仕事じゃ無いでしょう？　って言いたいよね。でもさ、D・D。あんたも大変だよな」

彼は暇つぶしの愚痴を言いながら、モニターの画面をあちらこちらと切り換える。

「何？」

「病み上がりだったのに、も一遍入院する羽目になるし、病院は火事になるし、宙港とこつちを掛け持ちさせられるし。おまけに四六時中一緒なのが、ゲリラに殴り込み掛けたり、分署で化物と大立ち回りする様な物騒な兄ィちゃんだもんね。ホント、よく体が持つよね」

しみじみと同情してくれるのは有り難いが、火事も分署の騒動も実は自分が原因である。ドルフェスは引きつった苦笑を浮かべて凍りついていた。

「おんやあ？」

彼は妙な声を上げて、モニターの一つを覗き込んだ。

「どうした？」

ドルフェスの問いに、彼はモニターを指さす事で答えた。促されるままにドルフェスも覗き込む。

麗々しく着飾り、豪華な晩餐の席に着いた紳士淑女の中に、モセ署長のにこやかな笑顔が加わっていた。

「へえー。署長ってこんな席に出れるんだ」

「侮れない婆さんだね。見てよ、本部長官より席次が上だよ。前々からシティの上層部に顔が効くのは知ってたけど、ひよつとして、署長ってアルゴル本星のいいとこの出かもね」

確かに、そうでなければ一介の分署署長が出られるような席ではない。

「署長って凄いんだね」

感心する二人の男の後ろで、TV画面は今日十何回目かの、シャトルから降り立つアルタイル・アルナスル翁の姿を映し出していた。『ご覧頂いているのは、今日の到着の模様です。アルナスル初代大統領閣下は体調も良く、宇宙港での歓迎式典では、無事ベースに着けて安心した。この星の人々の心からの歓迎を受ける事が出来て嬉しい。』と述べられました。』

ホ口画像には、布を髪と紐に編み込んだシャルクタという正式な民族衣装に身を包んだ豊かな白髭の老人が浮かび上がり、にこやかに手を振っていた。ドルフェスの前のモニターには、同じ老人が主賓席に座っている。

高齡ではあるが、気品に満ちた容貌は、かつて至高の輝きとまで讃えられた美貌を忍ばせる。

しかし、柔和な微笑みを始終浮かべ、優雅でゆつたりとした所作を見せている姿からは、父殺しの汚名を敢えて被り、反乱軍を指揮して、銀河に名高い軍事帝国であったアルゴル帝国を転覆させた將軍としての姿は想像できなかった。

「これが鋼鉄の大天使か…」

混の言葉を思い出して、ドルフェスは呟く。

「へえ、D・D古い名前を知ってるねえ」

「うん、警部に教わったんだ」

「じゃ、これは知ってる？エルムリアの恋人達っての」

同僚の言葉に、ドルフェスは首を振った。

「有名なラブロマンスだよ。アルゴル帝国の崩壊と、その引き金になった銀河大戦の元凶になったのは、アルタイル・アルナスルとセファートの王女との恋だったってやつ」

「へえー」

「エルムリアってのはセファート王家の保養星で、昔そこで両国の和平会議が行われたんだけど、アルタイル・アルナスルと王女様がそこで恋に落ちて、その為に戦争になって、二人は引き裂かれた。

で、彼はその恋を貫くために驍進して、ついに戦争を終結させて、王女様と結婚にこぎつけた。と、まあ。女の子が好きそうな話だけどね」

ドルフェスはもう一度モニターの中の老英雄を見た。

「今からじゃ想像もつかないな」

「そうだねえ、こんな爺ちゃんになっちゃったらねえ。でもまあ、詳しい話はじきにTVですよ。あいつら当分この爺ちゃんを追いかけるだろうからね」

彼は呑気にそう言い放った。TVのキャスターは、まだ熱っぽく英雄を讃え続けていたが、一般庶民の意識はこんなものである。

「キユイ？」

不意に足元から声がした。

「ん？」

覗き込むと、ドルフェスの靴に片足を乗せて、銀色の奇妙な動物が見上げている。

「あれ、お前確かトリトンだっけ？ どうしたの？」

ドルフェスの問いに、トリトンは器用にドルフェスの膝を伝ってコンソールに飛び上がり、モニターの横に置いたインターコムを鼻

で押した。

「え？ 付けろっていつのか？」

「クユウ」

トリトンに促されてドルフェスはインターコムを取り上げる。

「可愛いねえ。それ何？」

同僚の問いに、ドルフェスは説明に詰まった。

「えーと、警部の飼い犬の子供」

「？ 犬には見えないよ、新種？」

「俺にも良く判んない」

首を傾げながらインターコムのスイッチを入れる。微かな呼び出し音のあとに、滉の元気な声が飛びだしてきた。

『おい、D・D、トリトンはそっちに行ってるか？』

「あ、はい。済みません、お呼びだったんですか？」

『いんや、たいした用じゃ無いから気にすんな。ただ、一寸やつてもらいたい事が有るんだ』

「はい」

『ちよつくら、トリトンの後について来てくれ』

「え？どこにですか？」

『来れば判るよ。じゃな』

笑いを含んだ様な滉の声色に、ドルフェスは一抹の不安をかき立てられながら立ち上がった。

「おや、お呼ばれかい？」

「うん、一寸行ってくる」

「物騒で綺麗な兄いちゃんに宜しくね、体を厭えよD・Dイ」

モニター室を出るドルフェスの背中に、同情を込めた励ましが送られた。

「有り難う」

礼を言いながらドアを閉めたドルフェスは、既に数メートル先で待っているトリトンへ足を向けた。

16 A・HERO・WORSHIP (後書き)

そして、その先には……

17 Promise to Meet Again — 再会 — (前書き)

トリトンが連れて行く先には……

トリトンは、ドルフェスの歩調に合わせて1メートル毎に振り返っては、早く来いと言いたげに顔を見つめてくる。

小さなオコジョに追いつこうと、青年は小走りになっていた。

「トリトン、何処へ行くんだ？」

聞いてもトリトンに返事を返す機能は無い。

苛だたし気に2、3度飛び上がり、廊下の曲がり角まで走っていつて、再び青年の追いつくのを待つ。

従業員用の通路をしばらく行くと、トリトンは非常口の前で立ち止まった。

「クウ」

「此処から出るの？」

「キユイ」

そうだと言いたげに、ドアの縁を前足で引つかいてみせる。親機という子機といい、滉の持ち物は人使いが荒い。

「判ったよ」

素直にドアを開けて外に出る。自然の森を模した裏庭の、ひんやりとした夜気が体を包んだ。

一見不用心に見える森だが、百を超えるセンサーと監視カメラが据えつけられ、表よりも更に厳しく警戒されている筈である。昼の説明だと、うっかり妙な所に踏み込んだら、容赦無くレーザーで撃ち抜かれると言うことだ。

あんまり有り難くない。

トリトンは青年の不安にはお構いなしで、どんどん森の奥に走っていく。

ドルフェスはこわごわと周りを見回しながら後を追った。

不意に森が開け、月明かりにトリトンの銀の体が煌く。

ショーウトの光を受け、発光しているかの様な輝きを放ちながら、小さなオコジヨは、空き地を走り抜ける。

そして、向こう端にそそり立つ一際大きな巨木の下に佇む人物の肩に駆け登った。

白いスーツを着た人影は、一瞬驚いたように黒い頭を巡らせて自分の肩に乗ったオコジヨを見つめ、片手を上げてその頭を撫ぜた。次にゆっくりと後ろを振り向き、トリトンの後から空き地に駆け込んで来た青年を見て、そこで凍りつく。

ドルフェスもまた、同じように止まっていたが、頭のなかでは、自分でも制御不能の嵐が巻き起こり、暴発した心臓の為に次第に体が震えてくるのを感じていた。

「け…けーぶ…？」

辛うじてそれだけ呟くのがやっとだった。

確かに、銀色のオコジヨを肩に乗せて、驚きの表情を浮かべて立っているのは、変装のつもりか、髪を黒くした滉なのだが、頭のなかでは違うという声がするような気がし、背丈も一回り小さいような気がする。

いや、それ以上に、月の光を浴びて立つ姿の美しさに、青年は息を呑んだ。

頬に生暖かいものを感じて、ドルフェスは慌てて顔を撫ぜた、手が濡れる。いつの間にか涙が出ている。頭の隅でいぶかしむのと同じ時に、この感情の嵐の正体を知った。

歓喜。

この人物を見て、自分は泣くほど喜んでいる。

どうしてだろう？

いけない、この儘では変に思われる。

何か言おうと思うのだが、体は完全に凍りついて思うように動きそうには無い。

月明かりを浴びながら、二人は暫くにらみ合つた形となつた。
止まつたような時間を最初に破つたのは、黒髪の滉だつた。

彼はやつとの思いで、束縛を振り払うように頭を振ると、つかつかとドルフェスの前まで歩み寄つてきた。

やはり高さが違う、青年はぼんやり考えた。滉は彼より目線が高いが、この人物の目線は青年より僅かに低い。

誰なんだろう？ 呆然とその端正な顔を見つめっていると、意気なり胸ぐらを捕まれ、同時に頬に激痛がはしる。

「！？」

横つ面を張り飛ばされた気づいたのは、折り返しでもう一方の頬を叩かれた時だつた。

「よくも…よくも今頃になって、のこのこと出て来れたわね！」
聞き覚えのある女の声が、耳元で弾けた。

「え？」

「今まで何処をほつつき歩いてたのよ！！」
両手で青年の襟首を握りしめ、渾身の力を込めて前後に揺さぶつてくる。

首を絞められたドルフェスは、必死にその腕を振りほどこうとしたが、自分よりもはるかに細い腕は、万力のように、びくともしない。

「くっ…苦しい…」

仕方なく両手をばたつかせてアピールすると、彼女は慌てて手を放した。

「あ、ゴメン」

久しぶりに流れ込んでくる新鮮な空気に、激しい咳を催しながら、青年はこの途轍もなく荒っぽい、滉そっくりの女を見た。

彼女はぐいと顎を上げて青年を睨み付けていたが、その白い頬は、何故か濡れたように光っていた。

「あのう…もしかして、津川光さんですか？」
恐る恐る尋ねてみる。

「他の誰だつてのよ。ふざけ無いで！」

「済みません」

相手の剣幕に思わず謝ってしまった。

青年を睨み付ける、滉と同じ金褐色の目に、始めて訝しげな光が刺した。

「？ …… あんた、誰？」

「そいつがドルフェス、今のところ俺の部下だよ」

あらぬ方から滉が言った。

二人が声のほうを向くと、さも嬉しそうなやにや笑いを隠しもせずに、木々の間から滉が現れた。後ろにアルゴルの服装をした金髪の方が続く。

「あんたの仕業ね……」

光の目が、剣呑な色を浮かべる。滉は、険悪な視線を平気で無視しながら、二人の前まで進み出た。

「滉、あんたこの坊やのこと、業と何にも言わなかったわね」

今にも爆発しそうな押し殺した声で光が尋ねる。

「そーだっけ？ 名前もどういふ奴かも言った筈だぜ、他に特別な事も無いし……？」

しれつとした態度で滉が答えた途端、光の手が白く閃いた。それが、頬に炸裂する寸前で軽く身を引いて受け流す。

「つとに、手の早えエ女だな」

にやにや笑いを浮かべたまま、滉が文句を言う。

光の怒りが爆発した。

「あんたの陰険さ加減よかったですわよ！ まったく、こんな野郎と一緒に生まれたかと思うと虫酸が走るわ！！ よくも人をコケにしてくれたわね！ この女つ垂らしのストコドッコイー！！」

「久しぶりに再会した兄に向かって、その言い草はねエだろう」

光の剣幕など何処吹く風で、滉はまだ薄ら笑いを止めようとはしない。

「出来ればもう少し後で会いたかったわ」

「だとさ」

光の答えを受けて、滉が後ろの男に笑いかけた。

「無論のこと、光は私との蜜月を楽しんでいたのだよ」

純白の民族衣装の男は、優雅な仕種で肯いて見せた。

月明かりに輝く、癖の無い黄金の髪を持った、恐ろしいほど冴え冴えとした美貌。

「坊っちゃん！！ 勝手な事言わないでよね」

ぎろりと、光が睨みつける。

「私は諦めないよ、何、時間だけはたっぷりある。色好い返事を待っているよ」

滉と同じく、光の剣幕を気にも止めずに、金髪の貴公子は優しくに微笑んだ。

ライトがこのささやかな空き地に光を投げかけ、彼の表情を顕にする。

滉や光もかなりの美形だが、坊っちゃんと呼ばれた人物は、本当に男かといぶかしむ程に優美で気品のある美貌の持ち主だった。

美しいが、不思議な感じのする男である。

ドルフェスは、はじめ、彼をもっと歳をとった男だと思っていた、口調や仕草、全体から漂ってくる雰囲気何となく老練な物を感じさせたのだが、こうして光の中ではつきりと見てみると、むしろ若々しく華やいだ印象を受ける。飛び抜けた美貌が、彼の年齢を希薄にし、シャドウの様な人外の美しさを醸し出している。

そこでドルフェスは、改めて彼の様子に気がついた。

形の良い唇に穏やかな微笑みを浮かべて、見ている方が圧倒されるほどの、威厳に満ち、光を湛えた彼の紺碧の瞳は、ぴたりとドルフェスに向けられている。

ドルフェスは、この金髪の貴公子の顔に、何となく見覚えがあるような気がし、微かに首をひねった。

「それにしても、いやはや、全く驚いたよ」

金髪の貴公子が溜め息と共に、呟いた。

「今頃こんな顔に出会うとは、竜造寺とはよほど強い縁が有るようだな」

余裕の有る微笑みの俤、彼はしみじみと言った。ただ、言葉の割には、表情にも仕草にも、かけらも驚いた様子は感じられない。「いくら似ているからだったって、こいつで兄貴の仇は取るなよ、別人なんだからな」

冗談めかして滉が言う。貴公子は、軽い笑い声を立てた。

「ははは、うっかり仇討ちなどをしたら、私が兄者にどやされる。第一、仇を討つならば、滉、真っ先にお前を殺しているよ」

奇麗な割には物騒な事を平気で言う。

「さアすが、殺戮兄弟の片割れだあな。言う事が違うねえ、ブラコンは治ってねエけど」

軽口を飛ばし合い、美形の男同士はからからと笑い合った。

「……ちよつと…そのホモダチコンビ」

額に青筋をたてているような光の低い声が割り込んだ。

「ひでえ事言うなよ、こいつと一緒にすんな」

「全くだ。閑吼ユルクやアレクスそれにアクアならば一考の価値は有るが、滉ではな。私にも好みというものがある」

「私の息子達を変な道に引き込まないでよ」

貴公子は、さも驚いた様に首を振った。

「知らなかった。三人は君と滉の子供だったのか」

「おゝそうになると、ギユネイが孫かあ。可愛げねえなあ」

軽口に乗乗して滉がせせら笑う。

ぐつと光の拳が握られた。

「楽しそうね…」

指の長い手が優美に閃き、貴公子はアルゴルの正式な礼、クシャリスタをしてみせた。

「気に障ったのなら謝ろう、我が愛しの君よ」

かつて皇帝へのみ送られた、最高の敬意を表す流れるような動作は、話についてゆけずにはうつつとしていたドルフェスの目にも、ど

きりとするほど華麗だった。

が、怒り心頭に達した光には何の効力も無かったらしい。

「誰が愛しの君よ。あんたが私を誰の身代わりにしたがつてるかよく知ってるわよ」

「そりゃあ、なげえ付き合いだからなあ」

のんびりと滉が茶々をいれる。

「滉、私は何も香花の身代わりに光を欲している訳では無いぞ。一緒にしたら香花が気の毒だ」

「なんですって？」

「ともかく、共に遠き地に旅立った愛しい者を思い続ける者同士、一緒になるのが一番だ、そうは思わないか？」

につこりと光に微笑みかける。蕩けるような視線を、真っ向から睨みつけて、光は軽く息を吐いた。

「アルバム代わりも御免だわ」

「つれない事を…」

光の冷たい言葉に、貴公子は悲しげに首を振る。

しかしその仕草には、どことなく楽しんでいるような嘘臭さが漂っていた。

不意に静かな鈴の音が木々の間に流れた。

貴公子の胸元を飾っている豪華な紋章の縁に付けられた鈴が、柔かな和音を奏でていた。

彼の指がそつと紋章を触る。

「どうした？」

「…」

貴公子の問いに幽かな声が答え、彼はゆっくりと肯いた。

「判った：全く、私が居らねば何も出来ぬのか。滉、光。すまないが戻らねばならない」

先程とは打って変わって、今度は実に残念そうにため息を付いた。
「では、これで」

軽く一礼して踵を返そうとする背中に、滉が声をかけた。

「アル、護衛も付けずに行くのはどうかと思うぜ」

滉の言葉に振り返った貴公子は、微笑みながら小首を傾げる。

「しかし滉、お前は光に用が有るのだろう？」

「ああ。だからさ、こいつ連れてけよ」

ぐいつ、と親指を突きつけられて、ドルフェスは途惑った。

「へ…？」

貴公子は、戸惑っている青年に、面白がっている様な目を向けた。

「ふむ、悪くは無いが。滉、どっちの護衛だ？」

「どっちでもいいんじゃないの。出来る方がやればいいさ」

呑気な答えに軽く吹き出して、貴公子はドルフェスの側に歩み寄った。

「まあ、久方振りにこの顔と歩くのもいいだろう。ドルフェス、来るがいい」

「ま、そういうこつた。D・Dよろしくたのまあ」

「は…はい」

おずおずと肯いたドルフェスに、それまで業と青年の顔を見ようとしなかった光が、弾かれたように振り返った。

「何それ！！」

「どうした光？」

「D・Dって誰よ」

今までの怒り方とは違う、酷く冷たい声音だった。

「こいつ」

様子の違ってきた光にも、全く頓着せずに、滉がドルフェスを指差す。

「あんたが付けたの？」

光の声はますます低くなる。

「うんにゃ、初めからそう呼ばれてたぜ」

光はゆつくりと肯いた。

「そつ。なら、あんたに少しでもデリカシーがあるんなら。…私の前で二度とこの坊やをD・Dなんて呼ばないで！」

悲鳴にも似た叫びとともに、ぎろりとドルフェスを睨みつける。
まるで親の敵を見るような冷たい目。

ドルフェスの胸の奥に、固く重たい石がずしんと乗せられた。

「言いたい事はそれだけよ。滉、あんたも行ったら？」

そう言い捨てて、光はさっさと森の中に入ってしまった。彼女の足元を擦り付く様にトリトンが続く。

「おい、光。待てよ」

挨拶代わりに手を挙げて、滉は光を追って行った。

森の中から、滉を罵倒する光の声と、のんびりと返事をする滉のそれが、ゆつくりと遠ざかっていく。

ドルフェスは双子の声を聞きながら、その場から動けずにいた。
この僅かな出会いの時間で、ドルフェスは、光が夢の女だ、という確信を持っていた。

確かに髪の色は違うが、ドルフェスには、あの黒い髪の陰に、燃え上がるような金褐色の輝きが隠されているのが、はっきりと解つた。

間違い無い。彼女こそ、長い間夢に見続けたあの女だ。

死の床から幽かな微笑みを返し、良くも悪くも、青年の心を捉えてきた、自分の夢の産物だと思ってきた女。

その彼女が、血肉を持った人間として、青年の前に立っていた。

夢の中の生き生きとした笑顔のどれよりも、更に生命力に満ち溢れた存在感を発して、彼女はそこにいた。

そして、彼を真正面から拒絶した……

ドルフェスの胸の奥で大きくなりはじめた、重く固い石の冷たさが、青年の心臓に鈍い傷みを与えていた。

自分が酷く情けなく小さな存在に感じられる。

この辛さは何だろう？ 失恋？ そうかもしれない。

「やれやれ、とうとう新月にしてしまったか。滉はからかい方の限度を知らんからな」

自分も一緒になつてからかっていた事など、さつさと棚に上げた貴公子が、ため息混じりに呟いた。

“新月にしてしまった”と言う奇妙な言葉に、去り際の光の、泣いている様な後ろ姿が重なって、成る程と思う。

月の女神は悲しみの為に姿を隠してしまった。自分が現れたせいだ…

不意にドルフェスは、胸の中の石の正体に気が付いたような気がした。

失恋の失望などではない、まして、絶望ですらない。これは…

——罪悪感…

石が更に重く冷たくなった。

「トウア・ドルフェス、もう行こう」

「え？」

貴公子の声で、青年は我に返った。

「私にも余り時間が無い。光も滉も、暫くすれば戻って来ようしな」促すように軽く顎をしゃくり、彼は迎賓館の方へと歩き出した。

貴公子に附いて歩き出しながら、ドルフェスはもう一度光の入っていた森を振り返った。さつきから、脳裏を離れないイメージが、木立の中に見える様な気がしたからだ。

それは、滉に縋り付いて泣いている光の姿。無言で背中を撫ぜている滉の胸に顔を埋めて、肩を震わせている。

——ああそうだ、あの双子は何時も、どちらが泣いているのか解らなくなる迄、ああやって相手の悲しみや苦しさを 飲み込み合ってきた。人前では絶対に見せない光の涙を、滉はどれほど受け止めてきたのだろう…光もまた同じだ。

何時から…？

そう、二人の母親が死んだ時から、双子は互いを支えて、時には意地を張り合い、寄り添ってきた。

…ああ…光は未だ泣いている。

声を殺して、嗚咽さえもひそめて……

意地っ張りめ、声を上げて泣いてしまえばいいのに、光は何時もあんな泣き方しかない…

「何だこれ…」

ドルフェスは、戦慄を覚えて思わず立ち止まった。今し方まで自分の考えていた事が信じられなかった。

「俺、どうしたんだ？」

双子の今までなんて知らない。母親の事なんて知るわけが無い。光の泣き方なんて見た事無い。なのに、何故、思い出して感傷に浸っているんだ？

第一、このイメージは何だ？ 光の髪が滉と同じ色で、二人ともまるで十代の様に若く思える。こんな二人を自分が知るわけが無い。これは誰の記憶なんだ？！

以前病院で、デ・ジャヴの示す、自分の物ではない記憶にぞつとした事があつたが、あの時はカイマン達から受けた毒の所為だと納得していた。

だが、今のはそうではない。

青年は今度こそ、自分の中に別の記憶が有ることを認めざるを得なかった。

「誰が居るんだ？」

思わず声に出して呟く。

「おや、やっぱり気が付いていたんですね、僕が居る事」
後ろから返事がきた。

「え？」

振り向くと、につこりと微笑んで魅羅が立っていた。

「魅羅さん…」

「お久しぶりです」

珍しく丁寧な口調で魅羅は軽く頭を下げた。

そして、微笑みを浮かべたまま近づいて来た。

「貴方に、ずっと逢いたかった」

「え？」

気が付くと、魅羅の顔がすぐ目の前にあった。

近々と改めて見ると、実に奇麗で品があつて、それに色っぽい。

「……あれ？ 何か違うぞ？」

ドルフェスは目の前の魅羅に違和感を覚えた。が、疑問を口にする前に、細い腕が首に巻き付く。

「え?!」

奇麗な顔がぐんぐん近づいて……唇に柔らかな物が押し付けられた。

「……えー?!?!?!」

心臓が爆発したみたいにテンポを早め、何時もながら突然の事態に対処しきれない青年の頭は、ささと真っ白になってしまう。

形の良い眉の下で軽く閉じられた目と、長いまつげが視界を独占している。

硬直した背中中に滑り降りてきた手に僅かに力が込められ、重ねられた唇から差し込まれた暖かい何かが、まるで味わう様に青年の唇の内側をくるりと撫ぜて、仕上げに一度強く唇を吸ってからゆっくりと離れていった。

魅羅は一步離れて、未だ硬直した儘の青年を見つめ、妖艶と言えるほど艶のある微笑みを浮かべてみせた。

今までの、青年の知っている限りでの魅羅には無い大胆な行動である。

「……うわーど?! どうしよう……」

停止した思考活動の中、目の前の魅羅から感じる違和感が、更なるパニックを引き起こし、ドルフェスは飽きずに硬直した儘じつと魅羅と見つめ合った。

「何だ、お前も出てきたのか」

貴公子が二人の側へ歩み寄り、魅羅に優しく笑いかける。

ついて来ない青年をいぶかしんで引き返して来たらしい。

魅羅は、貴公子に会釈を返した。長い黒髪がさらさらと音を立てて揺れ、ドルフェスに優雅な物腰を改めて見せ付ける。

——あれ？——

ここで初めてドルフェスは魅羅の服装が、何時ものパステルカラーのタイトスーツではなく、地味な色合いのメンズスーツだという事に気が付いた。

——似合ってるけど——

口さえ開かなければ、見た目はしつとりと落ち着いた大人の女性というのが魅羅である。

加えて男物のスーツが知的な雰囲気醸しだし、何よりも、今夜の魅羅はたおやかで色っぽい。

そう、ここが違う。

どうにか頭が少しずつ動き始める。

目の前の魅羅と、いつもの彼女との違いを考える青年の横で、貴公子がにこやかに口を開いた。

「その様子だと、ドルフェスへの挨拶は済んだようだな、ユルク閑吼」

——え…？ 閑吼…？——

改めて、目の前の人物を見る。

やはり何処から見ても魅羅である。だが、とても色っぽい。

「 閑吼は私の兄よ、お医者さんなの。 」

以前魅羅が言った言葉が脳裏を過ぎる。

「 閑私の兄よ 」

——兄っていったら——

再び衝撃が襲ってきた。

背中に悪寒が走り、思わず口を押さえて後づさる。

狼狽する青年を見て、貴公子は片眉を上げた。

「ふむ、中々情熱的な挨拶だったらしいな」

真面目とも冷かしとも取れる言い方に、閑吼は妖艶に微笑んで見せた。

「これは、お褒めに与かり光栄です」

そして再びドルフェスに向き直り、青年が更に2歩程後ずさるのを気にも止めずに、今度は軽く会釈をした。

「自己紹介が未だでしたね、僕は津川閑吼。魅羅の兄です。どうぞ宜しく」

ドルフェスは、閑吼の微笑に怯えながら、小さく頷き返した。閑吼がくすりと笑う。

「ところで、どうしてこんな所までお前が出てきたのだ？ エゼルはどうした？」

貴公子の問いに、閑吼は足元に置いてあったケースから、一振りの刀を取り出した。

半円を描く様に彎曲した円月刀である。

このタイプの刀によく見るような派手な装飾は無かったが、柄や鞘に見事な彫刻と象眼が施されており、かなり値打ちのある物だろうと思われた。

「これを御前にと…」

閑吼の言葉に、貴公子の顔に氷の様な微笑みが浮かんた。

「ライファンからか…？」

「はい、すぐに御入り用になるだろうと。エゼルは彼を守ってくれています」

奉げ持つ様にして閑吼が差し出した刀を受け取ると、貴公子はゆつくりと肯いた。

「判った。楽しみだな」

閑吼は貴公子に礼をするとケースを持ち上げた。

「では僕は、父達に伝えてきます」

2、3歩歩きかけて、閑吼は未だ真っ青になっているドルフェスを見て足を止めた。

「有り難う。お陰で、永年の夢が叶いましたよ」

再び極上に妖艶な微笑みを送ってよこし、柔らかな髪をなびかせて、閑吼は森の中に消えていく。

惚けた様に後ろ姿を見送っていた青年は、貴公子の含み笑いで我に返った。

「あ…あの、俺…」

「トウア・ドルフェス、お前は気にしないで良い。あれの挨拶は、竜造寺へ送られたものだ」

その言葉で、ドルフェスは真っ赤になった。

閑吼が、自分を竜造寺では無いと知っていながら身代わりにしたから。

「か…彼は知っていたんですね、俺の事」

「ああ。私と共に、滯からお前の映っているモニターを見せられたからな。あ奴め、余程人が驚く姿を見たかったらしい。確かに、あれほど驚いた閑吼の顔を見たのは初めてだったな」

面白そうに肯く貴公子を見ながら、青年は頭を抱えた。

頭の隅を、呆れた様な視線の魅羅の顔がかすめる。

生まれて初めて男にキスされたショックから、まだ立ち直れそうに無い。

おまけに其れが竜造寺の身代わりときた。

「いつたい、竜造寺龍也って何なんだ…？」

思わず呟いた言葉を受けて、貴公子が再び肯く。

「その気持ちはよく判る。まこと、津川の家の人達にとって、竜造寺はどれほど大きな存在になっているのやら」

「貴方は、竜造寺龍也を御存じんですね」

貴公子に話しかけて、ちらつと彼の名を知らない事が気になったが、今はそんな事に構ってはられない。

「教えて下さい。彼はどんな人だったんですか？ シャドウさんや魅羅さんから、色々と伺いましたが未だよく判らないんです」

青年の真剣な問い掛けに、貴公子は軽く笑った。

「其れは二人の言う事がそれぞれ違っていて、どれが本当の奴の姿か判らぬと言う事か？ 其れならばダフネの言う事が最も正確だ。

あれは物事を客観的に見ることで出来る女だからな。それとも、光魅羅、閑吼。この三人が、あの男に何故に恋い焦がれているのかか判らぬのか？」

「恋…」

貴公子に逆に問われて、思わず言葉に詰まる。魅羅の夢見る様な顔。D・Dと聞いたときの光の怒り。妖艶な閑吼の微笑み。それらが頭の中をぐるぐると回り出して、何だかむかつ腹が立ってきた。「俺が知りたいのは、恋だのとかそんな事じゃなくて。俺…彼の所為で何か訳判らないんですけど、ずっと命を狙われているんです。その訳が知りたい。化猫達は、俺を見る度にDragon Makerと言って殺しに来る。俺は竜造寺じゃ無い。理不尽ですよ。顔が同じってだけで何でこんな目に会うんです?! 拳げ句…」

酷く惨めな気分になって、後は続けられ無い。

「光には竜造寺では無い事で腹を立てられ、閑吼には身代わりで口づけをされる。…確かに、竜造寺は居ても、ドラゴ・ドルフェスは何処にも居らぬな」

優しい静かな声音で、憤りの核心を突かれて、青年は唇を噛んだ。「猫共の事は知らぬが。津川の方は許してやる事だ、光はもとより、閑吼も悪気でした訳では無かるう。ただ竜造寺への思いが強すぎただけだ。第一、滉や魅羅は、今まで一度でも、お前を竜造寺として扱った事は有るまい?」

確かにそうだ、二人とも、始めに驚きはしたが、後は自分をそのまま受け入れてくれた。それはシャドウも同じだった。だからこそ、青年は滉達を信じてこれたのだ。ドルフェスはゆっくり肯いた。

「津川の者達は、どう仕様も無いほどの悪戯好きな上、多少家族で纏まり過ぎて排他的な所も有るが。決して人を踏みつけたり、蔑ろにする事は無い。トウア・ドルフェス。今までのように津川を信じてやれ。彼等に出会えた事は、お前にとって何よりの幸運だ」

指の長い手がそつと肩に乗せられた。ドルフェスにはその手गतても暖かく感じられ、その暖かさがじんわりと心に凍み込んで来るような気がした。

少なくとも、ここにも自分をそのまま受け入れてくれる人がいた。「そうですね。俺、竜造寺龍也に焼き餅を焼いていたみたいです。有り難うございます、愚痴を聞いて下さって」

ぺこりと頭を下げる青年に、貴公子は慈愛に満ちた優しい微笑みを向けた。

「それで良い、トウア・ドルフェス」

鷹揚に肯く貴公子の顔に、ふと、母、アンジェラを思い浮かべる。似ている所は髪と目の色ぐらいなのだが、青年を見つめる碧い瞳に不思議な親しみやすさを感じる。その瞳が、悪戯っぽい笑みに細められた。

「しかし、私に言わせれば、津川の者達が何故に、あれ程まで竜造寺に執着するのか判らんよ。あ奴の毒舌は、本当に腸が煮えくり返る。叩つ斬つてやろうと決心したのも、一度や二度では無かったぞ」
「そうなんですか？」

青年が黒い目を見張ると、貴公子は再び肩に手を乗せた。

「お前の美德は、その素直さと忍耐強さだな。それに、分を弁える事も知っている。良い育ち方をしたのだな」

不意に褒められて、ドルフェスはどぎまぎして頭を掻いた。

「あ…いえ…どうも…」

貴公子は微笑みを深めながら、肩に乗せた手をすつと腰に滑らせた。

「え?!」

「だがまあ、過去の人間である竜造寺に思い煩うよりも、今我々が為すべき事を考えねばなるまい。トウア・ドルフェス、覚悟は良いか？」

腰の手にぐつと力が込められ、体が引き寄せられる。ドルフェスは貴公子に抱きかかえられる格好になった。

「え? あの、ありません! 覚悟なんて何にも無いです!」

真つ赤になって、逃げようとする青年を、片腕でがっちりと捉えたまま、貴公子は何やら口の中で呟き始めた。

「ラス・パステイアルス…パルドアルナ…アティヤエルドオン…
私の求めに応じ、扉を開け」

碧眼がかつと見開かれ、金の髪が扇の様に広がり、次いで淡い光

を放ちはじめる。

——え——

ドルフェスは信じられない面持ちで、貴公子と自分の体を見比べた。

ぼんやりとした光が貴公子の全身を包んでいき、爪先まで包まれると、ふわりと浮き上がる。当然、抱きかかえられている青年も一緒に浮いて行く。

「わー!!」

慌てて手足をばたつかせ、何とか異常事態から逃れようと試みたが、青年を捕まえた貴公子の腕は、見た目よりも筋肉質でがっしりとしており、相変わらず微動だにしない。

「トウア・ドルフェス。余り暴れると舌を嚙むぞ」

楽しそうな貴公子の声が、耳元で囁く。

二人の体は加速をつけて上がって行き、既に大木の梢に手が届く程迄になっていた。ドルフェスは諦めて、と言うよりは、高所への恐怖から貴公子にしがみついた。

「よし、しっかり掴まっておれ」

梢の最上の葉が足の下を通過した所で、二人は静かに停止しする。

「此れぐらいで良からう。ライフアン!!」

誰かの名を呼び、胸の紋章に軽く触れる。

「客の様子はどうか？」

『三々五々お集まりの御様子です』

低い幽かな声が答えた。貴公子の口元に冷たいだが楽しそうな笑みが浮かぶ。

「よし、全員が入るまで何もするな。判つていようが、この晩餐会に出口はないぞ」

『もとより承知』

貴公子は、肯きながら迎賓館に目を向けた。この高さからは、三つの月からの光を浴びている屋根の連なりと尖塔、そして建物の中

央の屋上に設えられた広いテラスが見える。

そこから奥の更に一段高くなった屋根の向こうが、ぼんやりと明るいのは、さつきまでドルフェスが見ていた、正門に詰めかけた報道陣のライトだろう。

「表の野次馬や、中の者達には気どられるな。夜会の邪魔をしては、アルタイル・アルナスル殿下に悪いからな」

『承知しました』

幾分皮肉を込めた貴公子の声に、相手は冗談を聞いたと言いたげに、笑いを含んだ返事を返してくる。

『もてなしの支度は整っております、御指示を』

ライファンの声に促される様に、貴公子は再び紋章に触れた。

「ウル、客の出立は如何だ？^{いって}」

『賑々しく正装なさった方々が30名様、何の装いも為さってない方々が15名様程という所ですな』

ライファンとは別の声が答えて来る。

押し殺したような囁き声だったが、妙に楽し気に弾んでいる。

「素っピンはどうせ猫だろう。オイス達の担当だ。お前達は礼儀正しく着飾った連中の接待だ。粗相の無い様にな」

『承知仕った。御前。其方の首尾は？』

「上々だ」

貴公子が満足そうに微笑んだ。ここへきて、ドルフェスはやっとこの会話が何か物騒な事の準備だと判ってきた。

「あのう…何が始まるんですか？」

恐々聞いてみる。ドルフェスの声に、ウルが嬉しそうな声をあげた。

『おお、御前。其方の御方が御曹司ですな』

いきなり妙な事を言われて、ドルフェスは面食らった。

「へ？御曹司？いえ、俺、ドラゴ・ドルフェスですけど…」

何処ぞの坊っちゃんの間違われているらしいので、慌てて名乗ったが、相手はそれを冗談だとしても受け取ったらしく、軽い笑い声ま

で聞こえてきた。

『ドルフェスとは？！　なんとそのままではありませんか。アンナシエ……』

「ウル」

何かを言いかけたウルを、貴公子が遮る。

その声音に、らしくも無く慌てた様な響きを感じて、青年は貴公子の顔をそつと盗み見た。しかし、月明かりを受け、自らも淡く光っている超然とした顔には、何の表情も現れてはいない。

「無駄口を叩いている暇は無いぞ」

『申し訳無い。御前、お許しを』

「まあ、良い。そうそう、喜べ、滉も参加するそうだ」
小さく口笛が聞こえた。

『地獄の太陽神が手伝って下さるとは、有り難い限り。警備主任も心強いでしょうね。ま、どうせ騒ぎを知らん振り出来る人じゃ無い
か』

「当たり前だ、あれは歩く騒動だからな」

ドルフェスは貴公子の言葉に、思わず吹き出しかけた。

どうやら滉は、何処でも物騒だと言われているらしい。

『所で、御前。此処から拝見いたしますと、何やら得体の知れぬ物が空に浮いておりますが？』

ライフアンの声が割り込んで来た。貴公子が眉をひそめる。

「無礼者。私だ」

『左様で御座いますか、此れは御無礼を。しかし、御前は、確かこちらに御出でになって指揮を御取りになられる筈と伺っておりますが。手前の記憶違いでしょうか？』

慇懃に聞いて来るライフアンに、貴公子はにやりと笑った。

「そんな事、信じてはおらなんだ故、閑吼に剣こるぎを持たせたのだろう？」

『とんでもない。あれは護身用です。お客様は皆様、御前に御会いするために来られているのですからな。それに、御前はよく行方知

れずになるのが得意でいらっしやるから、素手ではあまりにも不用心と思ひまして』

貴公子は煩そうに短く息を吐いた。

「私は此処で指揮をとる。異存はあるまい」

『はい、そこで指揮を御取りになられるのですな？』

「そうだ」

くどい、と言いたげに貴公子が眉を寄せる。

『重ねて御伺いたします。そこで、《指揮だけ》を、御取りになられるのですな？』

ドルフェスは、ライフアンがにやついている様な気がした。

きつと彼は、貴公子が何をしたいかなんて、最初から判つていて厭味を言っているのだらう。その証拠に、貴公子は苦い物でも口に似た様な顔をしている。

「ライフアン。それで、客はどうなっている？」

『皆様御入場なさったよし。ヤーユアイとイルダナフより入り口を閉めたと伝えて参りました』

気を取り直したらしい貴公子が、ゆっくりと肯いた。

「よし、我々の夜会を始めよう」

これでメインキャラが出揃いました。

閑吼と光がやつと登場です。

Angel cry とお父さんと一緒に、を読まれた方には、キャラを比べてみてください。

18

A F U L L H O U S E

満員御礼

そして、血と炎でもてなす晚餐は始まった。

ぴん！ と空気が張り詰め、青年はうなじが逆立つような奇妙な感覚を覚える。

回りの景色が一瞬歪んだ気がし、ドルフェスは思わず頭を振った。
「どうした？」

貴公子の問いに、高所恐怖のせいと笑われるかとびくびくしながら、自分の感じている事を言つと、彼は感心したように微笑んだ。

「是を感知する者が居るとは驚いたな」

「どういう事ですか？」

貴公子が開いている手をひらひらとさせて周りを示した。

「この裏庭一帯に、次元シールドを被せたのだ。極々薄いものだから猫共にも気付かれてはおらん筈だがな、お前が気付くとは思わなかった」

「次元シールド？」

聞き慣れない言葉に青年が首を傾げる。

「つまりだな、位相空間を虚数関数曲線に沿って歪め、任意のフィールド内に展開させ……」

楽しそうに説明を始めてくれたものの、聞いたほうが余計判らなくなった。

耳を素通りしていく数式や数値に、ドルフェスが目を点にしていると、貴公子は小さく笑った。

「まあ、平たく言えば、異次元空間を薄く引き延ばして、椀の様に此処へ被せたと言ったところだな。D・V製の特注だ、通常のシールドでは猫に逃げられるからな」

平たく言えるのなら始めから言ってくれば、余計な恥をかかず

に済んだのに。少し恨めしく思いながら、ドルフェスは、D・Vという名に、例によって懐かしさを感じていた。

これは何なんだろう？ 自分の中に居る誰かのか…？

青年は貴公子を見た。彼ならば、自分に答えをくれるだろうか？
「これから何が始まるんですか？」

自分の奇妙な記憶はひとまず置いて、ドルフェスは当座の疑問を貴公子に尋ねた。

「夜会だ、もう判っているだろうが猫共が私に会いにやって来るのでな、皆で心ばかりのもてなしをするとところだ」

つまり戦闘開始と言う訳らしい。

「貴方を狙って？」

「ああ、お前目当ても居ると思うが、大半は私だろう。特に盛装した奴等にとっては、私の首を取ることが、最大の望みだろうよ」

「なぜ…？」

怪訝な顔をする青年に、貴公子は凄味のある冷笑を浮かべてみせた。

「私が奴等を裏切ったからだ」

「え…？」

意外な言葉に青年が目を見張った途端、犬の遠吠えが響き渡り、左の森から火柱が立ち上がった。

「えっ!？」

続いて雄叫びが上がり、矢継ぎ早に立ち上がる火柱の間を、無数の光線が交差する。

「ファンファーレが鳴った。ディナー 晚餐を始めよう。アストロン 厨房部隊、アペタイザー 前菜を出

せ、カップベアラー達はワインの給仕を始めろ」

『承知』

貴公子の指示と共に、足元の森は俄に騒がしくなった。

あちらこちらで光線が閃き、小規模な爆発が起こる。犬の遠吠えは休みなく続き、左手の森に、木々を焼きつくしながら、火柱は何本も立ち昇った。

「ひよつとして、ネプチューン？」

聞き慣れた声に青年が首を傾げる。と、貴公子が笑い声を上げた。
「わんわん啼きながら火を噴く車は、他には居らんだろうな。滉が遊ぶのに、ネプチューンを除け者にするはずがないだろう？」

言われてみればその通りだ、ネプチューンは実に楽しそうに啼いていた。

きつと例のブラスターが、ボンネットから誇らしげに光っているに違いない。

それにしても、こんなに派手な戦闘をして、迎賓館の中に居る地元警察の警備担当班や、表の報道陣に気がつかれない道理がない筈だ。

今夜の夜会はアースのフランス式だと嘯きながらスूपとサラダを指示し、支配人^{メイトル・ソル}にコースの進行を託し終わった貴公子に、自分の疑問を聞いてみた。

「此処と向こうは、次元が違う」

簡単な返事だった。

「シールドの為、ですか？」

「そうだ、此処で何をやろうと、向こうには爆発の火などは見えな
いし、音や振動さえも伝わらん。向こうから見ればここには何もな
い。暗いだけの場所だ。そしてこちらから見れば、あそこの中には
間違いない平和だけしかない、目隠しをされた、偽りのものだがな」
皮肉を込めて貴公子が微かに笑う。

その微笑に、奇妙なほど歳を経た雰囲気を感じて、青年は改めて、
年齢の判らないその横顔を見つめた。

一際高くネプチューンの雄叫びが響きわたり、わりと近所の樹が
燃え上がりながら倒れていった。

明日、この裏庭を見た管理担当者は、真っ青になるに違いないな
などとぼんやり考えていると、その炎の中から、二つの影が空中に
飛びだした。

大きく弧を描きながら空中で交差し、金属を激しく打ちつけ合う

音が響く。

炎に照り映え、燃え上がる様に輝く髪が、一方の人物が誰かを教えていた。

「！？警部？」

滉の姿はすぐに森の闇へと落ちていった。

「楽しそうだな」

貴公子が幾分うらやまし気に呟いた。

再び影が跳躍し、交差する。炎に浮かんだ影は、コスタと同じぬめぬめとした肌の化け物だった。

「出来損ないだな。あれ位ならすぐ終わる」

貴公子の冷静な声の通り、滉の攻撃を受けた化物は、撃ち抜かれた鳥の様に力無く墜落していった。落ちてゆく骸を、ネプチューンのブラスターが捕らえ、火達磨にする。

「出来損ないって何ですか？」

「まともな猫では無いと言うことだ。証拠に毛がない。戦闘力もかなり落ちる。此処のように制限の無い場所ならば、滉の敵では無いな。そら、もう一匹」

炎に追いつ立てられるように、無毛の化け猫が跳躍した。続いて滉が飛び、ネプチューンの火球が数発、滉の脇をすり抜けて化け猫の近くで爆発した。

爆風に煽られてバランスを崩した化け猫に滉が迫り、手に持った横に握りの付いたくるくる回る短めの棒——トンファーだと貴公子が教えてくれた——を首筋に打ちつけた。

撃墜された化け猫をネプチューンが焼きつくす。

更に2匹の化け物が、降りてくる滉を迎え撃とうと木々の間から飛びだしてきた。

「危ない！」

思わず声が出た。

「大事無い。滉に取っては願ったりだろう。ほら」

確かに、落下中の動きがとれないところを狙われたはずが、滉は

空中でくるりと体を丸めて化け猫達の爪をかくぐり、やりすごした瞬間、肘とトンファーを後頭部にたたき込んで止めを刺した。

粉碎された頭蓋骨が、グニヤリと歪んでいく。

同時にネプチューンのブラスターが2匹を捕らえる。刹那程の短い時間だった。

「凄い……」

犬の群れを相手にして、あっという間に倒してしまった時を思い出す。

あの時も並の人間ではないと思ったが、今、本格的な滉の戦闘を見せつけられると、彼が味方だということがどれ程心強いかが有り難がった訳が良く判る。

「なに、滉はまだまだ遊んでいる。ほら、まだお人好しの顔で笑っているだろう？」

貴公子がからかうように言った。

「暗くて見えません」

貴公子に馬鹿にされている様な気がし、かすかにむっとして、青年は答えた。

「そうか、お前には未だ、私の眼力は備わっていないのだな」

妙なことを言われ、青年は首を傾げた。

「貴方の眼力を、何故俺が持つんですか？」

青年の問いに、彼は品良く首を傾げてみせた。

「今に判る。トウア・ドルフェス」

何だか思いつき子供扱いされた様な気がした。

考えてみると、彼がさつきから自分の保護者面をしているのは何だろうか？ そう、憤っている自分を宥めた態度は、まるで自分の子供をたしなめてでもいるかの様な感じだった。

どうして彼はこんなふうな態度で接してくるのか、第一、何で彼は、自分をトウア・ドルフェスと呼ぶんだだろうか？

貴公子に不愉快なものを感じて、ドルフェスは下の森に視線を落とした。このまま貴公子と顔を突き合わせていると、腹立ち紛れに

どんな暴言を吐くかも判らない。

アルゴル人社会で育ったドルフェスには、人前で自分を出すのは失礼だとする昔ながらの習慣が根強く刷り込まれていた。それは、個性を強調するアース人社会に移り住んだ今でも、青年の意識の根底をささえている。

まあ、お蔭で人前ではつい構えてしまうので、取っつきにくいと、以前ゾルゲに言われたものだった。

そんな青年にも、堪忍袋の緒が切れるときは有る。今夜は色々ありすぎた。先刻の憤りも、貴公子に宥められたからといって消えたわけではない。

実のところ彼に愚痴をこぼし続けても意味がないし、彼の優しさを嬉しく思い、親身になって話してくれているのに、何時までもこだわっていたら失礼だと思って、取り合えず引っ込めただけだ。

閑吼には芯から腹を立てていたし、光の言ったことも、今だにある罪悪感と夢の女への思いを無視すれば、理不尽だと思っていた。実際此处で、あと一つか二つからかわれれば、森のなかでの光ではないが、今度は自分が激怒する番だろう。あんまりそんな事はしたくない。

そこで青年は、森のなかでの戦闘に意識を逸らすことにしたのだった。

そんなドルフェスの目に、今度は銀色の死に神に良く似た化け猫の姿が飛び込んできた。森の樹の枝を伝って、ドルフェス達の足元近くまで迫ってくる。

その影を追って、滉の白い姿が、同じ様に木々の間を縫って飛ぶ。その身のこなしは、常人に真似出来る様なものでは無かった。自分なら、まず樹の枝まで飛び上がる事も出来ないだろう。

妙なことで感心していると、近づいてくる化け猫をもう一匹の化け猫が攻撃した。

「あれ？」

目を見張る青年の足元で、2匹の化け猫は絡み合って地面に激突

し、飛び離れて双方睨み合う。再びもつれるように激しく攻撃を交わしはじめた。

「どうなっているんだ？」

あっけに取られて見ていると、同じように立ち止まっていた滉が、こちらを見上げて、何やら大きくジェスチャーをしはじめた。

ドルフェスには、そのジェスチャーの意味が何となく判った。

「やい、何て事するんだ人非人……て警部言ってますよ」

ドルフェスの言葉に、貴公子は本当に驚いたように目を見張った。実際こんなに驚いた顔を見るのは始めてである。

「お前、滉の手話が判るのか？」

「手話？ いえ、手話なんて知りませんけど、そんな気がしたんです」

訝しげに見つめ返してくる青年に、貴公子は初めて見たという様な視線をよこしてきた。が、其も一瞬のことで、また何時もの超然とした微笑に戻る。

「滉の使っているのは、現代の銀河標準語ガラクタに置き換えられた手話ではなく、大昔、アースの一地方で使われていたものだ。今では津川の暗号として使われている。あれを読めるのは、私達と津川の者だけだが、お前の勘はたいしたものだな」

本当に感心した様に言われて、青年は首を傾げた。

「判りません。俺、この頃変なんです」

青年の言い訳に貴公子は微かに目を開いた。

「どんな風に？」

問われて、素直に話してしまおうかとドルフェスが躊躇したとき、別の化け猫が足元の巨木を駆け上がった。

「来た！」

思わず悲鳴のような声を出してしまった。だが、貴公子は動かず、遙か下に居る滉さえも動かない。

化け猫のかつと開かれた顎あでこを見て、青年が胸元に忍ばせた拳銃を取り出そうともたついた時、化け猫の首に、何か細い紐の様なもの

が巻きついた。

化け猫は首に巻きついた紐に引かれて、グンっと空中に巨体を踊らせ、断末魔の悲鳴とともに、その首が胴体から切り離される。

「滉！ 護衛の助っ人やってるんなら、ちゃんとやってよね」

聞き慣れた声がすぐ近くで弾けた。

「光さん……」

声の方を見ると、光が化け猫並に巨大な動物に跨がって宙に浮いていた。

「遅かったな光」

貴公子に、光は肩をすくめて見せた。

「私も忙しいのよ。ところで、オードブルからスープまで終了、メインディッシュを出す？ 肉切り（カーヴアー）達が手ぐすね引いて待ってるわよ」

そう言いながらにっこりと笑う。

先程の激昂は影もなく、戦闘で高揚した彼女は、夢の中での笑顔以上に輝いていた。

どきりとする。

この笑顔も、自分に向けられるときには、また、冷たい視線に取って変わるだろうと思ったのだ。

それを見るのはとても辛い。

だが、青年の懸念は杞憂に終わった。光はドルフェスに目を向け、更になにっこりと笑ってみせた。

「拳銃、出しといたら？ 今みたいな時、すぐに撃てないでしょ？」

「あ……はい」

慌てて拳銃を引っ張り出すと、光はけらけらと笑い声を上げた。笑い方が魅羅に似ている。

「シヤドウの言ってた通り、本当に素直ねえ。家の亭主とはえらい違いだわ」

一人で納得して頷きながら、また一仕切り笑う。笑うタイミングまで魅羅と同じだった。笑うだけ笑うと、光はすっと表情を引き締

め、まっすくに見つめてくる。

「D・D、さつきは御面なさい。滉の悪巧みに引つ掛かったお蔭で、あんたに八つ当たりしたわ。とんだ迷惑だったでしょ？ 本当に御面なさい」

意外なほどあっさりと謝られ、おまけにぺこりと頭まで下げられて、ドルフェスは狐に摘まれた様な気分になった。

それに、D・D……？さつきは滉に、自分の前では二度とそう呼ぶなとまで怒っていたのに、この変心振りは何なんだろう……

「あー、すっきりした。後味悪かったのよね」

光は嬉しそうな笑顔に戻った。

「さつきは頭に血が昇っちゃっててね、私って、腹が立つと見境ないのよ。ほんとに。何もかも滉が悪いのよ、それに坊ちゃん。あんたも同罪だからね。滉と一緒になって出歯亀してるんだから。まったくもっ……丁度下に居るし、一発どついて来るわ。すぐ戻るわ、じやあね。アレス、GO！」

光は言い訳のように一人で喋りまくると、そのまま巨獣を駆って下へ降りていってしまった。ドルフェスは茫然とその後ろ姿を見つめていた。

訳が判らない。

本当に、さつき怒っていた人と同一人物なんだろうか？ またそっくりな別の誰かが、光を名乗って現れたのでは無かるうか。

印象のあまりの違いに、青年が戸惑っていると、貴公子の忍び笑いが体を伝ってきた。

「さすがに照れくさいらしい。逃げていきおった。トウア・ドルフェス。あれが、光だ。怒り狂ったかと思えば、次には笑っている。頑なに意地を張り通す癖に、自分の非に気づけば、あの様にすこぶる素直に謝ってしまう。変幻自在。滉とはまた、別の形で掴み所の無い女だ」

貴公子は笑うために少し言葉を止めた。

「怒れば烈火の如く、微笑めば春風の如く。貴婦人から端っ葉、超

一級の戦士まで、月が姿を変える様に、くるくる変わる。それが本当のあの女の顔なのか、本人にすら判つてはいないだろうな、まったく気まぐれで振り回される。だが実に魅惑的だ。難を言えばちと気が短い事か。あの女と付き合つていくには、多少の覚悟が要るだろうよ。まあ、退屈はしないがな」

以前シャドウが光を評して、とても魅力的な人と言っていた。確かに、ある意味ではそうかも知れない。

あの、人を引きつけずにはおかない生命力に満ちた笑い顔、視線を捕らえたら放さない金褐色の瞳。夢の中の光と同じ……いや、それ以上に美しかった。

ふと、魅羅の顔を思い浮かべた。顔つきは良く似ている。だが印象は正反対だ。

魅羅は滉と同じ天中高く輝く太陽を連想させる。

光はまさに月だ、暗黒の虚空に白い炎を燃え盛らせる。

——そして、その炎の中には、水晶がある。炎で身を守りながら、その炎によって碎けていく、脆い水晶が……

「まただ……」

青年は思わず頭を振った。

「どうした？」

急に激しく首を振る青年に驚いて、貴公子が顔を覗き込んできた。

「え……？ い、いえ、何でも有りません」

慌てて答える青年に、貴公子は優しい眼差しで見つめた。

「お前は不思議な男だな」

「はあ？」

貴公子はまた少し笑った。どうも彼はよく笑う人らし

「こうして体を合わせていると、お前の波動が伝わってくる。実に面白い」

「はあ……波動……ですか？」

貴公子はゆつくりと頷いた。

「うむ、今のようにな力を開放している時には、人の持つ波動を読む

ことが出来る。たいていは色で見えるのだが、お前からは色と音が来る。これは津川の者達とよく似ている」

え？」

「滉は閃光と爆発音、らしいだろう？光ならば、青い真っ直ぐな光線とキン…と澄んだ響き。お前は、優しい水のせ　せらぎと荒々しい波の音。そして、暗い夜の空色と青銀色…」

青銀色…青年は何か心に引っ掛かるものを感じた。何だかとても懐かしい。

「本当に妙だ。何故、二つずつ見えるのかな？だが、一つはとても見慣れた物だ…」

貴公子は面白そうに首を傾げていたが、ふと下を見てくすりと笑った。

「ああ、光が来るな、さつき笑っていたから、今度は怒っているだろう」

百面相ではあるまいし、そんなにころころ変わるはずが…

「アルタイル！」

光の怒声が響きわたった。

「本当に怒ってる…でも、アルタイル？」

アルタイル、今迎賓館の中で、盛大なセレモニーを受けている老英雄と同じ名前である。ドルフェスは貴公子を見た。彼は微かに首を竦めてみせる。

「アルタイル！　あんたねえ、やっていい事と悪い事が有るでしよ　うが！！　何だってあんな事したのよ！」

二人の横に飛び上がってきた光は、噛みつかんばかりの勢いで怒鳴った。

貴公子は小さく溜め息をついてみせる。

「光、その名はトサマル（ここ）では呼ぶなと…」

「人非人相手に知ったこつちや無いわよ！！　さあおっしやい！　何だってあんたまで化猫を造ったのよ！！」

貴公子が化猫を造ったと聞いて、ドルフェスは戦慄を覚えた。

「化猫を、造った…？」

抱き抱えられている状態で、なるべく体を離そうと試みる。
相変わらず、彼の腕はがっしりしていた。

「トウア・ドルフェス。怖がらなくても良い。確かに我々の陣に猫は居るが、私が造った訳ではない」

「じゃあ、誰が造ったっての？」

地獄の底から響くような光の音が、貴公子の言葉を遮った。相変わらず、光の剣幕などどこ吹く風と微笑みながら、彼は、怒れる女神に顔を向ける。

「ご先祖様」

「責任を転化するのは良くないわ」

「そうでは無い。我々は未だ、人を猫に変える技術は持ってはおらん」

光はぴつと指を突き立てた。

「滉から、D・Vで分析したケットシーのデータが渡されてるはずよ。それ見て造ったんじゃないの？ 滉も下でカンカンよ」

「光、ライフアンを高く評価してくれるのは嬉しいが、たった半日で猫を10匹も造れる筈が無い。少しは私の言い訳を聞いてもらいたいな」

「自分で言い訳って宣言してどうすんのよ」

光は呆れたようにくすりと笑った。彼女は魅羅と同じで、気分を変えるのが劇的に早いらしかった。

「そいえば魅羅は今頃どうしているんだろう？ 今朝車の中で目を覚ましてから、未だ一度も姿を見ていない。」

「で？どんな言い訳？ 言っとくけど、志願者で化猫造ったって言っても、私達は許さないわよ」

「その前に、光、何やら下がにぎやかだぞ」

貴公子の言葉に光が下を見る、ドルフェスも一緒にのぞきこんだ。激しく絡み合う2頭の巨獣と、5〜6人の、重装備に武装した人影を相手に、飛び回っている滉の姿が見えた。

「おやまあ、鈍くさい奴ね。あんなのにてこずってる」

一斉射撃をかくぐりながら反撃のタイミングを掴めないでいる
滉を見て、光が口を尖らせた。

「しょーがない。手伝ってくるわ。アレス、行くわよ」

跨った巨獣に、声をかけて、光が身を翻す。

音もなく滑空していく後ろ姿を、ぼんやりと見つめていたドルフ
エスは、目の端に何か光るものを感じて首を巡らせ、息を飲んだ。

赤い光点が三つ。強く輝きながら近づいて来る。

「ミサイルだ……!!」

青年の声に、貴公子もその方へ首を巡らせた。

「うむ、その様だな」<

「落ち着いてる場合ですか?! 早く避けなきゃ」

慌てる青年に、貴公子は微笑みながら首を振った。

「まあ、まて。トウア・ドルフェス」

貴公子の言葉が終わらないうちに、下方からきらりと一瞬光る物が
飛び、次いでミサイルが爆発した。

「ほら、慌てるほどのことは無かっただろう?」

につこりと貴公子が笑う。悪魔でも蕩かせる様な笑みを前にして、
ドルフェスは、彼の糞度胸に薄ら寒さを感じてため息をついた。

「はいはい……。でも、今のは誰が?」

もしかと思って下を見る、激しい地上戦を繰り広げている光が、
こちらに向かつて手を振って見せた。

「光のナイフは、相変わらず切れ味が良いな」

「今のは、光さんが?」

地面からあのミサイルまで軽く100Mはあったはず。しかもナ
イフで? 銃なら納得できもしようが、手投げのナイフでミサイル
を落とすなど、常識外れもはなはだしい。

冗談と言つて欲しくて聞き返したものの、貴公子はゆっくりと肯
いた。

「それが光の仕事だからな。だがまあ、光も滉も忙しそうだ。後は、

自分ですとしよう」

そう言いつつ、にやりと笑って見せた方に、二人と同じように、宙に浮いている人影があった。

淡い金髪が波打つように長く広がり、何処かの民族衣装の様な、ゆったりとした服装をしている。

暗いので、性別は判らなかったが、腰のあたりに奇妙な装置を取り付けている。ごつごつしたフォルムから、重力遮断による浮遊装置だろうと思われた。

そう言えば、貴公子はどうやって浮いているのだろうか？ 見た所、いや、自分の体で感じる限りでは、あんな大仰な物を付けているようには感じられない。かといって、コンパクトで、体にフィットするデザインの浮遊装置があるなんて、聞いた事はない。あればとにかくに一般に出まわっている筈なのだ。

もっとも、光も浮いていたし、この謎の多い人々のことから、何があってもそう驚く事も無いだろう。

新たな浮遊者がずっと滑るように近づいて来た。

貴公子も、其れにあわせて体の向きを変える。ここまで近づくと、相手が男である事が判った。かなり整った顔立ちで、歳は貴公子と同じでよく判らなかった。

「久しいな、カストウア。達者で何よりだ」

にこやかに声をかけた貴公子とは逆に、カストウアと呼ばれた男は、苦い物でも口にしたような顔をしている。

「よくも、おめおめと、生き恥じを晒せたものだ。裏切り者め」カストウアと呼ばれた男は、吐き捨てるように言い放つ。

「生き恥とは思っておらぬからな。お前も、些細なことで何時までもへそを曲げるのは止めて、そろそろ戻^{みな}って来ぬか？ 皆も待つておるぞ。特にライフアンがな」

貴公子の言葉に、カストウアは激しく頭を振った。

「黙れ！！ 盗人猛々しいとはこの事よ！！」

ブン！と右手を一閃させる。握られた直剣が月明かりにきらりと光る。

「先代様を謀殺し、その地位を掠め取った痴れ者のくせに。英雄と祭り上げられ、相変わらぬの救世主気取りとは片腹痛いわ！！」

剣先を貴公子に向け、カストウアは息巻いた。

ドルフェスは、時代掛かった男の罵りを、超然とした表情で聞いている、貴公子の顔を見た。

「砂伯カストウア。お前は、私だけでは飽き足らず、兄者までも落としめるつもりか？」

今まで聞いた事も無いような冷たい声だった。

「兄者の死がどのようなものだったか、お前が一番よく知っている筈だ」

カストウアはにやりと笑った。嘲るような哄笑だった。

「おお、知っているとも。お前が津川の双子と共謀し、如何に先代様を謀殺したか、この眼でしかと見届けたぞ」

開いている方の手を握り締め、カストウアは憎しみに歪んだ顔で貴公子を睨みつけている。

「あの時の、この腕の中で冷たくなっていかれる先代様の、無念に満ちた顔を、わしは決して忘れるせん。そうとも、わしは忘れんぞ！ アルタイル・アルナスル！！ お前の悪行を！」

——え——

来訪中の英雄の名を聞いて、ドルフェスは再び貴公子の顔を見た。兄殺しと罵られながら、彼は相変わらず超然とした態度を崩してはいない。ただ、冴え冴えとした碧い瞳が、心成しかいぶかし気に細められた様な気がした。

「カストウアよ、何をされた？お前の波動が濁っている」

「黙れ！！！！」

カストウアの叫びは、間近でおこった爆音にかき消された。

憎悪を顕にした顔が紅い光に浮き上がる。貴公子を睨み据える彼

の目元が光った様に見えた。おそらくこのカストウアという男が、襲撃隊の頭目格らしい。

その男がこれほどまでにこだわる先代、つまり貴公子の兄とは、どんな人物だったのだろう。そしてその人を貴公子が殺した…？にわかには信じられない。

ドルフェスは眉を寄せた。そう言えばさつき滉達は、兄の仇討ちがどうか話していた。

竜造寺が仇だとか、滉の方を先にするとか…あれは、この事だったのか？

「砂伯カストウア。参る！」

ドルフェスがぼんやりそんな事を考えている内に、カストウアは突きつけていた剣を構えて突進して来た。

「うわー！！」

木々の燃える炎にぎらりと光る剣先を目にして、ドルフェスは悲鳴をあげた。

「銃を使えば良からう？」

いやに冷静な貴公子の声が耳元で聞こえた。

「あれ人間ですよ！ 駄目です！」

「そうか、なら私がするか」

ガキッと円月刀が直剣を受け止める。

「カストウアよ、お前の剣の師は、誰だった？」

円月刀を逆手に持ち、カストウアの剣を押さえたまま、貴公子が笑いかける。

「うるさい　！！」

突き飛ばすように離れたカストウアは、再び構え直し切り込んで来る。

その時、初めて貴公子が動いた。

ドルフェスが後ろに引かれるような感じを覚えた時には、既にカストウアの懐深く飛び込んでいた。

「！！！！　？！」

ドルフェスの声にならない悲鳴は、とつさに繰り出したカストウアの直剣と円月刀の剣戟にかき消された。そのまま激しく切り結び、飛び離れる。

不意を突かれた格好になったカストウアは、何とか有利なかたちを持ち込もうとした。しかし、貴公子はカストウアが少しでも体勢を立て直すような暇は与えなかった。一度戦闘に入ると、彼は今までのゆつたりとした動作からは想像出来ないほどの敏捷さで、空中を自在に動きまわり、次々と攻撃を加えて、攻め立てていく。しかも片腕にドルフェスを抱えたままで。

どちらかと言えば、カストウアの方が動きが鈍いように見えた。切りあわせるうちに浮遊装置の何処かが破損したらしく、カストウアは、少しずつ高度を下げていく。ぐらりとバランスを崩した所で、貴公子がカストウアの剣を弾き飛ばした。

「さすがは金の飛鷹。こんな装置などでは役にもたため。何時までもいたぶっていないで、さっさと殺したらどうだ？」

肩で息をしながら、カストウアが歯ぎしりする。

「カストウア、歪められた記憶と、偏った思考が、お前の剣を鈍らせている。思い出せ、私とお前が袂を分かつた本当の理由を。憎しみなど、何処にも無かったはずだ」

貴公子の声音はやはり静かなままだったが、ドルフェスには、ほんの僅かに悲しげな響きが含まれているように感じられた。

「黙れ！偽善者。お前に謀られた事など思い出したくも無いわ！

さあ殺せ！！」

淡い色の瞳が、ギロリと見開かれた。ドルフェスがカストウアの狂気に近い憎悪の姿を見て、背筋に冷たい物を感じた時、

「なあんだ！！ 誰かと思ったらカストウアじゃないのよ？！」

下方から光の声が響いた。振り向くと、光と滉がアレスに乗って飛んで来る。

「おー。カストウア。久しぶり！」

滉が光の後ろで手を振っていた。

「随分見なかったなあ、元気そうで何よりだ。騒ぎも一段落したし、後でまた一緒に酒飲もうぜ」

およその場に似合わないのんきな台詞に、ドルフェスだけでなく、カストウアも呆氣にとられた顔をして双子を見ていた。平氣な顔をしていたのは貴公子だけである。

「津川滉……？」

「何、ハトが豆鉄砲くらった様な面してんだよ。俺に決まってるっつ？」

滉はいつもの人好きのする笑顔でカストウアに笑いかけた。その目が不意に険しくなる。

「それにしてもお前がついててこの騒ぎってなあ、どう言うこった？ おまけにあの化け猫。何が起こってんのかとっくり聞かせてもらっぜ」

光も同じように、真剣な顔でうなづく。

「そうよ、カストウア。貴方はあんな酷い事をさせないためのお目付役でしょ？ 人間を改造して化け猫にするなんて、酷すぎるわ」

近づいて来た双子が口々に苦情を言い立てたが、カストウアは凶悪な顔つきでにやりと口を歪めただけだった。

「？どうした？カストウア。人相悪いぞお前」

「うんうん、なんか荒んでるわよ。何かあったの？」

あくまで呑気に、双子は何の警戒もしないでカストウアに近寄っていく。

——大丈夫なのかな——

不安な気分で、ドルフェスはカストウアと双子を見比べた。

案の定、滉の手がカストウアの肩にかかった途端、懷に隠し持ったレーザーサーベルが突き出され、光と滉を串刺しにしようとした。

「警部……！！」

ドルフェスの声より一瞬早く、滉はアレスの背を蹴って宙に身を躍らせていた。

光は素早く後退し、レーザーの切っ先をかわす。

空中で一回転した滉は、カストウアの背後に回り込んで羽交い締めにし、同時に、拘束されたカストウアの手から、光がサーベルをもぎ取った。二人分の重量に耐えかねた浮遊装置がグラリとバランスを崩して、左右に大きくゆれ始める。

「なにしやがる！ 度が過ぎるぞカストウア！！」

滉の怒声と、カストウアの大笑が重なる。

「何が可笑しい?!」

「黙れ偽善者共め！ 先代様への冥土の土産に、お前の首を持って行きたかったがしかたが無い。アルタイル・アルナスル！ 早くわしの首をはねろ！！」

カストウアの言葉に、双子は愕然^{がくぜん}とした表情で貴公子を見た。

「アル…こいつどうしたんだ？」

「いつものカストウアじゃ無いわ。何を言っているの？」

端正な顔を初めて曇らせ、貴公子は、首を振った。

「我々は、兄者を謀殺した大罪人だそうだ」

「へ？ カストウア。何でお前が、んな事言い出すんだよ」

「そうよ、アルファルドの本心を教えてくれたのは貴方じゃないの。でなけりや私達、とつくの昔にアルタイルと殺しあつてたわ……まさか……」

光の声が途中で途切れた。彼女はぎゅっと目をつぶって俯いた。

滉もまた、悲痛な表情でカストウアを見つめていた。次第に激しい怒りの色がさしてくる。

それは、以前ドルフェスが垣間見た、煉獄の炎を吹き上げる滉の姿に他なら無かった。

「カストウア…お前…ファントムに喰われやがったな」

貴公子は無言で足元を見つめていた。

四人の下にあった森は、1/3を失ってまだちろちろと赤い舌を見せながら、白い煙を立ち上らせてはいたが、もう戦いの喧騒は収まっていた。

ふと、真下にある空き地に、数人の人影が集まってこちらを見上

げている。

何人かは銃を持ち、残りの数人は何故か身仕度に忙しいらしく、しきりに上着を着たりズボンを履いたりしている。

「あれは？」

ドルフェスの声に、貴公子ははっとした様に息を吸った。

「ああ、ウルとオルスだ。夜会はお開きのようだな。滉、光。下に降りよう。カストウアを、ライフアンにも会わせねばならん」

貴公子の言葉に、双子は無言でうなずいた。

滉が顎をしゃくると、光は手にしていたサーベルで、カストウアの浮遊装置を切断する。滉とカストウアはそのまま落下していく。

ドルフェスはひやりとしたが、無事に着陸するのを見て、安堵した。

光がアレスの背に立ち上がった。腕を組み、背筋をすつと伸ばした姿は、神話の中から抜け出て来た様に美しく見えた。

「アルタイル。まだあんたの言い訳を聞いてなかったわ」

「言い訳はもう、本人に聞くと良い。下にいるオルス達だ」

光の頬に苦笑いが浮かんだ。

「私達とおんなじ…御先祖様の遺産つてやつ？役には立つけど、有り難くはないわね」

そう言う光は、腕を組んだまま、アレスの背から身を躍らせた。滉と同じく、そのまま奇麗に着地する。

光の後を追うように降下していたアレスは、途中で奇妙に輪郭が歪んだと思った途端、不意に二つに別れて、白と黒の二つの塊になった。

光の足元に着地したそれは、白と黒のどちらも、尻尾のふさふさした小さな猫のように見える。

ドルフェスが目を見張っていると、自分達もまた降下しているのに気が付いた。

地面がゆつくりと近づいてくるのが判り、青年はこっそり安堵の

ため息をついたのだった。

1 8 A F U L L H O U S E

—— 満員御礼 ——

カストウアの悲劇。

19 BE NOT ALL THERE?——正気?——(前書き)

津川に保護をされたエミィは?

微かに甘い香りがする。これは薔薇………?

優しく頬をなぶる風の心地好さに促されて、エミーはゆっくりと目を開いた。

アンティークな寄せ木細工の花模様が見える。

「?」

微妙な木肌の色で作られた薔薇の花は、次第に覚醒していくにつれ、何枚もの天井の羽目板となり、中央の薄薔薇色のシャンデリアを囲んで、咲き乱れる花園になった。

「ここは……?」

「エリー館。幻惑の帳とほづに包まれし薔薇の館。お目覚めですか? お嬢さん」

枕許から低い男の声がして、エミーは驚いて首を巡らせた。

「おはよう」

ヘッドボードに腰掛けて、栗色の髪の男がいる。

「あんた誰?」

男はにつこりと笑いかけて来る。紫の瞳が深い色を湛えて静かに輝く。

すごいハンサムだった。でも、どこかで見たような…?

「僕は稀胤ケイン。この館の住人」

柔らかなバリトンの声が、辺りに漂う薔薇の香りによく似合っていた。でも、この声も、何処かで聞いた事がある。

何だか頭が重い。起きようとは思っただが、動くのもおっくうだった。

「ここ…どこ?」

ぼんやりした頭で、エミーが呟く。

「だから、エリー館」

「そんなのさっき聞いたわ。何区の何通り何番地?」

エミーの切り替えしに、懸胤ケインは一瞬言葉を失ったようだ。

「あたし、何でもここにいろの？」

「……………君を守るため」

「何であたしが守られなけりやならないのよ」

顔をしかめて言い返すと、懸胤ケインは小さく笑う。

「やれやれ、気の強いお姫様だ」

「くっさい台詞。あんた言つてて恥ずかしくないの？」

懸胤ケインは、大袈裟に肩をすくめて見せた。

「君にムードは不用って訳か。いいでしょう、それじゃあ単刀直入に。ここは津川の家。君は、今のところ家の居候つてところかな？」

眠気が吹き飛ぶ。

アドネナリンが背中を駆け登り、頭に血を送り込み、エミーは跳ね起きた。

「何それ！？」

毛布を握り締めて懸胤ケインを睨みつける。

「何であたしが居候なのよ！！勝手にこんなところに連れてきて、その言い草は何よ！！」

「僕が君を連れてきた訳じゃないよ」

「じゃあ、だ…」

言いかけて、思い出した。

「仕方ないわね、いらつしやい」

「いやよ、行きたくないわ」

「いやがつてるわよ、やめときましよう」

「めんどくせえな」

「あいつ…あたしを殴って…」

懸胤ケインがのんきそうに首を傾げた。

「あいつって？」

「滉あきひよ、津川滉！！あの野蛮人！」

「へえ」

エミーは眉を寄せ、懸胤ケインの顔をじつと見つめた。

「そう言えば、あなた、あいつに似てるわ。ううん。もっと最近あなたを見たわ」

「さあ、僕は初対面だよ」

につこり笑って見せた懸胤^{ケイン}だが、エミーは短く息を吸い込む。

「そうよ！あいつと一緒にいたでしょ。D・Dがあなたをファントムとか言っていた！！ あなた達やつぱりグルだったのね！！」

確かに、目の前の男は、あの時下品な笑い声を発っていたファントムとかいう男そっくりだ。唯一の違いは眉まで白かった髪が、明るい栗色に変わっている点である。

それに物腰も、とことん下品だったファントムに比べ、懸胤^{ケイン}には、そこはかとない気品すら感じさせる。しかし、その容姿も、声も、紛れもなくファントムのものであった。

エミーの告発に、懸胤^{ケイン}はわざとらしく顔をしかめて見せた。

「ファントムう？失礼な、あんなモノと一緒にしないでくれたまえ」

「なあにがくれたまえよ。馬鹿にして！！」

地団駄を踏むように身悶えして、エミーの声がオクターブ跳ね上がった。

「あたしをどうするつもりよ！ D・Dと一緒に殺すの？！D・Dはどこ？！ あなた達、もう殺したんでしょ！！」

懸胤^{ケイン}はため息をしつつ首を振った。

「君のD・Dは、元気に今朝^{けいちゃん}グラン・パと出かけたよ。足は二本、首も付いてたし、血も出てなかった様に見えたよ。それに、もう一度言っとくけど、僕はファントムじゃ無い、津川^{つがわ}懸胤^{ケイン}。お見知り起きを」

エミーは目を釣り上げた。

「あなたはファントムよ！！ この眼でちゃんと見たんだから！髪なんか染めたぐらいではつくられるとも思ってたの？！」

怒り狂ったエミーは、懸胤^{ケイン}の髪を掴もうと手を伸ばす。

絶妙なウエーブを自慢げに揺らしている、栗色の前髪を掴んで思

い切り引つ張った。はずが、エミーの手は虚空に泳いだ。

「避けないでよ卑怯者!!」

何が卑怯なのか判らないが、余計に頭にきて、整った横つ面を張りどばした。

が、その手も空を切る。しかも、懸胤^{ケイン}の顔を素通りして…

「？」

もう一度、手を戻す。

今度は探るように懸胤^{ケイン}の顔の当たりで手を振ってみた。やはり何も無い。

懸胤^{ケイン}は動かずににやにや笑っている。

だが、よく見れば、懸胤^{ケイン}の後ろにある棚の形が透けて見える事に気がついた。

虚を突かれた様に、エミーは動きを止める。

しばしの沈黙……

「キャーーーーー!」

エミーの悲鳴が辺りに響きわたった。

その途端。

「伯父様!!」

部屋のドアが勢いよく開かれて、同時に甲高い声が轟いた。

「なんて人なの! 女性の寝室に忍び込むなんて、最っ低でしてよっ!!」

入り口に、廊下から漏れる光を背負って、小さなシルエットが腰に手をあてた格好で仁王立ちになっていた。

「やあ、レーイ」

懸胤^{ケイン}が片手を上げて微笑みかけた。だがこころなしかその顔は引きつっている。

「やあ、じゃあありません!」

小さな影は、舌つ足らずな声で懸胤^{ケイン}を非難しながら、トコトコと部屋の中に入ってくる。

「御免なさい、家の男どもはてんで躡がなくてなくて、お恥ずかし

いわ」

そんな事を言いながらエミーの前まで来た姿は、台詞とはおよそ似合わない、どう鼻屑目に見ても九歳ぐらいの、まだ少女とも呼べないような年端のいかない女の子だった。

——何、このこまっしゃくれたガキ？——

エミーが見つめていると、幼女はスカートの裾を摘まんで一丁前な挨拶をして見せる。

「始めましてミズ・ティラー。あたくしは、レイチェル・アライヴ・津川。レイイって呼んで下さいな」

アンティーク人形が、そのまま動きだしたかと思わせる美少女だ。艶やかな金髪に、赤い花で造られた髪飾りが良く映えている。花飾りの葉っぱの緑が、大きめな瞳の緑に呼応して、更に鮮やかに引き立っていた。

着ているのは白地に小さな赤い薔薇がプリントされたワンピースで、これは髪飾りにあわせてあるらしい。

仕上げは子供らしい赤い靴となっていたが、そこにも留め金の飾りに薔薇が象つてあった。

「伯父の失礼をお詫びしますわ。ホントに御免なさい」
小さな頭をペコつと下げる。

「綺麗な女性には目が無いのが、男つてものさ」
懸胤ケインが嘯うなづくと、レイチェルはキッと睨みつけた。

「そんなのは、伯父様と曾お爺様だけよ！！」
腰に手を当てて、幼女は懸胤ケインに向き直った。

「あたくしの父様は、とつてもモテるけど、母様以外の女性に色目を使った事何て、いっぺんも無くてよ！ 第一！ お爺様もエゼル伯父様もアクアお爺様も紳士でいらっしやるわ！」

「そりゃあ、マックは特別製だし、ダディ達は……」
言い返しかけた懸胤ケインは、レイチェルのジト目に気圧されて口を閉じた。

「伯父様。何時までも図々しく居座つてると、本格的にモテ無くな

りましてよ」

冷たく言い放たれて、懸胤^{ケイン}は肩をすくめて立ち上がった。ただし、床から20cmは浮いていたが……

「はいはい。かしこまりました、お嬢様。余計者は退散いたします」
そう言いつつ懸胤^{ケイン}の姿はどんどん透き通って、ウインクしている紫の目と、にやにや笑う口元だけになった。その姿にレイチェルの追い撃ちがかかる。

「今時チェシャ猫の真似なんて、ウケなくてよ」
輪郭だけの口がチェッと音を立てた。

「じゃあ僕はリビングで待っているから。僕の為に、もっと美しい姿を見せて呉れ給え。もっとも、ナイティの君も素敵だったよ」

慌てて胸元を掻き合わせるエミーに、レイチェルの怒声が被る。

「伯父様！！」

紫の瞳が閉じる様にふつとかき消え、悪戯っぽい笑い声が遠ざかっていった。

レイチェルは疑わしげに、しばらく懸胤^{ケイン}の消えた辺りを睨みつけていたが、完全に気配が無くなった事を納得したらしく、小さく溜め息をついてエミーに向き直る。

「ほんとに失礼ばかりで恥ずかしいわ。御免なさいね」

そう言いながら、再びペコンと小さな頭を下げて見せ、顔を上げるとにつこり笑う。

「着替えはクローゼットの中よ、あたくしもリビングに行ってますから、着替えたらお出で下さいな。リビングは廊下の突きあたりを右よ。ブランチを一緒にしましょう」

幼女は、その姿に甚だしく似合わない大人びた口調で用件を言うと、エミーの返事を待たずに出ていってしまい、あっけに取られていた彼女は、緩慢な動作で枕を持ち上げると、思いつきリドアに投げ付けた。

広いリビングは陽光で満たされ、薔薇と紅茶がブレンドされた香

りが漂っていた。

紅茶の香りは、部屋の中央寄りに置かれたテーブルに乗っている、白磁器のポッドかららしい。

そのテーブルの上も下も、このリビングの調度品総てが、昨今では骨董屋でもついぞお目にかからないほどの年代物で占められている。フローリングされた床にも、趣味の良い敷物が置かれ、シツクな雰囲気醸し出していた。

庭に面しているらしい側は全面がガラス張りで、レースのカーテンの向こうには、微かに薄紫色の花が咲いているのが見える。

ふて寝をしようにも空腹で眠れず、他にする事も無いので、渋々起きてきたエミーは、三百年位時代を間違えた様な、アンティークの塊のリビングに目を見張った。

「お目覚めのようなね」

柔らかな女性の声が投げかけられる。

声の方を見ると、董色のワンピースを着た女が、年代物の飾り棚バッファの前に立っていた。

恐ろしいほどか細くて、華奢で、女の目から見ても、思わず見とれてしまうぐらい美しい。

女の横に踏み台を置いて、飾り棚からティーカップを出していた幼女が、ぼうつと立っているエミーに気付いてにつこり笑って見せた。

「ねえ、曾お祖母様。今日のカップはティファニーでいいかしら？
それとも二ナリツチ？」

かわいい声で聞かれて、曾お祖母様には見えない女は優しく肯く。
「そうね、ティファニーにしましょう」

返事とともに、小さな手が白磁器を取り出す。

エミーは取り落とすのではないかと冷や冷やしたが、幼すぎる手は、意外にも危なげなく二客のカップを取り出した。

「スクランブルになさる？ それともサニーサイドアップ？」

「え？」

カップを運ぶ幼女を、睨みつけるような勢いで見つめていたエミに、女が訊ねた。

虚を突かれて振り向いた彼女は、女の顔に見覚えがあるのに気付いた。

「あんた確か：昨日の幽霊？」

胡散臭気に眉を寄せる彼女に、幽霊呼ばわりされた女は、気を悪くするでもなくにつこりと笑い反す。

「ええ、私はシャドウ。どうぞお見知り置きを」

前夜の様な、紫色の光に包まれてはいなかったが、シャドウの体は、後ろの飾り棚が微かに透けていた。その横に、ふわりと懸胤^{ケイン}が現れる。

「やあ、赤いスーツもよく似合うね」

飾り棚に腰を掛けてウインクをして見せる。

「出たわね、色情霊」

睨みつけるエミーに、懸胤^{ケイン}は悲しげに首を振って見せた。

「酷いなあ、そんな言い方無いだろう？」

「懸胤^{ケイン}」

エミーが言い返す前に、シャドウが厳しい声で懸胤^{ケイン}を見た。

「何です、そんなところに腰掛けて。お行儀が悪いわよ」

形の良い眉を寄せて、シャドウが上品にたしなめる。

「はい、グラン・マ^{おばあちゃん}」

子供のような返事をして、懸胤^{ケイン}は飾り棚から離れた。

例によって、床からはかなり浮いている。

「伯父様。遊んでないで、手伝って下さらないこと？」

部屋反対から、レイチエルの声が飛んで来た。

「はいはい。家の女性軍は人使いが荒いねえ」

そうぼやきながら、懸胤^{ケイン}は滑るように移動していった。レイチエルの笑い声が出迎える。

「だってエ。今家に残っている男性は、懸胤^{ケイン}伯父様だけですもん」

「ああ、体が恋しい。そしたら出かけられるのに。古代の遺跡たち

が僕を待つてるんだよ」

「あらあ、体があつたら、今度は曾お祖父様にこき使われるわよ」
「痛しかゆしだな」

先ほどとはうって変わって、軽妙な掛け合いをかわす凸凹コンビを、不機嫌な顔で睨みつけていたエミーの前に、シャドウがふわりと進み出て来た。

「さあ、貴方もテーブルにお着きなさいな」

いささかむつとしながら、促されるまま、背もたれの高いチェアに腰掛ける。

「それで、スクランブルとサニーサイドアップ。どちらがいいかしら？」

「なにそれ？」

「ブランチのメニューよ」

幽霊佳人はいとも優しく微笑みかけてきた。

「あ、そう。じゃあ、オムレツ頂戴」

精一杯の反抗にクスリと笑う。

「ええ、お望みなら」

彼女の後ろから懸胤^{ケイン}の嘆きが流れてくる。

「ああ、グラン・マのスクランブル・エッグ。グラン・マのサニーサイドアップ。グラン・マのアスパラサラダ。グラン・マのオムレツ。グラン・マのジンジャーブレッド。グラン・マの自家製ハム……」
「うるさいわね！！」 勝手に食べれば良いでしょう！」

怒鳴りつけると、懸胤^{ケイン}は肩をすくめた。

「だって僕、体が無いから食べられない」

レイチェルがとなりで肯いている。

「そうそう、ご飯が余ってしょうがないのよ、頂くのあたくし一人なんですもの」

小さな手は、そうばやきながら二客のカップをテーブルに並べて、ポットから紅茶を注ぐ。豊かな芳香が強まった。

程なく自走ワゴンがパンと注文の品を運んでくる。幼女はエミー

の前に皿を並べると、ナイフとフォーク、バターナイフを駆使して自分のハムエッグを征服しはじめた。

シャドウが柔らかな声音でレイチエルに話し掛け、懸胤^{ケイン}も幻のティーカップを片手に会話に加わる。

——何なのここ？ すつとぼけたお化け屋敷だわ——

奇妙な光景だった。

警察署で睨み合っていた二人の幽霊と、得体の知れない幼女がにこやかにテーブルを囲み、花の形のカップには紅茶が満たされている。

そして、並んだ皿には料理が盛られ、何とも言えないいい匂いが、起き抜けで空っぽの胃を刺激する。

惘然として座っていたエミーだったが、空腹は如何ともしがたく、彼女は渋々フォークを持ち上げた。

ブレーンオムレツとハム、パンも、サラダやデザートのマントチョコのアイスクリームまで、気がついた時にはすっかり平らげていた。

「御馳走様でした。ね、曾お祖母様のお料理は美味しいでしょう？」

小さな手を合わせて、レイチエルがにつこりする。

「え……まあ、けっこう食べれたわ」

『ええ』と言いかけて癪に触り。負け惜しみに言い返すと、シャドウとレイチエルは視線を交わしてくすりと笑う。

「後は私がするから、お皿はワゴンに乗せてくれるだけで良いわ。

レイ、お客様に、お庭を案内してさし上げたら？」

「はい。曾お祖母様」

シャドウに可愛くお返事すると、レイチエルはピヨコンと椅子から飛び降りた。

「じゃあ、ミズ・テラー。どうぞこちらにお出で下さいな」

言葉とともに、小さな手がエミーの手を引いた。思わず力一杯振り払うと、軽くて小さな体はいとも簡単に宙を飛び、床に転がる。

「レイイ!!」

ケイン
懸胤が声を上げた。

「あ…」

さすがに罪悪感がした。が、いまさら謝る訳にもいかず、エミーは、床に座り込んできよんとしているレイチエルを業と睨みつけた。が、大きな緑の瞳がまっすぐに見つめ返してきて、たまらず目を逸らす。

「こ…子供は嫌いなのよ」

泣き出すだろうと思った幼女は、意外にもそのままピョンと立ち上がった。

ケイン
懸胤もシャドウも何も言わず、レイチエルはパタパタとスカート
の埃を払ってから、にっと笑う。

「判ったわ、もう触りませんわ。さ、お庭に行きましょう」

「…判ったわよ」

珍しく素直に、エミーはレイチエルの後ろに付いて歩きだした。

庭の大半は薄紫の花で埋まっていた。

同心円状に造られた花壇から、林の中の所々に瓦礫と石像（ローマの遺跡を摸したヨーロッパ形式とレイチエルは言った）が配置された赤い煉瓦の遊歩道の脇。迷路風の生け垣の間等、総てにその花が揺れている。

薄紫の小振りの薔薇で、揺れる度に色が濃紫から桃色に変化して見える。不思議な花だ。こんな花は今まで見た事は無かった。

一輪手折って眺めていると。レイチエルが見上げていた。

「な…何よ。取ったら悪い？」

どうもいけない。さっきの一件から、エミーはレイチエルになん
となく弱腰になっていた。それが気に入らなくて、更にレイチエル
を睨みつける。

だが、幼女がそんなものに怯む訳も無く。悪戯っぽく口元がカー
ブする。

「それ、ダフネでしょ」

「え？」

「その薔薇、ダフネって名前なの。曾お爺様が、曾お祖母様フロボースに求婚の言葉の変わりに、お送りになられた花なんですって」

レイチエルはうつとりと薔薇を見つめた。

「素敵よね。永遠に変わらない愛を籠めて、愛する人の名を薔薇の名に冠したの。それも、他には絶対に無い、オリジナルの薔薇を造って…」

一人前にため息なぞついてみせて、往年の大恋愛に夢を馳せている様子だった。

—— 気障ったらしい ——

嫌悪感と共に、白髪の爺婆が頬を染めて見つめ会う姿が連想されてぞっとする。そこでふと気がついた。あの幽霊女も曾祖母様と呼ばれていた。

「その曾婆さんってどんな女だったのよ」

遠回しに聞いてみる。はたして幼女は、笑いながら家の方を指し示す。

「リビングでお話したでしょう？ あの方よ」

エミーは、そこで初めて、《エリー館》の姿を見た。

此处から見える家は、《館》の名に相応しく、白壁に蔦を這わせた、豪奢で落ち着いたたたずまいを見せている。

高さは三階程あるらしい。

こちら側から見えるだけで、7つのバルコニーが有り、色とりどりの花が咲いている。そして10以上は有る窓すべてが、洒落た出窓にしつらえられて、白いレースのカーテンが揺れている。

シャドウと名乗った女幽霊の、楚々としていながら華やかでもある美しさが、この館にはよく似合っている様に感じられた。

そうだ、あの幽霊はシャドウと言った。ダフネではない。

「名前が違っじゃない。これはダフネ、あっちはシャドウ」

「ええ。今は、ね」

「今は、つて。どういう事よ？」

「その内お判りになるわ。貴方なら」

そう言うレイチエルの顔を見て、エミーは、冷たい手で背筋を撫でられたような悪寒がした。幼女の幼い顔に一瞬、とても子供とは思えないほど大人びた表情がかすめたからだだった。

——この子何？ 気味の悪い——

のどかな庭の雰囲気は胡麻化されてすっかり忘れていたが、ここはお化け屋敷なのだ。すべてが見た目通りとは限らない。

長居は無用だ。

取り合えず大人しく従っておいて、隙を見て逃げ出そう。

その後は、警官を拉致監禁した凶悪犯達を一網打尽にしてやる。

牢獄に繋がれた滉という想像を、せめてもの慰めにしながら、エミーはレイチエルの後ろに付いていった。

そして、その機会は意外と早く来た。

煉瓦の道が塀に突き当たって左右に分かれている。

「右へ行けば海の見える丘。左は大伯母様の花壇よ。《ダフネ》以外の花が見られるわ。どちらに御案内しようかしら？」

小さな手で左右を指差しながら聞いてくる。

「真ん中」

「え？」

レイチエルが振り返った時には、すでに助走をつけて飛び上がっていた。

「あらら」

エミーがまんまと塀によじ登ったのを見て、幼女が呆れた様な声を出す。

「どうもお世話様。帰らせて貰うわ」

捨て台詞と共に塀の外に目を向けて、そこに大通りが広がっているのを見た。

「?!」

奇妙な光景だった。

塀に取り付くまでかけらも見えなかった高層ビルが、道路の両側にそそり立ち、大量の車が通りを流れていく。

勿論歩道には人が歩いていて、ショーウィンドウをながめたり、会話したりしていた。

それを横からではなく正面から眺めているのだ。

車はエミーの足元にある塀の中から飛び出して、反対車線は飛び込んでくる。

人々もまた、何事も無いかのように塀の中に入り、また、現れる。

「何なのこれ……」

愕然とするエミーに、後ろからレイチエルが話しかけてきた。

「そこからは出られなくてよ。空間閉じてるから」

振り向くと、レイチエルは呑気そうに笑っている。

「本物のお化け屋敷だわ」

とんでもない所に連れ込まれた。

心底から震え上がったエミーは、一縷の望みを今見えている自由の天地に託して、塀を蹴って宙に身を躍らせた。

*

「まったく。無茶するよな、このお嬢さんは」

ぼんやりした頭に、懸胤^{ケイン}が呆れたように言う声が聞こえる。

「次元シールドに頭から突っ込むなんて。…弾き返されたから良いようなものの、うっかり取り込まれたりしたら、美人が台無しになるところだ」

「そうね。だけど、あんな光景見れば、誰でもパニックになると思いましてよ」

いやに悟りきった声で、レイチエルが答える。

「有るはずの無い所に有る家に自分が居るって？ 判るけど、もし外に出れたとしても。車に轢かれてたよ」

「ここに居るより、その方が良いって思ったんでしょう、きっと。」

伯父様に夜這いをかけられるのはお嫌だつのよ」

とてもじゃ無いが、子供の台詞とは思えない。

もっとも、レイチェルの言う事は、どれも姿に似合っていないのだが……

半ば朦朧とした意識の中で、エミーは、脱出に失敗した事を悟った。

今彼女は、何か寝台らしき物に乗せられて、何処かへ運ばれている途中らしかった。

硬い床を歩いている小さな靴が、カツカツと可愛らしい音を発しているのが聞こえる。

「そう言えば、今、どの辺りを移動してるの？」

レイチェルの問いに、懸胤^{ケイン}は一寸考え込む様なうなり声を出した。「連動座標で言えば……トラファルガー区っていう辺りかな？ 何でも、ホテルトラディシュとかいろいろの側に入り口を開くんだって、

グラン・マが言ってるよ」

ホテルトラディシュ？ ベースの都心部にあるホテルだ。

そんな所にこのお化け屋敷が現れたとしたら、どんな騒ぎになる事か。

こうしてはいられない。早く脱出して、みんなに危険を知らせなければいけない。

慌てて起き上がろうとしたが、体は痺れたような感覚がしていて力が入らない。

津川家の面々を頭から信用していないエミーは、何かの薬品で自由を奪われていると確信した。

——逃げようとしたから監禁するつもりね——

焦ったエミーは、何とか動こうと渾身の力を振り絞ったが、麻痺した体はピクリとも動かなかった。

パニックに陥りながら、必死の努力を続けている内に、寝台は何処かの部屋に運びこまれたらしい。

軽い振動が感じられ、足音が止まった。

「もし気がついていたら、彼女混乱してらっしやる筈よ」
わずかに気遣わしげな声でレイチエルが言った。

「仕方ないよ。全身打撲なんだから、麻痺させとかなけりや痛みで死んじやうよ。あゝあ。ダディがいてくれれば、もっと早く治せるのに」

「でも、これで大丈夫よね。ミズ・テラー。すぐ楽になりますわ、安心して下さいな」

レイチエルの言葉が終わらない内に、寝台に覆いが被せられ、まもなくシユウシユウと何かのガスが噴出される。

――殺される！ やめて！――

心の中で悲鳴を上げたが、勿論口を動かす事も出来なかった。

『^{ケイン}懸胤、レーイ。こちらにきて下さいな。御前のパーティーの様子
が、少し変よ』

インターホンかららしいシャドウの声がして、^{ケイン}懸胤とレイチエルは返事を返して部屋を出ていった。

後には、死の恐怖と直面しているエミーだけが残された。

やがて睡魔が訪れて意識を引きこんでいく。

薄れかけた意識の中で、ドルフェスはどうなったのかが案じられた。

頼りなくてお人好しで、すぐ人に騙される。

――あたしが守ってあげなくては…………――

*

何が起こったのか。ドルフェスには初め判らなかった。

やっとのことで貴公子の腕と空中浮遊から開放されて、滉がカストウアをマグネット手錠で縛り上げるのを手伝っていた時。

ズン。と鈍い振動が感じられた。

何だろつと顔を上げると、滉の腕が伸びてきて青年の腕を掴んで

いた。

「?!」

驚いて滉を見れば、恐ろしく真剣な顔で迎賓館を見つめている。そのまま無造作に青年を引き寄せ、大股で歩きだした。

「警部？」

引きずられる格好になったドルフェスは、コケそうになりながら滉についていく。

横ではじける笑い声に気付いて滉の反対側を見ると。カストウアが、こちらは文字通り襟首を掴まれて引きずられている。

そんな格好のままカストウアは可々大笑していた。

笑い狂う彼の様子に、鬼気迫るものを感じた青年が、戸惑いながらもう一度アース人を見た時、

「エシク!!」

と、滉が怒鳴った。

「はい!!」

貴公子を取り巻いていた集団中から、鮮やかな紺色の髪の少年が飛び出してきた。

駆けてくる少年はひよろりと背が高かったが、まだあどけない面差しを残している。

ドルフェスは、少年がパストアス人ではなかつたかと思った。

なにせ、少ない知識の中で、青年がこの人種の特徴について知っていた事が、長い寿命の他に青い髪だったからだ。

「何ですか？ ヘル・アポロン」

聞きなれない名で滉を呼ぶ。

「エシク、こいつを頼んだ！ しっかり見張つとけ

そう言いながら、片手でぶら下げていたカストウアを放り投げる。

「逃がしたら、ライフアンが泣くぞ！」

「はい!!」

少年が肯くのを待たずに、滉はドルフェスを掴んだまま歩きだす。

「光!!」

「判つてゐる！！ 二班四班散開、後は私について来て！！」

指示と共に、迎賓館に向かつて駆けていく光の後ろ姿が見えた。

足元を二匹の猫が追いかけていく。

「ならばこの者は、私が預かろう」

何時の間に来たのか、青年の背後から貴公子が腰に腕を廻して来る。

「け……けっこうで……」

逃げだそうともがいていっていると滉が不意に手を放してしまった。

「アル。頼むぜ」

振り向きもせずに滉が言う。

「任せてもらおう」

「けーぶー！」

スピードをあげて、走り去っていく滉の背に助けを求めたものの、それも虚しく、悲鳴と共に二度空中に舞い上がった。

ドルフェスの足元には再び迎賓館の夜景が広がっている。

「え……？」

先程とはうって変わった光景に、青年は目を見張る。

月の光を浴びている屋根の連なりと尖塔。そこかしこから煙が上がっている。

「一体何が……」

愕然と辺りを見回していると、ため息混じりの声で貴公子が答えた。

「我々が、少々遊び過ぎたようだ」

「え？」

「今日の客の後発部隊が、迎賓館のあちこちに花火を仕掛けたのだ」
鈍い音と共に、また新たな煙が立ち上った。

「やれやれ。ライフアン。どんな具合だ？」

貴公子が訊ねると、静かな声が答える。

『そうですね、今のところ宴たけなわですな』

『そうか、正規の客達はどうしている？』

ライファンの声が、笑いを含んで微かに揺れた。

『御前の夜会が始まった時点で、会場と表門にシールドを被せております』

つまり、中の賓客や表のマスコミ陣には、相変わらず何も判らないという事だ。後で慌てるだろうというのは目に見えていたが…

『お前は大事無いか？』

気遣わしげに訊ねる貴公子に、ライファンの声はこころなしか嬉しさに震えていた。

『有り難う御座います。医師殿と騎士殿が来て下さっておられるので、こちらの事はご心配なく』

「閑吼とエゼルがいるのか、ならば安心だ。双子達も飛び込んだ由、じき騒ぎも収まるう」

『御意に御座いましょう』

ライファンは、各部署の状況を報告しはじめ、それにウルとオイスの声が加わって更に詳細な情報が付け足される。時折、光の凜とした声が入って来た。

ドルフェスはその声を聞く度に、痛いような胸のうずきを感じていた。それが、自分のものなのか、自分の中に居るらしい別の誰かの記憶の所為なのか、よく判らない…

三つの月はまだ頂天にあり、今はライトが駆け昇ってくるところだった。

二重の影が、煙の間を動いて行く様をぼんやり眺めながら、二重になった記憶の原因を思いやった……いけない、いけない。今はそんな事をしているような場合ではない。

ドルフェスは、慌てて報告に集中した。

入ってくる情報はみな、化猫が大挙して現れ、警備員や警官達を襲っているというものだった。

同僚達を心配した青年が、降ろしてくれるよう貴公子に頼んだが、

美貌の貴公子は例によってやんわりと首を振っただけだった。

「我々が降りていったら、それこそ皆の足手まといだ。我等を守るうとして皆の動きが鈍ろう。ここは辛抱するのだ」

そうこうする内にそれぞれの部所で戦闘が始まったらしく、激しい喧騒が伝わって来た。中でもオイスは凄まじい叫び声のあと、ふつりと通信が跡絶えてしまった。

今度こそ本気で降りようとするドルフェスに、貴公子は微笑みながら大丈夫だと言った。

「でも、通信が…」

「通信機が付いている服を脱いだのだ、戦う為に」

「戦う為？　もしかして、さっきの…？」

襲いかかって来た化猫を迎え撃った化猫を思い出して、ドルフェスは聞き返した。

貴公子は静かにうなずき、

「そうだ、オイスは我々方の猫を指揮している」と、答える。

貴公子の腕の中で、青年は、出来うる限り体を離そうとした。

「やつ…やつぱり…」

光の言った通り、彼等が化猫を造ったのか？　驚愕する青年に、貴公子は小さく笑った。

「猫を造ったのは我々の先祖だ。かつて、王家の者を守護するべく産み出された、特別な家系の末裔なのだ」

「せ…先祖って…」

「我々の先祖。つまり、銀河第一期文明の遺産だ、かつては我がパストアス王家を守って、数多くの家系があったというが。アルゴルの侵略によって滅ぼされ、今ではあれの一族のみになってしまった」

パストアス王家の守護？　銀河第一期文明？　あまりの荒唐無稽な話に、声も無く貴公子を見つめる。

「何を驚いている？　パストアスが、銀河でもっとも古い種族である事は周知の事だと思っていたが、知らなかったのか？」

「あ…貴方はパストアス人なんですか？」

初めて近くで見る伝説の種族、ただ目を見張る青年に、美貌の貴人は優しくうなずいた。

「そうだ。私の母は、パストアス最後の女王であつた」

「じよ…じゃあ、お…王子様…？」

「もはや存在せぬ王家だ、気にするな」

貴公子はライフアンに状況を訊ね、襲撃の規模が見た目よりも大きくないと聞いて微笑んだ。矢継ぎ早に指示を与え、ゆっくりとドルフェスに視線を戻す。

「アンコールももう終わりらしい。まだ少し時間はかかるがな。それまで、今の続きでも教えてやろう……トウア・ドルフェス。お前も少しは知っておくべきだ」

まるで、リビングで寛いで居るかのようなのんびりした口調で話します。

忘れているかもしれないが、ここは迎賓館の上空なのである。こんなにゆっくりしていて良いんだろうか？

青年の疑問など知らずに、貴公子は話を続けた。

「二百八十年前パストアスは、滅びの詩を恐れた当時のアルゴル皇帝によって侵略を受け、文化文明の総てを完膚なきまでに消し去られた」

ドルフェスはゆっくり肯いた。

いくら歴史音痴でも、それぐらいなら知っている。

元々パストアスは、総ての武力を放棄し、星系の空間そのものを閉じて十万年以上にわたって鎖国をしていた。

銀河最古の文明としてその名を知られてはいたが、その所在地は不明なまま。古の民の地は伝説の中にのみ存在していた。

だが、アルゴス・シリムカシク朝第二百十四代皇帝が、その伝説の地を見つけたした。

母星を持たぬ放浪の民アルゴルは、銀河各地に植民地を造り、それらを足掛かりに銀河内に藩を広げていた。

そして皇帝は伝統に則り、惑星に降り立つことなく新たな天地を求めて宇宙を翔ける。

第二百十四代皇帝ムハンアナ・ティトラスタン・六世・アルゴス・タウ・シリムカシクも、歴代皇帝に倣って、要塞遊星《武運の誉》で航行中、まったくの偶然からパストアスを発見した。と、歴史は伝えている。

当時、アルゴル内には終末思想が蔓延しており、《メトセラの七姉妹》という詩編が王朝の滅亡を唄っていると信じられていた。

その伝説をもっとも恐れたティストラタン六世は、パストアスこそメトセラであるとして、退去を要請するパストアスに対して突然の武力行使に及んだ。

高度な文明を誇りながらも、一切の武力を捨てたパストアスは、何の抵抗も無いままアルゴルの軍勢力の前に膝を屈したのだった。

そして、母国を失ったパストアス人の苦難の道は、此処から始まった。

あいにく、ここから先は一気に銀河大戦になってしまふあやふやな知識の青年に、今度は貴公子が、己が民族の苦闘の歴史を語って聞かせる。

アルゴルの軍門に下ったパストアスは、パストアス女王の、その身を投げ出した懇願により、辛うじて虐殺だけは免れた。

だが、その長い寿命をアルゴルの中に取り込む人種統合の為という名目で、母星から強制的に退去させられただけでなく、その文化の全て、あまつさえ、母国語さえも放棄させられ、子供はアルゴル語のみを教えられた。

銀河でもっとも高貴な血筋の民族は、破滅を呼ぶ民との烙印を押された上、アルゴルの中で最下層の階級として忌み嫌われ、虐待を受け続けた。

暗黒の日々の中で、パストアス人達の唯一の希望は、皇帝の後宮に入った女王が、表向きには皇帝の子として産み落とした二人の王子であった。

「表向き？」

「当たり前だ。誇り高きパストアスの女王が、血に塗れたアルゴルの子など産む訳が無かるう？ 母は侵略戦争にて戦死した前夫の遺伝子と自分の卵子とを密かに結合させ、私と兄を産んだのだ」

誇らしげにそう言ったが、青い瞳にふと影がさした。

「もつとも、我々兄弟が皇帝の子ではないという擬いは初めから有った。……母は我々を庇い、疑惑を晴らす為とある戦闘に参加して、皇帝を守って超新星に飛び込んだ」

「え……?!」

「私も知らなかった。皇帝を父だと信じていた。それゆえ、母を死なせた皇帝を憎んだ。何もせずに見ていた兄を責めもした。兄の死後、カストウアから真実を聞かされるまで、アルゴルの軍人として私は皇帝の為に戦っていた」

月の光を浴びる憂いに沈んだ美貌は、自分が女なら間違いなく恋情を抱くだろうと思うほど美しい。

彼といい津川一族といい、何時の間に、自分の周りにはこんなに美形ばかりになったんだろう？ 現在の状況も忘れてドルフェスはぼんやり貴公子に見とれていた。

貴公子はドルフェスの視線に気付くと、何時ものように微笑みを浮かべる。

「混達が居らねば、あの状況がまだしばらくは続いただろうし、私が兄の思惑通りメトセラを継ぐ事も無かった。そして今のような平和も自由もありはしなかっただろう。そして、私に反発したあ奴等がこうして襲ってくる事も無かつたらうな」

終わりの言葉は面白がっている様な響きがあった。

「メトセラ？ これってその内争なんですか？」

「ああ、そうだ。メトセラとは、兄が組織した反アルゴルの秘密結社だった。虐げられたパストアス人達は最後の王の下で結束し、滅びの詩を実現すべく自由を求め密かに立ち上がったのだ」

アルゴルに母星を滅ぼされ、取り込まれていた他の民族も志を同

じくする者として地下活動に加わり、メトセラは帝国の土台を脅かす程の大きな勢力となっていた。

虎視眈々と帝国崩壊を狙うメトセラに、絶好の好機が来た。

アルゴルと銀河を二分する大国セファート王国との全面戦争、いわゆる銀河大戦である。

ここら辺からならドルフェスにも少しは判る。

銀河の覇権をめぐつて、平和共存を旗印に掲げるセファートと、あくまで帝国の一統独裁を目指すアルゴルとの、決して相容れないもの同士の闘いは熾烈を極め、どちらも多くの犠牲を出したが次第に形勢はアルゴルに傾いていった。

そこに現れたのが平和の星となるアースである。

当時セファートの王子ソーラ・アイ・セファートが、ある事情から妹姫と共にアースに身を寄せていた。

そこにアルゴルの追撃隊として派遣されて来たのが、現在迎賓館の主賓となっているアルタイル・アルナスルと、彼の兄、アルファルド・アルナスルであった。

この先なら誰でも知っている。

「確か、アースで和平協定が結ばれて、その後皇帝が暗殺されて、革命が起こったんでしたよね」

皇帝の暗殺者こそアルタイル・アルナスル、皇帝の庶子であった。老英雄の最大の汚名《父殺し》は、同時に彼を英雄たらしめた。貴公子が静かにうなづく。

優しいな微笑みが、何時の間にか皮肉な冷笑に変わっている。

「そうだ、メトセラの力を使って、アルタイル・アルナスルが皇帝を殺した。実際には父でも何でも無かったがな。だが、アルタイル・アルナスルにとって、パストアス王家の血筋の正しさを証明するより、むしろ《父殺し》のアルゴルの皇子のままでいる方が都合が良かった」

「何故です？ パストアスの王子様の方が良いでしょう？」

ドルフェスは首を傾げた。親族殺人よりもパストアス王家が母国

の復讐をしたという方がずっと正当性がある。

「アルタイル・アルナスルが行ったのはあくまでも革命だ。故に、国名もあえてアルゴルの名を残した。判るか？」

「えっと…つまり、パストアスの報復ではなく、国内の内乱ってことにしておいた。って訳ですか？」

「まあ、そうだ。他国の王子に皇帝を殺されたとあっては、如何に不満を持った国民でも愛国心に燃えるというものだ。それに他の王子を押さえる意味もあった」

「父の仇って言わなかったんですか？」

素朴な疑問に、貴公子は軽い笑い声を上げた。

「そんな者は山ほどいたぞ。しかし、実のところ父を殺して帝位を奪う事は、アルゴルではよくある事だったのだ。現に、殺された当の皇帝も先代を暗殺して帝位を掠めとっていたのだからな」

伝統的な父殺し…自国のことながら、荒んだ歴史にドルフェスは呆れた。

革命以後の事は、朝からマスコミがこぞって説明していたから、もう聞くまでもない。

銀河大戦終結後、アルタイル・アルナスルは初の共和制を敷き、全国民の平等を唱って被征服民の人権を回復させた。そして初代大統領となって数々の国家的な危機を乗り越え、英雄として現在に至っている。

そこでふと、違和感を覚えた。貴公子の話は、初め自分の事を言っている様な口ぶりだった、だが何時の間にかアルタイル・アルナスルの話になっている。しかし話の流れは一人の人間の行動の様に聞こえる…そう言えば貴公子の名もアルタイルらしい…

まさか…この人が？

いや、そんな筈はない。

老英雄は今現に迎賓館の晩餐会に出ている。それに二百歳を越えた人間がこんなに若い筈が無い。

もう一つ疑問が浮かぶ。確か貴公子は滉達がいなければ革命は起

こらなかつた。みたいな事を言っていた。

しかし……

「あの……革命つて二百年前ですよね」

「そうだ」

「警部とは、何時ごろからの知り合いなんですか？」

貴公子のきょとんとした顔を初めて見た。とドルフェスは思った。青い目がマジマジと青年を見つめる。

「トウア・ドルフェス。滉はお前に何も言つて無いのだな」

「はあ……」

「七日以上も共にいて、あれほどお前を気に入っているのに？ 滉の性格では話さぬ方が不思議だ。それとも、あ奴も常識をわきまえ始めたのか？」

随分な言い様である。

「あ……でも、俺。入院したりしてて、実質的には三日程しか一緒にいませんから。それに色々あつてろくな話も出来なかつたし……」
何で自分が言い訳しているんだろう？と心の中で首を傾げながら
そう言つと、貴公子も頷く。

「そうであつた。滉の奴も三日ほど死んでおつたしな」

「え?!」

さらりと言われた言葉に仰天して貴公子を見た。

「死んでた？」

「うむ、生き死にが自由な者とは、実に羨ましいことだ」

しみじみとうなずかれて、青年は腕の中でじたばたした。

「ち……ちよつと待つて下さい。どういう事ですかそれ？」

頭の中で、エミーの言つていた魅羅の奇行の件がぐるぐる回ります。

「死体の始末をしたつて言つたでしょ？あれ本当よ」

「トランクから何か引きずり出してた。間違いなく津川警部だつた。」

まさかそんな事はない。有り得る筈が無い。

そう思つて鼻に引つ掛けもしなかった。だがまさか…

ドルフェスの慌て振りに貴公子が微笑んだ時、再び鈍い爆発音が響いた。

「おやおや、まだ花火が残っていたのか」

相変わらず呑気に構える貴公子に、ドルフェスはもう一度食い下がった。

「教えて下さい。警部が死んでたつてどういう事ですか？」

軽いため息と共に、青い目が笑いを含んで青年を見つめる。

「滉が話さぬものを、私が喋つても良いものか…」

真剣な黒い目が見つめ返した。

「お願いします」

「そこまで言うのなら、仕方あるまい」

肩をすくめた貴公子が話を続けようとした時、扉が激しく開かれる音と、続いて獣の争う叫び声が響きわたった。

中央の屋上に設えられた広いテラス。

月光に浮かび上がるその空間に、二人の人影と化猫らしい大きな影の群れが、争いながら飛び出してくる。

「双子達だな」

貴公子の言葉に、ドルフェスは慌てて下を見た。

確かに十数匹の化猫達を相手にして、滉と光が戦っていた。

建物の上なので、さっきまで滉をサポートしていたネプチューンのプラスチックは使えない。その所為か、駐車場の方から不満気なネプチューンの遠吠えが聞こえてくる。

銃火機は無いにしても、滉も光も人間業とは思えないようなスピードで化猫の爪を掻い潜り、手にした武器を繰り出して反撃を繰り返していた。

しかし多勢に無勢、しかも相手は、驚異的な回復力を持つ化け物達だ。森の中での様に、一撃で致命傷を負わせなければすぐに回復してしまう。

「ふむ、苦戦しておるのか？」

やっぱり呑気に貴公子が呟いた。そんな事は見ていれば判る。

滉も光も致命傷を与えかねて次第に防戦のみになりはじめていた。
「手伝ってやった方が良いかも知れんな」

さすがに心配になっただけらしい。貴公子がゆっくりとテラスの上空に移動しはじめた。

貴公子の腕に犬っころよろしく抱きかかえられたまま、青年がじりじりしていると、数匹の化猫に飛び掛かれた光が咄嗟に飛び上がった。

が、待ち構えた様に一匹が体当たりをかけ、ほっそりした身体が宙に泳いだ。

「！！」

息を飲んだ瞬間。青年の頭に激痛が走った。

「う……！」

思わず頭を抱えたが、目だけは辛うじて手すりにぶら下がった光の姿を追っていた。

片手で手すりを掴んだものの、もう片方の腕はぶらりと下げたまま、動かせないらしい。

不自由な体勢ながら、何とか身体を持ち上げようともがいている。オーバーハングになった外壁は六階以上の高さがある上に、足元には、爆破によって檜の様にそそり立つ建材や鉄骨が、炎を伴って待ち構えていた。

光に向かつて、二つの小さな影が跳ねるように動く。が、しかし。化猫達が行く手を阻み二匹の影は分断され、合体する事も出来そうに無い。

「助けなけりや……」

激しい頭痛にうめきながら青年が呟く。

——そうだ……俺が行く。退け——

誰かの声が頭の中に響いた。

「え……？　く……！！」

どくと頭の欠陥が脈打つのが感じられる。更に激しい痛みが

襲ってきた。

息も出来ないほどの激痛に苛まれながら、それでも縛られたように光から目が離れない。身体の自由はまったく効かなかった。

波のように襲ってくる痛みに次第に視界が擦れていく。

不意に、ぐい、と、身体が誰かに押された様な気がした。

そのまま、流されるような感覚と共に、意識は虚空の闇に飲まれていった。

貴公子の腕の中で、青年が身じろぐ。

「降ろせ…」

低い声が聞こえ、ゆっくりと頭を持ち上げる。

「トウア・ドルフェス。大丈夫か？ 何やら苦しんでおった様だが？」

覗き込む貴公子に、黒い瞳が鋭い視線を返してきた。

「トウア？ 本来の意味で使っているのなら、お前もたいした狸になっただな」

形の良い唇に冷たい微笑みが浮かんだ。

「お前は…そうか。あれが何をしたのか…聞かねばならぬな」

貴公子の目に、今までには無い奇妙な光が浮かぶ。

「さあ…降ろせ」

先程までの青年とはがらりと変わった態度に、貴公子は冷笑を浮かべながら高度を下げていった。

降下している間に、青年は数度拳銃を撃った。その度に化猫が跳ね飛んだが、しばらくすると皆立ち上がってくる。

青年は激しく舌打ちをした。

「早く降りろ。ここでは遠すぎる」

「急かすな、落とすぞ」

貴公子の冷たい声など耳に届いていない様に、青年は手すりにぶ

ら下がったままの光を見つめている。

「相変わらず、光の事となると血相を変えるな」

冷やかす様な声音には構わず、変貌した青年は無言でトリガーを引いた。

光の腕に爪を立てようとしていた化猫が、悲鳴と共に弾け飛ぶ。

「ここでもいい、もう降りられる」

ある程度まで降りたところで、青年が片手を上げた。

「いや、久方振りだ。共に降りて戦おうではないか」

「いらん。お前が退屈しのぎに暴れて怪我をするのは勝手だが、後でこいつが、お前の取り巻き連中に袋叩きにされる。願い下げだ」

自分を指さしながらまるで他人の様な言い方をする。貴公子はむっとしたように目を細めた。

「そうか、これ以上お前を抱いているのは、こちらお願い下げだ。さっさと降りろ」

奇妙な会話の終了と同時に腕が離され、青年はテラスへと落下していった。

「久々のオリオンか…高みの見物をさせてもらおう」

青年とは逆に上昇しながら、貴公子は楽し気に呟いた。

かなりの高さから飛び降りてきた青年は、何時もの彼からは想像も出来ない敏捷さで危なげなく着地した。

新たな敵の出現に、化猫達は牙をむき出して威嚇する。

「ふん」

青年は無造作に拳銃を持ち上げ、トリガーを引く。

「ギャンー!!!」

一匹が頭を上半分吹き飛ばされ、悲鳴をあげてもんどりうつた。全身を痙攣させて二度と起き上がらない。

「化け物が」

吐き捨て、次に襲いかかってきた化猫に銃弾を浴びせる。両目を

打ち抜かれ、後頭部を砕かれてこちらも絶命する。

続けざまに仲間を二匹殺された化猫達は、更に怒り狂い、乱入してきた強敵に向かって襲いかかってきた。

目の端で化猫達の変化を察知した滉が、嬉しそうに反撃を始める。無表情な青年の口元に、有るか無しかの笑みが浮かんだ。

素早い化猫の動きを正確に見極めて、最少の動作でかわしながら光が掴まっている手摺に向かって行く。

青年に襲いかかった化猫は、全て頭部を撃ち砕かれて骸となっていた。

「光！！」

青年が手を伸ばした瞬間と、意を決した女戦士が、壁面を蹴って身を躍らせたのが同時だった。

細い身体がしなる様に翻り、大きく弧を描く。

それを追って小さな影が跳び、両脇に支える様に取り付くと、尖塔の狭間を抜けて裏庭の方へ連れ去っていった。

虚しく伸ばした手を軽く握り、青年は安堵の溜め息をついた。

「……たく……相変わらず、可愛げの無い女だ……」

そう言いつつ、初めて嬉しいな笑みを浮かべる。

断末魔の悲鳴が響き、五匹の化猫を相手にしていた滉が、二匹を仕留めていた。

横から突進してきた化猫を、鮮やかに跳躍してかわす。間髪を入れずに一匹の頭をトンファーで砕く。

しかし、体勢が戻らないうちに、それを狙った化猫が飛び掛かってきた。

「クソ！！」

歯噛みした瞬間。銃声が響き、化猫の顔面が四散する。

ニヤリと口元が歪んだ。

情性で振り降ろされる大きな爪を蹴り払い、そのまま飛燕脚に移って。後ろから来る化猫に叩きこむ。

相手の身体が大きくよろけたところを、眉間に深々と鉄の棒をめ

り込ませる。

ぐしゃりと確かな手応えを感じ、顔面の全てから血を吹き出しながら化猫は絶命した。

トンファアの血糊を振り払い、滉は回りを見回した。

累々たる化猫の死骸が血の海の中に転がっている。

もう立っている者は、自分と、後ろにいるもう一人の男だけだった。

軽く息を整えると、滉はにんまりと笑み崩れた。

背後の気配で男が近寄ってくるのが判る。

「やつとお出ましか。お前らしいや」

ゆっくりと振り向いて、見慣れた皮肉な笑いを浮かべた男を見る。

「よう、相棒」

そこに立っていたのは、ドラゴ・ドルフェスではなく。紛れもない。竜造寺龍也だった。

19 BE NOT ALL THERE?——正気?——(後書き)

ついに現れたドラゴンメーカー。物語の核心がうごめきだす？

20 THE T S LIGHTS — その通り — (前書き)

戦いの犠牲者に、閑吼の心が痛む

見事な調度品に飾られた部屋の中に、天蓋付きの寝台が据えられていた。

古式ゆかしいアルゴル調のそれには、アルゴル本星から取り寄せられた、豪華なアルゴシルクの夜具が置かれている。

ベースシテイでも第一級を誇るホテル。トラディシユのロイヤルスイートルームである。

勿論、現在来訪中のアルタイル・アルナスルの為に用意された寝室だが、今その寝台には別の人間が眠っていた。

迎賓館で双子に捉えられたカストウアである。

横たえられたカストウアから、閑吼は静かに検査用の端末を取り外した。

「僕に出来る事は、今はこれで精一杯です。アースの、僕の研究室に行けば、少しは何とか出来るでしょうけど……」

そう言いつつ、後ろに立ってじつとカストウアを見つめている男に向き直った。痩せぎすでひよろりと上背のある、穏やかな容貌の男は、微かに引きつった様な笑みを浮かべて見せた。

「医師殿、そのお心だけで十分です。ファントムに喰われた者で、まともに戻った者はいない……任務中の事ならば、弟も覚悟は出来ていたはず。……お氣に為さらず、楽にしてやってください」

閑吼は黒い瞳を瞬いた。

「安楽死、ですか？ ライファンさん、僕は医者です。患者を生かすのが仕事ですよ」

ライファンは首を振った。

「そこを曲げてお願いしたい。弟は武人です、あれに少しでも正気が残っていれば、こんな醜態を曝すことを潔しとはしないでしよう。それに、このままにしておけば、必ず、御前や津川殿達に仇を為すでしょう」

沈痛な面持ちのライファンに向かって、閑吼はにつこりと笑って
見せる。

「ライファンさん。《記憶の銘記者^{パラディケル}》の御子息が何を弱気な。過酷な運命に、真っ向から立ち向かってこそ、あなた方の本領でしょう？」

長い黒髪をさらさらと鳴らして、閑吼はライファンを見上げた。

「僕は何度もカストウアさんにはお会いしています。初めてお顔を見たのは、叔母の結婚式に来て下さった時でした。その時、とても強い方だと思いましたし、アレクスを見た途端にプロポーズをして、イルダナフやエゼルと大喧嘩なされた時には、大笑いをしたものです。大丈夫。彼はきっと元に戻ります。僕が戻してみせます。何時までも、ファントムに負けてはいられませんからね」

「医師殿……」

見つめかえすライファンに、閑吼は首をすくめて笑う。

「第一、父達や御前が、このまま彼を見捨てるはずがありませんよ。何しろ、平気で悪魔と踊ってみせる様な人達ですからね」

手早く用具を片付けると、ライファンの肩に手を伸ばす。

「皆さんは、銀河大戦を切り抜けた戦友だと、母から聞かされています。それに、カストウアさんとの酒場での大喧嘩は、父が武勇伝として何度も話してくれました。だから、僕にとっても、カストウアさんは遠い人ではないんです」

閑吼の言葉に、ライファンは目を伏せた。

「医師殿、宜しく願います」

再びカストウアを見つめるライファンを後に残して、閑吼はそつと寢室を出た。

アンティークな手動のドアも、振り返らないように開閉する。

昔、幼い頃。母親が珍しく厳しい顔で言ったものだ。

「愛情や優しさから、強い人が涙を流すのは、決して恥ずかしい事などありません。でも、その姿を覗き見るのは、とても恥ずべき行為よ」

母の言葉を守っている訳ではないが、実際こんな仕事をしていると、偶然そんな場面に出くわす事も多い。

その度に、見なければよかったと後悔する。

今も見たくは無かった。弟の運命を呪う、打ちひしがれた兄の背など…………

母の言葉と共に思い出す背中がある。

言葉の意味を思い知った、あの日。十二の時に見た、最も男らしい、強い人と信じていた男の、悲しみに膝を折った背中……

「閑吼、どうだ？」

その男に膝を折らせた当の本人達の片割れが、青い顔をして聞いて来た。

「父さん……」

「カストウアはどうだ？ 治りそうか？」

父の問いに、閑吼は小さく首を振る。

「判りません。あれほどまでに食べ尽くされた人は初めてです。カストウアさんが我々方の人間である事は、ファントムには判っていたんでしょうね」

滉の顔に、暗い怒りが走る。

日食になりかけているな、と閑吼は思った。

怒りと後悔によって、精神的に追い詰められている滉を指す言葉だ。

この言い方も、あの男が言ったことだ。

「滉が日食になると手がつけられなくなるぞ。お天道さんには、照つといてもらわないと困るからな」

何時からだろう？ 頭の中で彼の指示を作り出す様になったのは、苦しいにつけ、悲しいにつけ、彼の声进行い出して、自分を前に向けて叩き出すのだ。そして自分はこう答える。

—— yes D・M ——

「D・Vの設備を使えば何とかなるかも知れません。しかしファン

トムのエッセンスをD・Vに入れる事になりますから、多少の危険が伴います。最も安全で設備が整っているのは、アースの僕の研究室ですが、此処からでは遠すぎますからね」

閑吼ゆゑくの提案に、滉は大きく肯いた。

「構うもんか、連れていけ。お前ならそう言うと思って、シャドウには話してある。あいつも賛成している」

滉の決断の早さは、閑吼ゆゑくにとって嫉妬に近いほどの憧れを感じさせる。

自分はカストウアを診てから今まで悩んでいたというのに、滉はとづくに予想して、準備をしているのだ。

親子だというのに、何時も迷ってばかりいる自分とは、どうしてこれほどまでに違うのだろう。

滉は太陽だと、竜造寺は言った。津川ケインの家に生まれた双子の男は、太陽の筈なのだ。滉も稀胤アポロンも太陽神の名に相応しい強さと明るさを持っている。

しかし、自分は違う。津川の双子の二代目は、太陽と月が逆さまになっている。
あまてらす つくよみ

天照と月読のようだと。昔、祖母の弓美やもう一人の叔母の月絵が、冗談めかして言ったものだ。

本当にそうだと思う。

魅羅の強さと明るさに対して、何時も陰に隠れてしまう自分。

前に出ていくことが苦手な分、魅羅をサポートするのが役目だと決めて行動してきたし、自信も持っていた。

そう、かつて竜造寺が、滉と光を支えたように…

「閑吼ゆゑく、どうした？」

滉に肩を叩かれて、閑吼ゆゑくは物思いから覚める。

「あ…いえ、何でもありません」

閑吼ゆゑくは首を振った。

「そうか。D・Vはホテルのすぐ隣に入り口を開いているし、今、光が持つて行く為の車の車あしの手配をしている。ネプチューンを使えば良

いんだが、あれが無くなると俺が困るんでな」

「判ってますよ。それに、ネプチューンは、父さんとD・Mの命令しか聞きませんしね。僕なんて、仕方なく乗せてやってるんだって態度をとられるんですよ」

閑吼ゆるくの返事に、滉は小さく笑った。

「あいつも頑固だからな。覚えてるか？ お前。ネプチューンにパ
ンツ引つ張られて、オンオン泣いてたっけな」

「…五つの時の事じゃないですか…」

肩に置かれた滉の手が暖かった。スキンシップを大切にする滉は、何かに付けてこうして触れてくる。

滉に触れるのは好きだ、彼の力が流れ込んでくるから。

でも、最も懂れた人は、滅多にそうしてはくれなかった。それは、彼の強さが、人を拒む事から作られているものだったからだ。

——それでも、僕は貴方が好きですよ。D・M——

「それは嬉しいな。たが、お前はなんでそんなに不安定になって
るんだ？」

——多分…彼の所為でしょう——

自分の中の竜造寺と会話しながら、閑吼ゆるくは滉の後ろに居る男に一瞥をくれた。

滉がD・Dと呼ぶ男……

黒い直髪。鋭角的な細面の輪郭。滉程では無いにしても、上背のある長い手足のシルエツト。何処も彼処も、無意識に左腕を撫ぜる仕草まで竜造寺そっくりだった。

しかし、常に皮肉な光を浮かべていた黒い瞳は、何とも間のぬけた、御人好しとしか言い様の無いものになっており。キリツと引き締まっていたはずの口元も……

閑吼ゆるくは眉を寄せた。気に入らない。腹立たしい模造品だ。

「おい、閑吼ゆるく。本当にどうした？ ばーっとして」

滉に肩を揺すられて、閑吼ゆるくは再び我に返った。

「え？ あ…済みません。考えごとをしていたので」

いぶかしげに覗きこむ父親へ、言い訳をしながら、閑吼は慌ててカストウアのカルテを開く。

「移動させるんですしたら、なるべく早い方がいいですね。鎮静剤は射つてありますが、彼があらゆる薬剤に対して、抵抗力をつけているのは明白です。確か、アルゴル軍人の基本でしたよね」

「つまり、長い事寝てちやあくねえって訳だ」

半ばばやいているような滉の言葉に、閑吼は真剣に肯いた。

「今すぐ起きても不思議じゃありませんよ」

「勘弁してくれ。やっと伸したのに…寝付きの悪い男だぜ、まったく」

訳の判らない愚痴を言いながら、滉は顔をしかめた。

もつとも、鎮静剤が効いてくるまで、一時間近くも暴れ狂い罵り続けるカストウアを押さえつけていたのだから、無理もないところだろう。

「ところで、父さん。トロイの木馬って何の事が判りますか？」

ふと思いついて、父親に聞いてみた。

「へ？ 何だお前エ忘れたのか？ 餓鬼のころいつもイリアスを詠んでやっтарうが」

「勿論覚えてますよ。ギリシャ神話は津川家の必読本ですからね。でも、アースの神話が、パストラス人であるカストウアさんに、どんな関りが有るのかと…」

閑吼が口にした言葉に、滉の顔が強ばった。

「どういう事だ？」

「うわ言で彼が何度も言っていました。『トロイの木馬、いけない、だめだ。仕方が無い』ライフアンさんも首を傾げていましたよ」

滉の目が何かを透かし見るように細められた。閑吼は滉の説明を待ったが、それはひょこりと突き出された呑気な顔から発せられた。

「そういえば警部、テロリストが同じ様な事を言っていましたよね？」

青年の言葉に、滉は大きくうなずき、閑吼は微かに眉を寄せた。

「ああそうだ。D・D、済まねえけど、ちょっくらネプチューンま

で行って、ファイルMつてのを持ってきてくれ」

「はい」

件の模造品は、実に素直なお返事を残して部屋を出ていった。その足音を、目を伏せて聞いていた閑吼であるが、面白そうに見つめる滉の視線に気がついた。

「？ 何ですか」

息子の問いに、小さく笑う。

「お前、あいつに何やったんだ？」

「どうしてそんな事をおっしゃるんです？」

閑吼を見つめながら、滉は肩をすくめた。

「あの生真面目な男が、ホテルに着いてからこっち、お前を見ると目を逸らして会釈の一つもしやしない。はてな…とね」

今度は閑吼が肩をすばめた。

「さあ、僕は挨拶しただけですよ」

金褐色の髪を掻き上げて、再び小さな笑い声をもらす。

「まったく、お前の性格は、光にそっくりだな」

「え？」

「気に入らねエんだろう？ そっくりさんがよ」

本音を言い当てられて、閑吼は微かに顔を赤らめた。

「僕は、別に…」

「まあなんだな。光よか、お前の方が素直だよ。あいつは見栄張つてな〜んにも気にしてないわよってな顔してやがるが、お前ははっきり嫌だつて顔してるからな」

閑吼は観念して下を向いた。

「ま、俺や魅羅みたいに、そっくりさんです、ハイそうですか。てな具合にやあいかねえだろうが、勘弁してやんな、顔が似てるのはあいつの所為じゃねえんだからよ」

閑吼は苦笑しながら肯いた。

「判ってはいるんですよ…」

滉は腕を廻らせて、閑吼の肩をぎゅっとひとつ抱きしめると、ポ

ンと背中をどやしつける。

「ま、その内慣れるって、どうせ長い付き合いになるんだからよ」
「え？」

怪訝な息子に、悪巧みを白状するようにやりと笑う。

「ナデイーラに頼んで、あいつを貰って帰るつもりなんだ」

「父さん?!」

「まだあいつの意思は聞いて無えが、お袋さんの反対が無かったら親父の後を継いで連邦に志願する筈だったって事だから、嫌がりやしねえだろ」

「またその御母さんが反対して終わりですよ」

冷たく言い放つ息子に、首をコキコキと鳴らして、

「二十五にもなった男が、何時までも才母ンの言いなりになつてられつかよ」

と、鼻でせせら笑うように言う滉。こめかみを押さえて、ゆるく閑吼は唸った。

「そう言つて、彼を焚き付けるわけですね…? 怨まれますよ、先方の御母さんに」

滉は何時もこうだ。勝手に決めてさつさと実行に移してしまう。

人の言う事など聞いた例は無いのだ。今回は事前に話してくれただけでも、まだましといえるかもしれない。

「でも、何で連れて行くこうなんて、お考えになられたんです? 今までの現地調達の部下で、そんな風におっしゃられた事は無かったですしょう?」

長い黒髪が肩から流れ落ちて、さらさらと音を立てる。

「やっぱり、顔ですか?」

率直な質問に、滉は困った様に視線を泳がせた。

「マア…何だな、否定はしねえよ。だが、あいつはそれよりもっと面白い」

「面白い?」

「ああ、面白い。あれほど真新まっさらな奴を見たのは初めてだ。さっきの

台詞じゃねエが、二十五にもなった男だつてのに、少しもスレた所が無え。まるで生まれたての赤ん坊みたいに、素直で真っ直だ。まったく、あいつには過去むかしなんて何にも無いんじゃないか？　って気がするよ」

照れたような笑みが滉の頬に浮かぶ。

「ホント、俺達があ顔に持つてるイメージとは正反対だぜ」

そう言いながら肩をすくめる滉を、閑吼ゆゑくは微笑みながら見つめていた。滉もまた、竜造寺の影を求める一人なのだ。そして、竜造寺の受けた苦しみや、悲しみ。受難の数々（それらの原因の半分は自分達であるはずなのだ）から、あの青年を守りたいと考えているのだらう。

口を濁す滉の心中を、閑吼ゆゑくはそんな風に解釈していた。だが、滉がどんな感傷をドルフェスに対して持つていようが、とにかく、気に入らないものは気に入らない。それがこの先ずつと続く…？　第一、竜造寺にことのほか懐いていた自分の想い人は、ドルフェスアレクスを見たらどれほど泣くのだろうか……初めは喜んで。そして次には、別人である切なさで……やめて欲しい…閑吼ゆゑくは、こっそりため息をついた。

「ま、どーなるかはあいつ次第だけだな。けどよ、もしあいつが来たらきつと面白えぜ」

息子の嘆きには頓着せずに、滉は楽しそうに窓辺に歩み寄った。地上四十階にある窓からは、ベースシティの夜景が一望の下に広がっている。

アース系の企業の流入に因って発展した都市であるこの街も、闇に浮かび上がらせる光で縁取られた姿は、アルゴルの伝統を踏襲した、同心円と放射線を組み合わせたものだ。ホテルを取り巻く大きな同心円郡の向こうに、歓楽街であるジャクトーナ区の小振りの同心円郡が、一際華やかに浮き上がっている。

滉の背中越しに見えるそんな光景が、閑吼ゆゑくには、水面に広がり、互いに打ち消し合う波紋の様に思えた。

旧都と新都心。攻めぎあい、衝突する二つの力……古いものと新しいもの。

今夜起こった騒動もまた、新しいものを受け付けられない者が、過去からの亡霊に力を借りて、人間の尊厳を踏みにじり、己の正義を押し付けてきた事に他なら無い。狂気に血走ったカストウアの目と、悲しみに沈んだライファンの横顔が思い出された。次いでドルフェスの呑気そのものの顔と、竜造寺の引き締まった凛々しい顔を思い浮かべ、自分のわだかまりも、変化に対応出来ない年寄りの執着だろうかといぶかしんだ。

—— D・M、僕はどうかやら、頭が固くなってきた様ですよ——
「〃気にすんな。一々滉に合わせていると、総白髪になるぞ〃」

心の中の竜造寺の言葉に、閑吼はこっそり笑みをもらした。

「D・Dの奴、遅っせえな」

窓から離れながら、滉が首を傾げる。

「かれこれ二十分は経ってるぜ。いくら地下までつつーたって、長すぎるよな。見てくつか？」

歩きだす滉に、

「彼が取りに行ったファイルって、何なんですか？」

と、閑吼が聞く。

「あ？ ああ、こないだテロ助どものアジトを叩いた時に、連中のコンピからネレウスがもぎ取ってきたデータだ。GENから分析結果が返って来たんだ」

「GENはなんて？」

そう聞くと、嬉しそうにやりと笑う。

「もうすぐ、百鬼夜行がはじまる。とさ」

「え？」

「お前の従弟は、俺以上に厄介事が好きらしいぜ。嬉しそうにわざわざ解説付きだ。笑えるぜ。ありゃあ、親父似だな、理屈っぽい所がそっくりだ」

そう言いながら滉はドアを開ける。

「それにしたって、D・Dの奴、何してやがんだろうな」

「彼の事だから、何かで困ってるんじゃないですか？」

「かもな」

SPに後を任せて、津川親子は笑いながら部屋を後にした。

閑吼ゆゑくは、自分とネプチューンの関係をあてはめて、そんな悪口を言ったのだが。それとは違った状況で、ドルフェスは今、やっぱりとても困っていた。

——— どうしようか…？ 警部に連絡しなきゃ ———

地下駐車場の中、柱の影に張り付いて、二ブロック先に居る人影の様子を伺いながら、ドルフェスは一人焦っていた。ベースシティで第一級を誇る、ホテルトラディッシュは、格式だけでなく、その規模もまた第一級を自負している。従って地下収納が好きなベースシティの常として、ホテルの地下三階層を占める駐車場は、広さに関しても半端ではない。

10m間隔に並んだ柱を一ブロックとし、柱を五十ずつのグループで分けて一区画エリアとしてあった。直通エレベーターで降りて来たものの、ネプチューンは出口近くに行っていて、遙五区画先まで歩かなければならない。これが混ならネプチューンの方から来てくれるのだろうが、自分ではそうもいかないのが、青年は仕方なく歩きだした。ま、ここまでなら、彼に降り懸かる数々の不運に比べれば、たいした事は無い。

本格的な不幸は、一区画程歩いた頃、眼の端に金色の光を見たと思った時にはじまった。

車に見え隠れしながら、貴公子が歩いて来るのが見える。

「？」

貴公子と共に、先程ウルとオイスと紹介された人達がいた。三人の前を、地味なスーツを着た小柄な男が歩いており、ドルフェスは、

その姿を見た途端、肌が泡立つ思いがした。

—— ケット・シー……？！——

七三に分けた髪。これと言って特徴の無い平凡な顔。例によってのアタツシユケース。軽い猫背が貧相さを強調し、後ろを歩く貴公子の威風堂々たる豪奢さによって、彼の装う平凡さは嫌味なほど完璧に見えた。これが今、シティ中を震え上がらせている死神の頭目であるなどと、誰が想像出来るだろう？

近づいてくる一行から咄嗟に隠れた青年は、柱を背負いながら四人の会話に神経を集中させた。立ち止まった四人は何やら話合っている。

ケット・シーが二言三言ぼそぼそと喋ると、貴公子は得心したように肯く。

「では猫よ、私をそこまで連れていけ」

「御前？！」

貴公子を守るように両脇に立っていた二人が、そろって声をあげた。それを手で止めて、貴公子は薄い微笑みを浮かべる。

「お前の主人には、会えるのだろうか」

ケット・シーは、微かに首を振り、お馴染みの『さあ、どうでしょう』を口にした。

馬鹿にしきつた態度に、ウルが血色ばむ。

「無礼者！！ 何方の御前おんまえと心得る！」

「アルタイル・アルナスル・アルゴス・ウナヌ・シリムカシク・パストアタン閣下と、存じますが？」

貴公子をわざわざフルネームで呼んで、ケット・シーは、人間には絶対出来ないVの字笑いを浮かべ、すぐに何時もの無表情に戻る。ウルが気色悪そうに眉を寄せた。

「猫よ、今は忍びだ。その名は別の者が使っておる故な……」

確かに、アルタイル・アルナスルは他に居た。ドルフェスは、騒動の後で死ぬほど驚いた事を思い出した。

何時の間に自分が、滉と一緒に居たのかよく判らないが、貴公子

が中庭に降りて来るのを待っていた時に、賑々しく着飾り、お供を引き連れた老英雄が現れた。

滉以外の総ての人々が頭を下げて礼を取ったが、ふわりと着地した貴公子は軽く肯いただけで、それどころか、膝を折り深々と頭を下げたのは老英雄の方であつた。

眼を見張る青年に滉がにたにたしながら説明してくれた。

実は、貴公子こそ、本物のアルタイル・アルナスルであると。

純血種のパストアス人は、外見を望みの年齢に保つ事が出来るのだそうだ。しかし、二百年前から生きている有名人が若いままでは世間は信用しないし、かといってそんな特技を公表する気もないついでに、姿をイメージ通りにするなんて、真つ平御免である。

従つて、影武者を仕立てて、表の顔としていたという事だつた。

今アルタイルを名乗る人物。本名をタウルといい、貴公子の母君に仕えていた侍従長であり、貴公子の生まれた時からの側仕えなのだそうだ。彼は総てを懸けて貴公子に忠誠を誓っており、今もアルタイル・アルナスルとして人々の眼を集めて、貴公子に自由をもたらしめている。

迎賓館の上空で、パストアスとメトセラの説明を受けた時に感じたちぐはぐさは、その為だつた。

ケット・シーと貴公子の会話は続いていた。しかし、声を落としているために、ドルフェスの位置からではよく聞こえない。

「何を話しているのかな？」

恐る恐る首を伸ばした時、後ろでエレベーターのドアが開く音が聞こえた。

振り返ると滉と閑吼あひうが出てくるのが見える。

「警部……」

ほつとして二人のところに行こうとした。が、柱の陰から不意に人影が飛び出し、行く手を阻む。

「？ オイスさん……」

貴公子の近衛隊を指揮するオイスは、深い紺色の髪と緑の目を持

つ大柄な男だ。その大きな身体で、青年の前を塞いでいた。

「オイスさん、あいつは化け猫の親玉ですよ。御前が危ないですよ。今警部が来たんです、早くあいつを捕まえましょう」

声をひそめて話し掛ける青年に、オイスは軽く頭を下げる。

「御曹司、申し訳無い」

「え？」

何を言っているのか判らず、聞き返そうとした。が、口を開いた途端オイスが何かスプレーの様な物を吹き付けてきた。

「な……何を……？」

ぐらりと視界が傾く。回りがぐるぐる回りだす。かすれ始めた意識の中で、誰かが貴公子への呪詛の言葉を吐き出しているのが聞こえたような気がした。

それは自分が言っているのか、頭の中で誰かが言っているのか……

…

遠くでネプチューンが鳴き出した。その声がどんどん近づいて来る。

「ネプチューンですね」

判りきった事を閑吼ゆゑくが言う。

「そだな」

滉はあたりをきよろきよと見回しながら、上の空な返事を返してきた。

「どうなさったんですか？」

黒髪を揺らして、父親の顔を覗きこむ。

「んー？ D・Dはどこ行っただんだ？」

「迷っているんじゃないですか？ そこら辺で」

閑吼ゆゑくの声には嫌味が滲ぬんでいる。

滉は苦笑した。

「子供じゃあるめえし、こんな見通しの良いだだっ広いところで迷子

になるか？」

——彼ならやりかねませんよ——

心の中で、閑吼ゆめくは皮肉を言ってみた。

ネプチューンが激しく鳴きながら走ってきた。鳴き方が妙に忙しくない。

「様子がおかしい。ネプチューン、どうした?!」

ネプチューンはスピードを落としながらドアを開けた。明らかに普通ではない。

「閑吼ゆめく!! お前は戻れ、ライフアン達を頼む!!」

ネプチューンのシートに飛び込みながら滉が叫ぶ。

「父さんは?!」

「D・Dがさらわれた!! 追いかける!!」

叫びつつネプチューンはスピードを上げた。その赤いシルエットに、誰かが飛び付く。

「光ママ……」

見送っていた閑吼ゆめくは小さく呟き、踵を返してエレベーターに飛び込んだ。

「滉! 窓開けて!!」

「光か!! 早く入れ!!」

滉が命じる前にネプチューンは窓を開けて光を入れている。

「ポイント233 “5 ‘66よ”

前置きも無く光が言う。滉がうなずくのと、ネプチューンが言われた方向に進路を向けたのは同時だった。

「アルは一緒か?」

「ええ、ウルとオイスがドルフェスを抱えてエアキャリーに乗せたわ。あんた達が降りてきたのと一緒にくらいよ。もうすぐ飛んでるのが見える筈だわ」

空を見上げながら光が言う。

「後は、あんたのメモリフォトで送られてきたケット・シーとか言

う化け物が乗ってたわ。坊っちゃんは何を考えてるのかしら、ドルフェス手土産にあんな奴について行くななんて……」

光の声を聞きながら、滉は黙って空を睨んでいた。

——あいつが言っていた通りになりやがった……——

ギリッと奥歯を噛みしめる。

——早い事絞めあげておきゃア良かった——

滉は、警告を与えてくれた、短い再会の時を思い出していた。

あの時、抱きつきたいような気持ちを押さえて、滉はこう言っちゃった。

「それにしたって、まー騙されたぜ」

竜造寺は微かに片方の眉を上げた。

「何の事だ？」

「シャドウが言ってたぜ。あんたの身体は、あんたでなけりゃおかしいってね」

「だから？」

あくまで聞いてくる竜造寺に、滉は口を曲げる。

「ド・ル・フ・エ・スだよ。あんたの性格で、よくまアあんな好青年が演じられたもんだ」

そう言いつつ、手摺に身体を預けて空を見上げた。

暗い夜空の中央に、あたかも星の如くアルタイルの発する光が見える。

「あの野郎。高みの見物か？ 良い御身分だぜ」

ぼやく滉の横に、同じ様に竜造寺が並んだ。懷をまさぐり、煙草を取り出して火を付ける。

紫煙が揺らめきながら昇っていく。

「懸胤^{ケイン}達の計画は成功したようだな」

ぼそりと竜造寺が呟いく。

「あ？ ああ。お陰で墓の中から叩き起こされて、この体たらくだ」

「そうか……………」

再び黙り込む旧友に、滉は小さく笑った。

古い友が、昔と変わらずにいるのは、何と嬉しい事だろう。
長い年月の隔たりを忘れて、二人は黙って夜空を見ていた。

「滉…」

しばらくして竜造寺が口を開いた。

「ほいよ」

空を見上げたままで滉が答える。

「ドルフェス…だがな。俺じゃない」

「え?!」

驚いて竜造寺を見ると、彼は紫煙の煙幕に包まれながら、何かを探るように空を睨んでいた。

「俺じゃねえって…D・D、どう言うこつた?」

「お前は俺がドルフェスの振りをしている。又は、ドルフェスと名乗って此処に居た。と考えたようだが、残念ながらどちらでもない。ドルフェスはドルフェスだ。俺とは違う」

意外な答えに、滉は茫然と竜造寺の顔を見つめた。

表情は別として、服は魅羅が見立てたものだ。たし、靴もそうだ。
ついでに今持っている煙草とライターは、今朝魅羅が、助手席で眠りはじめた青年の懐に入れてやった物だ。

「お守り、忘れちゃ駄目よ」

魅羅はそう言っていた。

そう、ドルフェスは煙草を吞ま^のない。しかし竜造寺のヘビースモーカー振りは尋常ではない。

「どうなっているんだ?」

首を傾げた滉に、竜造寺は肩をすくめて見せた。

「さあな、俺にも解らん。何せ自分のことを思い出したのは、つい先^{さつき}刻なんだな。その時はドルフェスが居座^さっていて出ていけなかった」

「まるで二重人格だな」

「俺がこいつの前世かもよ」

冗談めかす竜造寺に、滉は首を振った。

「いや、あんたの身体はシャドウが調べた。D・Vに泊まっている間にな。答えは先刻言っただろ？」

短くなつた煙草を踏み消して、新しい物を取り出しながら、竜造寺は片眉を上げた。

「なら、ドルフェスという男は何者だ？」

滉は混乱して頭を抱えた。竜造寺が更に言葉を続ける。

「ドルフェスは今、どこか奥の方で眠っている。頭を殴って伸す具合に俺が出てきたからな。だがすぐに目を覚ますだろう。そうしたら俺は奴の後ろにいかざるを得ない。これが俺の身体なら、何故奴が主導権を持っている？ 何故俺の自由にならない？」

滉に謎の答えが解るはずが無かった。

D・Vに居た三日間、青年はほとんどうとうとと眠っていた。

話し掛けても答えず、そのくせ寝室にはちゃんと歩いていく。

ただし、用意した客室ではなく、教えてもないのに真つすぐに竜造寺の部屋に入つて眠っていた。

そしてシャドウは、青年のDNAその他すべてを調べて、竜造寺であると言いつた。

今日一日、やっとまともに話すようになったドルフェスを、探りを兼ねてからかいながら、この男が仮面を脱ぐときを待った。そして、待ち望んだ男は現れた。

これでそっくりさん事件は解決の筈だった。何故ドルフェスなどと名乗つてここに居たのか、二百年経つても変わらぬどころか、若返ったのは何故か。すべて聞き出すつもりだった。そうして後は、彼を待つ家族の元へ二人で帰る。これで全て元に戻るのだと考えていた。

だが、当の本人はドルフェスと自分は違つてと言いつた。挙げ句の果てに自分を指して『何者だ？』とはどういうことか……

「すまん、旦那。俺、訳がわかんねえ」

降参のポーズをする滉に、竜造寺は笑い掛けた。昔から、津川の兄弟にだけ見せる優しい笑い方だ。

「俺にも解らん。どうしてここに居るのか、何故今になって生きているのか。……俺は、アンナシエーラに殺された筈だった」

「アンナシエーラ？」

「俺の秘書だった女だ。どういう経緯いきさつだったかは、今はよく思い出せない。取り敢えず覚えているのは、レーザーがこつ、身体を切った事だな」

親指で左肩から袈裟掛けに体をなぞる。

「真つ二つになったあたりで記憶が終わっているから、多分死んだんだろう」

相変わらず他人事の様に言う。滉はため息をついた。

「何か怒らせるような事したんじゃないかねえか？それとも……しなかったからか？」

竜造寺の性格を考えてそう言うと、青年の姿の相棒が頷く。

「彼女は、俺の女房になりたがっていた」

「え？」

「希望に沿う気はかけらも無かったんで、申し出を断った」

相変わらず女性に対して、情のかけらも持たない返答に、滉は相手の女性に同情した。

「可哀想に……そりゃあ殺したくもなるわなあ」

ため息交じりに納得する。

「で、どんな女？」

「お前の女好きは相変わらずだな。またダフネに家出されるぞ」

途端に滉が唸り声を上げた。

「ああ、今していたな」

「うるせえ！ 家出じゃねえ！ 誘拐だ。シャドウは居るぞ」

「影は居ても、ダフネじゃなければ抱けもしないだろう？」

滉は大袈裟に肩を落として見せた。

「たまんねえよな、絵姿女房じゃあるまいし、目の前にいて話しも

するのに、触れねえんだぜ」

「本体はファントムとか言う化け物と一緒にだったな」

「知っているのか？」

火のついた煙草を化け猫の血の池に投げ棄て、三本目を取り出す。火を付けながら竜造寺は首を振った。

「お前と出会ってからこっちのドルフェスの記憶が多少有る。何でか知らんが、懸胤の姿をしていたな」

滉は、血を吸って赤くなっていく吸い殻を見つめながらうなずいた。

「ああ、あれは懸胤の身体だ。クソ婆アがろくな記録も残していかなかった御影で、あの化け物の事を知らなかったんだ」

ギリッと滉が奥歯を噛み閉めた。

「後でゆつくり話すよ。とても手短に説明できるこっちやねえからな……」

およそ滉には似合わない、暗い怒りの炎が立ち昇る。

ドルフェスが煉獄の炎と感じ、かつて竜造寺が日食と呼んだ暗い怒り……

記憶の中で滉がこんな顔をしたのは、ダフネを殺された時だった。それだけに、この事態がどれほど深刻なものか、痛いほど解る。そして、自分の手で育てた懸胤^{ケイン}と慧魅里^{エミリ}の顔が、脳裏をよぎる。

「そうか……」

滉以上に激しく冷たい怒りを浮かべながら、竜造寺は天空に登りはじめたセカンドウアを睨みつけた。

「化け猫の糸を手繰れば、奴に行き着くな……」

「ああ、そうだ。ところで旦那。ドルフェスについて、まだ何か知ってんじゃねエのか？」

黒い瞳にからかうような光が浮かぶ。

「疑り深いな」

金褐色の瞳が、こちらはジト目で受けて立つ。

「こういう時のあんたに關してはな。昔、敵の黒幕を知っていたく

せに、ずーっと黙ってやがっただろう？」

「極悪非道とはいえ、実の父をチクるのは忍び無かったんでな」

「嘘付け、謎解きさせて面白がっていたくせに」

二人はしばらく見つめ合い、次いで同時に笑い出した。

化け猫の死骸が散乱するテラスの上、未だ硝煙の匂いを含んだ煙がたなびく夜の空に、二人の笑い声が響いていく。

「滉、アルタイルを絞めあげろ」

ようやく笑いが収まると、竜造寺がそう言った。

「へ？」

まだ上空に居るアルタイルの光に目を移しながら、竜造寺は冷笑を浮かべる。

「あの狸。何か企んでいるぞ」

金褐色の瞳が、困惑したように見つめてきた。

「そりゃあ、あの坊やが何か腹に一物持っているらしいってのは感じていたけどよ・・・」

「ドルフェスの正体を奴は知っている」

滉の眉がはねあがる。

「何だと?!」

「奴はこいつの事をトウア・ドルフェスと呼んでいた」

「何だそりゃ？」

親友の勉強不足に、以前のように皮肉を言いたくて竜造寺は苦笑した。

「よくまあ、そこまで阿呆で今まで生きてこれたな」

「喧しい。さつさと蘊蓄たれやがれ、糞親父」

嬉しそうに滉が罵倒を返す。

「トウアは、パストアス語だ。「親愛な」という意味だ。いや、むしろ「我が」とか、「私の」という使われ方をする単語だな。トウアルミナ、とあいつは香花を呼んでいただろう？ あれは『私の恋人』って意味さ」

「ってことは……私のドルフェスう？ 確かに意味深だな」

滉が首を傾げていると、竜造寺はだるそうに手すりに寄り掛かった。だらりと下げられた手から煙草が抜け落ちる。

「D・D?」

苦しい息をしている竜造寺を、滉が覗きこむ。

「もう終わりだ、ドルフェスが目を覚ます……」

ゆっくりと閉じられていく黒い瞳を引き止めようと、取りすがる様に竜造寺の両肩を掴む。

「こ……今度いつ話せる?」

気だるい顔に、困ったような微笑みが浮かんだ。

「何て顔してる? 阿呆。俺はどこにも行かん。ドルフェスが眠れば、出てくるさ」

「そうか……」

ほっとしたようなため息が洩れる。

「じゃあ、さつさとドルフェス寝かしつけてやらア……光も喜ぶぜ」

消えかけていた目の光が不意に強まった。

「光には言つな」

「え? 何でだよ。あいつの方があんたをずっと待ってたんだぜ」
肩を揺さぶる両手を竜造寺が掴み返す。

「言つな……こんな不確かな状態で、あいつに会いたくない……」
言外に、ぬか喜びをさせたら可哀想だ。という声が聞こえる。

世の中のどんな女にも興味が無いくせに、こと光に対しては全身全霊をもつて愛情を注いでいる。光が少しでも悲しむようなことは絶対にしない。

「解つたよ……」

腕を掴んだ手から力が抜けた。だらりと下げられ、一緒にカクンと頭が下がる。

別れも言わずに、彼は行ってしまったらしかった。

それでも滉は息を殺して、ぐったりと手摺に寄り掛かった黒髪の青年を見つめていた。

「滉、どうしたのよ？」

光に覗き込まれて、滉は物思いからさめた。

「ああ？ いやD・Dがさ……」

すっかり言いかけて口籠る。

竜造寺は光には言うなと言った、確かに今ここで、ドルフェスの中に誰が居るのか光に教えれば、この片割れは逆上して我を忘れるに違いない。

「何よ、あの坊やがどうしたの？」

幸い光は、ドルフェスの事と勘違いした。滉はほっとして小さく笑った。

「お前なア、そりやお前は年食ってるだろうけどよ、大の男を坊や呼ばわりは可哀想だぜ」

横からパンチが飛んできた。

「誰が年食ってるですって？」

「……悪かった……」

見事に決まったストレートに頬をさすりながら、滉は、前方の上空に小さく見えはじめたエアキャリーの噴射光を見つけた。

「あれだな」

「そうよ」

むすつとしながら光はサイドの窓を開け、ネプチューンと併走していた二匹の猫を入れる。

「ンナアアアウー」

「マアアアアウ」

短距離スプリンター達は、長時間の追跡を強いられた事に対する不満を口々に言いながら飛び込んできた。

「光、猫入れんなよ。毛が飛ぶじゃねえか」

滉が口を尖らせる。

「何よ犬キチ。昔はネプがずーっと乗ってて、毛だらけだったじゃない」

「ネプチューンを縮めて呼ぶなよ、旦那の言い方みてえだぜ、お前」
「夫婦だもん、似てくるわよ」

滉の文句などどこ吹く風とばかりに、光は素知らぬ振りで二匹の猫達を撫ぜた。

白い方の猫が、喉を鳴らしながら滉に擦り寄う。

「マウー」

甘い声が洩れる。

「おー、ジュノーか、お前なら良いんだぜ乗ってても」

目を細めて滉が笑いかける。媚を売る連れ合いを鼻で笑うような音を出して、黒猫が滉を睨みつけた。嫌悪に満ちた緑の目と、受けて立つ金褐色の目が激突する。

「あんたって、初代以外のジュピターと、どうしてこう仲が悪いのかしら」

呆れた光が、ため息をつく。

「うるせエ、馬があわねえんだ」

ビルの狭間をネプチューンは疾駆する。エアキャリーの光が近くなってきた。

「ドルフェスなら、そっちのバカ猫にも好かれるだろうぜ」

滉の憎まれ口に、光は怪訝な顔をした。

「そう言えば、あの子、D・Dの銃を持ってたわね」

迎賓館の上空で、アルタイルに抱きかかえられながら、もたもたと取り出していた拳銃を思い出して、光が言う。

テラスでの銃撃戦は見る余裕が無かったが、あの音は確かに夫の物だと確信していた。

「あれって確か、ネプが預かっていた筈よね」

「オンー!!」

返事はネプチューンがした。

その嬉しそうな声に、内心ひやりとする。

ネプチューンは初めから感づいていたのだ。ドルフェスの中に竜造寺がいる事を、いや、あの身体が竜造寺そのものである事を……
「そーみてエだな、顔が同じだから気に入ったんだろ。ナ、ネプチューン？」

業と呑気な口調でそう言っただけ。しかし、寄せられた光の眉は解かれない。

「犬って、顔で判断したっけ？」

疑う様な声音に、滉は本格的な危機を感じていた。光に隠し事をするのは、昔から滉の最も苦手とする事だ。どんなに胡麻化しても、ほんの少しの目の動きで察知して詰め寄ってくる。

このままでは、かなりヤバイ。

外側はあくまでも平静を装いながら、滉は冷や汗を掻いていた。天の助けか、エアキャリーが降下しはじめる。

「光、降りてるぞ」

「この先には、リニアラインのターミナルがあつたはずだわ」

ディスプレイに地図を出して確認する。

「ラインの行き先を見てくれ。ネプチューン、俺にハンドルを寄越せ」

返事と共に計器類が点灯した。ハンドルを握ると同時にアクセルを目一杯踏み込む。まばらな車の流れを縫って、ネプチューンは滉の思っままに疾走しはじめる。

「ラインは東西に伸びてるわ。西は郊外へ出るラインよ」

「ダイヤは？」

「確認済み、今は何も走ってないわ。終電過ぎてるもの」

ラインの高架が見えはじめる。高架に添って進路を変え、高架脇の道をひた走る。

「降りてる、あそこ！！」

光に示されるまでもなく、リニア列車の屋根に、速度を合わせてエアキャリーが浮いていた。

「ダイヤには無い列車ね」

「ドナメトセラは金持ちだわなあ、専用列車か？」

「派出好きなのよ」

馬鹿にしきった声で光が言う。相手から言わせれば、津川家の人間にだけは、言われたくない台詞だろう

その間にもキャリーは列車の屋根に着地した。

キャリーとの接続が済むと、リニアは速度を上げはじめる。

「つきしょー、路面制約でこれ以上スピードを上げられねエ」

少しずつリニアに遅れはじめて、滉は齒噛みをした。

エアカー類は飛行する事も出来なくはないが、エアキャリーなどの航空専用機と違い、路面から発せられる信号ハルスによって、かなりの制約を受けている。特別詔えの連邦捜査官の車と言えど例外にはならない。解除されるにはそれなりの手続きが必要である。

もちろん既にネプチューンは、手続きを始めていた、だが、完了するにはまだ時間が懸かる。

「OK、私が行くわ」

光が腰を浮かす。

「大丈夫か？」

心配するのは口だけで、滉はさつさとルーフを開けた。高速によって巻き起こった風が、金褐色と黒い髪をかき乱す。

風に逆らって光は立ち上がった。

「じゃ、先に行ってるから」

「おお、頑張れよ」

六つの月が浮かぶ夜空へ、黒衣に身を包んだ細いシルエットが舞う。間髪を入れずジュピターとジュノーが脇に取り付き、一気にリニアまで連れて行く。

無事リニアに取り付き、進入口を探す。

次第に遅れながら、夜景の仲に浮かび上がるそのシルエットを見つめ、滉はじりじりと動ける時を待った。

20 THE T S LIGHTS — その通り — (後書き)

意外な伏兵。アルタイルの真意はどこに？そして、竜造寺とドルフ
エスの秘密とは

21 RAP GROUP —話し合う人々— (前書き)

ずいぶん間が空きました

ガラスのケージの中に、2、3才の赤ん坊が二人寝かされている。激しく泣きじやくる二人は、寝台に縛り付けられたうえに、身体中に電極を付けられ、まるで蜘蛛の巣に捕らえられている様に見える。ケージの回りでは、数人の白衣を着た男女が計器を見つめ、何か調べているらしい。

ガラスに遮断されているせいか、赤ん坊の声は微かにしか聞こえない。

たまらなかった。

あんなに泣いているのに、回りの大人達は作業を止めようとはしない。それどころか2本の注射器を取り出して、血液の採取をしようと言いだした。

人非人め！！
ひんびにん

赤ん坊の一人が引き付けを起こして激しく痙攣^{けいれん}しはじめた。もう片方も、苦しげに泣き声を大きくする。

——光！！

そうだ、あの二人は混と光だ。双子たちはその身体に隠された秘密を探るために、両親から引き離されていた。守らなければ。

ここには自分しか二人を護れる者は居ない。

方法は一つだけだ。躊躇する事はない。

ガラスのケージの前に行き、両手を広げた。

「僕を使え。同じ血を持っているんだ。これ以上赤ん坊を苦しませるな」

白衣の男が近寄ってきた。見上げる程大きい男・・・いや、自分の方が小さいのだ、そう、自分はまだ子供だから・・・

「坊っちゃん。そんなことを言うものじゃありませんよ。社長が心配なさいます」

「父は関係無い。赤ん坊何かより、僕の方が色んな実験ができるよ」
男は困惑したような振りをして、業とらしくため息を付いて見せた。

「いいですか坊っちゃん。あの双子は、人間より化け物に近いんですよ。電流や薬物に対して異常なほどの抵抗力を持ち、傷の治り方なんて普通の三倍は早い……そんなものが人間といえますか？」

ちらりと気味の悪い物を見る視線を赤ん坊に投げる。

「ああ引き付けていても、10分もすればけろりと治るんです。心配する事なんてありませんよ」

何を言う！ お前達に双子をいじりまわされてたまるものか。

「薬だつたら僕にも効かない。傷の治りだって早い。僕を使え」

頑として言い張る子供を扱いかねた男は、後ろを振り向いて計器の陰で見つめている男を振り返った。

上品な顔立ちの男を見つめる自分の目は、おそらく憎悪に満ちている筈だ。この非道を平然と眺めている男。拳げ句そんな場所に自分の息子を連れてくるような男。

「父さん。僕を実験台にしてよ。赤ん坊よりも使い易いだろう？」

男は微かに笑った。ぞつとするほど冷たい笑い方だ。

「龍也。そんなに双子が大事か？」

面白がつている様な冷たい声。

面白いんだろうきつと。滅多に口も利かない息子が、双子に関しては必死になる。そんな様はさぞかし面白いに違いない。

お前何かより、双子達の方がより自分に近い。何よりも、双子は自分のものだ。

誰にも渡さない。ましてやお前などに渡すものか。

「判った。お前を使ってやる。お前に免じて双子は帰してやる」

「もう、何もしない？」

「今後一切手は出さない。その代わり、お前は逆らうな」

頷く他は無い。信用はできなくとも、家に戻されれば、あの人が双子を護ってくれる。

力を貯えなければ・・・いつか、この手で双子を護りきれなくなるまで。

必ず・・・

規則的な振動が体を揺らす。

ドルフェスはまどろみの中で、軽い機械音が体を揺らすのを感じていた。

ゆっくりと夢から覚めてきたが、未だ身体はだるく、じんわりと痺れ、揺れていること以外は何も感じられない。

自分は何で寝ているんだろう？疑問は頭をもたげ掛けるが、すぐに霧散して、だるさだけが残る。目蓋は重く、開く事も出来そうに無かった。

もう一度眠ってしまいたい。でも、遠くで人が話している声がする。それがとても気になる・・・

誰かが馬鹿にしたような声で言う。

「だからこいつを出汁^{だし}に使うわけか？」

「仕方あるまい、それが条件だ」

貴公子の声が聞こえた。珍しい事に、どこかしら苛立っている様な響きがある。

ドルフェスはぼんやりした頭で、貴公子と話している男の声に聞き覚えがあるような気がした。しかし、それ以上は考える事も出来ない。

「お前らしい迂闊さだな、お人好しが。身内のつてがあてにならないのは、よく知っているだろうが」

相手の声にはあくまでも刺がある。

貴公子はため息交じりに言い返した。

「そもそも、あれの心を歪めたのはお前だぞ」

「俺は何もしてはいない」

「余計悪い。あれは、お前が振り向く時を待っておった。しかし、

お前は無視し続けた。20年だぞ、これではどんな者でも歪むというものだ。おかげで私は、居心地の良い古巣から抜け出して、人攫いの真似をさせられる始末だ」

相手の男は息を吐き出した。

「おい、いいかげん煙草は止める。煙くて堪らん」

ドルフェスは自分の喉に刺激を感じた。ゾルゲと共に居た時を思い出す。彼も煙草が好きだった。

喫煙はアース人が広めた習慣だ。貴公子と話している男も、アース人かも知れない。

「お前の家系は、とにかく気が長いからな」

貴公子の抗議は無視して、男が言う。

「諦めるという言葉を知らん」

「双子に対する、お前の執着の仕方には負ける」

からかう様な貴公子の声。

「人の事が言えた義理か？」

言い返す男に、

「何故、光に会おうとしない？」

多少声を強めて貴公子が切り返す。

「光の涙を見るのは、それ程嫌か？」

男は無言だった。どうやら痛いところを突かれたらしい。

「目隠しをして何も見せぬ事が、お前の護り方なのか？随分怖じ気づいたものだな」

ここぞとばかりに詰め寄る貴公子に、男の低い笑が答える。

「何がおかしい？」

「インキュバスを嗅がせて、身動き出来んようにした相手をいたぶらないでくれ」

「そうしなければ話しが出来んではないか」

インキュバス。商売柄その名をドルフェスはよく知っていた。セファート星系原産の多年草オルトネアトリム「アース名ティアラドリーム」をアースで栽培したところ、種に強力な誘淫幻覚成分

が含まれる様になった。これを精製して作られる麻薬の名前がインキュバスだった。0・1?というわずかな量を吸飲又は飲用するだけで強烈なエクスタシーを伴った半昏睡状態を引き起こし、服用者は至上の快樂を得るところから、アースの伝説に登場する夢魔の名を与えられているこの麻薬は、伝説の夢魔が、一度虜にした人間の精力の全てを吸い取って、死に至らしめるのと同様、強い習慣性と毒性によって、短期間の内に服用者の体を蝕み、数多くの人間がその毒牙にかかっていた。

インキュバスが発見されて200年。セファートはオルトネアトウリムの輸出を禁じ、アースでも一切の栽培が禁じられているにも関わらず、未だに夢魔は闇の中でまかり通っていた。

ドルフェスも何度か捜査に駆り出されて、摘発に躍起になったものだ。

そんなものを持っていたら連邦犯罪になる筈なのに、あまつさえ人に使ったなんて・・・疑問と心配が沸き上がって来はしたが、すぐにだるさにすり変わってしまったって考えに集中出来ない。

諦めて再び会話に耳を傾ける。

「それにしても、お前達の身体はどうなっているのだ？お前に使ったインキュバスは0・2mgほとんど原液だ。普通の人間なら三日は昏睡するか、弱ければショック死するものだぞ」

貴公子は笑いながらとんでもない事を言う。男は煙を吐き出す音をさせた。

「そんなに俺を殺したかったのか」

「ふん。お前がこれ位で死ぬような玉か？現にそうして平気な顔をしているではないか。おまけに・・・何本目だ？」

小さな電子音が聞こえ、相手の男が新しい煙草に火を着けたことが判った。

「知らん」

あっさりとした答えに、貴公子がため息をつく。

「やれやれ、私まで煙草臭くなってきた。とにかく、お前が光を放

つておくのならば、丁度求婚もした事だ、私が貰ってもいいのだぞ。心しておけ」

「アルタイル」

「何だ？」

「お前、光を女と思ったこと有るのか？」

「いいや」

これまたあつさりとした返事に、聴いている青年はため息をつきたくなった。この連中はどこまでが本気なんだろう。

楽しそうな、男の含み笑いが聞こえる。それが不意に途切れた。

「お前はそのまま、あいつに会いに行く気なんだな？」

今までとは違つ、まじめな声だった。

「うむ。行かざるをえまい。あれの事は、兄者から託されているのだ、見捨ててはおけぬ。それに、訊かねばならぬ事もある」

貴公子の声からもふざけた響きが消えていた。

「お前は途中で離脱しろ、連中にお前を取り戻されては困るからな。薬が切れれば動けよう」

「俺が行けるとは限らんぞ」

「逃げ道は確保しておいてやる。それにどうせ、もうすぐ滯か光が迎えに来る」

「それなら、こいつでも行けるかな？」

見えている訳ではないが、男が自分を示しているのが判った。この男は何者なのだろう？初めてはつきりとした疑問が浮かぶ。

彼は自分を知っているらしい。声にもとても聞き覚えが有る。

だるかったが、何か大切な事を忘れていた様な気がして、ドルフ

エスは何とか思い出そうとあれこれ記憶をまさぐった。

考え込んでいるうちに、話し声が遠ざかっていった。

代わりに耳元で、コポコポという水音が聞こえはじめた。そして強い眠気が身体中を包んで行く。

睡魔に飲み込まれながら、意識の片隅で悔しがっている自分を感じていた。其れは、何も出来ずに、ただ流されている自分を、嘆き

罵る声だった……………

「…眠ったか…」

カウチに体を伸ばして、煙草をふかしながら男が呟く。

「誰が？」

アルタイルの問いに、男は口の端を上げて見せた。

「ああ、ドルフェスか。竜造寺、お前には判るのだな」

思い当たって頷く貴公子に、深く吸い込んだ煙を吐き出しながら、竜造寺はせせら笑った。

「あいつにだって判るはずなんだ。だがあいつは感じるどころか、無意識に俺の存在を否定しようと躍起になっている。まあ、あんなに常識に囚われたままの固い頭じゃあ、一生無理だろうよ」

「無理もあるまい、中にいるのがお前ではな…」

業とらしくドルフェスに同情して見せる貴公子に、竜造寺が視線を向ける。

「何が言いたい？」

「聞こえた通りだ」

アルタイルの厭味にたいしても、竜造寺の目には何の感情も浮かば無い。

ドルフェスには、間違っても出来ない冷たい目だった。永年の友人に対する視線がこれである。

無表情な顔の口だけが動く。

「滉に、お前を絞めあげると言っておいたんだがな」

「随分物騒な話だ」

淡い色の液体が満たされたグラスを片手に、アルタイルは小さく笑った。

「何で私が、絞めあげられなければ、ならないのだ？」

優雅に首を傾げて見せて、グラスを揺らす。薄暗い照明を反射し

て、中の酒が淡く輝く。

揺れる光に照らされて、端正な顔が優しげに微笑んでいる。

これがドルフェスならば、思わず見とれるところだが、竜造寺は、面倒臭そうに煙を吐き出しただけだった。

「いきなり俺が出てきても、驚くどころか、納得していただろうが。それに、お前があいつを、トウア、と、呼んでいたからさ。」

わざとらしく言葉を区切る。

「あの呼び掛けかたは、よほど特別な相手にしか使わない。俺が憶えている限りでは、後は香花にだけだった」

青い瞳に、夢見る様な光が浮かんた。

「我が恋人^{ルミナ}…愛しい香花。ああ、確かにそうだ」

そつとため息をついて見せるアルタイルに、竜造寺は、にやりと口を歪めた。

「それに、ドルフェスつてえ名にも、引つ掛かる」

皮肉に満ちた視線を受けて、貴公子は再び優雅に微笑んだ。しかし、瞳にはもう、柔らかな光は無く、探る様な鋭い視線に変わっている。

「彼の名を考えてみれば、その素性はすぐに分かる。だからこそ、お前は、今の時点で光に会いたく無いのだろう？彼女の気持ちを考えれば、分からなくも無いが…」

黒い目には、相変わらず何の感情も浮かばない。

「その悟りすました態度を、どうしてやれば崩せるのかな」

アルタイルは苛立たしげに眉を寄せたが、すぐに意地の悪い笑みを浮かべた。

「そう、一度だけあったな。あれは、私が光を宇宙船^{ふね}から突き落とした時だった。お前が恐怖に引きつって飛び出して 行った様は、実に見物だったぞ」

悪役そのものの笑い方をしてみせながらアルタイルが立ち上がる。「さてと、肺癌にならぬうちに逃げ出すとるか、お前はゆっくりと休んでおけ」

「卸陰様でそれしか出来ん」

煙幕の向こうから、竜造寺が煙草の箱を振って見せる。

「ついでに差し入れを頼む」

「こんな所でそんなものがあるか。代わりにこれでも飲んでおけ」
うんざりした声で言い返して、小さなアンプルを投げてよこす。

「なんだ？」

「スネルトイ……」

竜造寺は目を眇めた。

「ふざけているのか？ インキュバス並にやばい麻薬だぞ。」

貴公子は極上の笑みを見せつける。

「最近わかったのだが、インキュバスの中和剤として、非常に有効なのだ。尤も、使う側の体力次第だが、お前なら大丈夫だろう」

忍び笑いをもらしながら、アルタイルは部屋から出ていった。

微かな音を立ててドアが閉まる。

しばらくの間竜造寺は、まるで遮断された通路の音を聞いているかの様に、身じろぎ一つせずに居たが、やがて苦しげな息をもらしてカウチに深く沈みこむ。

虚勢を張っていたものの、通常の2倍の麻薬を吸わされた体は、実際、かなり辛かった。

小さな瓶を弄びながらふっと苦笑がもれる。

「犯罪マニアめ」

躊躇^{とまど}うことも無くアンブルの口を折って、どろりとした液体を飲み干す。妙な甘みが口中に広がり、竜造寺は眉を顰めた。

「素養だけの勝負か……まったく……野坊主に身体を鈍らせやがって……

鍛え直さんと、話にならん」

昔、父親の実験材料になっていた時を思い出す。

あの時も、あらゆる麻薬を試されたものだった。すべての薬物が常人の半分も効かない事を知った時のあいつの嬉しそうな顔……この手で破滅に追い込めた時の暗い喜びが、嫌悪と共に蘇ってくる。

「そろいも揃って、ろくでもない父親だ。……まったく、滉の女好き

よりまだ酷い」

竜造寺は深く煙を飲み込むと、苦い笑い声と共に吐き出した。まるで自分を嘲る様な乾いた笑いが、薄暗い室内に溶けだしていく。

ひとしきり笑った後、男はゆっくりと黒い髪を掻き上げた。

額に手を乗せたまま動作を止め、天井を睨みつける。

「来るのは光だな……じゃじゃ馬が」

掻き上げた髪をぐしゃぐしゃとかきまわして、竜造寺は自分の胸を指先で軽く叩く。

「おい、坊主。危なくなったら俺に頼れ。それぐらいならやってやる……光を危険に向かわせるな」

言葉の終わりを吐き出すと、ゆっくりと目を閉じた。

リニアのシルエットを縁取っていたビルの明かりが、まばらになりはじめる。

高架は次第に下がりはじめ、じきに亡者を飲み込む闇の河口の様な地下への入り口に飛び込んで行くだろう。

リニアラインは、この地点から住宅街に入るのだ。

ベースの地下収納好きは、ここでも遺憾無く発揮されている。大小の同心円を中心に、いびつな瓢箪形になった都市の外側に広がる居住区は、歩行用道路以外の地上交通機関を地下に飲み込んでいた。

特に、リニアラインは住民の足として網の目の様に入り組んでいる。滉は、現在位置を地図と照らし合わせて舌打ちした。

やっと路面制約を外したものの、乗り移るタイミングを逸したアース人は、リニアの車窓から見つからないように、高度に気を付けながら伴走していた。しかし、このままでは、それすらも儘為らなくなる。

「どうするネプチューン？このままケツ追っかけて行くしかねえか

あ？」

そんな事をすれば、一発で相手に見つかるに決まっていた。

「たまんねえな…上から監視かぁ」

どうもサポート役は性に合わない。

付かず離れず待機して、タイミング良く救いの手を差し伸べる。

手順はばっちり、経験もOK。

しかし、何度やってもこの”待つ”という事に耐えられない。

「ほんと…旦那はよくやれたよな」

完璧なサポートで双子の援護をしてくれた、竜造寺の姿を思い出す。彼が後ろに控えていれば、どれ程の無茶でも平気で出来た…

ふと、自嘲の笑みが浮かぶ。

我ながら現金なものだ。竜造寺は死んだと諦めていた今までの間、先鋒もサポートもそれなりにやってきたというのに、彼の存命が確認できた途端、もう昔の様に後ろに立つことを心待ちにしている。

共に過ごした20年間、どれほど彼に頼りきっていた事が、今更ながらに思い知らされると言うものだ。

「しゃーねえか」

モニターのキーを幾つか操作して、フロントウィンドウに映像を投影する。

線画と記号でベースの地図が展開され、市街の輪郭をなぞるようにピタリと今見えている街の上に重なった。

車体の動きにあわせて、刻々と変化してゆく画面の中を、記号のベールを被せられたリニアが疾走する。

その記号に重なって明滅している光点は、光が発している座標ビーコンだ、地下に潜れば、これだけがリニアの位置を知らせる命綱になるだろう。

サブウェイラインの路線図をモニターに映しながら、思いつきり顔を歪める。

一般に公開されている路線図では、データが少なすぎた。

光に何かあっても、ここからでは何も出来はしない。いや、何より

も、路線図に記述のない支線に入られた場合、ビーコンが途切れれば、ドルフェスや光の行方をつかむ事は難しくなる。

時間はかかるが、連合捜査官の権限で、リニア管理会社から詳細を記した地図を転送^{おく}らせるしかないだろう。

「アルのボケなんぞ、お供付きなんだから、どーとでも出来るだろうがよ……」

ガシガシと頭を掻きながら、滉はため息をついた。

今ならまだ間に合う、どうせ自分達が来る事など予想の上に決まっている。無理にでも屋根の上に乗移っておこう。進入口など容易く見つかる。

待つ事嫌さに意を決して、地下に潜りはじめたりニアの上へ回りこもつとしかけた途端、フロントウィンドウのディスプレイが、住宅街の地下に広がるリニア網の表示に変わっていく。

「何だあ……？」

まるで唐草模様の様に、複雑に絡まり、寝静まった暗い市街地の上に浮かび上がった路線図は、滉の呼び出したものより遥かに精密だった。

訝しげに眉を寄せたアース人の耳に、クスクス笑う女の声が飛び込んでくる。

『どう？驚いた？』

少し甘ったるいアルトの響き。

「魅羅か！？」

『はい、LITTLE MOONよりBIG SUNへ。私からの贈り物、気に入っていたただけかしら？』

妙にはしゃいだ魅羅の声が、通信機から弾ける。

「どーなってんだこれ」

『SHADOW MOTHERから、御前たちがリニアに乗り込んだつて、聞いたのよ。そうしたら即座に協力して下さった方がいらしたの』

「協力……誰が？」

『うふふふ……』

魅羅の含み笑いに、別の女のそれが重なる。

「モセ署長?!」

自慢だが、女の声を聞き間違えたことは一度もない。

『よくお解かりですわね、Mr. 津川』

果たして、魅羅の声の後ろからモセの声が流れる。

「署長……これは一体……?」

さすがの滉も、言葉の継ぎ穂を失った。

『うーん、驚いてるでしょう? もっと驚かしてあげる』
うれしげな魅羅の声。

『リニアのライン上にある、すべてのターミナルや待避用の出入り口には、もう警官隊の配置が完了してるわ。ついでに、近隣の衛星都市にも、配置の依頼をしてあるのよ。容疑はドルフェス誘拐。御前の名前は出してないわ。ね、ね、誉めて誉めて』
はしゃぐ魅羅に、

「……おめーがしたのかよ?」

冷たい父親の声。

『ぶーー』

膨れる娘は放っておいて、滉は感嘆の言葉を発した。

「それにしても驚きましたよ。こんな裏技をお持ちとは……」

『あら、こんな事、何でもないんですのよ』

はにかむ淑女に、色男を自負するアース人は、優しく囁く。

「御謙遜を……あなたは本当にすばらしい方だ。感謝いたします」

軟らかなテノールの声は、こうすると実に効果的なのだ。

「この事件が終わったら、今度こそ、私の祝杯を受けてください」

『まあ、本当に、私なんかでよろしいのかしら?』

「もちろんです。貴方だからこそ……」

『なーに言ってるのよ。んな事やってる場合じゃないでしょ? ママとD・Dはどーすんのよ』

身内への言葉とはえらい違いの言いように、通信機の向こうでぶつ

ぶつ文句を垂れている魅羅の声が聞こえる。

それに反応したのは、当然モセである。

『あらあら、いけませんわ。ここは一刻も早く、御前達を助け出さなければ』

「…そうですね…」

捕まえかけた獲物に逃げられて、滉はこっそり舌打ちをした。理解のある奥方の忍び笑いが、もう一つの専用通信機から漏れる。

さすがに文句をつけるわけにいかず、決まり悪い仏頂面で居ると、

『Mr. 津川。光姉様の追尾ビーコンを、こちらでも捕捉したいので、周波数を教えて下さいな』

件の獲物から、呑気な申し出がよこされた。

「ええ、かまいませんよ。シャドウ、頼む」

快く引き受けて、ふと、違和感を覚える。

「?…光姉様?…」

いぶかしむ滉に、魅羅の爆笑が叩き付けられた。

『キヤーハハハハハ!』

「何だあ?」

『アハハ…ごめんごめん…でもおつかしー。ひやははは…』

魅羅は、身悶えするほど笑っているらしい。ダンダンと床か机を鳴らす音まで聞こえてくる。

「……」

無然と通信機を睨みつつ、光のビーコンをチェックする。笑い転げている魅羅に何を言ったって無駄なのだ。

ひきつけを起こしそうな魅羅を、やはりくすくす笑いながら宥めにかかるモセの声が聞こえ、二人の親密さがなんとなく気に入らない。今のところ6勝3敗。よもや魅羅に先手を取られたか?

滉は、密かな危機感を抱えながら、地下を疾走するリニアの動きを見つめていた。

『レーイ。来てくれ、レーイ。』

誰かが、幼女を呼んでいる。

『急いでくれ、君の力を借りたい』

エミーはゆっくりと目を開いた。

白い天井が見える。ぼんやりと首を巡らせて周りを見た。

天井と同じ、白くがらんとした殺風景な部屋である。

「ここ……どこ……？」

呟いてから、はっとして枕元を見た。しかし、彼女の問いに答えるお節介は居ない。

ほっとして起き上がり、ゆっくりと伸びをして、身体がすんなり動く事に気がついた。

確か、自由を奪われて、妙なガスを吸わされたはずだった。殺されたと思っていた。

しかし。

この爽快な気分はどうだろう。まるでたつぷりと眠って、ちょうど良いタイミングで目を覚ました時のようだ。

身体の何処も痛くない。それとも、……もう死んでいるのだろうか？

エミーはもう一度あたりを見回した。

光源はわからないが、室内は十分に明るい。後は何も無い。

自分が寝かされていた寝台を除けば、気持ちが良いほど何も無い部屋だった。

楕円形の寝台には軟らかな詰め物がされていて、エミーの体を支えている。

エリー館とかいう、いかにもなお化け屋敷の部屋とは明らかに違っている。こんな近代的な部屋があのだとは思えない。

「正体見せてもらおうじゃないの」

にやりと笑って、赤毛の婦警は寝台から降りた。

裸足の足に、白い床が意外なほど暖かい。どうやら空調ではなく、床によって室温を一定にしてあるらしい。

薄いガウンの下には、何も付けていない事に気がついた。一瞬、羞恥と怒りで頭に血が上りかけたが、どうにか自分をなだめて深呼吸を数度する。

落ち着かなくては、ここから脱出しなければ。

部屋の壁は全て均一で、何処にも出入り口らしいものは見当たらなかったが、エミーが近づくと、目の前の壁がぼつかりと口を開いた。

部屋の外には、正面へまっすぐな廊下が伸びている。どうやらここは廊下のどんずまりらしい。

思い切って歩き出す。

部屋と同じ材質の、白い壁で囲まれた廊下はかなり長く、他に入り口が開いてもいない。

「薄気味の悪いとこね」

眉を顰めながら進んでいく。

と、前方に分岐路らしき場所が見えてきた。

『レーイ。何をしているのだ？早く来てくれ』

再びあの声があたりに響き、エミーはびくりと身を竦ませた。

「はい。はいはい。そんなに急かさないでよ。幻^ゲ伯父様。これ重いんだから」

あの幼女が、柄の長いデッキブラシと大きなバケツを抱えて、前方に分岐路をよたよたと横切っていった。

分岐路まで急ぎ、壁に貼り着くと、じっと耳をそばだて、幼女の足音が消えるのを待つ。

完全に大丈夫と確認すると、幼女が行ったのとは反対の方向に走り出す。

きっと出口は、幼女の来た方向に有るに違いない。などと単純に考えたわけではなかったが、とりあえず、人の居ない方へ行きたかったのだ。

廊下の向こうに、出口らしきものが見えた。

歩調をゆるめてそつと中を伺う。

やはり何も無い部屋があった。

さっきの部屋と違うのは、反対側にもう一つ出口が開いていることだ。

用心しながら部屋を横切り、二つ目の出口からその向こうを伺うと、そこは、今自分が居るのとまったく同じ部屋だった。

同じように次を覗く。

また、同じ部屋である。

何も無い誰も居ない。おんなじ部屋が続いている。

そんな部屋を6つも通ると、さすがに嫌気がさしてきた。

「馬鹿にされてるのかしら……」

意味も無くむかつ腹を立てて、無造作に次の部屋を覗く。

でかい顔があった。

「げー！」

慌てて身を引く。そして今度は慎重に首を出してみる。

でかい顔は、6階ぐらいが拭きぬけになっている広いホールのような場所に置かれた、巨大な彫像の頭部だった。

エミーの立っている出口は、そこからキャットウォーク張り出しの廊下が壁に沿って左右に伸びて、ホールをぐるりと回っている。

恐る恐る手すりに近寄って、ホール全体を眺めた。

ホールの壁は、今までとはまったく違って、黒く冷たい石が組まれている。

壁面の所々に奇妙なオブジェがあり、そこからぶら下げられた籠に、薪の様な物が入っていて、明々とした炎をあげている。下の方にも同じ様な灯かりがあり、巨像の正面とおぼしい辺りに置いている一対の大きな松明と合わせて、これらの原始的な照明だけがこのホールを照らしているらしかった。

でも……この荘厳な神殿らしい場所の主役である巨像は、何なんだろう……

その像は、6本の腕を持つ2人の人間が、背中合わせになっている様に見えた。

彼女の側をむいている方の顔は、彫りが深く、精悍な顔立ちをした男の様だった。穏やかな視線でまっすぐ前を見詰め、閉じられた唇が笑みを形作っている

アースの一地方にある古代彫刻が持つ特徴で、アルカイック・スマイルというものののだが、エミーには”気味の悪い顔”程度に思えただけである。

エミーは張り出しを歩きながら、ゆっくりと像を眺めた。

計12本の腕は互いに絡められ、愛撫し合っているかのようだ。

男性像の裏側にある顔は見えないが、腕の太さから女性像だと推測できた。

それにしても何とまあエキサイティングな色彩だろう。

巨像の、磨き上げられた滑らかな肌には、およそそぐわないと思えるどぎつい色の塗料が、おそろしく無秩序に塗り付けられていた。右頬に赤と黄色、左頬には緑に紫といった具合で、てんで纏りが無い。それに汚らしい。

まるで絵の具を風船に詰めて、思い切り叩き付けたような、メチャクチャな色が躍っていて、なんとなく悪意さえ感じる…

とてもじゃないが、大切に安置された御神体とは言えそうに無い。

「何なのよここ…まあ、お化け屋敷にはお似合いの場所ね」

不快感もあらわに、赤毛の婦警は吐き捨てた。

こうしてはいられない。こんな変な場所で時間を潰している暇はないのだ。

足早に歩きながら出口を探す。と…石作りの扉のようなものがあった。

「これはまた……」

絶句する。

大理石で造られ豪華な彫刻で飾られている扉らしいものは、巨像以上の汚らしさだった。

蔦をイメージさせる浮き彫りのある側柱にはテープの切れ端が貼りつき、塗料は大きな刷毛でべたべたに塗りとくられている。

そして、巨像には無かったが、ここには一面に文字らしいものが書き殴られている。

アースの文字だという事だけは解かる。

エミーに数多あるアース文字への造詣が有れば、ここに書かれた文字の意味が解かっただろうが、残念ながら彼女には、文字に込められた悪意と憎悪が感じられただけであつた。

しみじみと眺めていると、足元に千切られたテープや、ペンキ落として書かれた溶剤の缶があるのに気がつく。

さつき幼女が抱えていたブラシとバケツが浮かんた。なるほど、あれはこれに使われていたのか。

「あんな小さな子供に掃除させるんだから、やっぱりここお化けしかないのね」

呆れて呟いた時、下の方から何か音が聞こえた気がして、赤毛の婦警は咄嗟に身を伏せた。

そのまま床を這つて、手摺りの間から下を伺う。

案の定、下にある入り口の方から、何かが回るカラカラという音と、人の足音が聞こえて来きた。やがて3人の人影と、車椅子に乗せられた人物が入ってくる。

車椅子の側にはあの幼女がいた。

「ねえ、お祖父様。どうして此处でするんですの？」

幼女が車椅子の横をとことこと歩きながら、可愛らしく首を傾げてみせる。

反対側の横では、あの稀胤^{ケイン}とかいう幽霊が大袈裟に肩を竦めた。

車椅子を押していた髪の長い人物も軽く首を傾げる。

その顔を見て、エミーは眉間に皺を刻んだ。

地味なメンズスーツを着てはいるが、病院でドルフェスにへばり付いていた女検事だ。

女が口を開く。

「レーイ。これは僕ではなく、幻^{ゲン}の考えなんですよ」

この前聞いたときよりも幾分低い声。口調も違ふことに違和感を

覚える。それに、なんでお爺様なんだろう…？

「幻、お姫様に教えてくれよ。僕も知りたいからさ」

稀胤がいつも通りの軽い口調で言う。

息を殺して伺うエミーの後ろから声がした。

「稀胤。さつきから気になっていたのだが、いつまでお客さんを放っておくつもりなのだ？」

「い！？」

飛び起きると、扉の前に男が一人立っていた。

ゆったりとしたセーターを着た、背の高いやせぎすの男が、エミーを見ながら薄く笑う。

「女性をエスコートするのは、君の生きがいでは無いのか？」

「だって、僕が近づくと怒るんだよ」

何時の間にか、手すりに外側から寄りかかって、稀胤は口を尖らせる。

「目が覚めたときに、男に覗かれていたら、誰でも怒るとおもうぞ？」

「今までそんな事無かったよ」

癖の無い黒い髪に、半ば隠れるように見える黒い瞳に、皮肉な光が閃いた。

「王子様を待っている女ばかりじゃないって事さ」

デニムパンツのポケットに両手を突っ込んだまま、エミーには一言も挨拶をしないで、男はくるりと踵を返し、手すりに向かって歩き出した。

男の体を手摺りに近づくと、不意にぽっかりとその部分が開く。

まるで氷が融けていくかのように、手摺りと張り出しの床が形を変えていく。

男が一歩足を踏み出すと、そこには下まで届く階段が現れていた。お化け屋敷の魔法に、エミーが呆気を取られていると、稀胤がにっこり笑いながら右手を差し出す。

「どうぞ、お嬢さん」

床にべつたりと座り込んだまま、エミーはその手を睨み付けた。
「有りもしない手に捕まれるわけ無いでしょう？出来る事と出来ない事の見境も無いのかしら」

稀胤は眉を寄せて男を振りかえった。

「ほら、怒る」

男は肩を竦めただけで、そのまま降りていく。

「稀胤、怒られる事を気にするよりも、お客さんの形態なりの方を気にしてやれ」

不意に言われて、エミーはガウンの前を掻きあわせた。

「やだ！伯父様。着替えの事、お教えにならなかったの？」

途端に幼女が目を吊り上げる。

どうやら彼女の身長では、張り出しに座り込んでいるエミーの姿は見えなかったらしい。

幼女は、

「んもう！」

と叫ぶと、そのままホールを飛び出した。

「枕元に、メモは置いておいたよ…」

ぶつぶつと稀胤が口の中で言い分けをしている。

「見てないわ、そんなの」

すっかり逆恨みモードに入ったエミーが、稀胤を睨み付ける。

「あたしが起きている事知ってて、業と泳がせていたのね…こんな格好させて」

栗毛の美青年は慌てて首を振った。

「違うよ、僕と幻は、D・V全体に神経を巡らせているから、嫌でも解かっちゃうのさ」

「つまり、手のひらの上で遊ばせて頂いていた訳ね」

「だって君、干渉して欲しくなさそうだったし…」

「影で見張られながら、気が付かないのを嘲笑われるよりずっと増しよ」

稀胤に文句を並べたてながら、エミーは知らん振りで降りていっ

た男を睨み付けていた。

気になるのだ。

あまりにも似ている。

顔立ちや後ろ姿、ついでに笑った瞬間に見せた小さな仕種まで、彼女が今、自分の次に心配している青年…ドラゴ・ドルフェスに…

21 RAP GROUP —話し合う人々— (後書き)

ドルフェスの謎WW

22 E E E P A S T I F F L I P —めげずに行こう— (前書き)

モセ署長の念願成就 W W

目を開けた途端に、猛烈な吐き気が襲ってきた。

「う……!!」

口を押さえて体を丸める。

暫く悶絶していると、ありがたい事に、吐き気は少しずつ薄れていった。しかし変わりに、頭の中で艦砲射撃をされているような偏頭痛が、青年の神経を苛め始める。

ドルフェスは、こめかみを押さえながら、低くうめくと、今度はゆっくりと目を開いた。

薄暗く狭い部屋の中で、非常灯がぼんやりと浮かび上がっている。誰も居ない……

誰かがずつと側に居たような気がしていたのに。

そう言えば、アルタイルも居たような……?

頭痛が酷くて考えがまとまらない。

青年は、寝台の側に小さなテーブルがあるのに気が付いた。吸い殻が山盛りになった灰皿と、飲み物らしい液体の入った瓶とグラスが乗っている。

そろそろと体を起こすと、瓶に手を伸ばした。

淡い色のアルコールが、喉を潤していくと、気分が多少マシになった。

小さくため息を吐き、寝台に腰掛けて改めて部屋の中を見回す。

狭いというよりは、細長いと形容する方がぴったり来る。

寝台の横に、今飲んだ酒の瓶の乗ったテーブルと、座り心地が良さそうな布張りの椅子が置いてある。その後ろはすぐ壁だった。

壁にはシックな柄の壁紙が張られ、柱に木材が使われて、狭さの割には豪華な印象を与える。

「ここ……何処だ?」

ホテルの地下で、ケット・シーと貴公子を見つけ、ウルに何かの

薬を嗅がされて…そこから覚えていない。

ここはホテルの一室だろうか？

いがらっぽい喉に、もう一杯酒をすすって、灰皿を見る。

フィルター近くまで焦げた煙草は、なんとなく見た事があるような気がした。

懐を探って、自分の煙草を取り出す。

パッケージが開けられ、ほとんど無くなっている。

「ひでえ…」

思わずばやきが漏れる。

どうやらここに居たもう一人は、ドルフェスの御守代わりの煙草を、勝手に吞んでくれたらしい。

無然として煙草を元に戻し、よく見ると灰だらけになっているシャツを叩

はた

いた。

「掃除ぐらいしていけよ…」

無駄と知りつつ、もう居ない訪問者に文句を言う。

アルコールが回って、冷えた体に血が通ってきた。

頭痛も薄れ、青年は夢現に聞いた気がする、アルタイルと煙草泥棒の会話を思い出そうと、ゆっくりとこめかみを揉む。

確か…ここから脱出しろと貴公子は言っていた。

逃げ道を確認しておくとも言っていた様な気がする…そうそう、それに、滉か光のどちらかが、迎えに来るとも言っていたつけ。

…滉が来るといいな、と、青年は期待した。

夢で何度も見ていたとはいえ、殆ど初対面の光よりも、滉の方がずっと安心できるし、頼り甲斐も有る…

「何だよそれ、何考えてるんだ俺…」

自分の考えに、いきなり腹が立った。

「冗談じゃない…俺は、お姫様じゃないぞ」

庇^{イト}われて、守られて、高い塔の上か、地下の迷宮で、ひたすら騎^ナ

士の登場を待ちわびる。

そんなみつともない真似が出来る訳が無い。

病院の庭で見た夢…シャドウが竜造寺だと判じた男の言った言葉…
「……………」何時まで津川のお荷物になっているつもりだ？ 自分の事は自分でやれ……………」

津川のお荷物。

その言葉が改めて突き刺さってくる。

「くそ……！」

ドルフェスは舌打ちをして立ち上がった。

途端にぐらりと体が傾く。頭から血の気が引き、頭痛が再開する。椅子の背もたれにしがみ付き、ゆっくりと息を整えながら、自分の短気を後悔した。

もう少し、体の調子が落ち着いてから、ここを出た方が良さそう
だ。

そつと寝台に座り直して、こめかみを押さえる。

何を嗅がされたのかは知らないが、かなり辛い。

ふと、インキュバスという名が浮かんた。煙草泥棒が使われたと
いつていた麻薬…

アルタイルは自分にも用いたのだろうか？

「まさかね…」

青年は軽く笑って首を振った。

平気な顔をしていたらしい煙草泥棒かどうか知らないが。普通
インキュバスを使用^{つか}った場合、人間がどうなるかは良く知っている。

ダウンタウンで摘発と取り締まりをしていた時、夢魔の虜となっ
た人々を何人も目の当たりにしたものだ。

目覚めていても、夢魔の後ろ姿を追う様に空を見つめる者。

見えない恋人と語り合い続ける者。

肩に触れただけで、性的絶頂に達してしまう者までいた。

殴ろうが蹴ろうが、ただ官能的な喘ぎを漏らすだけの使用者…

壊れた人間達の群：

常習者だけではなく、初めて使ったらしい者でも、どこか退廃的で淫猥な微笑みを浮かべた者がほとんどだった。

インキュバスを使うと、痛覚が変化する。たとえ腕が千切れても、激痛は快感へと代えられて、歓喜の絶叫を迸らせるのだ。

警察での隠語は「マゾ薬」

「マゾ薬なんぞを使うんなら。家でかみさん可愛がっていた方が、よっぽど家庭平和と社会平和に貢献できるってもんだよな」

ゾルゲがしみじみとぼやいていたのが、思い出される。

インキュバスはそれ程悲惨な毒薬なのだ。

今の自分が、快楽に酔っているとは思えない。

むしろ、地獄の不快感と表現する方がぴったりくる。

どうせ麻酔が筋肉弛緩薬だろう。

昔から薬が効きにくい体質で、医者に行った時など困った事が多かったが、よほどきつい薬を使ったのに違いない。だからこんなに苦しいのだ。

結論に納得して、もう一杯グラスを傾けた。

それにしても、あのインキュバスを0.2mgも使われて、平気な顔をしていた煙草泥棒は、いったい何者だ？常識では考えられない抵抗力である。

煙草泥棒の体力が羨ましい。強張る首筋を揉み解しながら、ドルフェスはため息をついた。

「顔が見てみたいよな、煙草の文句も言いたいし」

鏡を見たら早いような事をつぶやいて、寝台に体を伸ばす。

青年は、灰皿の中に小さなアンプルが捨てられているのに気がついたが、まさかこれがインキュバスと並んで最悪といわれる覚醒剤、スネルトイが入っていた小瓶とは知らない。

頭痛、吐き気、筋肉の強張り等は、スネルトイの離脱症状なのだが、医療知識の無いドルフェスには解かるはずか無かった。

そして、しばらく横たわっているだけで、その症状さえも次第に回復していく自分の体の異常さにも、気がついてはいない……
青年の体の中からは、インキュバスもスネルトイも、既に消え去ろうとしていた。

＊

誰かが呼んでいる……

小さい声……幼い声……

誰を？

……俺を……

「にーた……にーたん……どこ？」

赤ん坊に毛が生えたぐらいの幼児が、よたよたと歩いてくる。

こつちを見て、嬉しそうにニパッと笑った。

ふわふわとした薄茶の髪を揺らしながら、幼児は両手を広げて走り出す。

あやふやな足元にひやひやしながら見ていると、案の定、右足に左足で躓いて鼻からスライディングした。

慌てて駆け寄る、が、幼児はもう居ない。

「兄さん」

振り向けば、10歳前後の少年が笑っていた。

「滉が泣いて帰ってきたよ。滉を叱ってくれたの、兄さんでしょ？」
肉の薄い肩が竦められる。

「滉の奴、このごろ自分の力が解かって来ててさ、暴走しそうで心配していたんだ。兄さんが止めてくれたからもう大丈夫みたいだ。
可哀相って言葉を覚えたらしいよ。僕も安心したよ」

少年は近寄ると、急に眉をひそめた。

「また怪我をしてるんだね。兄さんが実家^{いえ}に帰ってから、包帯が取れたのを見た事無いよ。」

悲し気に呟きながら、手を伸ばして腕に振れてきた、初めて自分

が腕全部に包帯をしているのに気が付く。

そう…これは実験台の証拠だ。

身体を切り刻まれ、血液体液を採取され、あらゆる薬物を試される…時々殺されるのを望みたくなる時もある。

だが悔いはない、自分は確かに力を付けている、自分の事も解かり始めている。

もっと力を付けるのだ、双子を守るために、そして、この少年を守るために…

「家に戻^{うち}って来てよ。父さんや母さんも心配してる。また、みんなで暮らそうよ」

懇願する少年に視線を戻したが、もう居ない。

「兄さんは双子を甘やかし過ぎなんだって」
薄茶の髪の青年が笑う。

「月絵ちゃんが言ってたよ。『危なくなったら俺に頼れ。それぐらいならやってやる。って言ってて、結局全部してるじゃない』だって」

ロッキングチェアが気楽に揺れ、青年は脳天気 to 笑う。

「僕が、だって兄さんだもんって言ったら、『学ちゃんは呑気過ぎるわ』って、今度は僕が怒られちゃったよ」

軽く肩を竦める。相変わらず肉の無い薄い肩だ。

「挙げ句の果てにさ、『兄貴達が2人掛かりで甘やかしているんだから、兄嫁として、あたしが厳しく苛めとかなきゃ』だって。思うんだけどさ、兄さん。光が怒りぽいのって、月絵ちゃんの影響じゃないかな？」

不意に、頭上から鐘の音が降り注ぐ。

華やかに、祝福を投げかける。

タキシードを着て、青年というよりは多少老けた男が目を見せ、飛びついてきた。

「兄さん、僕等やっと本当の兄弟になったね」
後ろから女の声がする。

「妹婿よ、兄さんじゃないでしょ？ 学ちゃん」

「僕には兄さんなんだよ月絵ちゃん。一生兄さんなんだ」

「じゃあ、光が姉さんになるの？」

女の問いに、男は、困ったように眉を上げる。

「どうなんだろう・・・？」

二度鐘ふたたびが鳴る・・・

鎮魂の叫びは、長く、悲しく、尾を引いていく・・・

振り向くと、墓標が3つ並んでいる。

その前に蹲うつくまった喪服の男が、ゆっくりと立ちあがり振り返った。

「双子は兄さんに守られて、幸せな一生だったよ。僕だってそうさ」

ハシバミ色の目に悲しみを浮かべたまま、男は精一杯明るい笑顔をしてみせる。

「双子は兄さんを置いていってしまったけど、僕は、ちゃんと年功序列を守るから安心してね」

学・・・お前は何時も笑っている・・・お前の笑顔にどれほど支えられていたか・・・

今はもう・・・何処にも居ないのだ・・・

俺の・・・弟・・・

つかの間のまどろみから、青年はゆっくりと覚醒した。

耳の中で未だ鐘が鳴っている様な気がする。

薄茶の髪とにこにこ笑顔が、目の端にちらついている。

自分の中にある記憶の主には、どうやら可愛く素直な弟がいたらしい。

何だか幸せな気分で起き上がり、不快感がすっかり消えているのにほっとした。

思いつきり伸びをして、さて、と、扉を見つめる。

自力で脱出しようと決めたのは変わらない。今、自分が何処にい

るのかさえ解からないが、もう、誰かに助けてもらうのなんてまっぴらだった。

しかし、果たしてあの扉は開くのだろうか…？

「やってみなきゃわからないよな」

取りあえず、今のモットーは果敢にチャレンジだ。

ドルフェスはグラスに残っていた酒を飲み干すと、思い切りよく立ち上がった。今度はめまいが起こらない。しかし、急に右に体が引っ張られる。

「え？」

なにか嫌な予感がする。今は確かに慣性がかかった時の感覚だ。慎重に扉に向かい、開閉スイッチを押す。

軽い油圧音と共に、扉はあっけなく開く。だが青年には当然だという気がした。

何故ならば…

古風で豪華な室内とは対照的に、金属的な内装で覆われた通路は、廊下の片側、ドルフェスから見て真正面に大きく窓が開かれている。

窓の外は、窓の形に照明が映った壁。時折非常灯が流れるように横切っていく。

「リニアだ…」

地下を走っているのは、住宅街に入っているからに違いない。

監禁されていないはずである。走る監獄の中ならば、何処へ逃げられるというのだ？

「どうしよう…」

ぐらつく決意を、頭を振って追い払った。

弱気になってはいけない、何か対策を考えるのだ。

「……………れ、それぐらいならやってやる……………」

不意に、誰かの言葉が浮かんできた。

眠っている時に、誰かが耳元で言っていた…

「……………危なくなったら、俺に頼れ、それぐらいなら、やって

やる＝＝＝＝＝

危機的状況にある現在、実に有り難いお言葉だったが、自立を目指している青年には、”頼る” という単語が癪に障った。

「ちくしょう…」

何処のどいつか知らないが、目の前に居もしない奴にどうやって頼るのだ？

第一、せつかく津川を当てにせずに自力でやろうとしてるのに、お前なんか助けられて堪るものか。

なんとしても、自分の力でここを切り抜けよう。

それが叶わずとも、何とか納得のいく事をしたいのだ。

取りあえず、後列に行こう。動けばなんとかなるはずだ。

全然根拠の無い理由で自分をなだめながら、ドルフェスはそろそろと歩き出した。

今のところ、望みといえる事は、重要人物が乗っている（勿論アルタイルの事である）こんな大きな物が、警察機構の目に留まらな

いはずが無い、という事である。

迎えに来る（らしい）混は、連合警察機構の警部であるし、ドルフェスの属するベースの市警察だって、負けてはいないはずだ。

ドルフェスは、自分の所属する分署に誇りを持っている。

なにせベースシティで、？１の検挙率なのだ。

署長はシティのお偉方に、何故か強力なコネがある。それに、アルゴル本星とも、何らかの関わりが有るらしいのが、迎賓館の晩餐会で伺われた。

あんな見た目をしているが、実は、ベースでも、１、２を争う切れ者だ。ついでに、モセの右腕として、セーレ才部長ほど恐い人は居ない。

警察学校を卒業する時に、２５分署に配属が決まった者達は、教官達から同情のこもった視線を投げかけられた上に、まことしやかに囁かれる、地獄の２５分署の噂を吹き込まれて、運命に戦々恐々としながら入署してくるのだ。（入ってみると、あまりにも普通

なので、気抜けしたのを覚えている。）

そんな彼等が、手を拱こまねいているはずが無い。

たとえばベースシティを出たとしても、いや、それならば路線は地上を走るのだから、それこそ絶対に、このリニアを見失うはずが無い。

リニアとて、いつまでも走っている訳には行かないのだから、必ず警察の包囲網に、取り囲まれるはずだ。

連結部まで来て、足が止まる。

なら、刑事として、自分は何をしておかねばならないだろう？

こここのところの騒動で薄れがちだった職業意識が、青年の中で首をもたげ始める。

自分が逃げる事ばかりを考えている場合ではない。

自分と同じく、ケット・シーに誘拐されているらしいアルタイルを見つけ出し、保護（必要があるのかは知らないが）し、共に脱出する。

たとえ、最終的に津川に助けられるとしても、それだけの行動を起こしておけば、塔の中の姫君の屈辱は味会わずに済むだろう。

青年は、決意を込めて頷いた。

誰でもそうだろうが、今まであまり行動していなかった人が、突然何かしようとする、あれもこれも一遍にやろうとする傾向がある。

今のドルフェスが正にそれで、出来るかどうか解からないが、とか、能力の及ぶ限り、などと、自分に言い訳をしながら、すっかり、無謀な計画を実行する気になっていた。

「でも、御前達は何処に居るんだろう？」

リニアに関する情報が欲しい。どうすれば手に入るだろう？

シネムービーの主人公が、敵を捕らえて情報を聞き出す様を思い浮かべて、苦笑しながら首を振る。

「毒されてるなあ……」

物語のヒーローを地で行く様な滉なら、そんな手も使えるだろう

が、ここはもつと現実的に行こう。

青年は、乗降ホールのディスプレイに歩み寄った。

「使えるのかな？」

駄目で元々。車内案内を選んでキーを押す。

三十五連結の全車両と現在位置が表示される。自分の居るのは10両目、アルタイル達は何処だろうか？それらしい車両を探す。

「あれ？ これは…？」

丹念に車両を確認しながら、ドルフェスは首を傾げた。

「寝台車しかない…」 先頭の車両ですら寝台車で、操縦室が見当たらない。

本来、すべて中央管制室の操作によって動いているリニアだから、通常、操縦室が無くても別に不思議でも何でも無い、しかし、いくらなんでも、誘拐犯が走らせている（であろう）この列車で、操縦室が無いなんて…？

「当てになるのか？ この車内案内」

そもそもこんな状況下で、車内案内が見られる事自体、変かもしれない。

ディスプレイは続いて車内のサービス施設の案内に移っている。

車掌業務を担当するホストコンピューターとのリンク法方や、ありもしないレストランの営業時間、チケット確認のアクセス時間などが、次々に現れ、最後にスチュワードの紹介になった。

画面が切り替わり、さえない男が映し出される。

「！！」

これといった特徴の無い、地味な男は、ドルフェスの背筋を冷たく凍らせる。

「ケット・シー……………」

青年の呟きに合わせて、口の両端が釣り上がり、嫌でも忘れないV時型の笑みを形作る。

「御乗車有り難う御座います。私が、貴方の旅のお供をさせていただきます」

慇懃な口調で化け猫の頭領が語りかけてくる。

「当車両はホテルトラディッシュを、20セクレット発、魔王の顎あぎてに、25セクレット着、良い旅をお楽しみ頂けます様に、誠心誠意お世話　させて頂きます」

軽い一礼の後、あの青紫の目が、ぴたりと青年を見据える。

人ではない視線に耐え兼ねて、我知らず足が後ろに下がり、そのまま踵を返すと、脱兎の如く逃げ出す。

モニターの中では、青年の背中に対して、ケット・シーが深々と頭を下げていた。

フロントウィンドウには、住宅街の中央を疾走し続けているリニアの記号が映し出されている。

何処を指しているのか？

アルタイル達がリニアに乗り込んでから、既に45分（コーチ標準時間で3セル）が経過していた。

リニア管理会社の管制センターに陣取っているモセと魅羅が、笑いながらも、的確に指示を出し、リニアは都市外苑部　を走るように誘導され、今は巨大な楕円軌道を描きつつ、出口を求めるように迷走している。

光は、何度カリニアのデータの照合ついでに、走るリニアへの山のような愚痴と罵声をわめき散らした後、10分ほど　前に、『進入口発見。乗り込む』という連絡を寄越して沈黙した。

通信機からは、引きつけを起こした雨蛙のような、魅羅の笑い声が漏れ続けている。

息も切れ、だいぶ苦しそうだ。

怒鳴り散らす光と、笑い転げる魅羅。どっちが始末に負えないだろう…？

特にする事も無く、ぼんやりとリニアを見る。

何よりも苦手な待機を割り振られた上に、魅羅とモセの笑い声を

延々聞かされる。これは新手の拷問だろうか？

あえて口を挟む気力も失せ、小さなため息がもれる。

「シャドウ、変化があつたら起こしてくんな」

遂に音を上げた滉は、シートをリクライニングさせて体を伸ばす。一つ大きく息を吐くと、たちまち軽い寝息をたて始めた。

2秒で眠れるのは、皆が羨ましがる滉の特技である。

彼の人生は、ある一時期を除いて、不眠症の文字とは無縁であつた。

『あー！！滉ねちゃつたの？』

車内の静けさに気付いて、魅羅が不満気な声を出す。

『当たり前です。おいたが過ぎますよ、魅羅』

母親らしい口調で小言を言うシャドウに、魅羅は通信機の向こうで、ぺろりと舌を出したようだ。

『はい、マザー。ごめんなさい』

素直に謝っておいて、パンパンと手を叩き出す。

『滉、滉ったらあ。私が悪かったわ、ごめんするから起きて』

何度か声をかけると、滉が片目だけをうつそりと開いた。

「やっと収まったか、笑い袋」

『ひつどおい』

「何が酷いんだか…」

ぼやきつつ起き上がる。

姿は見えなくても、魅羅がわくわくとこちらの返事を待っているのが、手に取るように感じられた。

伸びとあくびを一緒にしてから、娘の期待にこたえてやる。

「んで？」

管制センターで、女2人は顔を見合わせて、小さく笑い合つたらしい。

『説明は、ナディーラから。ね』

署長を馴れ馴れしくファーストネームで呼んでみせるのが、滉の危惧を深める。

魅羅とモセは、『どうぞお先に』とか『恐れ入ります』などと、
楽し気に譲り合っている。

やがて、再び込み上げてくる笑いを、こほんと小さく咳払いをし
て押さえたモセが、口を開く。

『Mr津川、私、女性としての魅力有りますかしら？』

意外にも、この手の話題をはぐらかすばかりだったモセから、そ
んな質問が出る。

『魅力が無かったら、食事に誘ったりしませんよ』

滉が力を込めて言うのと、深いため息が聞こえた。

『良かった。これで、賭けは私の勝ちですね』

「へ？」

嬉気として、熟女は繰り返す。

『私、Mr津川との賭けに勝てて、とても喜んでおりますのよ』

唐突な台詞に、滉は点目になった。

いつどこ何時何処で、モセと賭けなどしたのだろう…全然覚えが
無い。

『あら、お忘れですか？』

あくまで楽しそうに、モセの声が返ってくる。

「はあ…えーと…」

言葉を濁す滉に、少し落胆した響きを加えたモセの声がかぶさる。

『あんなにしつかりと、お約束して下さったのに…』

「いや…はあ…まあ、…済みません」

訳が解からなかったが、取りあえず謝ってみた。

我ながら、信じられない失態である。女との約束を忘れるなんて、
産まれてこのかた滅多に無い筈なのに…

『ま、そんな事だろうとは、思っておりましてけど』

ため息交じりにそう言われて、滉の自負心はいたく傷ついた。

「面目ない」

『宜しいんですよ、賭けには勝ったんですから。ちゃんと報酬も
頂きますわ』

再び明るい声になったモセに、プレイボーイの顔になって頷いてみせる。

「もちろん、出来る事なら何なりと」

また、女同士の含み笑いが聞こえる。

『なら、お約束通り、』ミ・ラ・ユルク』で、ディナーを御一緒に下さいませ』

”輝ける栄光”モセの言葉に滉はにんまりとする。

アルゴル主星の最高級レストランを指定されるとは、かなり脈有りを見た。

「喜んでエスコートしますよ」

魅羅がくすつと笑うのが聞こえた。

『嬉しいわ。こんな歳になっても、殿方にデートして頂けるなんて』モセの声は弾んでいる。

「こちらこそ、貴女ほどの方をエスコートできて、嬉しいですよ」

今度はモセが喉の奥で笑う。

『本当に私は魅力がありますの？』

「貴女程の女性は、なかなか居ませんよ」

もう一度訊ねられ、滉はしっかりと請け合った。

が、しかし。

口説き文句と社交辞令の、どっちにでも取れる言い方をしながら、実は、内心焦っていた。

思わせ振りのモセの言葉は、何時もの滉になら願っても無いことなのだが。

今はまずい。

さつきから沈黙してはいるが、シャドウはしっかり聞いているに違いない。

前代未聞の浮気男だの、タラシのトンデモ男と、家族中に認識されている家長だが、さすがに、自分の妻の前で、他の女性を口説く

のはやりにくい。

女2人が、またクスクスと笑いあつた。
モセが口を開く。

『ダフネ姐様の次に、でしょう？』

「え……！？」

まるで今の心境を言い当てるような台詞に、一瞬度肝を抜かれたが、魅羅が側に居るならそれくらい気が回って当たり前だと思ひ直す。

「お見通しですね」

苦笑して答えつつ、ダフネのことまで教えた魅羅に少し腹が立つ。
しかし、モセの言い方も気になる。

何故、奥さんという一般的な言い方をせずに名を呼ぶのだろうか？
双子の妹の光よりも、滉を理解してくれている賢夫人。彼女を名前で呼ぶ者は、実は少ない。

しかも、「姐様」とは……そう、さつき光にもそう呼んでいた……
眉根を寄せてから肩を竦める。

考えるのは苦手だ、解からなかったら聞けば良い。

「署長、先ほどから仰っている姐様ってなんですか？」

とたんに、2人は嬉しいのか悲しいのか判ら無い、深いため息を吐いた。

「は？」

『やれやれねー、我が父ながら、ここまで鈍いとは思わなかったわ』
勝ち誇るように魅羅が言う。

「何だよそれ」

滉の文句にモセのくすくす笑いがかぶる。

「署長……」

『本当に……全然変わってねーな、滉の兄貴』

いきなり蓮っ葉な言葉を吐くモセに、滉は驚天した。

いくらなんでも、モセからこんな言葉が飛び出すとは思ひもしなかった。

『まだわかんないのかい？ 滉の兄貴』
繰り返す言葉に、遠い記憶が蘇る。

アルタイルと共に、双子と竜造寺がアルゴル本星を目指した時、世話係と通訳をかねて、4人に付けられた子供が居た…光やダフネはお姐様と呼ぶくせに、滉と竜造寺を兄貴と呼び、誰を真似たのか、いくら注意しても、男よりも酷い言 葉を使う、まだあどけない、クリーム色の髪の少女…そう、その少女となら、遥か昔に賭けをした。

女扱いされない事の文句に、良い女になったら、銀河で一番高級な店でエスコートしてやると……

「まさか…ちびのナティか？」

とたんに、魅羅が歓声を上げる。

『ピンポーン！ 正解！！ ヒューヒュー』

パチパチと2人で拍手も送ってくれる。いや、一人多い。

滉は、もう一つの通信機を睨みつけた。

「シャドウ…お前も知っていたんだな」

『済みません、光さんに口止めされていたんです』

すつと目を細める。

「光だとお？」

『はい』

屈託の無い返事に、苦い物でも舐めたような顔になる。

してやられた。

おそらく、この星に来る前から、口裏が合わされていたに違いない。

そう、この事を知らなかったのは、きっと自分だけだ。

「…シャドウ、魅羅。おめーら津川の女は、ろくでもねーな！！」

怒鳴る父に、娘の答えは落ち着き払っていた。

『何方様かの、御教育の賜たまものですよ』

ほほっと上品に、妻と娘が笑ってみせる。

『滉の兄貴が初めて署長室にいらした時、きつと気がついてくれる

って思っていましたのよ」

モセは恨めし気に言う、

『それなのに、今まで解からないなんて』

「ナテイのくせにそんな上品な言葉使っくんじゃねえ！！すっかり騙されたぜ」

滉の文句に、女署長は笑ってみせたらしい。

『私、大戦後は、ずっと香花様の側仕えをさせて頂きましたのよ。行儀作法は、セファート王室直伝ですの。ご存知でしょ？』

「くそー」

齒噛みする滉に、嬉し気に魅羅の声が浴びせられる。

『それにしても、苦労したわ。滉に悟られないために、D・Dの前でだって、お芝居してたんだもの』

こいつなら、それぐらい驚く事ではない。

人を驚かす事に命懸けになるのが、津川の人間なのだ。

「どいつもこいつも…大体、なんでナテイが此処ベイスに居んだよ」

『…私、前にお手紙をお送りしたと思いますけど。香花様が身罷られた後、御前の勧めでモセ・カルバンと結婚しましたの』

そんな物は読んだ覚えはない。

「しらねーぞ俺」

『うん。あの時滉死んだ』

『あら、そうでしたわね。ともあれ、良人は医師で、第3次おっとの入植隊と共に、コーチに参りましたのよ』

適当に誤魔化して、話を続ける。

『残念ながら良人は5年前に亡くなりましたけど、子供達が居てくれるから寂しくはありませんのよ。それに、滉の兄貴達も来てくれたし』

通信機の向こうのこにこの笑顔が見えるようだ。

子供達、と言われて、ふと閃いた事がある。

「ナテイ、本部署長はあんたの息子か？」

果たして、明瞭な答えが返ってきた。

『いいえ、孫ですの』

道理で、自由に出来すぎた。

それに、警官隊を配置した、モセの対応の速さがこれで納得できる。

「何時の間にか、ベースの主になつてやがつたな」

『あら、人聞きの悪い事おっしゃらないで下さいな。本部署長が、たまたま娘の息子だっただけですわ』

アルゴル系の文化圏では、母親の力が強い。つまり、母方の祖母は血族内では、絶対権力者と言っても過言ではなのだ。

気の毒だが、モセの言う事に、本部署長は逆らうなんて出来ないだろう。

自分が居ない間、魅羅に嫌味を言ったと言う彼の気持ちが良く解かる。

「なにが84だよ。130歳もサバ読みやがつて」

ぼそりと呟く滉に、

『女心ですわ』

清ましてモセが答える。

この際何を言っても、もう後の祭りだ。

この星でピカ1の掘り出し物の女が、寄りによって、自分の妹分だったとは…

とんだ茶番を演じさせられたものだ。

失恋した滉は、今度こそ、何か有るまで寝る事を心に決めて、乱暴にシートを倒した。

青年は、化け猫から逃れる為に、必死に走っていた。

2車両ほど駆け抜けて、やっと足を止める。

「落ち着け、居て当たり前だろうが」

自分に言い聞かせながら、息を整え、周りを見た。

さつきと同じ、個室のドアが並んでいる。
コ・パトメント

窓の外の壁が後ろへと飛んでいく、どうやら前の車両の方に来たらしい。

まあいい、どうせアルタイルを探し出さなければならぬのだから、前の方から調べていく方がよい……かもしれない。

とにかく、情報を得るには地道な捜査しかない様だ。

地道な捜査……とは言えど、つまりはドアを一つづつ開けていくというやり方である。

無謀と大胆といった方がよいような気もするが、開けてみなければ、何が有るかは解からないし、どうせ軟禁状態で放っておかれているのだから、自分が何をしようと、ケット・シーは気にも留めないだろう。

ぼやぼやしていても、いつか殺されるだけだ、ならば、悪あがきの1つくらいやってみよう。

意を決して、それでも逃げ易い、一番後ろのドアの開閉スイッチに手を当てた。

……………

ロックされている。

「……はは……」

拍子抜けして、思わず笑いが漏れる。

見せたくないところは、見せてくれないらしい。

少しむかついて、次々にドアに触れて行く、全部ロックされていた。

悔しいような、ほっとしたような、妙な気分で、そのまま前の車両に移る。

最初のドアに触れる。

今度はすぐに開いた。

「キャーーーーー!!!!!!」

半裸の女が、脱ぎ掛けたドレスの前を掻き合わせて悲鳴を上げた。

エメラルド色をした縦形の虹彩の瞳が、驚愕に震える。

女の腰を抱いた男が、ぎらつく牙を剥き出して振り向く。

「し…失礼しました!!」

青年は大慌てでドアの前から飛び退き、閉まるのを確認してほと息をついた。

「あーびつくりした」

冷や汗を拭いながら、はたと気がつく、今の2人、顔が猫と犬だった……

「嘘だろ!？」

もう一度ドアに触れる。しかし、今度はロックされている。釈然としないまま、次のドアに行く。

ドアに触れようとした時、ドアが勝手に開く。

「急がなくなっちゃ。急がなくなっちゃ!!」

甲高い声と共に、白い塊が飛び出してきた。

慌てて避けると、奇抜な格好の、女であろうと思える人物が走り出る。

「?????」

ドルフェスは声も無く、ドア際の壁に張りついた。その目が凝視しているのは、形良く小作りで、赤い目とピンクの鼻がキュートな、兎の頭。

真っ白な毛皮に包まれた全身に、黒いトップレスのボディースーツ。首にはカラー、両手首にカフス。そして足には黒の網タイツとハイヒール。すんなりと伸びた形の良い耳は、頭の上で可愛らしく揺れている。

バニーなバニーガールとはこれ如何に。

体つきはヒューマノイドだが、頭は兎の女は、たわわな胸元から懐中時計を引っ張り出すと、ぴよこんと飛び跳ねた。

再び甲高い声を張り上げる。

「キヤー!!!みんなアー遅れるわよー!!!」

兎娘の声を受けて、ドルフェスの前に並ぶ扉が一斉に開く。

「大変!!」

「急がなくっちゃ」「いやーん待つてえ!!」

「遅れちゃう!!遅れちゃう!!」

「早く早く!!」

騒々しく叫びながら、色とりどりの兎娘達が飛び出して来た。

既に走り去った先頭が続いて、どうやってあの狭い部屋に入っていたのか、と思う程の大人数がどやどやと走り出てくる。

壁を背負ったまま固まっている青年には目もくれず、兎娘の団体は地響きと共に前車両へ消えていった。

獣頭人達が戻ってこないかゆつくりと様子を伺ってから、そろそろと壁から離れる。

「いやァん!!置いてかれちゃったァー!!」

声と共に、後ろから突き飛ばされた。

「わ!？」

思わず膝をついた青年の頭上を、ピョンと身軽に飛び越して、兎娘が走っていく。

「御前のパーティーに送れちゃうー」

半ベそをかきながら、悲鳴の様に叫ぶ声に、ドルフェスはがばつと飛び起きた。

「御前だつて!？」

サイレンのような悲鳴を上げながら走って行く兎娘の背中を、ドルフェスが追いかける。

奇妙な追いかけっこは3両分ほど続き、その間、悲鳴を上げ続ける兎娘に驚いたのか、各車室のドアが薄く開かれる。そこから覗く様々な目は、まるで変質者でも見るような視線を、ドルフェスに投げかけている。

酷くバツの悪い思いをしながらも、頭の隅で、いぶかしむ。

覗いている顔も、目も、手も、全てがヒューマノイドのものではなかった。かと言って、非ヒューマノイド型の人種でもなく、非常に慣れた、哺乳類の特徴なのだ。

はつきり言ってしまうば、犬だの猫だの山羊だの牛だのはてはコルドラク犀さい【白鳥座61番星第4惑星原産の小型の犀標準年198年に絶滅】のような珍しいのも居た。

それらがすべて、直立し衣服を着ている。

まるで子供の頃に見た絵本の動物村だ。

しかし、デイフォルメされたイラストと違い、リアルな彼等のなんと気色の悪い事。

彼等もケット・シーの仲間だろうか…？

訳の解からない不気味さの中で、青年は兎娘を追い続けた。

今となつては、果たして御前と言うのが、アルタイルの事なのか判別は出来ないが、取りあえず、手掛かりなのは間違い無い（はずだ）

3両目を通過して、連結部分へ真つ赤な網タイツが飛び込む。

続いて駆け込んで、そこで足が止まった。

「…何だこれ…？」

兎娘はカンカンと赤いバンブスを鳴らしながら駆け上って行く。

そう、次の車両が有るはずのドアの向こうには、遙上方に向かつて、長い階段が続いていた。

階段の向こうに何かあるのか。次回はもうしばらくかかります。

ドルフェスはしげしげと階段を見つめていた。

どこから見ても、確かに階段である。

両壁や天井も石造りの、見るからに古そうで所々に苔まで生えている。

そろりと後ずさって昇降ホールの窓を見た。後ろに向かい非常灯が流れて行く。

そう、ここは確かに、走行中のリニアの中、のはずなのだ。

しかも、地下トンネルの中でもある。

こんな階段が、あつて良いはず無いのだ。

しかし、それは目の前にある。

見上げても終わりが見えないほど長い階段…

この上に、果たしてアルタイルは居るのだろうか？

兎娘の足音は、上の方から微かに響いてくるだけになった。早く

追わないと見失ってしまう。

「どうしようか…？」

得体の知れない階段への警戒心と手掛かりを失いそうな焦りが、両面からドルフェスを責め立てる。

—— W - 3 へ行け ——

不意に、耳元で囁かれた。

驚いて辺りを見回すが、もちろん自分一人しか居ない。

W - 3 … 聞きなれない数字に首をかしげていると、昇降口の上に小さなプレートを見つけた。

ベースの常として、上からアルゴル文字、セファート文字、アイヌ文字が縦に並んでいる。

すべて同じ意味を示していた。

A - 2

どうやら車両番号の事らしい。

つまり、W - 3 番号の車両に行けと、あの奇妙な声は言ったのだ。数字から考えると、ここよりだいぶ後ろの車両らしい。後ろ…

通路を振り返って、少し考える。

あの奇妙な連中が居る何車両かを通り過ぎて、更に後ろへ…首を振って階段に向き直る。

戻るのは嫌だった。

決して、あの連中が恐い訳ではない、気味は悪いが…

第一、アルタイルの手掛かりは、この上にある。

戻るのだったら、彼と一緒にだ。

ドルフェスは、意を決して階段に足を踏み入れようと、一歩踏み出した。

「止めた方がいいわよ」

「うわ!？」

不意に後ろから声を掛けられて、青年は飛びあがった。

慌てて振り向くと、黒いスーツに身を包んだ滉が立っている。

いや、違う。

滉よりも小柄で、柔らかな体のライン。悪戯っぽい笑顔を浮かべた顔はそっくりだが、少し長めの髪は黒い。

「光さん…?」

啞然として青年が呟く。

形の良い頭がこくりと頷く。

「ええ、迎えに来たのよ、帰りましょ」

しなやかな動作で白い手が差し出される。

「迎え?」

「そうよ、走ってるリニアから飛び降りるなんて、貴方一人じゃできないもの」

いつもながら、津川の人間は考え方が違うらしい。

呆れて光の顔を見ていると、足元に何かが絡み付いた。

「わっ!？」

再び飛びあがる。

くすくす笑う光の声に被って、聞きなれない声が浴びせられる。

「ナアーウー」

「ミアオー」

足元には2匹の猫が、ドルフェスが驚いた事へ抗議の視線を向けている。

「？」

白い猫が脛に擦りつき、黒い猫はふわりと肩に登ってきた。

「ナァーン!!」

耳元で思いつきり鳴かれて、青年は思わず首を竦める。

「あははは。懐かれてるわね」。はじめてみたわ、初対面でその2匹に懐かれる人」

黒猫に頭突きのような頬擦りされながら、ドルフェスは目を瞬いた。

「これ、何ですか？」

間の抜けた問いが出る。

「何って…猫よ。ベースにはいないの？」

「いえ、居ますけど…」

不意に大きな緑の目が片方の視界いっぱい迫ってくる。肩に乗った黒猫が覗き込んできたらしい。

しばらく、巨大な眼球と見つめ合う。

縦長の虹彩が広がったり細くなったりを繰り返している。最後にくくつと笑うように目が細められ、緑の瞳は離れていった。そのままずっと黒猫が飛び降りる。

なにやら妙に人間臭い仕種をした猫に、ケット・シーの不気味さを感じて薄ら寒い気分になっていると、そんな様子には目もくれずに、光はしげしげと階段を眺め回していた。

「ふーん、よく出来てるわね。この書き割」

「はあ？」

首をかしげる青年に、双子の兄とそっくりの悪戯っぽい笑みが返される。

「あら、知らない？ 舞台なんかで背景に使う絵のことよ。最近は大抵ホログラムだけど、昔は木の板に絵の具で描いてたのよ、学校の文化祭の時なんて、私も描いたもんだわ」

そう言われても意味が解らない。何と言っているのか判らず戸惑っているうちに、光は階段をぺたぺたと叩いている。

「おおゝゝ すごい、ちゃんと触感まであるわ、凝ってるわねゝ」
ノックしたり、撫でてみたり、苔を摘んだり、なかなか楽しそうだ。

つられて自分も触ってみれば、ひんやりと硬い石の感触が掌に伝わる。

でも、何故だろう、どことなく薄い膜が被せられているような妙な感じだ。

「これ…何か変だ」

思わず呟く。

すると、光の笑みが更に悪戯つ気を深めた。

「聡いわね、あんた」

むしっていた苔を払い落として、光が横に来る。

「これは、五感に直接送り込まれている幻影よ。ファントムが関っている所で、そんなもの信用したら馬鹿を見るわ」

「幻影？ でも、今人が登って…」

困ったような呆れたような視線が返って来る。

「兎頭の女の子なんて、倫理規定破って作ってたって、なんの役に立つのよ。毛だらけのセクシースタイルなんて、私は見たくないわ」

「じゃあ…あれも幻影？」

「今まで見たのぜんぶがね。少なくとも、私が貴方を見つけてからこっちは、そうよ。ドアを叩いて歩いていたでしょう？」

「そんな前から…」

事件関係者への接触はタイミングを要する。というのは判ってい

たものの、間抜けな姿を観察されていたかと思うと、なんとなく腹が立つ。

「監禁されているはずのあんたが、楽しそうにドアを叩いて歩いているし、先頭車両に向かっていているようだし、大事を取って、様子を見させてもらったわ」

「そうですか…」

不満気な返事に小さく吹き出された。

「ぷつくくく」

「…なんですか？」

はつきり不機嫌な声を反す。

「うーんとね。素直だなあって、思って」

笑われている理由が判って、よけい渋い気分になる。

「この顔で素直だと、面白いですか？」

自分とは正反対の性格の竜造寺龍也か恨めしい。彼と同じ顔だというだけで笑われるのだ、腹立たしいにも程がある。

果たして光は、しっかりと頷いて見せた。

「ええ、面白いわ。私、あんたで楽しむことにしたの」

「楽しむ…」

「そうよ。ここまで良く出来た皮肉、絶対無いもの」

金褐色の瞳が、まっすぐに見詰めてくる。夢の中で、何度も覗き込んだその瞳。

色は褐色から華やかな金褐色となり、儚さなどは微塵も無い強い光を湛えてはいるが、同じ瞳には変わりはない。

ドルフェスの心臓がかすかにざわめく。

しかし、微かに過った甘い感情は、黒猫の笑みよりも不気味な雰囲気、光の笑みによってかき消された。

「遊んであげるから、楽しみにしていてね」

忘れていた。

津川家の人間が、歩く傍迷惑だということを。

ドルフェスは今度こそ、竜造寺に対して恨みを募らせた。

「さつてと…前に進むんなら、この書き割り邪魔ね」

はるかに続く階段を見上げて、光が軽いため息を吐いた。

「どうするんですか？」

首をかしげる青年に、黒髪の美女は、芝居がかった仕草で両手を広げる。

「魔王が造りし、魔界への階。^{きかい}神の巫女たるアルテミスが、見事消してご覧に入れましょう」

重々しく宣言し、広げた両手を何か棒でも持つように組み合わせた。その手を離さずに、大きく左右に打ち振り出す。

まるで何か旗のようなものを振る仕草に見える。

御幣^{ごへい}を振ってるのよ。と光が説明するが、何のことやら判るはずも無い。

ひとしきり振って見せると、それを押し頂くように額に翳し、良く通る声が響き渡る。

「かしこみかしこみもうまうす…神の御前に参りし津川光とドラゴ・ドルフェス。両名の願い聞き入れ賜わりたく。伏して御願い申し上げます…」

妙な節回しで、いきなり神に願いだした光を、ドルフェスは啞然として眺めていた。

深く二度お辞儀をすると、再び両手を広げ、

「はあっ」

気合と共に、おもむろに二度拍手をする。

二度目の拍手の時、足元の猫達が階段に向かって跳ぶ。

小さな体が階段の上で交差する。

パリーン！

涼やかな破裂音と共に、目の前の階段がかき消すように消えた。その向こうには、何の変哲も無い次の車両の通路が伸びている。

「え！？」

目を見張る青年の横で、もう一度礼をして、光はにっこりと笑って見せた。

「日本人は神道だし、二礼二拍手一礼つてば、やっぱりお参りの基本よね」

相変わらず意味不明のことを言う。

啞然としている青年を横目で見ると、更ににっこりと笑う。

「さあ、いこっか？」

そう言つて、そのまま進む美女に、ドルフェスはおずおずと疑問を投げかけた。

「あのう…何したんですか？」

さつきまで、堂々とそびえていた階段の痕跡を探して、きよろきよろしている青年に、光は軽く肩をすくめる。

「私と、あんたの頭の中に送り込まれていた、幻を遮断しただけよ。拍手と、私の声と、この子達の出す可聴域外の音波を共鳴させて、一時的なシールドにしたの。ま、すぐにまた元に戻るけど、常識さえあれば大丈夫よ」

歩く非常識の津川の女主は、からからと笑いながら説明を閉め括る。

常識つていったいなんだろう？　といぶかしみながら、ドルフェスは光の後について歩き出した。

香花^{いづか}…

愛しい香花

君の瞳を見ているだけで、私は幸せでいられる。

君の声が聞こえるだけで、私は神に感謝を惜しまない。

君が傍に居てくれた、あの日々。

何もかもが神からの贈り物。

私の人生の中で、唯一の幸福な日々。

「嫌いです」

少しからかうと、すぐに怒って横を向いてしまふ。

いつもその仕草が可愛らしくて、愛しくて、悪戯な私は君をからかう。

でもね、君が横を向いてしまうと、君の瞳が見れないと、私は寂しくて仕方がなくなる。

だからすぐに抱きしめて、何度も何度も謝る。

すると君は、少し泣きそうな目をして振り返るんだ。

「嫌いなんて嘘です。本当は貴方が大好きです」

その言葉は、私には最高の糧。

その微笑こそが最高の力。

君が私に人の心をくれた。

君が居なければ、私は何になっていたのだろう？

両手を血で濡らし、心を持たず、ただ言われるがままに、破壊する。

ぞつとするね。

だから神に感謝をしよう。

君を知らなかった私はもう居ない。

君に出会わない私は存在しない。

君が居なければ私は私ではない。

君と過ごしたあの短い日々。

何よりも幸福なひと時。

君の思い出があるからこそ、私は生きていける…

トゥッ
アルミナ
「吾が恋人…」

「好い加減に止めませんか？聞いているだけで、胸が悪くなる」

闇の中から、さも嫌そうな低い声が響く。

アルタイルは、にやりと笑った。

「見るとも、聞けとも言ってはおらん。そっちが好きに覗いているのだろう？ 多少のことは我慢しろ」

尊大な口調だったが、その顔は蒼白で、革張りの豪華な椅子に沈み込み、流れ落ちる金糸の髪すらも、わずかに色褪せているように見えるほど憔悴している。

そして、紺碧の瞳は、堅く閉じられたままである。

「お前が望むものなど、私の中にはひとかけらも在りはしない。兄者は愛する者と共に眠り。母は今の私に満足してくれているはずだ。そして香花は……お前には決して手の出せない場所に守られている。私の心には、彼女への愛しかない。さあ、どこを喰ってくれるのかな？」

不適な笑みはそのままに、彼はゆつくりと息を吐いた。

「どこを喰らうにしても、お前には不味いものだろうよ」

闇の中から、投げやりなため息が遣される。

「とんだ甘ちゃんですね。貴方には期待していたのに」

貴公子は小さく笑った。

「私は愛に生きる男なのだよ。殺戮し、断罪できる者の心が、愛に満たされているのが気に入らぬのか？ 私は愛するものの為に血を被る。昔からだ」

「歯が浮きますよ」

呆れたような声音が返ってくる。

しかし、アルタイルには判っていた。

さも嫌そうに、呆れたような返事があっても、この相手が、基本的にただ言葉遊びをしていることを。

こうやって会話の真似事をしながら、彼の心に幾許かの波を立てようとしているだけなのだ。

いや、ひよっとしたら、そんな思考や思惑すらも無いかもしれない。

人の心に湧き上がる負の感情。

憎悪、嫉妬、劣情、欲望。

あらゆる暗黒の感情を、こいつは喰らう。

そして更にそれを煽り立て、更に貪る。

最後には、狂気と憎悪によって、記憶すらも書き換えられた、狂戦士が出来上がるのだ。

あの、カストウアのように…

堅く閉じた瞳に、血まみれになった銀髪青年が浮かぶ。

氷薄の瞳は苦悶に歪み、銀青色の髪は血を吸って固まっていく。

抱き上げた自分の腕の中で、常に憧れ、追い求めてきた長身が、ぐつたりと死の淵へ沈んでいく。

唇が動き、『仇を…』と紡ぐ。

貴公子の形のいい眉が微かに寄せられるが、すぐにそれは穏やかに緩められた。

「無駄だと、何度言えば判るのだ？」

白い髭の老人の首が、鮮血を撒き散らして切り飛ばされる。それを掴みあげ、自分は高らかに呼ばわった。

『ここに我が兄が仇、討ち取った！』

そう、兄の願いは完遂されたのだ。

父と呼んでいた男の死と共に。

憎悪を向けていた男は、既に屍となり、もはや自分の心をかき乱す価値は無い。

兄の遺体を、彼が愛しみ続けた恋人に添わせて眠らせる。

抱きしめあうように絡ませた腕を、自分は満足して眺めたものだ。エルムリアの恋人達は、今も絶対零度の氷結水素の中で眠っている。

自分ではない思考が、どこかでざわめく、不満があるようだ。

その不満が、鮮やかな青い髪の女に変わる。

気品のある顔立ちに、嫌悪と蔑みが顕にされる。

『汚らしい、傍に来ないで』

銀河で最も高貴な血を持つ女は、力辱され、望まぬ子供を産まされた憎悪を、常にその象徴へ向けていた。

この数時間、何度この顔を見せられた事か…

「もう少し、バリエーションが欲しいな…」

それとも、自分の中には、これ位の負の要素しかないのかもしれない。

母に愛されること無く育った心は、一片の情緒も持つてはいなかったのか？ それとも、母の愛を得ることだけに腐心し、他に持つものが無かったただけか？

過去の残滓はなおも、かつて与えられた苦痛を繰り返す。

己が子供達に、冷たい視線しか投げかけぬ母の姿を見せつける。だが、彼はもう知っているのだ。蔑みの言葉を発する度に、母の心こそが引き裂かれていた事を。触れた手を打ち払う優美な手が、何度抱きしめようと広げかけられたか…

すべては我が子を守る為。

高貴なる烈女は、子を嫌い貫く母を演じて、己が子に掛けられた血筋の疑惑を退け続け、遂には狂気を装って超新星に身を躍らせてのけた。

最後に唯一与えられた抱擁。

あの時囁かれた言葉は、一生忘れないだろう。

『トウア・ドルフェルア』

生涯の終わりにたった一度だけ、自らに二人の息子を腕に抱くのを許した女王は、その腕にどれほどの想いを込めたのだろうか？
今なら解る。

あの時はただ意外であり、すぐに失われた温もりを求めて泣き叫んだ。だが、母の真意を知り、自分もまた人の親となった今は、母の苦痛に満ちた後半生が短く終わった事に安堵する。

すべては終わった事。

何もかも、それこそ身を焦がすほどの憎悪すら、ただ懐かしく愛しくさえ思える。

「母は自らの使命を全うした。私は誇りこそすれ、悔みはしない。それで？ 次は何だ？」

繰り返し与えられる精神攻撃は確実に彼の体力を削いでいたが、貴公子の心は穏やかなままであった。

「好い加減、無駄な事は止める。ファントム……いや、シードと呼ぶべきかな？　これが続けるのであれば、私は気持ちよく意識を失えるだろう。だが、そうなったところで、お前に私が喰えるとは思わんがな」

嘲りの声音を発しながら、貴公子は肩をすくめる。

不意に、若草色の瞳が脳裏に浮かび上がる。

淡い金髪の華奢な少女が、無骨な男に組み敷かれ悲鳴をあげる姿が見せ付けられていた。

『アルタイル、アルタイル。助けて』

若草色の宝石に涙が浮かぶ。

少女を組み敷く男は、凶暴な獣の目で貴公子を睨み下卑た笑いを浮かべた。

更なる悲鳴が上がる。

衣服を引き裂かれ、細い体が羞恥に染まる。

力辱される少女。最も愛する者が辱められる姿を見せ付けられながら、それでも貴公子は幽かに笑った。

「新しい画像だな、少しはオリジナリティーに、気を使うようになったか？」

たとえ幻と判っていても、自分だけが触れるべき白い肌を蹂躪する男に、衝動的な殺意が沸き起こる。それでも貴公子の笑みは消えない。

少女の上げる悲鳴が、次第に艶を帯びた嬌声に変わる。それと同時に、淡い金髪は緑色を帯はじめ、華奢な体は、細身ながら肉感的な曲線を描きだし、幼い顔立ちはそのまま男好きするような、猥らかな表情を浮かべた女に変わっていく。

「お前のオリジナルはこの程度か……つまみ食いの好きな、アルゴル王の側室だ……」

つまみ食いの対象になったことがある。

見目麗しい末席の王子は、彼女達にとって格好のおやつだったのだろう、あれこれ手解きを受けたお陰で、本当に大切な少女を大事

に愛する事が出来た。

ありがたいといえるだろう。

「まあ、次に何か思いついたら教えてくれ」

好い加減うんざりしながら、脳裏に展開していく幻を精神から遮断する。

そして再び胸の奥にある、宝物庫の扉を開き、その中に住まわせた優しい宝石に手を差し伸べる。

どこか外の方で、苛立ちを発する者がいるが、そんなものにはもう興味が無かった。

23 THE TROJAN A WOODEN HORSE — トロイの木馬

神社は、二礼二拍手拝んでから一礼。お寺は一礼拝んでから一礼が作法ですよ。

初詣でのお参りには忘れずに。

でも、三輪神社で般若心経を唱える人がいらっしやるのは何故でしょう？

どなたかご存知ありませんか？

RED SONIC 人名事典(前書き)

さて、REDSONIC&Angel Cryを読んでくれている
貴方達

そろそろ、誰が誰やら、わかんなくなってきたって人多いよね？

優しい、月絵ちゃんが教えてあげるわ♪

え？お前は誰だ？

もう…下見てよ。

RED SONIC 人名事典

津川家関係者

津川 ツガワ 滉 アキラ

銀河警察機構警部

初代津川の双子。別名「地獄の太陽神」ヘル アポロン 最近は「火薬庫」ボム・ベイ だっけ？
あたしに言わせりゃ、ただのアホ

顔は良いわよ、だって学ちゃんの弟だもん♪

戦闘能力でなら、津川家1。つまり、脳味噌まで筋肉なのよ。

それでね〜どうしようもない女好き。

まあ、ダフネだけとはことん大事にしているから、良しとするか。

津川 ツガワ 光 ヒカル

アルゴル政府CS警備主任

初代津川の双子。別名「地獄の月の女神」ヘル アルテミス

しっかり者で可愛くて。滉のしわ寄せを被っちゃう子。

大体、男運悪いわよ。

うつん違っわ、男を見る目がないのよ。あんなの選んじやっても
う。

津川 ダフネ

看護師 現在は主婦業に専念

滉の奥さん DVとエリー館の女主人 現在幽霊活動中

シャドウは、ダフネのホログラム映像での名前。

理由は滉のこだわりっただけ。

110回のプロポーズでやっと手に入れた奥さんなのに、滉の奴
浮気ばかり……でも気にしない子なのよね

(ココだけの話。滉の浮気相手は、みんなダフネの友達になっちゃ

うの。そしてみんなで滉を監視してるのよ？ 怖いかもね。あははは）

リユウソウジ タツヤ
竜造寺 龍也

元アース司法局長官

別名「ドラゴンメーカー」滉たちは「DD」って呼ぶわこいつ、あたし嫌い。

まったく、なんで学ちゃんはこいつが大好きなんだろう？
ずっと兄さんっていつて懐いてるのよ。従兄だつての。

双子が生まれる前から、所有権を主張しつづけている奴。後ろ暗い事山ほど抱えている男。

「双子は俺のものだ」あ？冗談じゃないわよ、あたしのおもちやよ

リユウソウジ ミミヲ
竜造寺 魅羅

銀河連合司法局検事

滉とダフネの娘。

とにかく陽気で、元気な娘。

どこを間違ったのか、滉に輪をかけた女好き。父親と女取り合う娘つて、どうよ？

別名「灼熱の天照」^{アマテラス}ま、この子はこれでいいか。

ツガワ ユルク
津川 閑吼

医師（総合医療資格保持者）

滉とダフネの息子。

魅羅の双子の兄なの。何もかも魅羅とそっくり。時々入れ替わって遊んでるわ。

この子のおかげで津川家が賑やかに戻った功労者なんだけど。
根っから暗い引つ込み思案。その上皮肉屋。やれやれやれ……
別名「氷結の月読」^{ツクヨミ}

津川^{ツガワ} 稀胤^{ケイン}

考古学者

魅羅と閑吼の子供

難しいこと考えちゃダメよ。この子の出生ってばややこしいんだから。（そうそう、『誕生日』呼んでね）

でも性格は、滉の能天気な、ダフネと魅羅の暢気を足して、かき混ぜたみたいなの・・・

つまり、御気楽。じゃなけりや平気で幽霊してられないわね
なにしろ、幽霊になつて原因がねえ……

慧^{エミ}魅里・アライブ・津川

懸胤の双子の妹

しっかり者で可愛い子なのよ。

遺伝子上の父の閑吼より、育ての父のアレクスとエゼルに超ファザコンなんだけど……お嫁に行けたからいいか。

とある事件で、今行方不明なの、はやくみつけたせたらいいの
ね。

マック・マクロード・アライブ・津川

元経済学評論家

慧魅里の旦那様

アレクスに見た目似ていて、優しくてかつこ良くて、人食ったやつ。

本人曰く、「諸悪の根源」まあ、その通りなんだけどね。

慧魅里といっしょに行方不明なの。実はかなりのサイキック。

レイ・レイチェル・アライブ・津川

慧魅里とマックの娘

とっても上品で可愛いおしゃまさんよ。

竜造寺 幻りゅうぞうじ げん

稀代の天才と謳われた数学者

龍也と光の一人息子。

こいつは……ええ、あたしも子守りしてあげたわよ。

泣きもしない生意気なあかんぼだったわ。ホント、親父そっくり。今は病気もあつてDVの管理を受け持つてゐるわ。面倒見が良くてまめなのよね、意外だけど。

ケリー・ドラゴ・ドルフェス

ベース市警34分署刑事

忘れてたわ！

こいつがレッドソニックの一応の主人公。だったわよねww
頼りなくて、見てて心配になる子よね。

なーんか、いつも巻き込まれてるし。大丈夫かしら？

アルタイル・アルナスル・アルゴス・ウナヌ・シリムカシク・パス
トアタン

アルゴル共和国。初代大統領。現在隠居中

長い。名前長すぎるわ。ま、それはそれとして。

金髪碧眼、美貌の貴公子。

昔は熱血少年だったのよね。年取ったら、こんな狸になるなんて
思わなかったわ。時間って残酷よね。

別名、金の飛鷹 鋼鉄の大使何ていう、通り名も貰っちゃつて
る。だって、こいつほんとに空飛べるのよ。

退屈が嫌いで、津川が引き起こす騒動を楽しんでいるらしいわ。
まあ、双子達の強力な後ろ盾になってくれるから、許してやる
か。

ロゴセリス・アクア・セファルトス

元第638代セファート国王 隠居(?) 中

来たわね「わさびアイスクリーム」

元セファートの王様。亜維の息子なの。セファートの王様して権力でアレクスや津泡の地盤を守ってくれた後で天寿を全う。

今はアレクスの眷属になってるのよ。

REDの時点ではルクテ何とかって世界に出張中。

ソロセリア・ギユネイ・セファトリス

元セファート国の宰相 軍部統括元帥 隠居(?) 中

アクアの息子。この子にはロゴスが発現しなかったから、王様には妹がなったんだけど、宰相として実権握って立派に切り盛りしていたわ。

俺様で尊大で、ぶきつちよで……アクアがアレクスの為に用意したって言い切る子。

おかげで閑吼が拗ねるのよねえ……

現在鬼籍の人たち

ソーロ・コーカ・セファルトウア・アルゴス・パストアティア

初代大統領夫人。享年65

セファート王家の第一王女様。淡い金髪に若草色の瞳で、ほんっとに可愛いのよ。

あのアルタイルにお嫁に行くなんて…狼の毒牙にかかるようなものよって、あたしは止めたんだから。

だってこの子、セファート人とアース人の混血だから、滅茶苦茶病弱。

でもね、健気で明るい性格で、体力が許せばおてんばな行動にも出るっていうやんちゃさん。まあ、横で見てるほうが恥ずかしいよ。うな大甘夫婦になったから良いか。

アルファルド・アルナスル・アルゴス・ハダル・ウルシャヴィド・
テトア・パストアタン

アルゴル帝国、第16象現侵攻軍司令官。享年114

アルタイルの死んだ兄さん。こいつ、ものすごく怖かった……

あたしだって殺されかけたんだから。

でも、顔は良かったわよ、銀髪に水色の目で、色素薄い奴。別名、
銀の孤鷹 氷の断罪者。確か、こいつも飛んでたわね。

こいつが残した組織、メトセラをアルが継いで、アルゴル帝国を
滅亡させたの。苦勞の割には、全然報われなかった人よね。可哀想
に。

ソーロ・アイ・セファート

第637代セファート国王「ロゴセリス・アイ・セファルトス」

地位と役職で名前が変わる国なんてだいつ嫌いよ。ややこしい。

国を想い、民を想い、責務を全うしようとしていた、理想的な皇
太子様。香花のお兄ちゃん。滉と並べる位背は高かったわよ。黒髪
紺色の目。笑うと妙に可愛い。

でもさこいつ、体内に、セファート王家最大の秘法を隠し持つて
いた！なんちゃって。

だが普段は、過保護な兄。笑えるわよ、あの兄妹の会話。

ツガワ マナブ
津川 学

機械工学の天才教授

これがあたしのダーリン。学ちゃんよ。

優しくて、一緒にいると、ほわほわってしてくる、春の陽だまり
みたいな人♪

とっても素敵なダーリンよ

ツガワ ツキエ
津川 月絵

優秀なエンジニア

ハイ、あたし。学ちゃんの妻。幼馴染だったのよ。
才色兼備良妻、双子のお母さん代わりも勤めているつもり。
え？何よ、嘘つくな？失礼ねえ・・・

津川^{ツガワ} 十字^{トガク}

世界の頭脳と、謳われた天才科学者
学、滉、光、津川三兄弟のお父様。
悪戯代好きののきな父さんで、下戸のお酒好きww
一口飲んだらすぐねちゃうのよ

津川ベルデ

元トップモデル 十字の妻

津川三兄弟のお母様。

今でも憧れるわ、とっても素敵な人だったのよ。
で、実はこの方が、純正アトラス最後の一人！

津川^{ツガワ} 元^{ゲン}

日本州警察機構長官で十字の弟。
学ちゃんや双子の親代わり（だってお義父さん育児能力無いもの）
15も年下の妻を持ち、養女のダフネを溺愛している。
別名「台風親父」被害受けるのはもっぱら家よ、いい加減にして
よね。

津川^{ツガワ} 弓美^{ユミ}

長官秘書。プライベートでは夫人
元の妻。学ちゃんとあたしの幼馴染なの。
まさかあたしの義理の叔母になるなんて思ってたけどさ。
彼女の親父趣味には、ほんとびっくりよ。

RED SONIC 人名事典（後書き）

ま。ちょっとはわかったかしら？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3540a/>

津川の双子後日録 RED SONIC

2011年6月22日21時10分発行